

風俗草紙



増刊 志賀新集 才九

風俗草紙

定價 百円



蛇の歌

まどひずむの女のくねくね
とうねりながらよろこぶ白
い裸身！

さじずむの男の兇暴な眼と
鋭く空を切つて肉に喰い込
むしなやかな鞭！

蛇よ

おまえの体から浮ぶこの相
反する二つのいまあいゆ
ぶきみてぐろてすくてわい
せつな蛇よ！ みだらな長
蟲よ……

蒼白き顔癪の病癖にむしば
まれたる私達の魂はお前の
ように

夜毎日毎都会の底を音もな
く這いずり廻る……



後記

風俗草紙第一号をお送りします。本誌は、
孤独な病癖に憑かれた方々の爲に心からなる
友人、或いは集会場たらんことを期して編集
された雑誌です。現実には愚劣蒙昧です。孤独

な夢想を好む方々は、本誌を手にして甘美な
陶酔、芳淳な精神の漫步を味わつて戴きたい。
耽美もまた芸術です。

ボードレエル、ランボウ、モダリアニ、ワ
イルド、ピアズレエ、西洋には耽美派悪魔派
の巨匠が多いことは読者も既に御承知のこと

でしょう。さて引続き幾許も無く絢爛と充実
した次号がお目見得します。ほんの一部の次
号予告でもお判りでしょうが何卒御期待下さ
いませ。尚別に特別会員にのみ「通信・風俗
草紙」を頒布致します。機会を脱さずふるつ
て御加入下さい。
(U)

◎直接購読者募集◎

御購読は直接申込が一番確實で御便利です。
又随時、出版通信を優先的に御送附します。
三分三冊（送料共）三百円
半年分六冊（送料共）六百元

風俗草紙 第一巻 第四号

特集雑誌 増刊 定価百円

昭和二十八年六月二十五日 印刷
昭和二十八年七月一日 発行

編集人 氏家富良
発行人 野村佳秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地

発行所 日本特集出版社
東京都千代田区神田神保町二の三四
電話 九段 334 三四二七番

次号予告 (八月号)

喜多玲子妖美さじすちつく画集

新企劃による圧倒的迫力に満ちた玲子画集！飽く事を知らぬ名画に乞御期待！

特集・囚獄の記録

腐った性臭……(女囚刑務所)……中山麗子	少年監獄……(少年審判院)……安野洋治	刑罰千夜……(少女感化院)……大塚ルリ	男色営倉……(軍隊営倉)……松尾亮
----------------------	---------------------	---------------------	-------------------

日本刑罰史 第二回 きりしたん彈圧拷問史……深田徹

世界の耽美派芸術家たち……原浩三
続・悦虐の部屋・やわ肌を責めて……喜多玲子

新連載 病者の手帖(假題)……日夏由紀夫

秘色大阪城絵巻……岩堀光

風俗美術館

性よ御注意！

変態性慾に「窃視症」という種類がある位だから、女は余程注意せねばならない。日本にも女の脛を見て下界に落ちた久米仙人の古諺があるが、これは別に外国（あちら）においても変りがない。上図の、この真剣な二人の大人共の顔をよく御覽下さい。



「かゆいワ、蚤でもいるのか」

しら……」

「ホ、ウ、子供だ子供だと思つてい

たが、もうすつかり、フーム」



若い者より老人の方が返つてのぞきたがる。



これはその一例

暴力と貞操！

暴力によつて女の貞操がふみにじられることは、昔も今も、東も西も、相変わらずに続けられている。男は精力が鬱積して、その吐け口が無ければ、暴力で女を征服する。惚れた女が言うことを聞かなければ、やはり暴力だ。

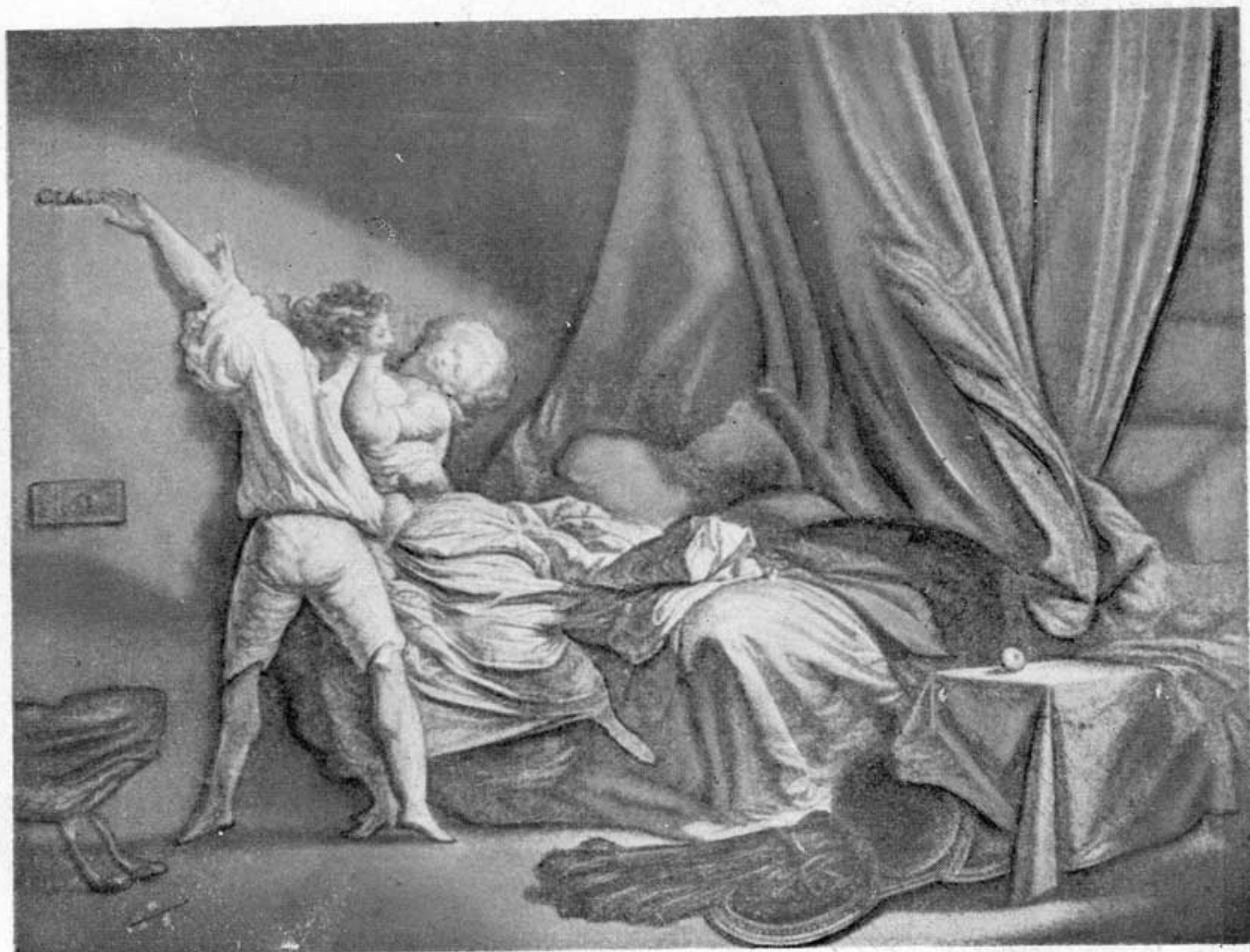
こうした、暴力による女性の征服は、現代においては、おおむね犯罪の形をとる。だが右下の絵の時代(十八世紀頃)つまりバルザックの「風流滑稽譚」やプラントームの「艶婦伝」の世界では、暴力による征服も、案外イキ(粹)なものであつた。女が男を嫌う様子をして、逆に男をひきつける技巧としたように、男も暴力を振い



↑ 危機 失神した娘を抱いた男の兇暴な眼！

→ある抵抗

豪ましい男女の格闘である。美





から女のマゾ心理をキャッチしたのである。右下の絵なぞ明らかに女の表情に、征服される陶醉感が見えている。しかし他の三枚の絵は惨忍な犯罪そのものだ。こうした惨忍さは過去現代を問わず絶対に許されるべきものではない。

↑ 捕われた夫婦

外国版「羅生門」である。縛られた夫の眼前で新妻は山賊共の毒牙にさらされている。先づジャンケンで順番を決めて……。



貌の貴夫人の寝室に忍び込んだ逞ましい男！ 逃げようとする女性を抱えて男は素早く扉の鍵をかける。抵抗する女の顔にははやあきらめの表情が浮んでいる……

↑ 盗 賊

夫の居ないのを見すまして母子の部屋に侵入した賊たち。彼等はまず金品を奪うが、その後は失神した人妻の危機である。

→ 逃げる女のマゾ

やよと逃げながら遂に半獣神の力に屈服する女のマゾヒズム

ギリシヤ神話の有名な構図。いやよい



女性の愛情心理

女性の性感情は実に複雑である。

ドンファンと言はれる男は皆、この彼女達のデリケートな心理を洞察している。右上の絵なぞはそのよい例で、半獣神に追いかけられるニンは拒否しながら既に半分征服されているのだ。そうしたニンの心理をのみ込んでいる半獣神の顔はあく迄も図々しく積極的である。男性よ、女性の仮面にだまされるな、とこの画集は語っている。

ナルシズム

自己愛の女

ああ美しいお前——彼女は鏡の中の自分に囁く。女は自分で自分を恋することが出来る。



ると女はすべてを忘れる。この絵身的な陶醉をよく現している。



← 乙女の夜

乙女は悩ましく羽根布団をかき抱く。
彼女を訪れる夢はいつたい何だろう？



隠したい・見せたい心理

← 駄目・入つて来ちやア、そう口では怒りながら女体は媚態を示している……



↑ 戀の激情

一度恋に熱中す
は若い二人を諷刺したものだが女の全

責められる女・三態

喜多 玲子・画

花散る夜

「フツフツ。どうだい、もう好い
加減にウンと云つたらどうだ、僕は
何も手荒な真似はしたくないのだが、あ
まり強情を張るから、こんな目に逢うんだぜ」
男はそんなことを云いながら、美津子の乱れた姿をな
めるように楽しんでいるのだ。
いや！ いや！ 家に帰して！ と叫ぶ彼女の声は、無情な猿轡
に殺されて、たゞ呻き声にしかならない。無理矢理に飲まされた酒
の酔が豊満な全身にかけめぐつて、畳の上を縛られたまゝ蛇の様に
のたうつ女体からは、夜の香りが部屋一杯に立ちこめるのだ。



送り狼

空になつた貧乏徳利を、破れ畳の上に投げ出した浪人は、トロリとした眼を姉妹にむけた。

墓地の外れにある人気のない空家につれ込まれた娘たちは、縛られたまゝひしと寄りそつて恐怖に身をふるわせていた。

「用心棒の拙者が、かどわかしの手先をつとめるとは世も末だな……フツフツ。二人とも美しく生れついたので身の因果とあきらめておとなしくしていた方が痛い目を見ずに済むぜ。一天地六の賽の目が地獄と出るか極楽と出るかはお前達の心次第だ、もうおつつけ、権六親分から迎えのかごが来る頃だが……」

薙ぐずれた娘達の足元から、チラチラとこぼれる緋の色に眼を奪われながら、浪人はジリジリと傍ににじり寄ってくる。



陷 穽

裏の物置小屋の中に閉じ込められた千代は羞恥と恐怖に身をもたえた。お客のものに手をかけた覚えはないと、いくら辯解しても、主人の源造は聞き入れてくれないのだ。「今夜まで此処にそうしている。夜になつてから、ゆつくり身体に聞いてやるからな」そんな言葉を吐き捨て、先刻出ていった源造が、もうそろ／＼やつて来るかも知れない。淫らな男の眼を思い描くだけで千代は全身が小さきみに震えてくる。



苦悶する女

七比ま玲子

— 毒薬の幻想 —



風俗草紙 目次

特集雑誌 増刊
オール実話

口絵

責められる女三態

喜多玲子画

日本刑罰史
第一回

小伝馬町女牢における拷問

深田 徹

特集・現代風俗の病癥

(女学生) 危険な戯れの魅力	矢野目源一	(22)
(処女) 東京に処女なし!	日夏由紀夫	(36)
(人妻) 人工中絶する人妻たち	西島 実	(51)
(オフィス) ドレスとカーとベットの	紫田 俊夫	(46)
(売春) 密淫街の女たち	小乃木 修	(64)
(犯罪) 戦後の性犯罪にみる病癥	足尾 喬三	(111)

男色喫茶店

(同志をもとめる
ソドミアのクラブ)

かびや・かずひこ

悦虐の部屋

喜多玲子

私が拷問した女 (元憲兵) 根津明治

新しい責め・古い責め 上田青柿郎

のぞきの悦楽 最上京子

鞭の家 (まぞひずむの女たち) 須川夏枝

結婚紹介所で会った女たち 黒丸慶二

針の椅子 古庄英生画

風俗瓦版 江戸刑罰十態 古庄英生画

手記特集 倒錯の夜

(男女同性愛者の歎びと嘆き)

うーるにんぐの嘆き	真下光二	(116)
保名狂乱	有馬千鶴子	(120)
逃げた妻	香川扇次郎	(123)

艶具余談 中野栄三

手記特集 責めに憑かれて

華麗な惨虐の回想	進藤江利子	(146)
嗜虐放浪記	天野鉄治	(150)
怖るべき教師	丸岡泰子	(153)

レスポス通信 (女性だけの秘密な愛のサロン) 園村恵子

そごみあ通信 (そごみあ秘密な交歓室) 藤井 晃

嗜虐倶楽部 (さじすだけのレター・サロン) 大槻久良二

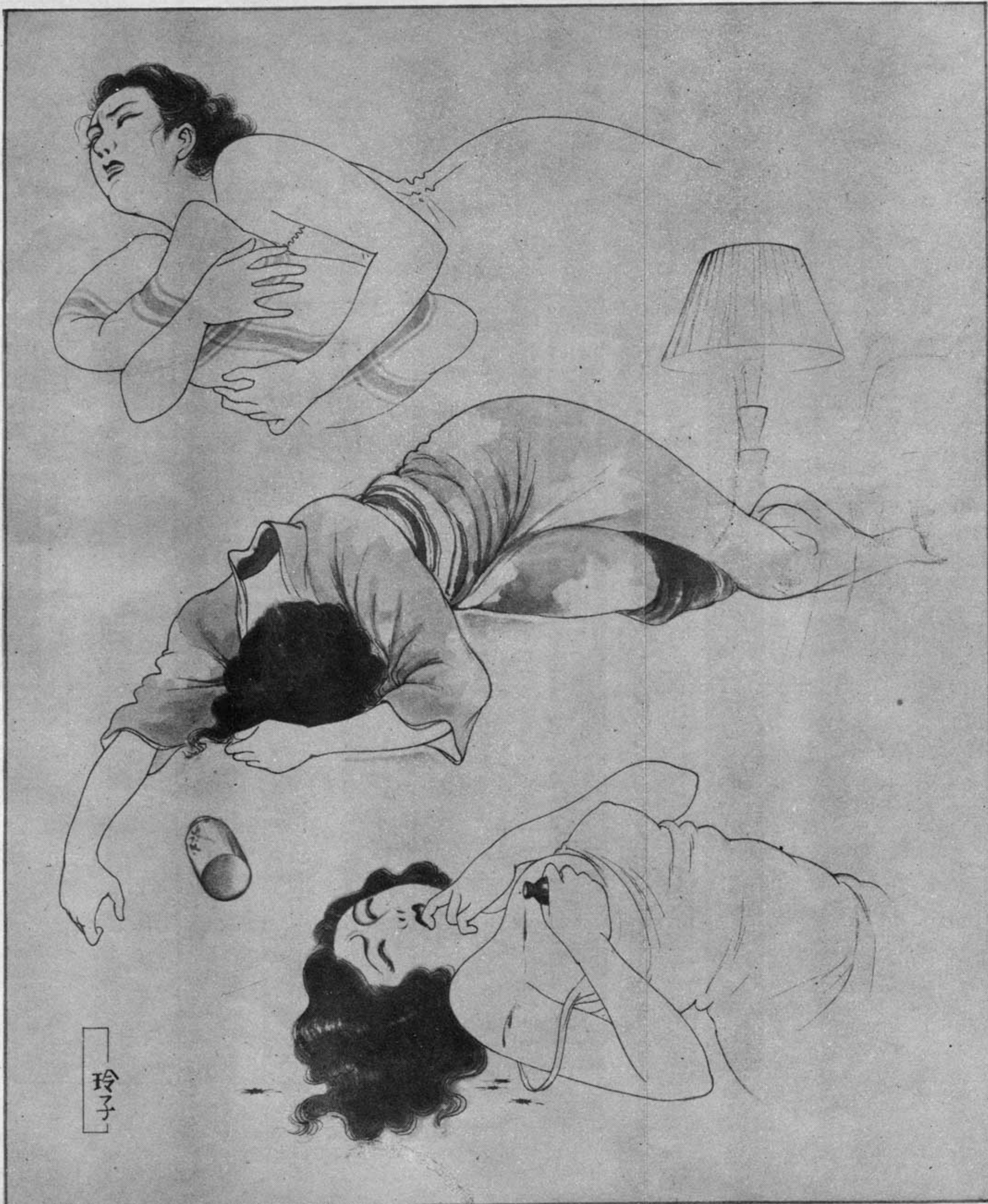
恍惚の白鳥 鳥羽瑛子

幻想美少年の街 志麻雪夫

さじすちつく 秘色大阪城絵巻 比企狂一郎

歴史小説 秘色大阪城絵巻 岩堀 光

はりつけにされた美貌の腰元の真白な肉体を鋭い槍先が突き抜ける! 惨虐な迫力に満ちた雄篇!



玲子

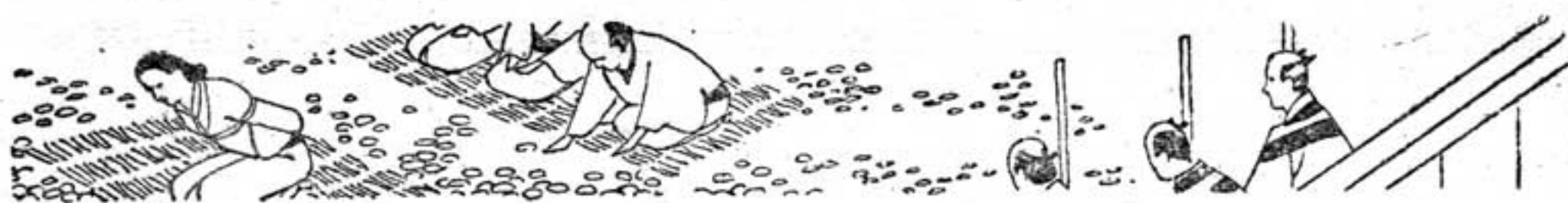
紙 草 俗 風

現代人の新しい
趣味雑誌



特集雑誌
オール実話

増刊



日本刑罰史 第一回

小傳馬町女牢に於ける拷問

深 田 徹

(一) 殘虐そのものの近世の拷問

〃蛇責めの實例〃

色こそ浅黒いが、引緊つた美しい軀つき。非人が情け容赦もなく舌舐めずりして衣類を手んでに剝取ると、女はさすがに胸を庇つて、身を疎ませる。

氣の強そうな眼ざし、怒りに眉がゼーンと釣上つている。ソレつ、役人の下知に應じて、非人がどーんと力まかせに屈んだ裸女の背を突く。見るみる女は手どり足どり穴のなかの柱にかたく手足や胴を縛りつけられた。

地上にひとの身の丈けにあまる深い、大きな穴が掘られ、その央ほどに太い皮はぎの丸太が土に埋めてガッシリ立ててある。女が縛されたのは、その柱であつた。

「よし、かねて手配のものを」

と役人が叫ぶと、おうと応えて、非人たちは用意した素焼の瓶の蓋をとつて、その内容を穴のなかへ投げおとし始めた。

空にのたうち、孤をえがいて宙を飛ぶ銀色、金茶色、……の無数の生きた紐、……蛇である。瓶は山のように整えられている。後からあとから大小、色かたち様ざまの氣味のわるい長蟲が、何百匹となく穴の奥へ注ぎ込まれる。数日前から御領内の百姓に命じて、山野を狩り蒐めさせたものだ。

恐怖に魂切る、女の悲鳴——。畏怖しさに眼尻は裂け、面は硬ばつて……。そこへお構いなしに女の頭上から、大ガメに満たした焼酎がどつと穴へ移された。苦しみもかく蛇……、朝陽をうけた穴の底に五色の縞をなしてうごめき、からみ合い匍い廻っている。たち込める酒氣を嫌い、逃げ場を失つた幾百の蛇は苦しまぎれに泳いで、我がちに唯一つの隠れ場所——柔かい女体にからみ付き、さらに皮肉を破つて奥へと遁れ様とする。

鍋で煮られたどじょうが熱さに堪えかねて、浮かした豆腐のなかへ潜り込む。あの残酷な鍋料理そのままの光景である。幽谷にこだまする断末魔の女の絶叫……。蛇の群れは、小麦色の



女の皮膚を破り、脂肉を噛んで、さきを争つてその体内に潜入してゆく。

軀じゆうの開いた孔というあらゆる孔、いや二つの眼玉さへ喰い破つて匍い込む、執念ぶかい銀蛇、……凄惨そのもの、生地獄は眼前である。全身鈴なりの蛇は、女の流す鮮血に染み、しかも絶え間なくうごめき続けている。

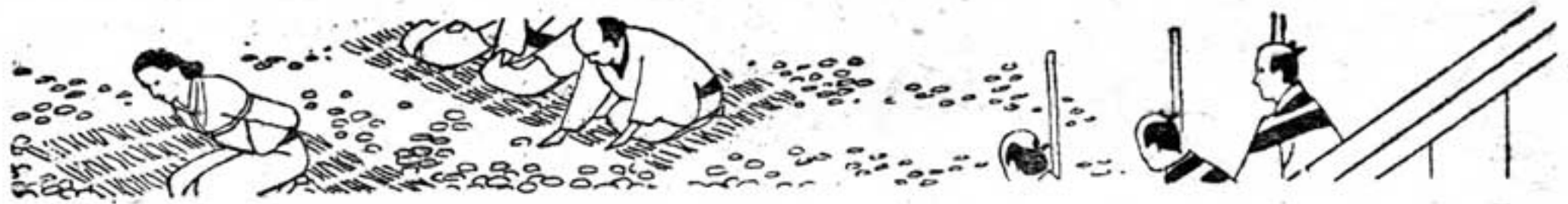
こうした苦闘の幾十分……、一匹がついに腸を噛み破つて逆口から頭を出したのを、彼女は苦痛のあまりその蛇の頭をわが歯に噛切つて、血まみれの狂死を遂げたといわれる。

——以上は実説、最近では村上元三氏も筆にされた有名な、「加賀騒動」の主人公の大槻伝蔵、その一味として処刑を受けた加賀藩の奥女中の浅尾局の惨死を伝えたものである。浅尾はこのお家騒動のヒロインで、前田侯の側室お貞の方づきの中老を勤めた女丈夫ながら、お貞の方と大槻伝蔵の密通の媒介についての自由を迫られ、かかる残忍な身の毛のよだつ拷問に訴えられたものである。伝蔵自身もこのあと幽閉された飛騨境の五ヶ山の針牢で憤死をとげている。

巷説によると、この浅尾責め殺しの顛末を見届けた係りの役人には、あと得態のしれぬ熱病に罹り、彼女同様の狂い死をしたものが続出したという。いかにその実況が凄じかつたかを偲ばせる後日譚といえる。

浅尾を処刑したのは彼女の仕えた加賀藩で、幕府の司直ではない。江戸時代はこの様に藩内のことは藩政府の詮議、処分に任されていたのだけれど、拷問などについても諸藩ではみな幕制に準じて執り行つていたとされている。





けれども、それでは幕府の行つた拷問の規定のうちに、いまの「蛇責め」など挙げてあるかというに、勿論そんなものはない。加賀藩で勝手にやつたことである。が、規定にない浅尾の責めの実例をここに述べたのは、封建時代にはいかに法を無視した酷烈な拷問——公刑というよりほとんど私刑に類するもの——が施こされ、おおくの人命がその爲め無法に闇からヤミへ葬り去られたか！ 又、だからこのような現実が公然の秘密とされていた頃の行刑のほんとの相を知ろうとするには、それゆえ史実文献のウラまで透徹する眼光がなければ、その一半を窺うだけの浅解にとどまる——このことを筆者は指摘したかつたからである。

西洋でも、中世、封建暗黒の時代にもつとも「拷問」の手段器具の発達が見られて、東西ともこの点では軌を一にしている。なぜ、拷問というものと封建政治はそれほど密接不可分なものなのか？ それについては後で述べよう。ただ信憑できる史実としてそれが記録に痕められているか、否かにかかわらず江戸時代の各囚獄に於ても、人智の及び得るあらゆる拷問法がなんらかの形態で密に行われていたと信じるほうが、真相に近そうである。

(二) 女牢の構造と拷問の歴史

ところで幕政時代をつうじ、江戸の牢獄といえは後年石川島に開かれた「人足寄場」を別にして、終始、日本橋、小伝馬町（もと常盤橋門外）に三千余坪のひろい敷地をとつた謂わゆる「伝馬町の牢」だけである。

ここには図面の上で「御朱引き内」と呼ばれる御府内（今の都内に当る）の犯罪人および、場合により吉田松陰のような国事犯のものも送られて、收容された。で、拷問もここで町奉行の附属として執行されたものである。諸国にある天領（政府の直轄の地）では、それぞれの代官役所で江戸に準つて行われた。

牢屋敷の造りをまづザツと示すと、方形の敷地の前後に二つ門があり、外廻りは土手と二丈ほどの嚴重な練塀でかこみ、その外側はさらに堀になつて逃亡を防いでいる。

塀のうちは右手の半分が役所の建物と、役人の官舎が建ちならび、牢の建物は、左手から奥へかけてである。牢屋の棟はみなで四棟から成つており、うち二棟は別で、百姓のための牢と身分ある者のための座敷牢である。

そして、残りの二棟が一つづきに左手のはしに竝んで建つていて、内部は長屋式に仕切られ、そのうちに東西の大牢が二つと、それに接した二間牢がそれぞれ一つづつ。これらの隣りに「揚り屋」ととなえる房が二つづつ、東西あわせて四つ附属して、その裏門がわの一房が、つまり江戸の女牢であつた。

間取りは四疊半のへりなしの琉球疊じき、この隅に引戸でへだてて厠がとり付けてある。出入口は犬の出入りするほどの低い格子造りが一つきり。まわりは二面が厚板の壁で、他の二面が太さ三寸角のあらひ半格子で囲われ、この牢囲の外がわは「外鞆」という土間の通路に両側をはさまれ、その外部はまた高さ二間、四寸角のがつちりした杉格子で遮ぎられている。

つまり外界から二重の格子で仕切られているわけで、通風は



わるく勿論、晝でも薄暗く陽を透さない建て方である。この女牢の入牢者数は大体、いつも平均して廿人位のものだった。男子や武士も入れた伝馬町の全部の入牢者の数がたいてい四百人前後くらいであつた江戸時代の、府内の入口はづつと五十万程度がつづいたのである。

それにしても四疊半一つで大江戸の女囚刑務所がこと足りたとは、女性犯罪がいかに少な過ぎる様だけれど、事実がこの通り。それからしても余談にわたるが、いかに刑政が苛酷をきわめてか弱い婦人を畏怖せしめ、また彼女たちがその峻厳な封建の法律思想のもとに忍従を強いられていたかが察せられよう。考えてもごらんなさい。今なら掃いて捨てるほどのアプレ少女のひとりの八百屋お七の放火が、後世までの語り草になり人の口に噲しやされたような時代なのである。

女牢の附人としては、乞食の女房が一ヶ月ごとに交代で使われ、面白いのはこの乞食も一しよに牢のなかへブチ込まれていて、用を足したことだ。今なら婦人看守の役だが、これが囚人なみに扱われていたのである。

話が飛ぶようだが、ここで参考のために本邦に於ける拷問というものの、沿革をふり顧つてみたい。一体、この「拷問」というのは、罪を犯したかどうか、明かでないところの容疑者を審問するのに、拷器拷具（責め道具）をつかい苛なんので、自由を強いることを指し、強問、噉問などの字も当てられる。

もつとも普通で簡単なものは笞とか、杖をもつて打擲するやつだが、これの軽いのは寺小屋や家庭でも子女の教育のために行われており、拷問の数にみとめられぬもの。日本でも、遡ぼ

つて上代の令制の定めるところによれば、この笞杖より外罪人の責め訊いの法は決めていない。が、他の拷問がなかつたわけではない。

それ以前の拷問の歴史では、仁徳帝の御代、ハハキノカグロとイナバのユコの両名を水中へ漬けて、ひどく拷したと記録に見えるが、ここらが古いところであらうか。しかし何も驚くことはない！ インデアンや蠻族の出てくる映画をごらんになれば解るとおり、拷問の事実は人間とともに始まつている。イブが禁断のリンゴを喰べたことを白状したのは、アダムが拷問のせいかも知れないのである。

しかし、文明国日本では、大化の改新から後には、拷問は笞杖を加えるだけに限られて、刑部省または衛府でこれを行つてきた。惨虐をきわめる拷問がふたたび復活したのは、中世、武家の擡頭とともにである。武断専制の弊が法をみだし、ここに苛酷な刑罰にともなう非道な拷問法があとを断たぬ有様となつたのである。まづ源平の頃から、保元物語や太平記などの戦記を読むと、水責め、火責めの記事をいくつも載せている。

室町時代に入つて「庭訓往来抄」という本を開いてみると、『——犯人を取調べる様をいうと、まづ被疑者を留置しておいて、第一は推問といつて今でいう訊問をはじめ、白状しなければ、梯子に縛りつけて水を浴せる。また小さな蛇をその口から入れる。次の拷問は、張附けであり、その後両手指の爪を剥がし、また錐で脚を揉む。第三の拷問とは、火炒」といって、これは鉄の鉢を赤く焼いて、犯人の頭へかぶせるのである。すると首はたちまち焼け碎けてしまう……』



と、こともな氣に記してある。

水責めについては、「碧山日録」にも、寛政二年に南禪寺の僧を水責めで苛んだ記述がでてゐるが、外国にある「木馬責め」などの拷問法もすでにこの頃から行なわれていた模様である。「木馬責め」の責めは、背に尖った木材をつけた木馬へ罪人を乗せて、その両足へ大きな石を吊して揺るのである。女性には、特に効果的とされた。

それ以降、大盗石川五衛門の釜煎の刑でも分るように、何しろ「車裂」「手裂」とか「鋸挽」「火焚」……あらゆる残忍な処刑法をほんとに試ろみた戦国の試將などとなると、憎む相手にのぞんで臨機応変、考えつく次第に勝手気ままな拷問法を編み出し、また実行に移したものであつた。

(三) じつさいの拷問法、石抱えの責め

そこで元にかえつて江戸牢の拷問の話になるが、前いつたように徳川幕府の正式の拷問は、町奉行の所管であつて、その配下にある典獄（刑務所長）石出帶刀（この職は世襲にされた）の直接指揮によつて実施された。

はじめは奉行所の詮議掛りの与力や同心が石出に断つて、牢屋同心（看守）に命じて内々にやらせていたのだが、延享の頃からあらためて「拷問」も石出の正式の役目に加えられて、それ以後は、奉行所で白状しない被疑者はその犯罪についての証拠をこまかに書上げて、帶刀のもとへ送つて「拷問」を請求し、与力同心（いまの警部や刑事）はこれに立会つて後、ただ石出の復命書を貰つて帰るだけになつた。

拷問法としては、幕府では答打、石抱、海老責、釣責の四種の責めを定めており、軽いものから順をおうて重いものに及ぶことになつていたが、それも罪の種類にしたがつていろんな限定は設けてあつた。

つまり、正しくいうと前の二つがそのうち「牢問」と呼ばれこれは牢屋内の穿鑿所（調室）で行い、あとの海老責めと釣責めの二つが「拷問」といわれて、これは牢屋敷のなかに特別にそのため作られた「拷問蔵」の内で執行されたのである。

右の拷問蔵の位置は、牢屋の囲内にあつて、西の大牢のすぐ隣りにあつた。これらの拷問に使われた責め道具はいまも保存されているから、責め方もよく見当がつく。ついでに断つておくと拷問蔵は別に在つたものの、これは滅多にじつさい使われなかつたようである。というのは、よほど氣丈な容疑者でもたいてい「石抱え」の責めで参つてしまい、白状するか死ぬから、海老責めまでも施す必要がじつはなかつたのであろう。

そこで先づ、責めのかるい方の「牢問」から説明すると、第一の答打だが、

——囚人によく——情理を説いて聞かせ、「たいらに白状しなければ、いいか！ 痛い目を見せるぞ……」

と脅しつけ、後手に縛りあげる。

そして、それでも白状をこばむと、箒の尻でもつて両肩をぶつ敲くことになる。但しこの場合には縛り方があつて、後手にしばつた左右の手首を両の肩の下までしめ上げておく。こうしておくと両方の肩さきへ肉があつまつて盛上るから、その上から敲いても、痛みはウンと強いが骨に直接に当らず、骨折や骨



の痛みなど伴わずにすむのである。

こうして笞打をつづけても、やはり白状しない罪人には、つぎの「石抱へ」を試みる。石抱へはまた算盤責めとも云われるもので、この器具は、座わる合の背のところへ太い柱を打ちつけた頑丈なもの。

その合の上に、薪が六、七本ならべて置かれ、その上に咎人の膝をめぐつて下半身ハダカに剃いたまま座らせて、後手に縛つたナワのあまりで後の柱へ反るほどよく縛り付ける。

そして後、彼女の柔らかな股から膝へかけ長方形の石の板を積んで、この重石のため薪へ喰い込んでゆく両脚の痛さを味あわせるのである。

石は一枚が十二貫から、三貫ある伊豆石ではじめ二、三枚が膝へのせられ、

「どうだ女、痛いかな！ はやく白状しろ」

と、責め立てる。その強情の度合によつて、どんどん石を重ねてゆき、七、八枚からときに十枚位まで試される。こうなる



と石の重量だけで百貫を超すわけだから、肉のやわらかい女の膝などペシヤンコに変形して、不具者になること請合いたが、こうなるまでに大概が氣絶するか、いやおうなくスラスラ白状してしまふことになる。

(四) 言語に絶する司直の暴状

けれども昔の女には、信じられぬほどの氣の強いのがいて、これでも泥を吐かぬ場合が稀れにあつたらしい。ことに切支丹の關係の婦人の受難者では、信仰でさええられた超人的な意志の持主もあつた。

こういう強情者に対して、つぎの段階である海老責めの痛苦が課せられたわけである。

この海老責めというやつ、責めの形を名にあらわした通りで、罪人に胡座をかかせて、両の足首から頸へかけて繩をかけだんだん前の方へと締めよせて行く……。海老責めがどれくら



い苦しいものか、身に受けてみないとよく分らぬが、「法曹後鑑」に記すところでは、——海老責めはあつても、実施したことはまあ無い——と出ている程だから、よほど酷いものに違いない。

以上のようにしても尙かつ被疑者が白状しない場合は、そこで上司へ伺いを立てた後に、最後の「釣責め」という酷拷が与えられた。

これの遣り方は、後手に縛つたまま床から二、三寸足ウラを離して、天井の環へ太紐で軀を釣り上げて宙釣りに放つておくのである。ときとして頭を下に逆釣りにすることもあるし、女囚だと髪を釣る法もある。

徳川氏の行刑についての制法は、寛政のかの「お定め書百ヶ條」で規定されたものであつて、このなかに公けに拷問に処していいと明記してある罪はというと、「人殺、放火、盜賊、関所破り、謀書謀判（文書偽造など）」の五つと限られてあり、

——これらの重罪を犯した証拠がたしかで白状しない場合、また一味のものがすでに罪状を吐いているのに本人がなお口を割らぬときは、評議の上で拷問に掛ける——と定めている。が勿論これは表向きであつて、たしかな証拠も何もあつたものではない。その筋の手先に睨ま

れた奴の災難というわけで

罪の有無によらずとにかく

強引にホシの口を割らせて

口上書（陳述書）を採り、



しまえば、万事落着だつたと考えてよからう。

この時代でも、さすがに白状書なしに刑に処することだけは幕禁になつてゐた。なにも江戸市中には、銭形親分のような名探偵が溢れてゐたはずがない。とにかく容疑のうてる相手を引っぱつてみて、これはと云う奴は、打つても叩いてもムリに白状させてしまう荒療法……、それに役立つたのが法定の「拷問」であつたのだ。

（五）責めの極致——駿河責めの惨鼻

だからして、そのための拷問法にしても、相手しだいで手をかえ品を変えて、あらゆる残虐が施こされたものとみて誤まらない。慶安の変の丸橋忠彌は、背を割いてそこへナマリ熱湯を注ぎこまれたと云われるが、それくらいの乱暴は実行されたであろう。近年までの警察における拷問の習慣は、奉行所時代からの伝統が明治へそのまま継承されたものである。

こうして法定のほかには密に行われた私的な拷問の実例として、たとえば次にのべる「駿河問状」の名で知られる責めが残つてゐる。この俗称駿河責めは、もと駿府の町奉行をしていた彦坂九兵衛が創案したところと伝えられており、寛永の頃おい

曾根甚六という士の妻がこれに遭つたとのこと。

——どんな拷問かというと、手肢を曲げてかがめ、背後へまわし、一つにまとめて堅く縛りあわせる。



そして、これを縛ったナワで宙へ釣上げて、その背に重石を荷わすのである。それから釣下げられて息も絶えだえの女の胴体をコマみたいに弾みをくれてはげしく振廻す——と、これの反動でまた軀が逆にまわつて来る。つづいて振れた釣ナワはその惰勢でさらに解けかえる。こんな風に、てブン、ブン、幾回転……、釣られた甚六の妻はそのため総身の膏が頭へ下つてしまひ、油汗の床まで滴たること、まるで水を流すようであつたという。

「駿河問状」のいまのやり方は、吊しを加えたところの圧迫拷問の一種とみられ、かのドイツ中世の残忍さをもつて有名なハングルグ拷問のそれにも比敵する工夫と云いたい。

また、拷問というより私刑に数えてもいい水責めにしても、旧幕のあいだ、伝馬町はもちろん地方の陣屋などに於て、それぞの手心によつて様ざまな責めの法が案出され、使いられていた証跡もあきらかである。

地方などでは水牢といつて、年貢をおこたつた百姓の一家を押し込みにし、督税のため水責めに遇わす苛酷なことが、暗黙で公けに許されていた。高さ六尺あまりの木框のなかへ河水を導



いて、その干満を利用してなかの罪人を水浸しにして苦しめる責め方で、浪曲の「小松嵐」でお時という女馬子が悪代官に投げ込まれるのが、この水牢になつてゐる。

いづれにしても、封建的な階級社会にあつては、世襲の身分や権力等がそれに従うものの人權を頭から踏みにじつて憚からぬとすれば、必ずやそこに「拷問」という悪制の生れる素地があるのである。

天保年間に武州川越在の貧農太吉は、年貢を怠つた爲一家六人、水牢に投げ込まれ、この中には二歳の童女、六十の老婆もあつたと云う。しかも、太吉の妻さくは、当時妊娠九ヶ月の身重で、この六人が互にかばひ合ひ、泣き叫ぶ声は三町先まで聞え、人々はこの悲鳴を聞くだけでもチリ毛立つたと云うことである。これは当人への体罰ばかりでなく、他へのみせしめとしての効果を充分果しているが、水牢の水が徐々に増えてゆく恐怖は、想像を絶する苛酷なものとなえよう。

拷問と云つても、直接容疑者に対して行はず、その肉親に加えるという陰惨な方法もある。芝居で御馴染の佐倉宗五郎の場合、真赤に焼いた鉄板の上を、幼い子供たちに素足で渡らせているが、その刑吏たちの神経は現代では一寸考えられない。

特集・現代風俗の病癢

女学生篇

危険な戯れの魅力

「いやあね。……浅間しいみたい。まるで動物ね」「だつてあんただつてこんなことをしたから生れて来たんじゃないの。」



矢野 目源 一

危ない読書サークル

女学校の裏庭でセーラ服の少女が五六人、古風な和綴の本を開いている一人をとりかこんで、折重るようにして覗きこみながら、歓声とも嘆声ともつかぬ昂奮した上ずった声を出している。

「わア凄い。こんなやつであるかしら」

「いやアね。……浅間しいみたい。まるで動物ね」

「だつて、あんただつて、こんなことをしたから生れて来たんじゃないの」

「そりア、そうかも知れないけど、いやアね」

「昔はお嫁にゆくとき、みんな持つてゆくものですつて」

「アジャパー」

ドツと笑い声が起る。

「ああ吃驚した。駄目よ。かじりついたりしちやア、くすぐつたいじゃないの」

一様に耳を真赤にして息をはづませ、恐らくはもつと隠密な場所には十六歳の少女の若い血潮が充血と刺戟を起しているにちがいないのである。

これは近頃の女学生の一部の間に行われている読書サークルなるものである。読書というと体裁が良いが、これはボーイフレンドや両親のところからこっそり持出した絵や写真や本をグループを作つて回覧するのである。歌麿や豊国では今の人に受けないものと見え、姿態だけは昔のもののままで、

特集・現代風俗の病癖

顔だけが鶴田浩二や美空ひばりになつてゐるものもある。本はヴァン・デ・ヴェルデが表紙の毛ば立つほど手垢で汚れ、缺字なしの西鶴や、カザノヴァ情史の翻訳や、国貞描く浮世源氏などというものが手から手へ渡り、婦人雑誌や夫婦雑誌の中から好奇心を満足させるような記事のスクラップや、いかがわしい筆写本が制服の処女たちの胸を悩ましくする。

桐の花が紫に咲き、うつとうしい曇り日の校庭に紫陽花が青臭い匂いを放つ頃、伝染病のような発情期が若い心を躍らせる。こうした少女達には勤労を基とした社会生活の実感がないため気持が浮わつてゐるところへ、誰か早熟な肉の呼声に強く支配されるものがあると、これを指導者格に、後は群集心理で、コワイ物見たさも手伝つて、一廉の成女振つた物識りを誇り合うようになってゆく。性の神秘は今でもそうであるが、あまりにも罪惡視されてゐる。そして、この蓋を開いたパンドラの箱からは露骨な魅惑の惡魔が飛出したのである。色氣づいた年頃の娘それは雌動物の本能に強く動かされてゐる。表面はさりげなくとも内には教師や親が何を云つても、或は檢察の役人などがどう取締ろうともピンとはねかえず植物の発芽のような活力に動かされてゐる。

この時代の娘は、戦前と戦後とを問わず、本質的には同じである。

彼女等はどこかの浜辺の小心な海水浴女性に似たところがある。彼女は乳と腰とを覆うた流行の水着を着て、黒い絹の海水帽で髪を包んだところは雑誌の口絵の

ように美しいが、おつかなびつくりで膝まで水に入つてゆく。細かい砂が彼女の足のうらをこころよく愛撫する。波が来て、規則正しく彼女の肉体をくすぐる。立上つたままで、彼女は海藻と沃度の匂いを鼻一杯に吸い入れてうつとりとする。時々彼女は両手で水の表面を掃くようにしながら、海の泡をすこし拾ひ集める。眼の前にひろがる海は同じように見えても、これは変化し、盛り上り、魅惑するのである。海水浴の娘は、波の上に身を投げかけ、波の上に寝たくてたまらない。そして波に転がされ、波に抱きしめられ、波に運ばれて行つたらどんなに心持がいいだろうと思う。しかし彼女は恐いのである。水はあまりにも深い。波に浮んだらどこまで連れて行かれてしまふだろう。それで彼女は、止むを得ず、岸に近いところで、白い小石や貝殻や、捉えることのできない海の泡と遊ぶことで満足してゐなければならぬのである。

ひどく抽象的な云い方であるが、年頃の娘の心の方向は、どんな善良なものでも、こういう風なものだと考えてよさそうである。

墮ちる制服の處女たち

大抵の女学校ではこのごろダンスを奨励してゐる。新時代の常識扱いにするのである。しかし、学校のホールでどうやらステップがリズムに乗るようになれば、これは元来女同志で踊るものでない位のこととは發達の歴史をみてもわかることなのである。どこの学生でも高等学校以上の七、八割はダンスに興味をもち（又、もつのがあたり前な



のだが）これのパートナードとして男の学生、つまり今の言葉でいうボーイフレンドを持つ傾向となる。

銀座のダンスホールのアベック・タイムに行つて御覧なさい。十六から十八位までのセーラー服の少女達がチークダンスや、からみ台いダンスと称するものを相手の青年と享樂している。ふくらみ初めた乳の蕾がどんなに敏感な刺激を全身に流すものか、老人には想像もつかないだろう。二曲も踊ると彼女等が定つてトイレットへ走るのはおかしな観物である。中にはパンツのスペア（代り）を準備してゆくのだと私に語つた少女さえ居る。そしてここへ時々婦警さんも交えた補導取締の警官が入つて来る。いつも二十数名の少女が訊問をうける。そのほとんどすべてはいづれも学校をサボつた女学生の一団なのである。

しかも少女達は一度おぼえたダンスの味——これは彼女等にとつて一種の合理的自瀆行爲に他ならぬのであるが——は一度や二度の説諭位で馴意されるものではない。ホールのアベック・タイムは他の時間より料金が安いとはいふものの、彼女達のお小遣で賄いきれるものではない。ホール通りの金に困れば、授業料をごまかしたり、学校の寄付に口実を作つたり、家族の着物を持ち出して売り拂つたりしているうちはまだしも、遊興費のためには万引や掻拂いをおぼえるものもある。こうなればもう女学生は罪の女と転落したのである。ダンスが頬を寄せたり、鼻奮のために利用されたりしている中は、それでもこの西線に止まるならば、まだ一種の青春発散だ



けですむ。しかし、現実には、すぐにこれに引続く次の段階が待ちもうけているのである。世間の雑誌には処女性を女の財産や嫁入資格として考えることが封建的愚劣だと教える心なき成人の文章が興味中心にのせられている。少女達は真の愛人に与うべき大切な宝を粗末に扱うように、自然の呼声と相俟つて、考えたがつてゐる。

「ダンスホールに出入りするようになれば占めたものだ」

と、ある不良学生が語っているのは本当だ。ここまで来れば、彼女との関係は友愛の一線を敢敢にふみ越えて、急ピッチに肉體關係にまで進展する。すでに読書サークルで神秘の帳は外されているのだから昔の娘のようにオドオドしたり、恐がつたりしない。或

特集・現代風俗の病癖

時の補導に引かかった女学生、ハンドバックの中にはゴム製品、の衛生具まで入っていたのである。男女共学の高校生の間では、もし妊娠したら、人工流産の手術の費用は男が出すことを条件として身を任せることが普通になつてゐる。「乙女の性典」とか何とかいう映画ではお腹が大きくなつてから処置なしなんておかしいわと、空嘯があるが、あんなになつてから処置なしなんておかしいわと、空嘯いてみせた若い娘を現に私は知つてゐるのである。時代からすこしズレた成人の想像脚本など、彼女等は鼻で笑つてゐるのである。

東京の新宿を終点とする小田急電車の沿線から通学する男女の学生たちの間で組織されている「ジロリン・グループ」という大規模なグループが警視庁少年係の手によつて摘発されたことがある。これは百名近くの会員をもつてゐた。ジロリンとはジロリ、即ち秋波を送ることなのである。電車の中でウインクを交換し合つて、会員になる。一人の女が何人の男を相手にしよう、一人の学生が何人の女を相手にしようと自由であるという。恋愛関係ではない唯物的な恋愛関係をむすぶ。勿論はじめは映画やダンスホールへの同伴者である。しかしすぐにグループの乱交の犠牲者にされる。一種の割礼式があつて、一人の少女は先輩格の少女たちの手にした器具によつてアツという間に処女性が器物的に血祭りにあげられる。医専に通つてゐる女医の卵が手当と消毒をうけもつ。かくして彼女の入団式が終つたのである。夜の玉川ベリには青草の褥がある。人民広場のたそがれには露に濡れるが草の枕がある。金と口実のあるもの

は、伊豆、湘南の温泉ホテルに将来行われるであろう新婚旅行の予行演習に赴く。私は一人と一人とが恋愛をして行くところまで行くのは、敢えて無軌道とは非難しないつもりである。ただ相手えらばぬ乱交は悪趣味不風流と断じたいのである。恋愛の遊戯だからかまわないじやありませんかと、或時、こうしたグループの一人から逆捻じを喰つたことがある。よろしい、恋愛の遊戯なら自分達だけで隠密にやつてもらいたいものだ。それを巡回の警吏にさしつけられた懷中電燈の灯影で尻を丸出しにして立ち上る男女の図などというものは、犬猫の交尾に等しく不行儀千万だといいたのである。

桃色学生の性愛遊戯はもつと暖い眼でみてまごころのある善導が行われたい限り、今のうちに墮落させておいて、ガチャ輩に取締らせておいたのではいつになつてもその根を断つことはできない。模倣性は年少者の特性である。成人が身を匡し、身を修めないでいて、彼等にはばかり非難を浴せるのは見当違いもはなはだし。

「誰か罪なきもの、この女を石もて打て」

とはキリストの名言である。

このように危険な青少年男女の風紀を嘆く人たちの反面には、又、若い時には何をしようとも、年が経てば結構落ちつくところに落ちつくから心配はないと、至極樂觀的な見解をとる人たちもいるようである。

確かにそれも又、一面の真理ではあろう。しかしそれはあまりに無氣力な、粹人的な見方である。戦後の世相が流した病癖が、この若い世代を犯しつゝある現実を、我々はもつと謙虚に直視して、対策を講じる段階にあるのではなからうか。(カット・八木静男)

男 色 喫 茶 店

——同志を索めるソドム族の俱樂部として——

かびや・かづひこ

街の茶房で、コーヒー茶碗の持ち方、或は
 コーヒー茶碗の持ち手の色で、同志をもとめ
 る——といつても、それはコミニスト間の暗
 黙の合言葉でもなく、また愚連隊や不良少女
 の合図でもない。いま、かなり世人の関心——

の相手というものは、女色のそれと違つて、
 容易く見付かるものではなく、しかも男色者
 は、執拗なまでに熱心に、つねに同志を索め
 て汲々としているからだ。

——興味的な——の的となつていところの男
 色者の間に行われている默契なのである。

また一般の読者にしても、これは一つの社
 会風俗史としての興味ある話題であらう。

しかもその茶房は、ほとんどがそれら男色
 党を顧客とする店で、そうした喫茶店または

そこで筆者は、それら男色者の喫茶店を諸
 君の前に紹介しようと思うが、まず第一回は

酒場が、西歐のことは措いて、このニッポン
 に北は北海道から南は九州の果ての人の集ま
 る主要都市に散在していると云つたら、それ

東京におけるそれをルポルタージュ風に談述
 してみたい。

を知らぬソドミアたちは、おそらく歡喜にハ
 ツと胸を躍らすことだろう。

話を進める前に、一口に男色党といつても
 それには次の三つの階層があることを頭に入
 れておいて頂きたい。

というのは、考えてもわかるように、男色

その一は、学名で、「同性間色情倒錯症」と
 称ばれる男性、すなはち男性でありながら、

女性として相手方男性に対する者である。

これをウルニング *Ulling* と云う。男色本
 来の意は、このウルニングを指すのだ。

また、その二は、右のウルニングを好愛す
 る男性で、ドイツ語のペデラスト *Päderast*
 支那で云う「男風」である。

以上二者が男色を構成する主要素であるが
 そのほかに、も一つ、「男色ファン」という
 べき階層がある。つまり、男色という現象並
 に男色者に深い関心・興味を寄せている人々
 である。

これら三階層の人を男色喫茶店は顧客とし
 ていることを、予め知つておいてもらいたい。

(A) 銀座 界隈





まず振出しを銀座といこう。
銀座四丁目交差点、交通巡査が一手手の下に数千の群集を繰っている姿を左横目で睨みながら、新橋に向つてチヨイト行き、チヨイト折れると、そこに男色茶房としてチピカルな「B」という店がある。

マスターは、十九世紀のヨーロッパの洒落男のように、モミアゲをアゴのあたりまで長く延ばし、鼻下にコールマン髭をたてた四十格好の男で、勿論其道の人だ。
ボーイは十八、九から二十二、三、いずれもペデラスト好みの型のハンサム・ボーイばかり揃えている。

五万枚の小説を書いた男と云われる精力家で、街の特殊な現象を次々と小説にとりあげている勉強家の丹羽文雄は、最近「青い街」という作品の中で、この「B」らしき店の雰囲気や次のように描いている。

「その喫茶店には、女の子がゐなかつた。
(中略)へんに去勢された十七八才の青年が、四五人ゐた。もみあげを長くのばしたマスターの態度は、慇懃をきはめて、気味が悪

いくらゐであつた。(中略)青年給仕が、僕のところへ紅茶をはこんでくる。青年はカウソターのところにさがつて、そこからちつと僕らを眺めてゐる。女の子に眺められてゐると同じ感じがしてならなかつた。しかし、女の子の場合ならば、それがあたりまへのことであり、僕も、特に、眺められてゐるなど感じないでよかつた。「セラピア」では、特に眺められてゐるといふ感じが、肌にまといつた。そして、離れなかつた。彼らが何気なく眺めてゐるといふのは、ちがふからであらう。さういへば、ここでは、店の男たちの一挙手一投足が、何かの効果をねらつてゐるやうに意識的に感じられた」

さすがの丹羽文雄も、オソレをなしている様子が、よく現れている。しかし、この「B」は一般の人には向かない店なのだ。

また、「仮面の告白」「禁色」そして今連載中の「秘楽」と、次々と男色に材をとつた秀れた作品を発表し、「文壇の怖るべき子供」と称ばれている新星三島由紀夫も、ここの常連である。

三島は、この「B」で、「禁色」の主人公悠一のモデルである美少年と知合つたのだ。二人の関係はわりあい長くつづいたらしい。

そして、その交渉における三島の眼が、「禁色」となつて現れたのだ。

「なぜ三島由紀夫が、男色を作品のテーマに選んだのか。その最も簡単な答は、デフォルメに一番都合がいいからということであろう。世俗のいわゆる罪とか悪徳とかいうことに、挑戦するには最もいいテーマである。そしてあわよくば、神のない世界へも切り込めようというものである。更に答を付け加えれば、男色ということは、日本の近代文学で忘れられていたテーマである。これを取上げることは、鬼面人を驚かす役にも立とうというものである」

文芸評論家浦松佐美太郎は、三島の創作心理をこのように評している。

三島が、「禁色」の主人公のモデルと、この「B」で知合つたごとく、ここは、ボーイ対客の交渉のためにのみでなく、客対客、すなはち、冒頭に云つたように、男色党の客が同じ道の同性の客をもとめるための倶楽部でもあるのだ。ウルニング、ペデラスト、それぞれの客が、ここへ茶を喫みに来て、客の中から、自分の好みの相手を選びだし、双方情意投合すれば、あらためて相携えて交歓の場所へゆくということになるわけである。

又、ここでは、客の種類によつて、コーヒー茶碗の持ち方並にコーヒータ碗の持ち手の色が違うそうだと。

この「B」について、この界隈の男色喫茶店として有数なのは、同じく銀座四丁目の「C」でここもナヨ／＼とした、女のようなナイス・ボーイが揃つてゐる。

新橋にゆくと鳥森の「Y」と新橋の通りに面した「O」が、衆道の通人に知られてゐる。「Y」は酒の店、「O」は気のきいた汁粉屋で、前者は女装の青年が給仕し、後者は若いボーイがサービスしてゐる。

筆者思うに、こうしたソドム族の倶楽部となる店も、やはり相互の間に酒が介在してゐた方が、彼らにとつて効果的のようには思われる。アルコール分が体に入ると、互いに大膽になり、いつそう緊密に結ばれるものだからだ。どちらかというと、モーションの控え目なソドミアたちにとつて、これは好都合ではないか。――

(B) 上野 附近

その点、上野の「N」は、其道の上手といつていいだろう。

山下から広小路へ向つて左側、寄席鈴本の

対い側をちよつと入つた所に、その店「N」はある。スタンド式のさゝやかな酒の店である。

マダム——といつても女装の男性は三十がらみ、螢光燈に照らされた蒼白い顔には、その長い男色の歴史の跡が刻まれている。

曾て曾我廼家五郎一座の女形をしていただけに、日本風の細面、残んの色香を残してゐる。終戦後一時この土地で男娼をしていたことがあるが、いまは「オカマ」視されることは大嫌いだそうなの。

店はこのマダムひとりできつてゐる。彼女はカウンターの一線を以つて舞台と客席を劃し、昔ながらの女形の演技をしてゐるように見える。

店の雰囲気がかんな風だから、バタ臭い客はあまり来ない。クラシカルな男色の味を好む客が多い。そして客は上客が多い。

大体、男色を好愛する者には知識層の人や裕福者が多いのである。男風とは、富裕なインテリの贅沢な趣味なのかも知れぬ。

探偵作家に大学教授M、性医学者H等の著名文化人が、ときどきここへ姿を現わす。

「S・Iさんとは長いおつきあいだけど、しつこいところは嫌いだわ」

こんなことをマダムは云う。S・Iとは、
「責め」の画家として有名であり、嘗て五郎
一座の看板絵なども描いた人である。

其他、客はウルニングもペデラストも来る
が、マダムがウルニングのところから、やは
りペデラストが多い。

ウルニングといつても、このマダム、あま
り客にべたつかない。自分は男娼に非ずして
女形である、という矜持をもっているだけ
に、なかなかスツキリしている。カウンター
を隔てて、男性的特徴をカムフラージュしつ
つ、客に対するのみで、傍などえは腰をおろ
さぬ。

次にちよつと変つたところで、このシマの
男娼がよく集る茶房を教えよう。

それは都電山下停留所際のミルクホールの
二階と不忍池弁天様境内の茶店で、そこえい
くと、女装男装とりどりの男娼が、仲間同士
や又客とともに、お茶を喫んでいる姿を見か
けぬことはない。

(C) 其 他 一 束

新宿における男色喫茶店としては、二幸裏の
「Y」が、ソドム族の間で最も有名である。
この店は、やはりソドミアの茶房として知

られていた「ユーカリ」がさかんであつたこ
ろは、大久保で営業していたが「ユーカリ」
の経営者が店をやめて、地球堂に隠居するこ
とになつたのを、現在のマスターが新宿に進
出して、「Y」を開業したわけである。

マスターは、勿論ソドミアで、店に働く数
人の男ボーイは、いずれも二十才前後の盛り
の花。

尤も、煤條軒の「よだれかけ」巻五「男色
二倫書」によれば、十九から廿二までの若衆
は「散る花」
というのだそ
うだが……。

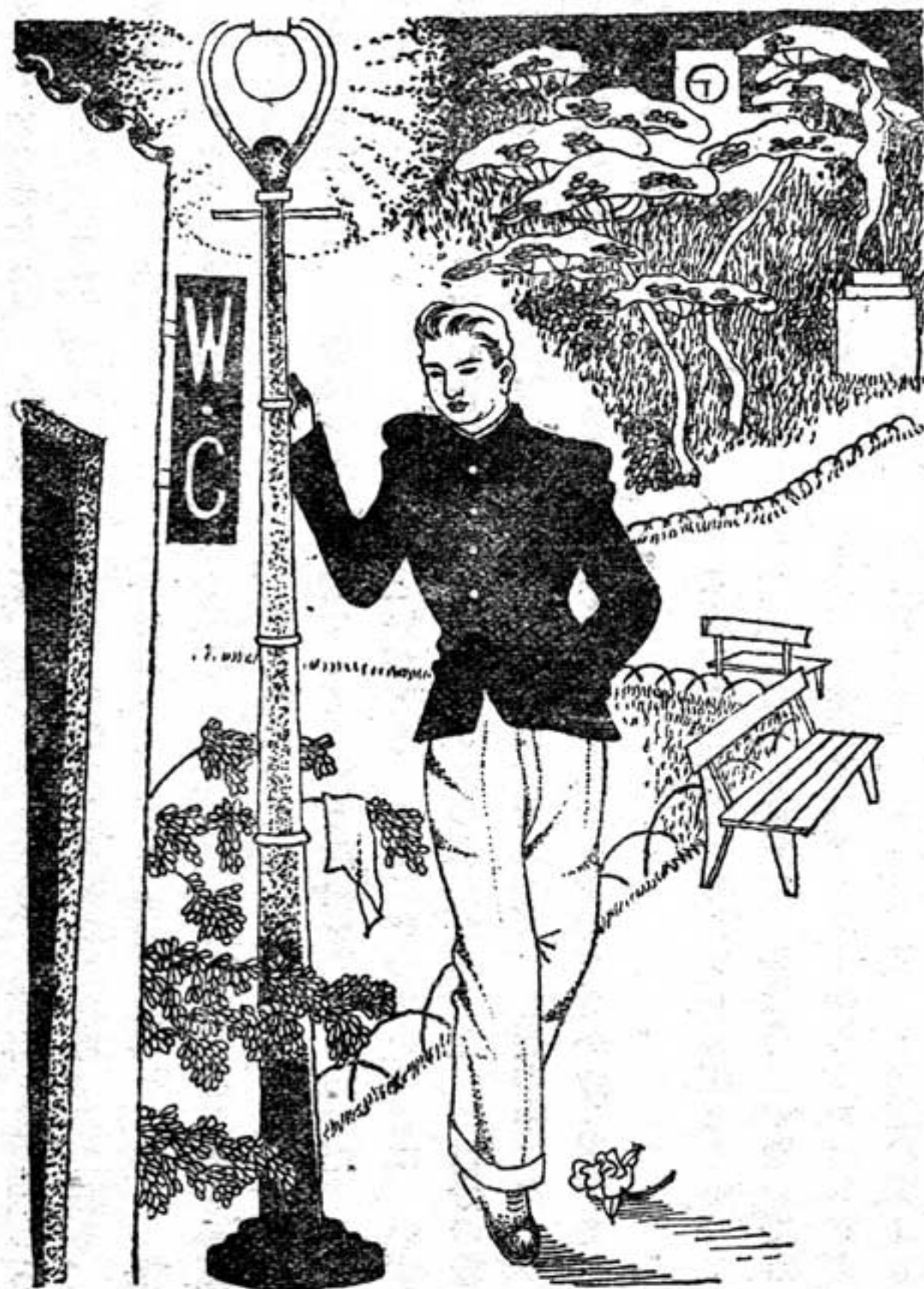
そういえば
この花花、触
れなば散らん
の風情があ
る。つまりい
ずれも媚ッぽ
い。媚ッぽす
ぎると云つて
もよい。自分
たちの好みの
タイプの客
——勿論男性

——が来ると、客同士の交情のことなどうち
わすれ、門外漢には「いやらしい」と思える
ほどの、媚めかしいウイंकをおくるくらい
はまだしも、嬌態媚態をその客に呈してかか
る。

こうしたや、いづれがまた、この店の客呼
びにもなっているのである。

次は、新宿文化劇場附近の「I」という喫
茶店が、男色党のクラブとなつている。

ここえは男色趣味の外人たちが、よく集つ



て来る。それらの外人は、兵隊ではいずれも將校級、民間人では幹部クラスの者ばかりで下つ端はいない。男色好愛者がインテリ富裕階級に多いことは、いずれの国でも同じと見える。

次いで澁谷では、テアトル澁谷真横の「S」がすぐれている。

日本風の酒の店で、マダムは花街仕込みの巧みな女性的テクニックをもつて、客を陶然とさせる。

この店は、九州にも「H」という同じ形式の支店を持つてゐるそう。

浅草で、男色者の集る所は、すべて酒の店で、その中「K」「I」「N」の三軒がよい。

「K」は昭和座前横にある。マスター夫婦は、共に男性で、愛しあつて一緒になつた間柄だから、客同士の交情にも粋が利き、恋のとりもち、縫れ事のとりまとめ、何でもマメマメしくやつてくれる。

「T」は今半横丁「N」は国際マーケットの中にあり、両者ともマスター夫婦は「K」のそれと同じく男同士の夫婦である。

この三軒のほかに、男娼——他のシマの——ばかりが集る飲み屋が、七軒もあるとか聞いている。

神田におけるソドミアの喫茶店は、今川橋附近にある「L」よりほか、筆者は知らぬが勿論このほかにも幾軒あるに違いない。

さて以上話述して来た東京の街々の男色喫茶店の性格が、それぞれその存在する町の性格をそのまま現していることに、読者は気が付かれたに違いない。

すなわち、銀座のバタ臭さ、上野の古めかしさ、新宿のやにつこさ、浅草の大衆性。等々である。世の正常性に抵抗するソドム族の世界も、所詮は郷に入つて郷にしたがつてゐるものと見える。

最後に、景物として、ノン・プロ男娼——男娼というよりは、やはり単に男色者といった方が適當かも知れないが——による男色クラブを紹介して、この稿の結びとしよう。

「クラブ」といつても、屋内ではなく、青天井の下で、場所は日比谷公会堂附近である。

このあたりに、灯ともしごろになると、どこからともなく、ひとりひとり、柔さしい身のこなしの男が寄つてきて、およそ十数人ほどにもなり、各自思い思いの所に、人待顔に佇つ。

青年あり中年者あり、年令はさまざまだが身装り格好はいちようにカタギのサラリーマ

ン風。然り、彼らはすべて銀座、丸の内から日本橋、神田界隈の給料生活者なのである。

そのほとんどが色情倒錯で、そのため、相手を得られぬ相手欲しさから、勤務先を終業後、夜を待つてここへ集い寄り、おのが性慾を満たしてくれる対象を索めるわけだ。

といつても、ここに佇つてゐる者は、いずれもウルニングのみだから、互いに自分の相手には不適當。それで道行く男の中のペデラストラしい者にモーションをかけるのである。

こういうわけだから、プロ男娼とちがつてその間の金銭の授受は、全然それのない場合もあり、普通にペデラストからウルニングへ金を与えることもあり、又、その逆の場合もあり、一樣でない。

これも亦プロでもなしノンプロでもなくのセミプロ男色者に、三の輪の飲み屋を流して歩く三味線ひきがいる。

三味線でサービスして、頂き酒でほろ酔になると、彼等はこれとにらんだ相手の客にしなだれかかつて来る。彼等はちゃんと職をもつてゐるので全く相手欲しさだけで、店から店を流して歩くのだ。

(カット・新田英児)

現代のサジズムの心理と風俗

新らしい責め・古い責め

上田 青 柿 郎

責めの型と雰囲気

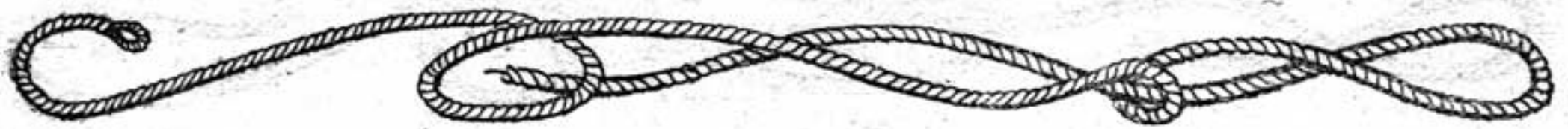
最近紹介されたフランスの小説に「泣き叫ぶ青春」というのがある。この小説のなかに木馬の四肢に少女を縛りつけて責める場面があるが、木馬の後肢が長くなっているので、いきおい臀部が高く突き出て責められる少女はひどく恥かしい格好になる。そのエロティックな少女の姿態が責める者を極度に昂奮させて、さらに息詰るような責の修羅場が展開されるのである。

日本にも昔から木馬責があつたことはいうまでもないが、この木馬はたいてい背中が屹立しているので俗に三角木馬ともいつている。これに跨がせられると責められる女は、痛さと、木馬から転落しまいとして腰を左右によじつて身悶えるので、その姿態に西洋木馬とは別な色気が見られる。

西洋木馬で責められる女が黒いストッキングの裸身であるなら、三角木馬の場合では眼も醒めるような友禪模様の

長襦袢でなければならぬ。筆者はこの二つの対照を撮影したことがあるが、西洋木馬のエロティシズムには一種の量感といったものが見られ、何かしら新らしい感覚をうけとることができた。それに比べると、三角木馬の場合は凄艶な色調感こそ見られたが、それは日本画に見る扁平な感じで西洋木馬の量感とはうけとれなかつた。

昔からいわれている蠟燭責（宗教的な意味が含まれ、女を全裸にして肩や背、手足などに点じて責めたものといわれるが、私刑として肛門や局部に挿入して火を点じて責めたもの）、算盤責（三角型に刻んだ刑具の上に刑罰者を坐らせ、膝へ伊豆石を一枚ずつ乗せて責める公刑）、松葉いぶし（主として女を責めるのに用いた私刑で、生松葉をいぶしてその煙で窒息に近い状態にする）、海老責（江戸時代の公刑で、股間に首を突込むくらいに身体を折曲げて責める）、薬味責（指先などを傷つけて唐辛子、胡椒等を塗って苦痛をあたえる。殊に女は、局所にそれらを挿入して堪えられぬ苦痛をあたえる）駿河責（駿河の代官彦坂九郎兵衛の考案したもの



いわれ駿河問いともいう。刑罰者の身体に重石を乗せて水中に沈めて責める。水責（水を顔にそそいで窒息に近い状態にする）などの拷問の型は、感覚的にも時代めいているのでとうてい現実的なものを感じられないが、現代の感覚ではどんな責が新しく、どのような責が古いか、またそれら昔の拷問の型を現代の感覚で扱ったとしたらどうであらうか、これはきわめて興味のある課題であると思う。

たとえば「松葉いぶし」を例にとつてみるなら、パーマネットの洋髪にシユミーズの現代娘を対照にして、松葉のかわりに、何十通となくあるその娘の恋文を一枚々々読みあげながら火鉢にくべてゆく、というようにあつたとしたら、女に裏切られた男の拷問としてフィクションがあつて面白いだろう。また木馬責の場合でも、西洋木馬のそののように、突き出された女の臀部に浣腸責（かんちようせめ）を併用したらかなり感覚の麻痺した者でも新しい情熱をおぼえることだろう。

このように、責の本質には新旧というものはなく、責められる者（女）の服装や責め場の雰囲気、昔からの拷問の型もおのずからその様相を一変してしまうのではないだろうか。

責められる女の羞恥心

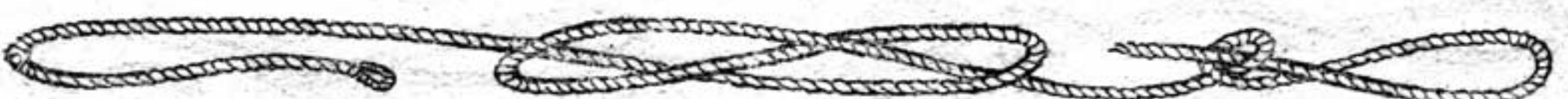
友人のMは、サディストとしては比較的ノーマルに昇華させてその愛人（二号さん）との性生活をエンジョイしているが、彼は一週一度の愛人との逢う瀬にはあらかじめ前の

週にたてゝおいた計画を実行して、いつも愛人に新しい情熱と刺激をあたえているので、七年間にわたる愛交も、この頃ようやく白熱（はくねつ）の度をたかめるようになったといっている。

Mは、女に羞恥心がなくなつたらサディストの夢は半減するし、アブノーマルな破壊（はた）を早めることになるだろうといっているが、このMの言葉をかりるまでもなく、責の世界では女の羞恥心がきわめて重要なポイントになっている。

ごく最近の話であるが、筆者はすこぶる頭のいゝ夜の淑女（レディ）に行きあつたことがある。新橋駅附近で凄く垢抜けた洋装の美女に呼びとめられ、好奇心半分に押（お）つかれてみると、特別面白遊びをさせるからというので、どんな遊びだと訊くと、それはホテルへ一緒にいってから、と嬌然（きやうぜん）たる仕草で誘うのである。そこで彼女にしたがつてホテルへゆき、女の望む額の金を渡すと、このいづれかを買つてくれといつてハンドバッグから錠剤の入った小壺と赤い扱帯（しやくたい）を取出した。つまりこの二つのうちの一つを買つてくれれば面白い遊びをしてみせるというのだ。いうまでもなく錠剤は睡眠薬（どうせ中味はいゝ加減なものだろう）で、扱帯は縛らせて自由になるというのだが、これでさらに別に幾らかの金をフン奪（うば）ろうという魂胆（こんたん）であるとかわかつていても、この頃の獵奇趣味（りゃくきしゅみ）を逐（お）う漁（あ）色（しき）漢（かん）にとつてはちよつと食指（しじき）のうごく趣向（きうきやう）であらう。

それは本題から外れる話だからどうでもいゝとして、筆者は、彼女のいう額でその赤い扱帯を買つてそれで彼女をうしろ手に縛りあげたが、卒然として興味を失つてしまったのである。というのは、どうせ商売の策として考えついたことで

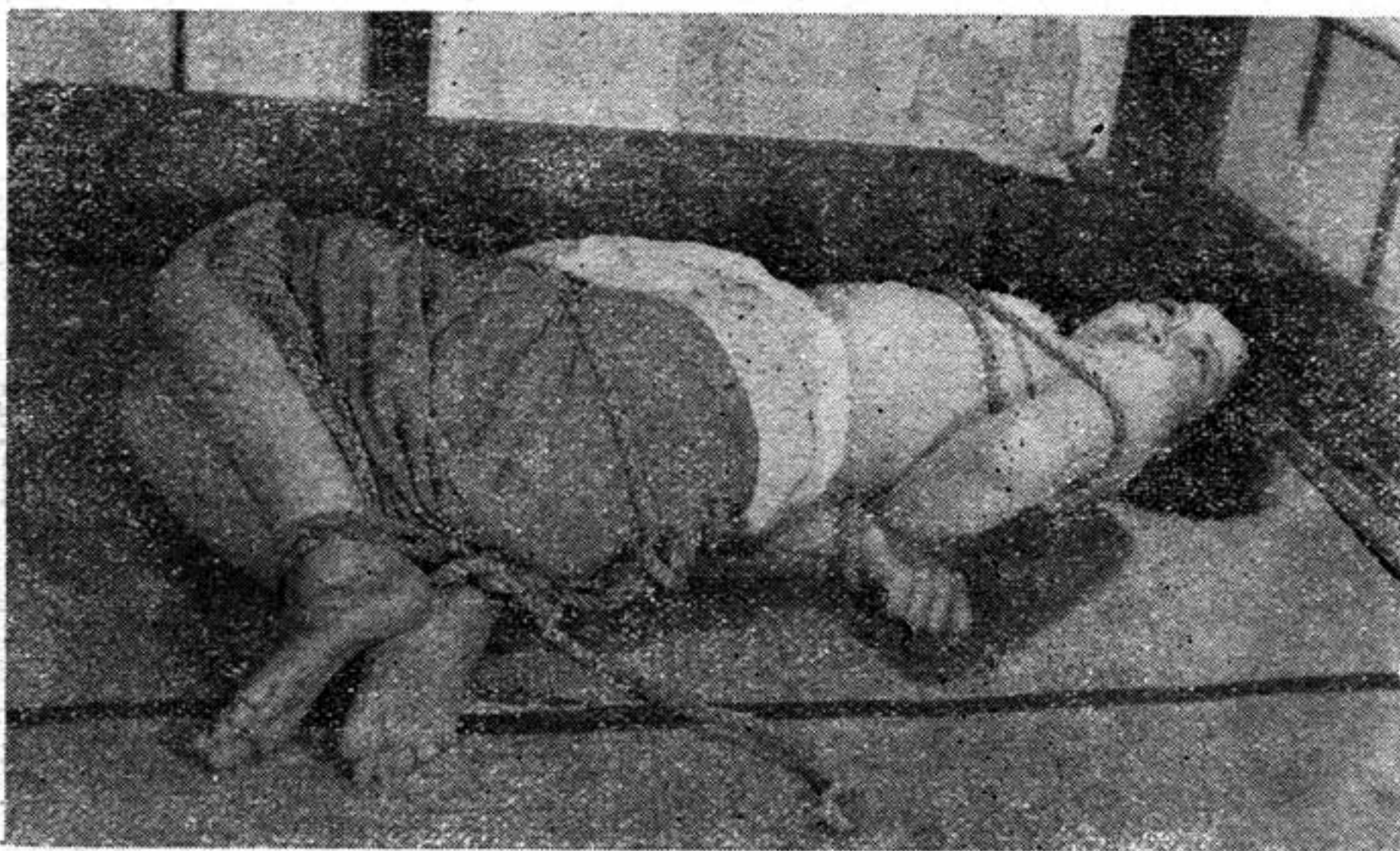


はあろうが、たゞ「縛らせた」というだけでそこに一片の色気も見られなければ雰囲気も感じられない。

最も肝心な羞恥心というものがまるでなく淡々としてきわめて味気ない風情なのである。彼女に多少でもその傾向があつてのことだつたら、この赤い扱帯はたちまち羽が生えて何本だつて売れることだろうし、彼女は瞬くうちに財をなすことになるだろうと、筆者は、彼女と別れる間際にそういつて笑つたものである。余談がたいへん長たらしくなつてしまつて恐縮であるが、要するに、女に羞恥心のない責は気の抜けたビールよりも味気のないという例としてお話しした次第である。

責め場と責め道具

責の道具として用いられるものを、昔のものと現代のものを比較して、同じ型の責にもどれだけの相違があるかを考えてみると、まず小道具とし



て昔の責め場につきものの煙管がある。まだ雁首に喫い残りの煙草がくゆり、女の柔肌を焼くには充分な余熱がある。それを縛られた女の太腿におしつける、それでピシリと殴りつける、というのが昔の責め場風景の定石である。これをマドロス・パイプに置きかえてみたらどうであろうか。

まずマドロス・パイプの型態から連想できるように、それが喫煙具としての用途とは別にどんな役目を果たすか、いうまでもなく女の羞恥心を狙つた一石二鳥の責め道具であることがうなずかれることだろう。

貧乏徳利と五郎八茶碗も昔の責め場につかわれる小道具であるが、これもビール壺あるいは洋酒壺などにコップとかカットグラスなどが砕け散つていれば、スリルさえ伴つて動きのある場面が現出するだろう。また、昔の常套手段である猿轡も、手拭のかわりにナイロンの靴下をかませれば、見る者に、むつちりとした足をつんだ女の体臭まで感じられて新味があるだろう。

しどけない長襦袢姿の女に水をかける折檻の手段も、芝居などでさんざ見せられてきた風景であるが、これも長襦袢のかわりに薄物のドレスを水浸しにすれば豊かな胸や腰の線がくつきりとうかびあがつ

て、素肌の場合よりもつと肉感的で効果があると思う。

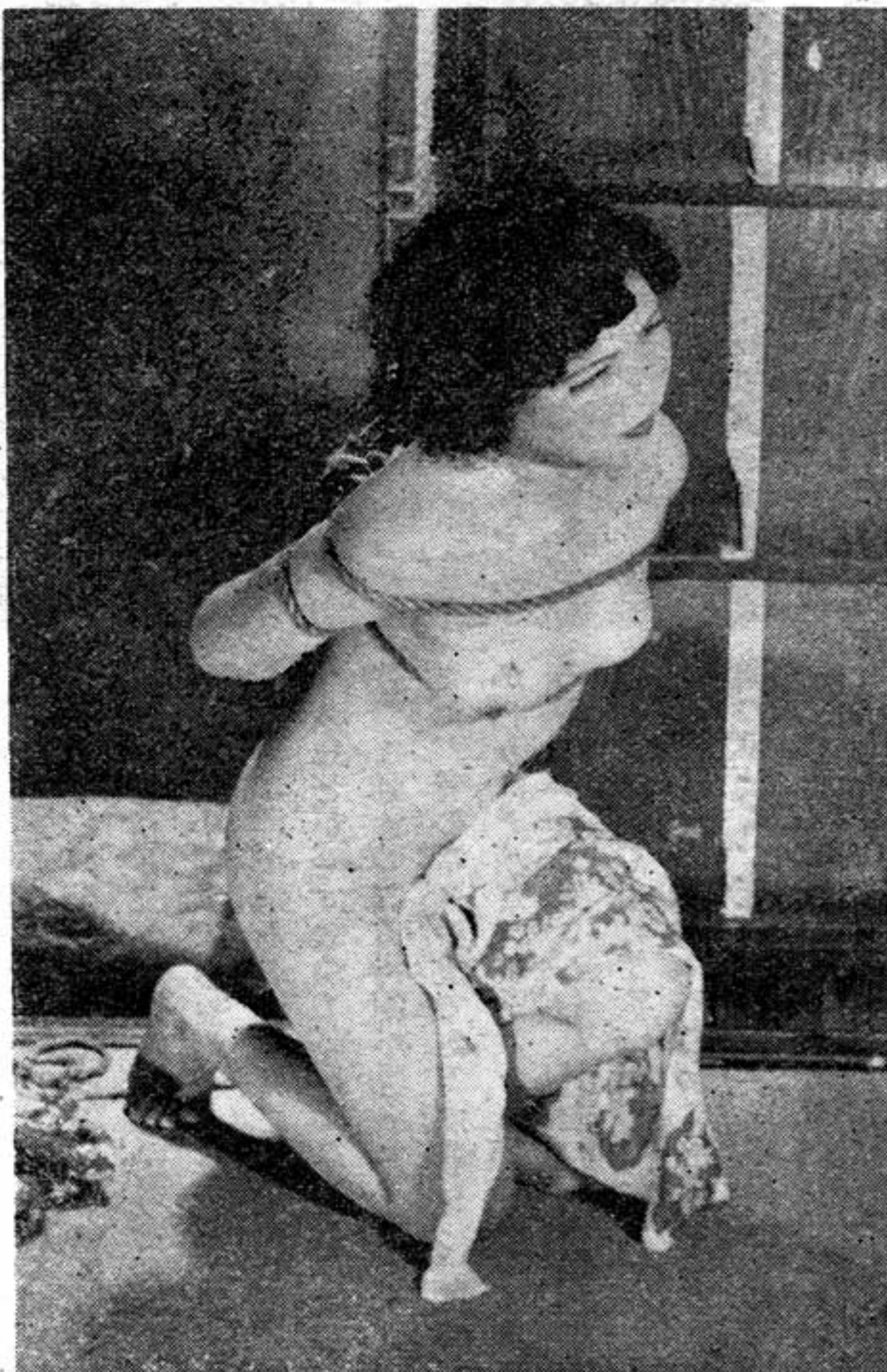
その他、新味のある責め道具としては、画室を責め場に画架に縛りつけた女の肌に赤や青や黄などの絵具をべたべたに塗りたくつたり、女の恥かしがる絵や文字を描く、あるいはパレット・ナイフで白蠟のような内腿を突く。また山小屋を背景にピッケル、登山靴、地下足袋、ザイルなどをあしらうと、さらに嶄新奇抜な構図が無盡蔵にうかんでくるだろう。

サデイストの夢

嶄新奇抜といえは、責の構想についてサデイストは最限なく夢を繰りひろげるものである。筆者の知る範囲のうちで奇抜と思われる二、三の実態をお伝えしてみよう。

Kは某省の事務官といういかめしい肩書の人物であるがその私生活では明朗なりベラリストできわめて社交性に富んでいる。彼は三十一歳の独身青年でアパート住まいであるが、そのアジトには彼と関係のある女性以外は何人も近ずけたことがない。

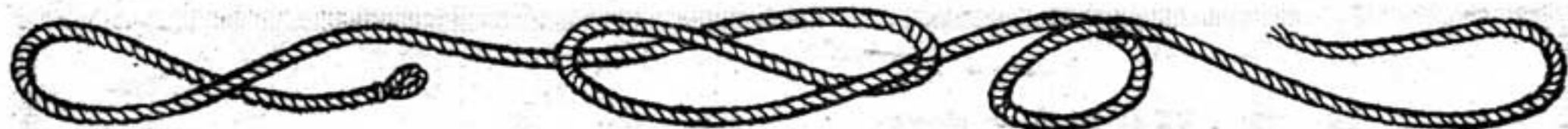
谷中の天王寺近くにあるこのアパートは、いまにも朽ち倒れんばかりの古色蒼然とした建物であるが、Kの部屋へ一步足を踏み入れると、およそ外部の風景とは別な、意外



な感じに誰しも吃驚することだろう。まず眼に入るものは赤一色の部厚い緞帳である。これは外部との音響を遮断する防音装置であり、その他、天井といわず壁にいたるまで防音装置がほどこしてあるので、かなりの大声を立てても絶対に外部へ漏れるようなことはないといっている。

Kがなぜこんな薄汚いところを根城にえらんだかといえは、このアパートの住人は殆んど勤人でしかも中年者の夫婦が多く、彼らは生活に疲れ果てゝいるので他人の生活などに干渉する気力がないからだというのである。

さて、その赤い緞帳のKの部屋には、隅に古風な、しかも



それは非常に豪華なダブルベッドがこの部屋の半分も占領している。が、よく見ると、このベッドの四本の脚には鎖がぶら下つてその先に鉄の輪が取り付けられている。頭の方にも足の方にも、鎖の輪や麻縄が垂れ下つてゐるし、さらにベッドの中程には胸や腰を締めつけるのに都合のいゝように頑丈なベルが二本取りつけてある。

Kに訊くと、このベッドはふだんソファのかわりにしてゐるので、女がどこに坐つてもその位置を替えずに縛りあげることができるという。

Kが最近このベッドで責めた銀座のダンサーで、二日間も縛らせたまゝKのあらゆる加虐に陶醉した女があるというが、彼女は食事も用便もそのまゝとらせ、ほとんど半睡の状態でKに加虐を強いたといつてゐる。

Yは丸の内の某商事会社の代表者で、彼はその持てる物質にものをいわせて、みずから「耽美荘」と呼ぶ家を新築して、そこへ若い女性を片つ端から連れこんでは、人も羨む加虐三昧に明けくれているのである。

筆者はYと交友関係もまだ日が浅く、この頃ある事情から急速に親交を深めたものであるが、はからずも今日、この原稿のペンを走らせていると、突然彼から面白いプランがあるから直ぐきてくれという電話をうけとつたのである。

前にも一度訪ねたことのある「耽美荘」なる家を、筆者は電話をうけとつてから一時間後に訪ねた。その部屋の模様は前にも見たのでよく知つていたが、今日は様子がガラリとかわつて、ひどく陰気な空気が重たく立ちこめてい

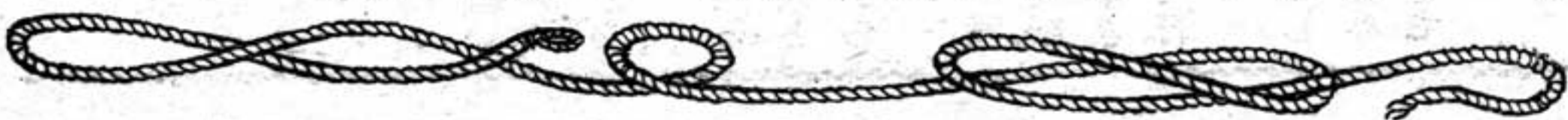
た。それでも桃色の電気が艶めかしく灯り、サディズムなドラマの幕開きにふさわしい雰囲気をつくつていた。

二十畳も敷けるかと思われるこの洋間の中央に、ポツンと一つ、およそグロテスクな格好をした頑丈な椅子が置かれてあるきりで、前に見たいろいろの調度は全部片づけられてあつた。が、筆者を出迎えてくれたYの話で、椅子一つというこの簡単な調度の意味をうけとることができたのである。

まず、この頑丈なグロテスクな椅子に女を縛りつける。この椅子は前方が深くU字型に挟り取つてあり、女の足は左右に大きくひらかれたまま固定し、さらにそのまま理髪店の椅子のようにうしろ廻れこむ仕掛けになつてゐる。そこへ、書生に曳かれて横ほどもあるシェパードがあらわれる。Yの手から女の體にミルクがすこしずつ落される。やがて女の表情にどんな変化が起つてくるか、さすがに筆者は、固唾をのむ思いで、このグロテスクな椅子を見守つたのである。

Yは横ほどもあるシェパードを飼つてゐるが、彼はミルク罐の口を切りながら、これからのプログラムをまだ女に打明けていないのだが、こいつを知つたら初めのうちにはちよつと抵抗するかも知れないよ、といつて、やがて幕を開けようとする人生最大のこのドラマの筋書にこゝろはずませてか、脂肪ぎつた顔をつねになく紅潮させていた。

それからものの五分とたないうちに、いったん出ていつたYは、上背のある上品な二十五・六歳の洋装美人を伴つてこの部屋に入つてきた。書生が、シェパードの鎖を解いてい



特集・現代風俗の病癥

處女篇

東京に處女なし!

日夏由紀夫



「あたし、お酒のむと、何だか、とてもヘンな氣持になるの……」「まだ、女學生なのにネ」「ても、もう十九よ。ちゃんとした大人よ……」

—
つい、最近のことだつた。

僕が日比谷で映画をみてから、あびす行の市電にのると、すぐあとから、やつぱりこの近所で映画でも見てたらしいヴウドル・ヘア(短髪)の若い娘が乗り込んできて、僕のと
なりへ腰かけた。支那服みたいな個性の強い服をきて、すらつと延びた軀が実に美しかった。プログラムをもった手の甲に、若い娘らしい靨が出来ている。体臭の強い女だ。

教養がありそうだつた。どこかの女學生らしい。こんなお嬢さんと友達になりたいなと思つたが、何だか話しかけるのは、はばかられた。

所が、その電車は、雨で断線が出来て、櫻田門止りになつた。……どやどやと降りた乗客にまじつて、その娘も、地下鉄の方へ歩きはじめたので、僕は思い切つて追いかけて行つて、傘をさしかけながら話しかけた。

気品のあるお嬢さんだつたから、道で話しかける男なんか無視するかと思つたら、案外明るく、答えてくれた。地下鉄の虎の門まで一緒に肩をならべて歩いた。

それが、僕とU子の仲のキツカケだつた。

特集・現代風俗の病癢

その晩は、地下鉄で別れたが、その次の日曜日に、彼女の行きつけの、有楽町の喫茶店で会い、映画をみたら、彼女は、

「今日、ビールが飲みたい、U子」

と、ちよつと甘えて云う。ビヤホールでビールをおごつてやつたら、すぐ真つ赤になつた。

そして、出ると、私の肩にもたれるようにして、足をもつれさせながら歩いた。僕は彼女が、酔っているのを利用して、宮城広場へさそつた。

U子は、自由放任主義で有名な神田の文化学院の生徒だつた。十九歳。英語科だ。どうりで、しやれた容子をしていると思つた。

宮城広場を歩きながら、思い切つて、肩を抱いた。むつちりした、若い娘の肉。

はじめて会つて二日目。少し早いと思つたけど、相手は酔っているんだし、肩をだいても何も云わないで頬を僕の肩にくつつけるようにしているから、いきなり、前へ立ちふさがつて、唇をさがした。

「いやン……」

そんな事を鼻声で云つたが、唇をつけられると、へびみたいに軀をくねらした。

「あたし、お酒のむと、何だか、とてもへんな気持ちになるの。……」

「まだ、女学生なのにネ」

僕がからかうと、平気で、

「でも、もう十九よ。ちゃんとした大人よ。」

……ママは子供あつかいにするから、家ではおとなしくしているけど……」

胸を服の上から、触れようとする、それはさすがにイヤがつた。……

「道なんかで、いきなり話しかけて、不良だと思わなかつた?」

ときくと、だまつて頸を振つた。

気まぐれなお嬢さんで、その晩は一回しか接吻を許さなかつた。恥かしくなつたのかも知れない。

だが、その次、会つたときに、

「ネ、鎌倉の海見に行つてみない?」

と自分から云いだした。まだ海水浴には早いが。……

「ああ。だが日帰りじゃいやだな。一晚とまらなきや」

「ママが、うるさいのよ」

「何とか、ウソつけば、いいじゃないか」

「ウン。じゃ、何か考えるわ」

どんな嘘をついたのか、彼女は、ちゃんと横須賀線の新橋の駅へきた。僕は、あまりすらすら、事が運ぶので、かえつて不安になりこのお嬢さん、男と一泊したりすること、どんな風に思っているのかと、

「大丈夫なんだネ。とまつてもいいんだネ」

と念を押すと、チョコレートを口に頬張りながら、

「ウン。ママうまくだましちやつたもの」

クスリと、いたずらつ子ののように笑つた。

KAMAKURA・HOTELへ部屋をとつた。海を見に行つてから、砂をおとしにお風呂へ入つた。勿論、別々。

ピンクのシミイズの上へ、HOTELの浴衣をきたU子は、ちよつと男の子みたいだつた。お化粧をしないのが、文化学院生のプライドだ。

布団のなかで裸になつた。とてもいい軀をしていた。そのいい軀が自慢らしく、

「私、下着脱ぐと、見られるの、いやなの」

手早く、くるつと素裸になつた。愛の口説もなければ、好きだとか嫌いだとか云う話もなかつた。よく女の子は、「責任もつてくれ

特集・現代風俗の病癖

る?」なんて云うものだが、U子は何も云わず、いきなり野生のけだもののように燃えた。処女じゃないとは思っていた。(接吻の許しかたなんかから考えたつて)——だが、この燃え方は、十九という歳の燃え方ではない。まるで大人だ。もうちやんと、何もかも知っていたのには、内心僕の方が、じくじとなり、当はずれた。もつと、イヤイヤしたり初々しい所もあるかと思っていたからだ。

健康で、開放的だが情緒はなかつた。これが、今の女学生か! 僕は舌を巻いた。戦前十九位の娘と云つたら、手を握つただけでも赤くなつて、心がぬれて、じつと思いつめるような恋をしたものだ。そのじめじめした恋心にくらべたら、U子なんかの方が、ずっと健康なのかも知れないが、だが、これは恋と云うより、なんだか、スポーツみたいな感じがする。

「U子は、今まで何人位、男と交際したの?」
腹ばいになつて煙草をつけながらきくと、
「六人位かな。……ウフフ……驚ろいた?」
でも、そのなかで、本当に好きになつた子は

二人位しか居ないわ」

「凄いだねえ。みんな、僕みたいな大人?」
「ウウン。年が違ひとは、あなたがはじめで、……今までは、みんな学生よ。デートね」

「デートつて云うのは、唯の友達のことなんだろ?」

「だつて、こつちで、そう思つたつて、男の子の方は、それじゃ承知しないもの。それにキャンプや、海水浴や、そんな機会があると自然になつちやうのよ」

「なるほどネ。外の女学生もみんなそんなかい?」

「知らない。——外の子のことなんて興味ないもの。でも、私達つて英語科でしょ。だから、あちらの人とお附合いするひと多いのよ。だから割合おませよ。イヴニングなんかきちやつて、方々のパーティへまねかれて行きますもの……」

現代の東京の風俗の一つにレセプションガールというのがある。良家の子女で、半分は自分から進んで、あちこちでひらかれる公式非公式のレセプションに出る美しいお嬢さんの集団のことだ。

華やかな雰囲気……、外人の甘い言葉……

若い娘が処女を失う機会が多いのは当たり前だ。U子の六人という男のなかに、ブロードの毛をもつた男が居なかつたとは云えないだろう。忘れられない二人と云うのは、或は、それかも知れない。僕が、そんな疑問をもつたのも、あまりに彼女の愛戯が、派手で、たくましくつて、日本人はなれしていたからだ。彼女は、それを海の向うの人に教わつたのじゃないのか。

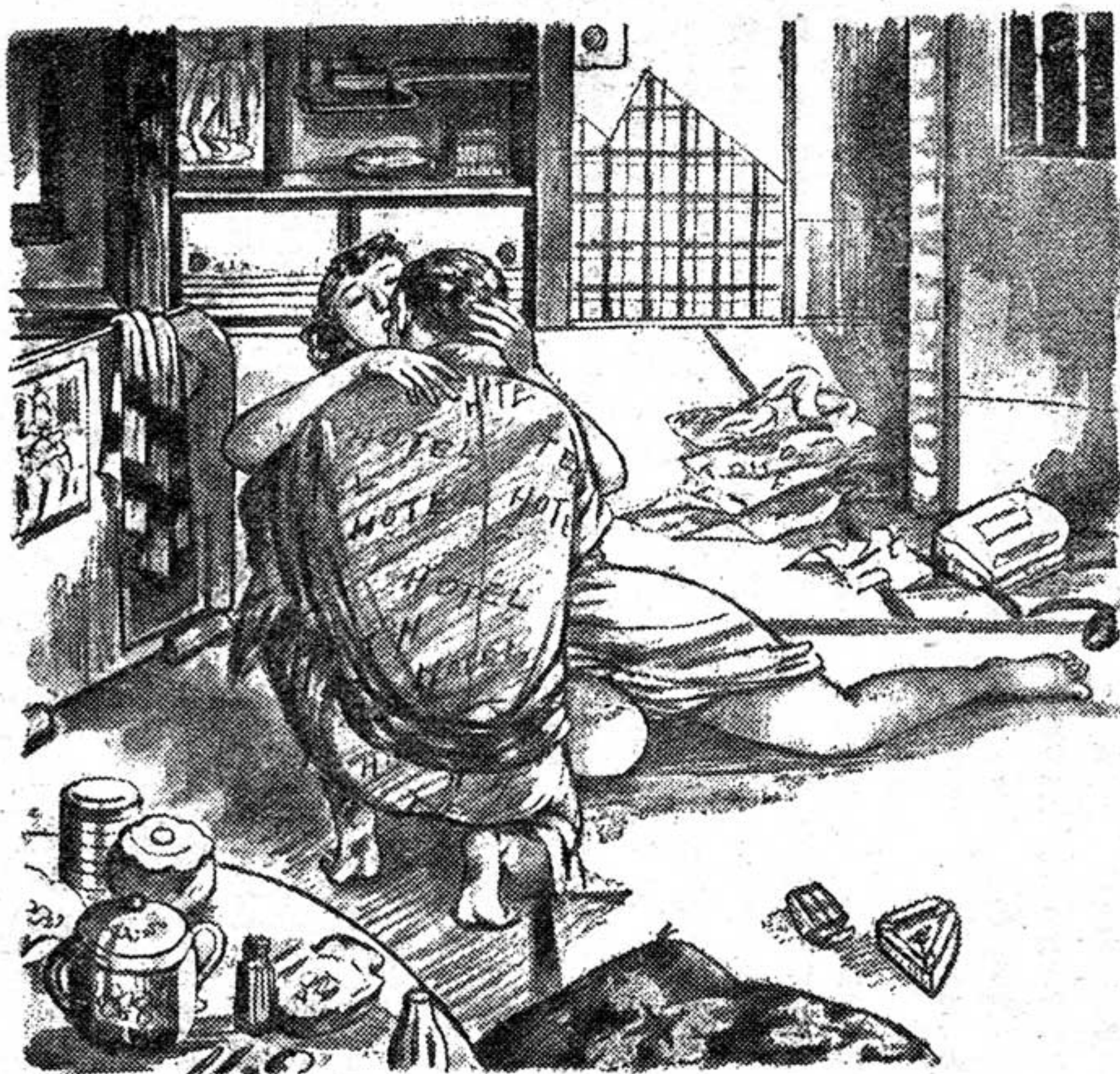
二

もう一人。

A子。——これは、D・M洋裁学院のお嬢さんだつた。

お友達と二人で、おつかかなびつくり、でも相手欲しそうに、品川のパラマウント・ダンスホールにきていたのだ。パラマウントがまだアベックタイム五十円で入れていた頃。

こんな所へお友達と、きている娘なんて、こつちで、少しいねいに誘えば、必らずついてくる。もつとも、男の友達ときている娘は、こわいから、誘わない。荷物あずけの所でみていると、あずける荷物で、ホール専門のズベ公か、あるいは、初心な女学生か、すぐ分る。A子は、紺色のスーツケースをあず



けたので、一目で洋裁女学生と分った。それで、すぐ申込んだ。

踊りは、まだカタかったが、そのカタイ所

が何とも云えずに可愛かった。ターンのとき、一寸足が強く触れるとすぐさツと赤くなる。それだけ踊りなれていないのだ。——だから、刺戟も、

それだけ強く感じるのだろう。

一時間位、続けて踊っている、握りあつて、握りあつて、汗でベツトリとなり、軀も汗をかいて、いるらしく、けもの臭い匂いがしてくる。眼が自然にうるんできて、何か話しかけても、あんまり返事しなくなる。可愛い唇から、吐く息が、熱くなつてきて、軀の動きも重くなる。その頃を見は

からつて、真ンなかの、動かないチークダンスの方へぐいぐい引っぱつていった。身動きも出来ないほど、つめ合っている。そこだけ特別に空気が熱くなっているのだ。

接吻しているもの。軀をこすりつけ合っているもの。そっくり返っている娘。顔へハンケチを当てて、陶醉をじつと味わっている娘。……そんな雰囲気、A子を興奮させていることは、すぐ分った。なにしろ、右を向いても左を向いても、目の前「尺」とはなれない所で、そんなことを、めいめいにやつているのである。若い娘には、強すぎる刺戟だ。お互いが、お互いを刺戟し合っているのだから……

A子は、やがて、僕の肩へ、顔をツツ伏して、何を云つても返事をしなくなつてしまった。足ががくがくするらしく、かすかな、ふるえが伝わってくる。——しばらくすると、「気分が悪くなつたから、出さして!」

と訴えるように云う。……その顔をみたら、みにくい程、真つ赤になつてゐる。

「じゃ、少し休もうね。又、踊つてくれるネ。気分がなおつたら」

「ええ」

消えそうな声。ちよつと可哀相みだ。

特集・現代風俗の病癖

えり足の毛の生えぎわに、汗のつぶが、うつすらと浮いている。

その日は、接吻も何もしないで、次の日を約束して別れた。そうしてそんな事を二三回くり返してから、踊りのかえりに友達のアパートへ連れて行つた。勿論、友達は留守にしておもつてゐる。

「ここ、あなたのアパート？」

「友達のだけど構わないんだ。コーヒーでも入れるから休んで行こう」「疲れたわ。——でも、ダンスのあとつてもいい気持」

トイレどこかしら、と恥かしそうに云つて彼女は、トイレに行つた。女がトイレを男に聞くようになれば、もう許したのと同じことだ、と何かでよんだ事がある。A子も、僕にそれだけ気を許すようになったのだ。

チークダンスを何回もくり返すうちに、あの陶醉した顔に僕に見られているうちに、軀を許したような錯覚にとらわれてしまったのだらうか。

その日、僕は彼女を本当に知つた。

そうなつてから

「チークダンスつて、素晴らしいかい？」

愛読者
通信

責められる女性を……

私は某会社重役をしている、中年の者ですが、幸か不幸か多分にサド的傾向を有している者です。このことに就ては多年苦しんで来ましたが、この希いの遂に止むことのないことを知り、今は貧乏にこの楽しみを享樂しようと希望して居ります。

實めに理解ある女性の出現を切望するものです。理想的には純日本趣味の若い方、但し玄人女性好みません。黒髪長い方、大歓迎致

と、きいたら、

「ええ……何と云うのかしら、……エクスタシイつて云うの？……それ、感じちやうのよ。とてもいいの。いつまでも、そうしたい位なの。……本当の愛撫よりあの方がいい位なの」

と告白した。ダンスで、実際の接觸以上にエクスタシイを感じる処女。——それは嚴密な意味で、処女と云えないのではなからうか。A子は、同性愛の経験もあるようだった。

僕にはどうもそう思えたので、それとなく追及すると、

します。失礼ながら謝礼の点など考慮させて頂くつもりです。

又、責めの写真、絵画などのコレクション御持ちの方、譲渡、交換等、御相談に応じます。私も又江戸時代のものなど、多少珍品を蒐集して居ります。同好の士あれば、何時でも御覽に入れます。

私共は常に世間を狭く憚つて暮して居りますが、やめて理解者間だけでも、暖かく励まし合つて行こうではありませんか。

(東京・佐渡生)

「あらそんなこと、やつぱりわかるの？ フ、」

と、ケロリとしている。それから、私の間のまゝに、彼女たちのグループの遊びについて、詳しく説明してくれた。何しろ若い娘たちばかりの集団だから其処には部外者の窺がひしれぬような、なやましい青春の生態が秘められているらしい。

そして異性との交渉には臆病になる内気な娘でも、同性同志の戯れには、意外に大膽で積極的になるらしいことも知つた。東京はこんな娘たちを、無数に孕んでいるのだ。

悦 虐 の 部 屋

ある女流畫家の告白



いまでも、そうであるけれど、その頃の私はもつと貧乏であつた。

京都の二條城の近くに四疊半二間の二階借

する同志の集りとして、この破れ疊の上にあぐらを組みに来ることだけは判つていた。

此の家の階下のおばさんは、天理教の熱心

りをして、質屋に通いながら下手な絵を描いていたのであつたが、どういうものか不思議に私のせまい部屋には人の出入りがたえなかつた。

その人達は何故、私の汚らしい部屋に来るようになったか、そしていつ頃からそうなたつたのか、私にはその一人々々に就いては、どう云うものか、はつきり覚えていない。しかしその人達が一つの目的を持つて云いかえれば、同じ方向の趣味を解

な信者で、殆んど毎日と云つていいほど、早くから近くの大教会にお参りに行つていて留守勝ちだつたし、そのお婆さんの一人娘である多賀ちゃん九條の方のミシン工場に勤めていたので、母娘二人つぎりの家族が出拂つてしまつたあとは、何の気兼ねもないのが身上であつた。尤も、お婆さんと云う人も信心家だけあつて、気のさつぱりした判りのいい人で、近所の人達が私のことを何かと云うと、親身になつてかばつてくれたりしたものである。

私は、そのような環境のなかで、のんびんだらりと遊んでいた訳では決してない。

其の日／＼の食べるものの爲にも、死んだ

七
玲子

夫がしていたように、泥人形の顔を描いたり京名所の泥絵をベニヤ板の切抜きの上に描いたりするのである。しかし、そんな仕事も時期の間だけで、何もないとなると、どれほど探してみても仕事はなかった。仕事があつても生活は苦しいのに、仕事がないとなると、どうかすると三日近くも何も食べない日が続くのであつた。

私の所に来るグループの人達が、そんな私を見捨てて何も力になろうとしなかった訳ではない、私の描く下手な「縛られた女」の絵

を見に来ることを楽しみにし、またはその同好者と遠慮もなく、世間において勝ちな引け目

も警戒心をもすてて、此の部屋の中だけではお互に裸になりきつてゐる人達が、私の窮状を知らなかつた訳ではないけれど、私はその人達に甘えようとする自分の気持が怖わかつたので出来得る限りそのようなそぶりは見せないことにしていた。

遠藤さんと云う質屋の主人が、あの妙な「展覧会」のことを考え出したのは、そのような私の窮状をたとえ一時的にもせよ、救おうと云う気持と、此の部屋に集まるグループの人達に一種の変つた刺激を与えようと云う

一石二鳥の狙いだつたに違いないけれど、それは、この悦虐の部屋の主である私にとつても奇妙な経験になつたことであつた。

それまで、私の絵を持つて帰る人は画料などは拂つたこともなかつたし、私もそのようなことは考えも及ばなかつたのである。

私の趣味と悲願で描いている「縛られた女」の絵を、たとえ、グループの人達だけでも理解していてくることが、心から嬉しかつたのであつた。

質屋の主人が考えた、妙な「展覧会」と云うのは、その会場が、おかしいことに此の家の大便所だつたのである。

かがむと丁度目の前になる様な場所に一尺五寸ばかりのベニヤ板を張り付けて、その上に私が念を入れて描いた「責め絵」を押しピンで三枚程止めておくと、これが私の所に来る人々の観賞の的になると云う仕掛けであつたが、この絵の中に自分の欲しいと思うものがあれば、その絵を持つて帰つてもいいことになつてゐるのである、ただし、その代りに百円を単位として、自分の思う価うちだけの枚数の札を同じ場所に押しピンで止めておくことになつてゐるのが一種の不文律なのであ

誰が、どの絵を持つて行つたか判らないのがミソであつたが、しかし注意して見ればそれは判ることであつた。

私はそんなことをセ、ハ、サ、クもしなかつたけれど、龍大の或る学生さんなど、長い間便所に入つて出て来ないこともあつたりした。彼の告白によると、秘密の場所の雰囲気につきずられて、なかなか立上ることが出来なかつたのだという。

これは、何と云つていいか、変な倒錯的な心理であつた。私自身も、自分の絵を便所の中で眺めて見て、今までに感じなかつたような、何かを感じたのである。便所のベニヤ板に貼り付けられてゐる絵は、常に見慣れてゐる自分の描いた絵ではなかつた。それは、もう、便所と云う奇妙な孤独感を満足させる部屋の、前面を飾る壁画であつた。

私は自分の絵を「孤独な部屋の」壁画として客観的に眺めるようになってから、次第にその壁を通して「責め」と云う現象に対する眼が、外に向つて開かれて行くのを感じた。

これは、今までにないことなのである。私自身はそれまで、自分のことしか判らな



かつたのだが、それは無理もないことなのかも知れなかった。死んだ夫にのみリードされて、現実には、夫と私との間の行爲だけしか知らなかったものが、夫に死に別れた後ただ過去の自分の姿を追うことによつてのみ満足し、かつて夫が私の縛られた姿を写生した様に、そんな自分の姿を描くことによつて女一人の身体を、しとど、ぬらして来たのであつた。

私には、学生さんの告白が不潔なものとは思えないのである。私は、此の奇妙な「展覧会」の爲に一生懸命に勉強した。百円札の止めてある枚数は別に定まっていなかったけれど、時によると、五枚も六枚もがベニヤ板に張り付いていることがあつた。勢いそうになると、グループの人達にうける絵と、そうでない絵とがあることが判る様になつて来るのである。

此の人達は、云うならば一人々々が何等かの意味で間違ひのない社会人であつた。モラルの限界をも忘れ去るほどの実行派は一人も私には発見出来ないものであつたが、だからといつて例外なくその人達が善良であると云う証拠にはならない。

その人達は、強姦や、またはそれに類する拷問のような「責め」を好んだ。それは私の考へ方からすれば悲慘であつた。しかし、その悲慘な美しさが好ましいと云うのである。

或る時、便所の押しピンに、こんなことを書いた紙片がはりつけてあつた。

俺はもつと血がほしい。

血糊がベタベタと手に付く様な絵が見たい。

私は悲しかった。私は「責め絵」の中にもつとノーマルな、ロマンと云うものを欲していた。確かにそんなものが実在する筈なのだ。私は信じているのだけれど、それは血ではなかつた。血は、色どりとしては美しいけれども、私の主観とは程遠いものであつた。これを書いた人は刑事であつた。私より年下のこの刑事は、良き理解者としての一人であつたけれど、いつも私の絵に対して不満を洩らしていた。

遠藤さんは時代物が好きで、色々な絵や本や写真などを、特別に作らせた木箱の中にしまい込んでいた。この人の好みは島田髪の娘で、緋の長襦袢で、荒縄の高手小手でなければならなかつたし、染屋の息子の中川さんは洋装の娘を対象にしないと御きげんが悪かつた。彫刻家の北川氏は、豊満な若い女性の白い臀部を、皮膚の破れるまで鞭打つことに心ひかれると云うし、舞鶴から月に二三度出張にかこつけて訪ねて来る検疫病院の元海軍衛生兵曹は、猿轡に我を忘れるという。私は、そのような話を傍で聞きながら混乱している自分を発見するのである。

話を聞いていると、どの人の場合でも、自分だけの欲望の爲に、女が犠牲にされるのであつて、その責められてゐる女性には悦びがないのであつた。マゾヒストではなくて、ノーマルな若い女性をそんな目に逢わせて見たいと云う人々の結論を聞いて、私は戦慄した。

それらが本当のサヂストなのかも知れないけれど、愛情を持たないサヂストには、私は軽蔑だけしか感じられない。

私の云う「悦虐」とは、責める男性が責めることによつて悦びを感じるならば、それと同じ意味で、責められる側の女性も当然、責められることによつて悦びを感じるものでなければならぬのである。

理解者だとはかり信じていたこのグループの人達は、その実、私を理解していないのかもしれない、いや、理解している様に見せかけて、ずる／＼と元のままの悪魔の淵に引きずり込もうとしているのでもあらうか。

「玲子の絵は遊びだ」

「生ぬるい」

此の人達は、自分達だけの主観で、そういう批評をしていても、絵を描くものの主観

は認めてくれないのであつた。

愛情が籠つていたらこそ私は素肌に突き刺すシユロ縄の縄目にも悦びを感じ、身を悶えながら蠟燭の炎にも情炎をたぎらせ得るのだつたけれど——増悪による責めや、一方的なサヂズムには我まんが出来なかつた。

貴女のは、ノーマルなマゾヒズムだ。と誰かが云つたように、一般の女性が心理の奥に意識すると、しない、にかかわらず、ひそやかに持ち続けているものと同じごくありふれたマゾヒストなのかも知れない。

新しい世代のサヂズムが、若し私の考えているようなものであつて、洗練された理念の奥深く、私たちを抱きしめてくれるものであつたならば、私は真つ先に「悦虐」の旗をかかげて、裸身に悦びの縄目を受けよう。

ああ。しかし、

私にはパートナーがなかつた。

混沌と苦悩と模索とのなかに、私の「孤独の部屋」の壁画に対する、ツシヨンは消え失せてゆきつゝあつた。

階下のおばさんに注意されて、多賀ちゃん、ベニヤ板に張り付けられたままになつてゐる百円札を夜おそく二階の部屋に持つて上

つて来たが、それはもう、三日もそのままになつていたものだという。

もともとから、二階の部屋に居る女の画描きは、たいへん変つたところがあると云う位のことは、おばさんも気付いてはいただろうけれど、百円札の意味は理解できなかったかも知れない。

私は多賀ちやんの持つて来た、押しピンの穴のあいた数枚の百円札がゾツとするほどきたならしいものに見えて仕様がなかった。

ケタケタとうつろな声で気狂い女のように笑いながら、その百円札に火を付ける私の仕草を、多賀ちやんは、美しい腫を大きく見開いたままとめようともしないでジツと見守っていた。

メラ／＼と燃え上る炎の光が、彼女の見開いた腫の中にキラキラと星のようにうつるとフト私のやり場のないセックスの奔流が、音を立てて、身体の何処からか突き上つて来るのだつた。

其の夜。私は、多賀ちやんに始めて縄をかけたのである。――

更け渡つた夜の静寂の中に、多賀ちやんの

若い悦びが芽生えつつあつた。

私にはそれが、夫との行爲以外の、他の人に対する最初の「悦虐」の実験なのであつた。私は男のような感情になりきつて、私の対象であるサヂズムを、この若々しい、はたちの肉体にそそぎかけるのである。

彼女は階下に寝ている母親に助けを呼ぼうとはしないで、そのくせ、ある程度の抵抗はしながら私の自由になつていった。

何と云う、美しい肉体であらうか。

私は、めくらめく思いで、この若い同性の裸身を見下していた。背後にねじ上げられて縛られた両腕、二筋、三筋、腰紐をつなぎ合わせた呪縛の流れが、夢見る胸の双つの隆起をしめつけている。ゆるやかに可愛い臍のあたりまでのスロープをみせた腹部は、急にふつくらとした孤線を描いて叢林の中に影を落し、にくらしい程ムチムチと脂肪を含んだその腰は、すらりと伸びた太腿までの曲線を文字通りくの字に曲げて、私の冷えびえとした夜具の中に、愛情の表現を待つのである。

ああ。

慟哭ともつかず、呻きともつかず、香ぐわしいその唇から吐息にも似た声を洩らしなが

ら、ほのあかるい電気スタンドの下に、彼女は長いまつ毛の眼を閉じ続けた。

私は、夜の花が少しづつ開かれて行くのを見ながら、私の愛情の表現がこの可愛い世代を征服しつつあることに限りない愉悅を感じるのであつた。――

愛 読 者 通 信

私は喜多玲子さんの「責め」の絵を見ると、一晩中興奮して眠れないのです。他の方の絵でも刺戟がありますが、殊に玲子さんの画の場合は、見ていると、自分が絵の中の女と同じように責められているような、異常な錯覚を感じます。

この頃では見るだけでは我慢出来なくなり、いろ／＼自分の牀の上に加えられる責めを、空想するのです。しかし、私の周囲には、そんな慾求に応じてくれる相手はみつからないのです。

今まで実際には何の経験もありません。こんな私でも御導き下さる方があれば、御文通を御待ちして居ります。

(神奈川 S子)

洋服と自動車と待合と……

柴田俊夫

★ 特 集 ★ オフィス
現代風俗の病癥 ガール篇



自家用車の階級——それは
オフィスガールにとつては
絶対のオールマイティであ
る。

存在が目立っているが、こ
れは考えさせられる問題で
ある。

一昔前ならば、こうした

薄れゆく貞操感

最近、新聞紙上にみる、汚職、詐欺、横領
などの事件のかけには、オフィス・ガールの

社会犯罪の動機は、某妓楼のお職女郎に入れ
揚げたとか、某ホールのダンサーに絞りとら
れたというのが常道だった。しかし、今やこ
うした方面にも、玄人女性に代つて、俄然オ

フィス・ガールが進出して来たのである。
現代の風潮に蝕まれゆくオフィス・ガール
たち！ これは決して比喻でも大風呂敷でも
ない、現実に彼女たちの貞操は亡びつつある
のだ。しかも、丁度北洋の氷山のように、表
面に現われたのはその僅少な一部に過ぎず、
見えざる社会の底に、かくされた実体が横た
わっているのである。

学校からオフィスに送りこまれ、純真な職
場の花としての期間を過し、その美しい青春
の思出と共に、結婚によつて家庭にかえつて
いった彼女たち——。ところがそのオフィス
・ガールたちは、今その過程に於て、社会の
病癥に犯されつつある。

そうして、一たび蝕まれたこれ等の花々の
一部は、やがて彼女たちが嫌悪したプロ女性
の群の中に、その姿を没し去る。又、正常な
家庭生活に入つたものでも、一度彼女たちの
体にしみこんだ虚栄と浪費の悪癖が、決して
その結婚生活に幸ひしないであろうことは明
かである。

筆者の亡友の遺児で、母一人、子一人の淋
しい生活をしている娘がいる。母親は病身だ
し、このA子が学業を終えて就職すると、そ
のサラリーが、殆ど唯一の収入と云つた状態

特集・現代風俗の病癖

であつた。

しかし、A子は早くから自分で働いて収入を得ることを目的にして、オフィス全体に対しては憧れていたら、毎日ハリ切つて出勤していた。

たまに会うと、質素だが、さつぱりした服装で、

「このブラウス、いいでせう？ 毎月少しづつ溜めてやつと作ったの。何軒も布地屋を廻つて、一番安い店で買ったのよ。あたし、靴も欲しいんだけど、そうすると半年ぐらい映画も観れないわ。」

如何にも娘らしい。初々しい清潔さだつた。だからたまに一諸に銀座などに出ると、豪華な装ひの女性を無邪気にふりかえつて、

「どうして他の人はあんな凄まじいコートやハンドバッグが買えるのかしら……、A子が吞まず喰はずで一ヶ月働いても、買えやしないのに——」

と、嘆息を洩らしていた。

ところが、それから半年足らずの裡に、このA子が、オフィスガールの流行病にとりつかれて仕舞つた。涙まじりの母親の訴えで、A子に会

つてみると、僅か半年の間に人違ひする程の変わりようである。ニューファッションの凄まじい装いで実に美しいが、何処か暗いカゲがある。以前の清潔な初々しさは求むべくもない。

A子が勤めていたのは新興建築会社で、始めは平凡な事務員だったが、どうやらその美貌ゆえに社長秘書に抜擢されたのが、墮落の機会を作つたらしい。

如何にもありそうな、お定まりの話である。しかも筆者の型通りの御説教に対して、彼女は悪びれもせず答えた。

「小父様の仰有ることはよく判るの。だけど、母や小父様方の純潔に対する事大主義にはついてゆけないわ。だつてオフィスで、破れ靴をはいて、一年中同じバッグを抱えてゐるのはA子一人よ。他の人達は次々に新しい服を着て、会社の男の人たちもそれを讃めるのよ。そんな毎日／＼がどんなにみじめだか、小父様方には判りつこないわ。——社長が望む通りに貞操を与えれば、その代りに、なんでも欲しいものが買えるのよ。ただそれだけのことだわ。それが、そんなに非難されなくてはいらないのかしら——」

若さの云はせる、向う見ずな八方破れの暴

論である。しかし、これがあの、匂やかだつた処女の、半年のオフィス勤めで得た処世の言だろうか——。

そして又、この処女の誇りを癡痺させてしまった病毒は、一体社会の何処に巢食つてゐるのであるか——。

危険な羨望

終戦後暴乱した性風紀は、それまでかなり好條件の下に温存されていた彼女たちさえも、一挙に頹廢の中に巻き込んで仕舞つた。何しろエロ新聞、カストリ雑誌が手近に氾濫するし、雨後の筍のように温泉マークが出現する。情欲がむき出しになつた時代である。しかし彼女たちを尤も刺戟したのは、かのパンパン嬢の横行であるらしい。面白いことに、彼女たちのパンパン嬢批判は道德的なそれとは少し異つていて、

「無知な表情で、外人にぶら下つて歩いてるでせう。遊んで暮して高価な服装をして……断然反感を持つちやうわ。でも教養がないのね、服装でも何でも、高価だけどゼンゼン趣味で見えていられないわ」

これは少々危険な思想である。つまり、パンパン嬢は軽蔑するけれど、若し自分にあれだけ

特集・現代風俗の病癖

の金があれば、もつと素晴しくシツクで上品な、完全な装いが出来るであらうのに——と云う。一種の羨望が混合しているのだから——。

しかも、こうして身近に売春の女たちを見聞して、それに慣れることは、やがて、当然彼女たちの貞操感を歪め、麻痺させて仕舞う。当今の風潮は、こうしたオフィスガールたちの傾向を助長させるばかりである。

家庭に於ても民主主義とやらで、両親の圧制がなくなり、子供たちへの発言力が弱くなってくる。彼女たちは或程度自主的な行動を誰にも妨げられない。

そして彼女たちがオフィスで見せつけられるのは、若い男子社員、つまり彼女たちの結婚の相手となるべき層の無力ぶりである。これは無意識の裡に彼女たちに、青年に対して不信の念を抱かせ、その経済力に絶望感を植えて仕舞う。

「新しいドレスを着た日には、なんだか世の中が明るく、幸福に見えるわ。」

と、オフィスガールの一人は云う。

それ程にもいじらしい、彼女たちの夢を満

たしてくれるドレスを、易々と提供してくれるのは、概して中年以上の男性である。そして、こんな資格を持つ男性は彼女たちの周囲にもことを缺かない。

オフィスの上役たち……、その友人、そして取引先の重役。こんな情慾をもて余した連中を相手に、絶対の偉力を持つドレスと、甚しく相場の下落した貞操との交換だから、ぎっ掛けさえあれば簡単にこの商取引は成立する。

一昔前の娘たちとは違つて、現代のオフィス・ガールたちは、貞操を失うことを、大して神祕的にも考えていないし、怖れてもいない。

如何にすれば性病、妊娠を防ぎ得るかとう云う知識もあるし、又、万一妊娠しても、半ば公然とそれを阻止する手段があることさえも心得ている。こうなれば全然怖いものなしの状態である。

たとえ、かすかに良心のうしろめたさを感じた者でも、一度こうした取引の味を知れば、以前のようにサラリーだけの生活に戻るには非常な忍耐を要することだろう。

虚栄、浪費、これ等を象徴するニュールックのドレスが、どれ程の処女たちを墮落させて

ていつたことであらうか——。

「〇〇さんつたら、又変つたスーツを着てるわね。アルバイトをしてるつて、本当なのかしら？」

「そうよ。この間休んだのだつて、熱海に行つたつて噂だわ。あの翌日から、凄いい指輪をはめてるぢやないの。いやあねえ。」

こんな何気ない連中の会話でも、筆者は胸痛むことなしに、聞きのがすことは出来ない。彼女たちの声音にひそめられた、無限の嫉妬と羨望を感じるからである。

同僚の醜行を軽蔑するこの娘たちが、同じような餌のもとに誘惑がころもられた時に、果して純潔を保ち得るであらうか——。

オフィス・ガールたちの純潔は危険にさらされている。現代の病癖に浸蝕されて、他動的にも、自動的にも——。処女たちが結婚の希望も愛情もなく、その貞操を放棄するのである。

その瞬間に彼女たちが描くのは、未来の新しい家庭設計でも男性への信頼でもなく、ドレスのデザインであり、明日の自分の、ニュールックである云つたら酷であらうか——。

純潔を陥しいれるもの



「今度の日曜にドライブに行くのよ。十国峠から熱海に出て、温泉で汗を流して帰つて来るの。凄いいプランでせう、待遠しいわ」と、はしやいでは、誰彼に吹聴している娘

があつた。

「まあ、いいわねえ、青葉の十国峠なんて、素晴らしいでせうねえ——」

と、相手方がうつとりすると、彼女は優越

感でますますいい気持ちになつて、ドライブ熱が煽られる

らしい。

どうも心配だつたから聞いてみると、案

の定、車の持主は半月ばかり前の雨の日に、偶然知り合つて車で送つて貰つたのだと云う。その程度の知り合ひで、熱海などに出掛けるのは行きすぎではないかと、それとなく注意すると、

「熱海によるつて云つても、凄いいニューカーだから、陽のあるうちに東京に帰つて来るのよ。泊るのではないから心配ないわ」と、受け合はない。

しかし、忌憂は現実に現はれて仕舞つた。車の故障で熱海に泊る破目になつたという。しかも、後になつて判明したのだが、この男は第三国人で、車は友人の持物だつたのである。

故障とは古いテだが、責めは彼女の方にもある。もともと稀薄な貞操感が、ニューカーに眩惑されて仕舞つたわけである。如何にも脆いが、これも現代の娘気質の一つであろうか。

たとえばそれが禿頭の五十男でも、ビヤ樽のような腹のエロ重役でも、自家用車の階級、それはオフィス・ガールにとつては絶対のオイルマイティである。一着のドレスで純潔が失はれるように、一日のドライブの亢奮は、簡単に彼女の理性を痙攣させて仕舞う。

特集・現代風俗の病癖

自動車に乗って街をゆく誇らかな優越感。それは人道や電車が混雑していればいる程、倍加される。たとえば、その行く先が待合であつたとしても、この時の彼女の優越感には変りがない。

この心理は、彼女たちの磨げられた庶民性の、無意識な反動だと説明する人もいる。しかし、この不健康さは、社会にとつても、彼女たちにとつても不幸なことであることは云うまでもない。

一度失はれた貞操は、彼女自身の将来を限定するばかりではなく、その周囲の乙女たちの幾人かに、その病毒を蔓延させる。前にも述べたように、オフィスガールたちは、その仲間の不潔な生活態度を蔑すみながらも、その報酬には無限の嫉妬と羨望をそそいでいるからである。

彼女たちの転落の動機は、異性の誘惑よりも、同性に対する嫉妬による比重の方が大きいと云えば云い過ぎであらうか――。

多少変つたケースだが、最近神楽坂署に検挙された公金横領事件のかけに、こんな女性がいる。

管内の某鉱山会社の支社に、B子とC子の二人の女事務員が勤めていた。小さな支社だから女はこの二人きりで、サラリーも安かつたが、二人とも似たりよつたりの乏しい家庭だから気分も合つて、愚痴をこぼしながら仲よく勤めていた。

ところがこの一人のB子が、支店長某の誘惑に負けて仕舞つた。それからこの二人の女事務員の生活がガラリと変つた。今まで退社も二人で、お互ひに乏しい小遣ひを嘆き合ひながら、買ひもせぬデパート歩きなどしていたのだが、それ以来というものは、C子がまだタイプと取組んでいるうちに、片方は支店長の車でスーツと出掛けて仕舞う。

ゆく先は食事とベッドだが、この支店長はかなり政治力のある男で派手に金を費うから、B子の服装は勿論、万事華美で如何にも豪勢である。

毎日、元の同僚のそんな生活を見て、るのが、死ぬ程辛く苦しくて、夢にまで見たとC子は云う。

だが、彼女はそのまま諦めはしなかつた。その支店の会計責任者で、勿論妻子のある中年の男をC子の方が積極的に誘惑したのである。この男は支店長の弱点を握っていたか

ら、若い情人に溺れて、C子のねたるままに社金を費ひ込んだ。

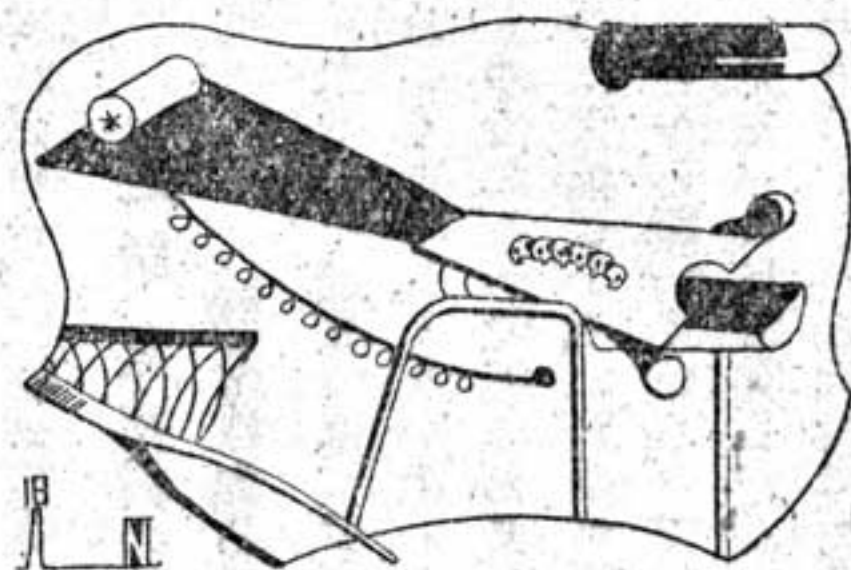
何しろ支店長と会計責任者が、氣を揃えて費消したのだから、支店の経理は乱脈を極めて、遂に横領が発覚、告訴されるに至つた。

この事件など、女同志の嫉妬から、遂に大の男二人を罪人にして仕舞つたわけだが、その後の調査によると、彼女たちも、一人は妾に、一人はバアの女にと墮ちて行つたのである。

だが、こんな事件はたま／＼発覚したに過ぎず、広い世間には、これと大同小異のオフィスガールたちの生態が、どれ程隠蔽されていることだらう。

昨日までは質素な服に、つましやかな処女を包んでいた娘が、一夜明くれば、昨日までの同僚を尻目に、豪奢な装ひで誇らし氣に現はれる。彼女たちはその服の爲に支拂はれる金額に眼がくらんで、あまりにも惜氣なく自ら捨て去つた、青春の価値には思ひ及ばないのである。

こうして、オフィスガールたちの処女が、恋でも、又過ちでさえもない、取引によつて失はれるということは、なんと云う佻しく、味気ない流行であらう。



特集・現代風俗の病癢 人妻篇

妊娠中絶する人妻たち

都會の人妻たちは妊娠を恐れない。妊娠に神秘感はない。單なる生理現象として彼女達は診察臺に横たわる

永代橋
病院院長

西島 實

☆

かの有名な穂積重遠博士の結婚訓（昭和十七年版）には「生め育てよ国のため」とあるが何と時代の急転回であることか、うたた今昔の感に堪えぬものがある。現代は正に避妊——と云うよりも解妊時代と云えるのである。戦後は何故かくも妊娠中絶が増えたのであるか、人妻の場合を婦人科医の立場から概略し合せてその方面から夫婦の生態の一節をのぞいてみよう。

先づ、妊娠中絶の原因であるが——

第一は、法律のワケが拡大され避妊問題が重大なる社会問題として論じられ従つて容易に受けられるようになった事。

第二は、戦前では子供は自然の意志による授かりものゝであつたが戦後の夫婦間で「作つたもの」であるから自分等の意志に反したものは何も育てる必要がないと想うらしい事、即ち、受胎を運命的（決定的）と考へなくなつたのである。

第三は、一般に女性特有のマゾ性（苦痛甘受性）が減少した事。

男女同権思想の普及により女性の男性化がよくも悪くもなりつゝある。従つて、女性特有のマゾ性が少なくなつて来た。悪阻は勿論の事、妊娠による必然的な分娩も女の特別な（男と比較して）負担と思うのである。

次に、この手術を希望する患者の訴えをみると、

（1）末子と今度の妊娠との間隔が短かい時、

傍の幼児を示しながら、先生、この子がまだ手がかるんですよ……などと云う。

（2）住宅難の時、若夫婦に多い。

「先生、間借りしているものですからとても子供など……」と云う。

（3）病気のため、一番多いのは悪阻である。「妾、悪阻がひどいので……」と云へば中絶希望である。

（4）共稼ぎの時……「勤めの身分ですからあと一、二年はとても生めないわ」など云う。

（5）浮気した時、

この場合は月経が一寸でもおけると先生妊娠でしようかと真剣味が溢れている。妊娠

と分ると今度は「あまり気が進まないの……」などと云う。

(6) 三人以上子供がある場合、四十近くなつて今更生んで育てたくないと言ふ時。
猶又「少くなく生んで、よく育てる」と云うのが受胎調節の道徳であるかの如くであるが、近頃は、受胎調節より避妊のみ重点におき優秀な子孫を作るために産児調節するなんて云う殊勝さは全然と云つてよい位みられない。即ち、其の場限りのが多いのである。

中絶手術あれこれ

次に、婦人科の診療簿より人妻の手術のこぼれ話の一、二を御披露に及ぼう。

第一話、手術料の

頭をはねる細君の話

二、三年前までは、手術の時は大抵、先生おいくらでしょうか？と事前によく尋ねたものであるが最近あまり聞かない、と云うのは大抵こゝでは料金が安いかどうか紹介者などから聞いているので時たま安いと思うと「先生、これで宜しいんですか？御損のない様に……」と云つてよいけいにおいてゆくのである。

滝山壽美江は近所の奥さんにD区のY病院を紹介された。D区は東京でも特に物価の高い所である。Y病院は入院しなくては駄目だと云われ八千円ほど使つた。

ところが手術後一回月のものがあつただけで胃がムカ／＼しだしたと云う。素人判断でも間違いなく悪阻症状である。

彼女は良人におそろ／＼打明けたのである。「仕方がないさ、又、おろすよりほかしようがないだろう、手術料はともかくとしてこの前の様に三日も入院させられたんじや子供の世話もやり切れんよ、なんでも三月以内ならその日に帰れるそうぢやないか、今度は簡単にやつて貰える所へ行つてこい」

と云う訳で、彼女は最近手術をしたと云う女学校時代の親友のF子に紹介されたのがG医院である、G先生は、親切で而も安く手輕であるので評判がよいと云う。

ともかく、彼女は恥をかゝない様に診断書と七千円程持つてG医院の門をくゞつたのである。

小一時間程待たされていよ／＼彼女の手術がはじまつた。今度は二度目であるので割合に度胸がついていた、検診台に要領よく上りいかにも神妙に構へた。

それから三時間の後彼女は身仕度を整へ大鏡の前で後れ髪をなおしていた。

「先生、有難とう御座いました、おいくらでしようか」

「そうですね、麻酔共に二千円戴きまじようか」

「あら、先生、それで宜しいんですの」

「結構です、私の所は手輕にやつてますからこれで充分です」

「そうですか、では二千五百円どうぞ」

「きちんとて宜しいです」

「どうぞ、先生は随分安いですね、簡単でいいわ、前の手術、やはり三ヶ月で三日入院して八千円でしたわ」

「そうですか、一寸高いですね」

「妾、手術料五千円に主人に話しておけばいいわね」

「……………」

G先生は何とも返事のしようがない、手術料の頭をはねるとはなか／＼人妻も器用になつたものである。

第二話、男泣きに泣いても

無駄であると云ふ話

患者は、満三十一歳と云う。ヤヤ大柄では

特集・現代風俗の病癖

あるが所謂小股は切れ上り、その肉体の美しいこと婦人科専門医として十五年の経験深き院長も思わず歎声の出る所であつた。

あまりチョイチョイ見当らぬ逸品である。

いよいよ手術が始まる。先づ、チクロパンの静脈注射で麻酔する。静かに液を血管に注入しながら二つ三つ……と数え出す。

十二まで数えて患者はぐつたり手腕をおとす、同時に深呼吸を一つ大きくやる。どうやら宗全に麻酔状態に這入つたのである。

子宮鏡を腔に挿入し、ミューゾーで子宮腔部を個定しヘガールのNO1より順次子宮口を拡大しはじめた。麻酔がよく効くと身体を動かさず静かにしている。ヘガールが十二号まで入れ終つた頃急に彼女がつぶやき出した。

「先生——」

「先生!!」今度は大声である。

「なんですか」先生も仕方なく返事してやる。

「先生! 妾しね、三年前までは岡山にいたのよ、今の主人はね、どうしても君が好きだと云つて主人のある人妻の妾を誘うのよ、私も前の

主人との間が面白くなく云わば愛情の危機にあつたのね、到々彼の熱心さに負けちやつたのね、子供三人残して東京へ逃げる様にして出て来たの、当時は誰一人知らない者がない位評判になつたのよ、地方の新聞にもデカデカと書かれたわ」

「——」

「東京へ出て来たものの彼は失職するし、妾は手に職がないし結局まあピアノがすこしひけるので幼稚園の保母さんになつちやつたの」

「すごいですね」院長はサービスのつもりで一度位返事をしてやつた。

「でもね、妾、神経質でしょう。身体は大きくてもあんまり丈夫でないものだからつかれちやうわ、主人はとても丈夫なの、あの方も毎日よ、こつちは一日の仕事で疲れて、ねてもすぐ起こされちやうのよ」

「——」

「主人はね、初婚だから子供がほしいの、妾はいや、それでこの前オロシちやつたの、そしたら今度でしよ、こんでこそ生んでくれ、と云うのよ、でも妾、赤ちやんなんかとても生めないわ、第一幼稚園の方やめなくちやならないでしょう」

「——」

「今日先生の所へ来るのに、昨夜は大変だったのよ、一晩中、主人は男泣きに泣いて頼むのよ、生んでくれつて!! でも私は、内緒で診断書を作つて来たの、先生に手術して戴けないと困るから——」

夕方頃問題の彼氏がやつて来たが、心なしか憂鬱そうに、手術は無事終りましたでしよとかと云つて、彼女を抱える様に病院の門を出て行つた。

その後、彼等夫婦は、幸福に暮しているか一度も逢わないので分らない。

次 號 予 告

愈々好調の喜多玲子女史の二大問題作を一挙発表します。御期待下さい。

玲子 画集 なぶられる女

けだものや妖虫に責められなぶられて失神する女体の凄まじい官能大画集!

続悦虐の部屋

やわ肌を責めて……

——ある女流画家の手記——

れすぼす
ふいくしよなる

恍惚の白鳥

鳥羽瑛子
畫古庄英生



茶會

ユカリは最初から、由緒ありげなこの屋敷の構えに圧倒されてい
る。

御所風の、いかにも典雅にさびた、たたずまひである。だが、何
気ない庭の布石にも、足元の笹りんどうの一株にも、恐しい程の神

経が行届いているような気がして、若いユカリは胸がつまつた。

白い足袋裏をチラと見せながら、さすがに洗練された身ごなしで
式台に上った名和夫人は、

「ユカリさん、御稽古所ですもの、何卒御気軽ね」

ニツコリ振りかえつてから、磨かれ抜いた長廊下をスルスルすべ
つてゆく。

御流儀は千家のお裏、とだけの予備知識で伴はれて来たのであ
る。しかし、あながち、初稽古の気おくればかりではない——と、

ユカリには何か胸騒ぎがあつた。

それがなんだか、云えもしないし、わかりもしない。

こんな、堂上方の御別邸ひかくのような御屋敷が、御師匠さまのお家な
んだわ——。

如何にもそれらしくありながら、なにかユカリにはそぐわないも
のがあるのだ。

廊下の角に来て立止る。と、二、三間先の黒塗りの棧の障子から
名和夫人の顔が覗いて、無言で招いた。

引合はされた師匠は、何の変哲もない、六十がらみの老婆であつ
た。聞かれるままに、亡くなつた母に十二、三の折から、手ほどき
だけはと云ひかけると、

「それではともかく、あちらの御茶室で一度御点前を拜見いたしましょうか」

そんな師匠の言葉も終らぬうちに、名和夫人は立上つている。ユカリはちよつと、気を吞まれた。

水屋に入つて道具だてを始めると、隣りの茶室からはサワサワとかなり大勢の人の気配が洩れてくる。

「名和のおばさま……」

「大丈夫、皆様この御弟子ばかり。つまり、あなたの姉弟子つて方たちのわけね？」

そんなことを云ひながら、夫人の指は忙しく、ユカリの前髪を撫で、帯揚げのふくらみを気にしたりする。

苔色の筒茶碗と、蒔絵の棗なつめを持つて、ユカリは茶室に入つた。爐に向つて坐る時に、膝頭が震えた。まづ狭い茶室に充滿した、甘酢つぱくそるような香料に気を奪はれていた。

凡そ二十人ばかりの、瀟洒な装ひをこらした女性たちが、その無数の瞳が、ただ一人の美少女に集中する。ユカリはふつと、逃げ出したい程の衝動にかられる。

いくら新入りの御点前だつて、こんなに大勢で、ひどい……姉弟子だなんて云つて、みんな意地悪なんだわ、あたし、来なければよかつた——。

しかし、ユカリに集中している視線は、決して意地悪なそれでも

ない。揶揄するような、又熱っぽい、又もの憂そくな、それぞれの表情が、一様にかすかな微笑を浮べているのだから——

とにかく、むせつぽかつた。ユカリは朱の袱紗を型通り捌いた。我にもなく手が震えてくる。と、

誰か笑つた——

と、ユカリは思つた。カツと上氣して、同時に手許が狂つていた。パタリ、と茶杓が疊に落ちる。

ハツと顔を上げた。その人が笑つている。一座にさざ波のような微笑みがひろがる以前に——。肩の辺りの青海波の模様と、抜けるように白い顔の不思議な含み笑ひだけが眼に入つた。

はなやかな衣裳のこの美少女が、おそらくは足の裏までも赤くなると、その初々しい血の色を透かして、再び一座に嘆声のようなざわめきが湧いた。

とにかく、奇妙な茶会である。名流夫人の御稽古所と聞いて居た。だが、すべてがまつとうのようで、何か腑におちない。たとえば、床の茶掛ちやかけにしても、花にしても……

真赤な、八弁のクレマティスが活けてある。クレマティスは普通白か紫。真紅と云うのは話に聞くだけで、今まで見たこともない。まして茶室には確かにこの色は強烈に過ぎた。

一通り御点前はすんで、お正客から御道具拜見にうつつていた。「結構ですこと」





「ええ、あたくし、欲しい」

次客の、青海波の人は、訝えた、よく響く声でそう云う。

「御氣に召しまして？」

名和夫人が末座から媚びるように声をかけるのに、振向きもせず
にその人は云った。

「堀出し物」

「まあ、清閑寺さまつたら……」

「御熱心なこと——」

ガヤガヤと肯き合いながら、御作法通り茶碗を順々に拜見してゆくのだが——。

この方たち、こんな何でも無い御茶碗を御大層に——

それからユカリは、アツと思つた。

御茶碗じゃない、御茶碗のことじゃないんだわ——。

清閑寺さま、と呼ばれた青海波の人は、中高な横顔を見せて云う。

「手入れ次第で、もつと美しい艶が出ましようよ、ね」

女 像

何処へ連れてゆかれるのか、皆目様子が知れなかつた。とにかく女ばかりの御稽古所だから——、気持の何処かで、そんなことを想つていた。

それにしても、この屋敷がこんなに広いなんて、一体どれだけの人が知っているだろう——。

初稽古から一週間、二度目の金曜日——。名和夫人が車で誘いに來たと云つても、何故こうして來て仕舞つたのか、ユカリは自分が不思議だつた。祖父と二人の、ひっそりとした生活には、あの日の茶室の雰囲気、あまりにも刺戟的だつた爲なのか——

廊下のつき当りが四、五段高くなつて、其処から鍵の手に曲つてゐる。小間使い風の娘が坐つていた。

「御待兼ねでございます」

誰が？——

愛くるしい顔が、しかし鋭く見上げているばかり。紫の房の下つた襖が重く明いた。

そして、ユカリは唇に掌をあてて立ちすくんだ。

暗い書院風の部屋に、ドツシリと洋家具がおかれて、清閑寺夫人の白い顔が浮き出している。その顔が笑つた。

「そんなに意外なのかしら？ 此処にいらつしやるのよ、ユカリさん」

美少女は云はれるままに、夫人の傍に坐つた。青白い指が煙草をつめて、銀の細い煙管から、薄く煙りが吐き出されている。

それにしても、この夫人の、何と変つた装いだらう——。黒の紋綸子、袖と腰に青海波の熨斗目模様、金欄の細い帯が前で結ばれて

いるのだ。舞台衣裳のようなそれと、垢抜けしたショートカットの不思議な調和——。

「大きな瞳をして、あたくしが余程不思議に見るのね？」

「いいえ、とてもよくお似合いでございますわ、それに——」

「それに？」

ユカリは思い切つて、感じた通りを答えた。

「なん、たか、ユカリ跪ひざまずきたくなりますわ」

夫人は甲高く笑う。そして、真ともに顔に煙を吹かれて、思はずそむけたユカリの項うなじに、夫人の顔が伏せられた。

ユカリは改めて動揺うごゆいしていた。それは十九歳の、健康な常識には計りきれなかつた。この部屋の、この貴族の女の、麻薬のようなこの雰囲気は一体なに？——

しつとりとユカリの背に夫人の体重がかかつて、芳香が鼻をうつ。未知で謎めいた、そのしびれるような陶醉。

「あたくしが、おいや？」

「……………」

かぶりを振つた。

「いとしい……………」

夫人の声は苦し気でさえあつた。ユカリはおののきながら、薄紅梅色の衾ふしの胸を、黒い小袖が抱くのを見る。なにかの、絵巻の中の一駒のような——

カタリと音がした。確かに音がした。ユカリはギクリと胸を立てた。

「だれ？」

夫人はサツと襖を明ける。その黒い着物の向うに、先刻の小間使がうずくまつて見えた。

「きく！」

声と一緒に黒い裾がパツと上がる。声も立てず、開くように娘はのけぞつた。なんと云うこと、夫人は娘の顔を蹴つた——。

「ユカリ、さあおいで——」

手をとられても、膝が立たなかつた。何時の間にか眼からこめかみにかけて、まるで紅をはいたようにうすら赤く、夫人はキラキラと瞳をすえている。

奥の部屋に、緋のベッドが見えた。

「あくしが怖い、ユカリ？ ホホホホ、赤さんなのねえ、こんな美しい体をして——」

どうしてなのか、夫人の手がこばめなかつた。帯あげ、鹿の子の帯じめ、帯、着物、伊達巻、長襦袢、五彩のそれ等が乱れ散つた中で、夫人の声が妖しく囁くのだ。

「震えてるの、おまえ？」

ペルシャ模様ペルシャ模様の赤い絨氈じゅうたんの上に、裸体の美少女は顔を蔽つてそれを聞いた。





竹藪

同じ部屋で――。

だが、あれからふた月、なんという少女の変わり方だろう。

「風が出ましたのね、竹の葉づれ音が――ユカリ、あの音きらい」

「そう？ いいじゃない、話しても話してもつきない昔話のようで……。この軒先から向うのガケ下まで、一面の竹藪なのです。竹ばかり。……でも、一本だけ誰も知らない木があつて、梅雨の頃になると、血のような色の花が咲くの」

ユカリは瞳をみはつた。

「まあ、どうしてでしょう？」

「ききたいの？」



夫人は謎のような微笑を浮べた。肯くとユカリの、肩で切り揃えた黒髪がゆれる。白い肌にただ一枚、夫人好みの古代紫の中振袖をしどけなくひつかけただけ、帯もない。

だから、振袖の紅絹裏が映えて、ユカリの裸身はピンク色かと見えた。女二人、たわむれつくした後の、放恣な姿態だつた。

「昔、むかしね。このお屋敷には一人の美しいお姫様が居たのです。大層お美しい方でしたが、どう云うものか、御嫁入りなされぬ運命があつたということで、生涯御興入れなさらず、姫様のままで御過しになつた――。この姫様のお傍には、篠と云う、これも美しい侍女が居て、それはもう、姫の大の御気に入り、朝から晩まで、篠、篠と仰せられて片時も御離しにならぬ。もう、御臥床の中までお呼びなされて、それはそれは一方ならぬ御寵愛であつた――」

ユカリは夫人の表情に気づくと、なにかチリ毛立つ思いで衿をかき合せた。

「ところが或る時、お篠がお宿下りで家に戻つた折に、恋を知つた。――何でも隣家の若侍で、想い想はれ、家柄もつり合うところから縁談が纏り、祝言という運びになつて、親許から御殿奉公御許しの願いが出た。が、姫はどうしても暇をお許しにならぬ。毎日毎夜泣いて篠をお責めになる。とうとうそなたも嫁入の叶はぬ躰になりや、と仰せられて、簪で篠の両眼をお突きになつた――」

声を立てず、ユカリは夫人の膝に顔を伏せる。――夫人の瞳は笑



つた。

「ところが、たとえ盲^{めくら}でもよい。お篠殿を宿の妻に頂きたいと、若侍が強つて申出た——。それを聞かれた夜、姫はとうとう篠を、むごたらしく殺して仕舞はれ、御居間の前の庭に死骸を埋めて、其処には一面に竹を植えさせた。ところが、その竹藪の中に誰も知らぬ



木が一本生えて、梅雨の頃には毎年血のような花を咲かす……」

夫人は終いの方を呟くように云つた。そして、急に明るく、

「まあこの子は、なにが怖いのか？」

「どうして、お姉様はそんなお話を？」

青ざめたユカリを面白そうに見て、

「この御屋敷はね、昔、あたくしの家の御下屋敷だつた」

「まあ、ではそのお姫様は……」

「あたくしの曾祖母^{ひそば}さまです」

冷めたく、突き離すように云つた。雨にまじつて、竹の葉づれの

音が聞えてくるのだ——。

短く叫んで、ユカリは夫人にしがみついた。夫人は低く笑う。

「ユカリ、おまえも何時かは逃げるの、ね？」

「いや、いやッ」

紫の着物がはだけて、すべり落ちるのも忘れて、

「だつて、こんなに嬉しいのに、お姉様が教えて下さつたことより

もっとユカリを夢中にさせることが、世の中にあつて？」

「そう、あたくしはしらない。だけど、ユカリは……」

言葉がパタリと途切れて、膝の上の白く丸い肩を、夫人は強く、

深く噛んだ。眉をよせて、呻きも洩らさずに、美少女はのけぞる。

例の小間使を供に、清閑寺夫人が迎えの車で帰るのを見送つてか

ら、ユカリは控えの間に戻つた。もう殆どの人々が、茶の稽古にか



こつけた放恣なこの一日を終えて、それぞれの愛人に別れて行つた跡だつた。

師匠が一人、物指をあてて、茶室用の炭を切つていた。ユカリはなんとなく、その前に坐る。疲れていた。

「静かですこと……」

「ええ、皆さん御時間にはちやんと御引揚げになる。邸に戻れば、御家柄の奥様、御嬢様ばかり——、お茶の御稽古が、毎週一回、長時間外出の口実になる……」

「御師匠様、この御屋敷には、男の方は一人も見えたことはありませんの？」

口に出してから、ユカリはかすかに赤くなつた。老婆はそんなユカリをチラと見上げてから、

「世の中には、どんなに美しくても、男のいらぬ奥様がいるもので、生れつき、そんな躰の方もあれば、旦那様の御道楽から病気で子宮を失くして、女でなくなつた方もある。それに、不具の旦那様でも、他目には一生夫婦で暮さねばならぬ運命のお方もある——。ここは男が憎うて憎うてならぬ方ばかりが、何時か自然に集るようになつたところ——。男は要らぬ屋敷ですのう——」

白
い
顔



京都の大學を卒業した兄の恭が戻つて来てから、祖父と二人きりの家が急に賑かになつた。朝から活気づいて、姐やまでが朝からコロコロ笑うのだ。

「ユカリ、なんだ、そんな御殿女中みたいな恰好で、又お茶の稽古かい？」

「……………」

睫毛を伏せると、ユカリはちよつと老けた表情になる。

「よせよせ。お茶なんぞサボつちやえ。それより早慶戦に行かないか？ 志賀も行くんだ。決勝戦だぜ？」

「じゃあ……、御兄様、あの、御師匠様に御断りの電話をして下さる？」

「OK、病気にしといてやらあ、そんな役なら巧いもんさ——。お茶なんざお前、第一不健康だよ」

何気ない兄の言葉も胸にしみる。兄にも秘めた暗いひめごと、だからもの憂く、ユカリは疲れていた。

蒼い空に鳩が舞い上る。やぶれるような喚声。黄と紫の旗と、黒い学帽が一せいにゆれる、ゆれる——。そして、プラスバンド。

熱球と白いユニホーム、それは、若さと闘志の見事な交錯。潮のように校歌と拍手が湧いて、五月の空にのぼる。若さと力が、この広い球場を支配した。

なによりも、ユカリにはこの天日の下の、輝くような明るさがま

ぶしい。

「どうだいユカリ、たまには外もいいだろう？」

「……………」

少し汗ばんで笑った。

「おい志賀、少しユカリを連れ出してくれよ。こいつ、二十だつていうのに、隠生植物のようにひねくれてやがる」

「ユカリさんは、箱入りだから——」

志賀の笑顔が清潔だつた。その白い歯——。

あたしが箱入りだつて……、御兄様も志賀さんも知らない、この健康な男性たちは——。あの男性無用の奇妙な世界も、そして、ユカリがその生贄だということも——。

生贄だと感じたこと、そのやましき、気おくれが、竹藪に蔽われたあの暗い部屋の夫人の腕の中のユカリの軀に反応した。

「どうしたの？ ユカリ」

「……………」

「へんな子、うれしくない？ こうしても？ ねえ、あたしの欲し

いのはそんなユカリじゃない」

「あ、あッ、おねえさま——」

「もつと、叫ぶの、笑うのよ、ユカリ——」

竹藪と、厚いカーテンに蔽われた秘密の部屋。ベッドが緋で、そして二人の女の、裸身だけが白いのだ。

くいしばった口を割つて、夫人はガラスの液体をそそぐ。血のよ
うな色の——。

ハツと瞳をあけた。

「どうしたの？ あれは葉づれの音」

「篠の竹藪の……」

夫人は蒼く笑った。燐のように——。

だが、それから一月、ユカリはその屋敷から遠ざかった。

だから——おびえながら、兄と志賀にとり巻かれて、その明るさが徐々に、二十のユカリにしみ込んでいった。

銀座のホールでピアノのリサイタルを聞いた夜、志賀とふたり、ユカリは御堀端を歩いた。初夏だから、志賀の水玉のネクタイをふき上げた風が、ユカリの頬を撫でて通る。

清閑寺夫人好みの、肩まで垂れていた黒髪が、パリスタイルにパーマされ、サモンピンクのドレス、白ローンの手袋。爽かで身軽だつた。

「ユカリさん、兄さんから聞いた？」

お堀に向いて肯いた。

「それで……僕は希望をもつてもいいの？」

「あたくし……」暗い水をみつめたまま、

「御兄様にも貴方にも、申上げられないことがあるの——」

「ハハ……」若々しい笑顔が心地よさそうに、





「ユカリさんの秘密？ きつと、御伽話のように、夢みたいないひめごとじゃないかな」

お伽話——。そう、竹藪の御下屋敷の。暗い堀の水に、ふつと白い顔が湧いた。

「あッ！」 柳の向うにも、土手の闇にもその顔はあつた。

「どうしたんだ、ユカリさん？」

横を疾走していった車の窓にも、あの顔がある。蒼白い、中高な夫人の。

「なにをおびえてるの？ 僕は、こんなに愛しているのに——」
強い力が抱いて、強烈な体臭。男性の——唇がふれた。

——ああ、とうとう——。

ユカリはしつかりと瞳を閉じた。指は志賀の、ヘリンボンの上着の裾をつかんでいる。

汚辱

「お別れの御茶会を致しませうね。お若いお嬢様のあなた、もう御茶も御卒業になる頃かと存じます。御目にかかつて、行末、御大事にと、申上げたいのです。

その日から、もう御呼び出しは致しますまい。一年の記憶の爲



に、御別れの御挨拶には来て下さいませうね。

では金曜日に——。」

巻紙の墨の色が薄い。ユカリの手が震えて、巻紙が葉づれの音のように鳴った。

だがその日、やつぱりユカリはあの屋敷の門をくぐった。「茶道指南」の、古びた門札を皮肉にみつめて——。

篠の話は、昔、むかしの御伽話。ユカリ、おまえは今日一日、おねえさまの御怒りに耐えればよいの——。

通されたのは、始めて会った日の、あの茶室だった。あの時のように八弁の、真紅のクレマティスを活けた床を背にして、清閑寺夫人が坐っている。「ようこそ」

「おねえさま！」

「あら、あなたは何を云うつもり——あたくしはみんな知っています」

静かに釜の湯を茶碗にそそぎながら、夫人は何気なくまるで隣人の噂のように、

「御兄様の御友達で、今年大学を出た外務省勤めの若い御役人。そうね、五尺、六、七寸もあるハンサム。御名前は確か志賀英之さまとおつしやる——」

「おねえさま！」

叫んで突つ伏したユカリの背に腫をすえて、
「この屋敷はね、男が憎い、男の無用な方たちの来るところ——男が愛しい女が来ることはありません。ユカリ、あたしはおまえを放してあげよう」

「……………」

「けれど、今日一日だけ、もう一度だけユカリの躰をおくれ、ねえ？」

すりよつて、低く夫人は囁いた。

「ユカリ、あの部屋に行つて、ベッドに寝ておいで、もう一度だけ……あたしもすぐ行きます」

のつぴきならなかつた。ユカリはフラフラと立ち上つて廊下に出た。

今日一日だけ……、志賀さん！——

光を奪われた暗い部屋で、ユカリは裸になる——。手きぐりで、ベッドに上つた。震えていた。サワサワと、無数の竹が鳴つていく。それに、何時もよりも尙この部屋は暗い——。

「よくつて？ ユカリ」

「はい、おねえさま」

襖の音がして、夫人が入つて来た。暗い中でそう思つたのだ。

だが、なにか、変つていた。——なんということ、脂じみた異臭！ ユカリは叫び声を押殺した、そして、躰が触れた。ザラリと

獣のようなその感触。「あッ！ おねえさま？」

「イヒヒヒヒヒ」

吐気のするような口臭とその野卑な笑い声に、全身に戦慄が走つた。

違ふのだ、おねえさまではない——。男、それも、野獣のような——それだけを感じて、ユカリは恐怖に半ば失神した。

「ホホホホ」

甲高い笑声が響いて、灯がついた。なんという、この場の異様な光景。

「イヒヒヒヒ、奥様どうも、夢みてえなこと、イヒヒヒヒヒ」

眼ヤニと垢だらけの、猿のような醜い乞食男。それは卑猥と汚辱の塊り。その顔に夫人は札束を投げた。

「早く、消えてお仕舞い！」

あわてふためいて札をかき集めるそれを、ベッドの上で、汚れた女が見ていた。もう表情はなかつた。

「ユカリ、おまえにもう用はない。それでも仕合せになれるものか。男の処にゆくがいい！」

二人の女の腫が、鬼火のように燃える。

「きく！ この厭はしい女を、竹藪に捨ててやるのです」

ズルズルと、ユカリの白い裸身が引きずられた。篠の竹藪——。風が立つて、それがサワサワと鳴っているのだ。



密淫街の女たち

密淫の娼婦は質が悪い。客はボン引きが巧いことを言つて連れて来る。客が怒つてもそれは彼女や業者の責任でないから、美人を用意する必要がないのだ。



特集 現代風俗の病癥

賣春篇

小 乃 木 修

密淫業者の生態

密淫——とは、いわゆる赤線区域、青線区域と呼ばれる集団私娼街とは全然別個に、他の商売か、或いはしもたやなぞを装いつつ、秘かに売春するモグリ娼家のことを言う。もつとも、モグリと言えは青線区域と呼ば

れる私娼街も似たようなもので、青線が黙認されて居れば密淫の娼家だけ批難するのは片手落ということになるが、青線はともかく集団をなして居り、社会の批判を受けるだけの態度を構えている。しかし密淫のほうはそうではない。

社会の耳目を全然くらまして、法律、税金検診、などという売春業者が当然受けるべき諸制約を脱れて、いわばスピロヘーターが本人の自覚せぬ間に徐々に肉体を蝕んでゆくのに似て、社会風俗の底流を毒して行くのである。

いきはい、社会的（法律的）監視が皆無の密淫業者は、女たちからの搾取は勿論、戦前の娼婦と同じように彼女たちを軟禁状態に置くことも平気であらうし、性病への警戒もいゝ加減のものであると、断言出来る。

こうした密淫業者は、世人の想像する以上に多く、都会の底に蜘蛛の巣のように拡がりつゝある。

そうして密淫とは集団で無いとききに記したが、地理的條件（姿をくらますに都合がよく、客を連れ込む便のよい）によつて、やはり漠然とながら、密集地帯をつくつてゐる。東京で言うと、まず千住界隈から浅草山谷

特集・現代風俗の病癢

吉原周辺。上野駅周辺から広小路近辺。――

こう言つた所はまず代表的である。

又、新宿旭町界隈から遊廓と通り一つ隔てた御苑周辺。澁谷駅五反田駅界隈は少々獵奇好みの紳士なら誰でも知る密淫地帯だ。

試みに、上野駅や澁谷駅の周辺にたむろしている輪タク屋の前を、モノ欲しそうに歩いてみれば、忽ちナレナレしく、また如何にも秘密つぽい囁きを、しかもネチネチと執拗に聞かされること請合である。

こんな手合を都会人なら大抵馬鹿にしているが、

「旦那、本当に素人なんですぜ、晝間は勤めてるんですが、一寸家の都合で働く気になつたらしいんです。しかも今日でまだ三日目にしかならないんですから、一眼会うだけでも会つてやつておくんなさいよ。エ、お氣に入らなかつたらそのまゝお歸りになつて結構ですとも……」

なぞとやられると、畜生うまいことばかり言いやがつてと腹の中では思いながらも、半分自分の想像に煽られてヒヨイと乗つて終う。

しかし輪タク屋や客引きに連れら

れて行くうちが花で、あやし気な露路を幾つか曲つて、やつと目的の家え辿りつき、さて問題の素人娘と対面ということになると、大低幻滅を感じるか、自分の馬鹿さ加減に絶望するのがオチである。

だが、そこまで来て、女が氣に入らぬと言つて歸る客は十人に一人もあるまい。輪タク代は拂わねばならぬし、その家え上つてからお茶の一杯位は出されているから、強引に引き返すには相当の勇氣が要る訳で、先づ殆どの客は諦めて終うと言つてよい。

その辺のところは輪タク屋も客引きも心得ていて、言葉巧みにお客の氣嫌をとりなしながら、適当な時にサツと消えて終う。

どうせこんな客はいつペンコツキが多いから、彼等に見れば、巧みに誘つて、客が一緒に歩き出せば、もうメめたものというのであろう。

それだけに密淫業者に対する客引きの権限は大きく、遊興費の二割から四割、開店早々の店など五割位拂うのである。幾ら女を抱えていても客が来ねば商売にならぬから、これは当然と言へるかも知れないが、こうした負担はすべて娼婦の肉体によつて償却されるのである。搾取の網は幾重にも張られていて、

無慈悲に彼女達の肉体は干乾びて行くのだ。

晝はそば屋・夜は密淫宿

今年の春先のある夜、上野広小路で、丸顔をニコニコさせた善良そうな輪タク屋に引つ掛つたことがある。

「派出婦会から働きに來ている、本当の未亡人や娘たちですよ。旦那、あたしやあ毎晩こゝえ出てるんですから嘘はつきませんや。彼女たちは晝間の働きのだけじゃ足りないんで、まあアルバイトする訳なんですよ……」

と全く誠意のこもつたような声で、誘う。客引きのスタイルにも色々あるが、前にも言つたように客を自分と一緒に歩あるかせれば九分九厘成功なのだから、こうして巧まずして客を信用させる客引きは、まず同業の中でもベテランと言うべきだろうか。――

案内されたのはつい目と鼻の、切通し坂下辺りの露路。

「旦那、人眼がウルサイもんですから、こつちから入つて下さい」

と、下町には家々の勝手口がピツシリ向き合つた、女中さんや御用聞の専用露路といったようなものがあるが、そうした薄汚ない露路からその家の裏口に送り込まれる。すぐ突

つつきの階段をのぼり、六疊程の小綺麗な部屋へ通される。この家の客間である。

約束した金をその輪タク氏に渡して、一寸世間話をしながら時間を潰しているうち、この家が、レッキとした「そば屋」であること聞いて、これには呆れ返った。

「へエ、本當かね。じゃあ晝間はほとんど客が来て、階下の店でそばを喰っているのかね」

「イヤ、晝間つて、まだ今も商売やつてんですよ。旦那が来た時は恰度店に客が居たもんだから、裏から入つて貰つたんです」

「へエー、成程ねエ」

さすがに相当夜の街をうろつき馴れている心算の私も、これには驚き入るばかりである。

念の爲に四五寸傍の窓を開けてみると、人通りこそ絶えているが、相当に広い通りが森閑と眼の下にあり、この家の店の燈がまだあかかと流れ出ているのだ。

この頃街に氾濫している簡便な「そば屋」の一軒だが、店の位置や作りから見てもチャンとしたものである。軒に縄ノレンなどぶら下つている所から見ると、晝間は「そば屋」で夜は一杯飲屋となるのだろう。

それにしても、恐らく晝間何事も知らずにこの店に集つてそばを喰る近所の主婦や勤め人の顔を思い描くと、何となく大声で思いきり笑い出したい衝動にかられて、私は困つた。

もし私が、仮にそうした無心の客に対してこの家の正体を告げたならば、彼等は一体どんな顔をする事だろう。恐らくギョツとして、醜行の行われる二階を振り仰ぐに違いない。

夜は売春宿となる「そば屋」

もしそれを知つたなら、一体誰がその不潔なそばを食うだろうか。

知らぬが佛とは、よく云つたものである。

そんな感慨にふけつていると、やがて襖が開いて、女が入つて来た。

「いらつしやいませ」

出来るだけつゝましそうな声と恰好で挨拶するが、一眼見て、これはヒドイと思うような女である。小柄でギスギス瘦せている。顔は十人並以下で、鼻がピヨコンと天井を向き、眼の辺りがペコンと凹んで、無智というより低悩といったものを感じさせる。その上、皮膚が青黒く、全体に發育不全の奇型児染みている。

或程、輪タク氏の言うように、派出婦会から来たアルバイト女性には違いないかもしれないが、こんな女と、思うと背筋の辺りがゾツと寒かつた。

こちらの顔色でいち早くそれと察した輪タク氏は、さすがに自分でもテレ臭いのか、「旦那、このひとなんですがね。どうぞひとつよろしく……」

など言つて後はモグモグ口を動かして誤魔化している始末だ。筆者を誘つた時の元氣は消えて、なんとなく縮こまつている。我ながら、嘘のひどさに氣がさすのだろう。

輪タク氏が消えると、女はホツとした風にガラリと態度を変えた。幾ら商売とは言え、きちんと座つて初心らしい恰好をしているのは、馬鹿々々しいといった風だ。また、こんなインチキはお客の方でも百も承知のことだろうと、決めているらしく、馬鹿のように笑つたり、荒つぽい言葉を吐き出す。

いずれ上野、横浜あたりで質の悪いパンパンだつたのが、それでも食えなくなつてこんな所へ流れて来たのだろう。全くこんな女では風太郎でもなかなか手を出すまい。

とすれば、こうした女にとつて、密淫宿は案外有難いネグラと言へよう。

特集・現代風俗の病癖

客はポン引きが連れて来るので、自分には責任がない。客がどう思おうとそれは向うの勝手で、とに角毎日食う物には事缺かないのだから符込みにビクビクしながら街をうろつくより余程恵まれた環境なのだと言えるかも知れない。

質の悪い密淫の娼婦

以上の一例が示すように、密淫地帯の女は概して質が悪い。筆者の経験の中でも、これは一番ひどい例をとり上げたのだが、大体において、皆似たり寄つたりである。

特殊なルートで客を集め、多額な遊興費を要求し、多少上質の女を呈供する密淫業者というものは、確かに別に存在するが、普通東京の盛り場周辺に集うこの種の娼家の内容は、前記の例と同じようなものだ。

浅草雷門の輪タク屋にひつこく口説かれて南千住の密淫宿へ連れ込まれた時も、同じような目に会った。こじんまりした素人やの茶の間で年輩の玄人あがりらしいお内儀にお茶をすゝめられながら、女と対面したが、何んとかく緊りのない体付で

鈍感そうな顔が、不感症の女の見本のような気がした。

この時は輪タク屋を陰え呼んで、帰ると駄々をこねたが、深夜のことであり、もう車も拾えません、と脅かされて、観念して泊つたが、その不快さ、馬鹿らしさは永い間尾を引いて忘れられなかつたものである。

また新宿二丁目の遊廓附近で、友人と二人で飲み屋から出たところを、これは客引きでなく、女自身から巧みに誘われた。つい近所だというので酔つた元氣もあり、フラフラついて行くと、真つ暗な露路を幾つか曲つて、ガタピシと老朽したアパートの、見るも無惨に汚れた一室に上げられた。しかも玄関からではなく、窓枠を露路から板が渡してあつてそこから部屋へ入る。つまり窓から出入したという訳だ。

この夜は早々に逃げ出したが、女二人この部屋に住んで、売春しているのだつた。旭町辺りのドヤを利用するのと違つて、とに角定住しているのだから、パンパン（街娼）というより、やはり密淫の娼婦の種類に入るだろう。

さて、客の側から見た密淫の女たちは、お

ゝよそこうしたものであるが、これを内側から、つまり女達の側から見た場合——つまり女達の事態とは、どんなものであろうか。

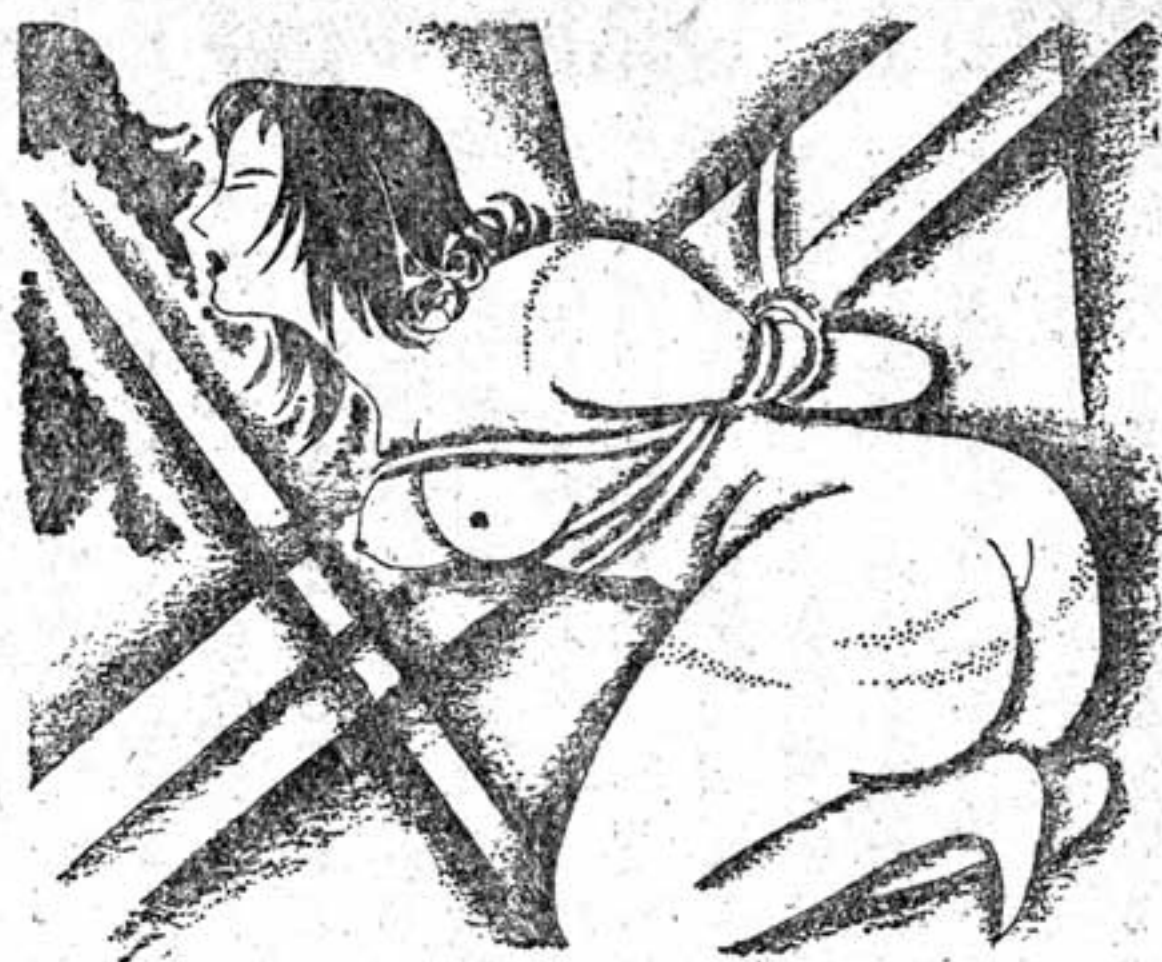
これは一寸、難かしい質問である。赤線区域の女たちは、喋るが、密淫の女は警戒してそんなことは恐らく客に打明けようとしな

い。二三度通えば、情が移るということもあり得るけれど、ポン引きに連れられて来る客は大抵一回だけだから、彼女達の素裸の実態が外部へ流れ出ることはまず殆ど無いのである。

たゞ、一つだけ断言出来ることは、冒頭にも記したように、いわゆる赤線区域青線区域の女より、過重に搾取されているであろうことだ。

これは娼婦たちの質が悪いことによつても判る。密淫業者にとつては、無智な、業者の願使に従順に甘んじる女で結構なのであつて顔の美醜なぞは二の次なのであろう。客はポン引きが連れて来る。ポン引きえの謝礼を考へれば、安あがりに酷使出来る女こそ、もつてこいの商品だとうそぶくに違いないのである。

(おわり)



私が拷問した女

(元憲兵少尉)

根津明治

笹本伍長は烈しい息づかいの合間にこう怒鳴ると、男の前に廻りざま、いきなり重い軍靴を蹴り上げる。鈍い肉が骨が鳴る音、と同時に男の五体がずるずると仆れ伏す、その廻りにゆるゆると描き出された赤い地図——笹本伍長の軍靴は見事に男の鼻骨を砕きつづけたのだ。

「ちえッ！ 伸びちまいやがつた。少尉殿、水でもぶっかけて眼を覚まさせますか？」

笹本伍長は尙も突き出した肋骨のあたりを軍靴で蹴りながら、私にたづねる。

「明日でいいだろう、それよりあと一人の工員というのを調べよう」

私は傍らに突立つて、自分の同胞の痛ましい姿を、まるで石像のように無感動な表情で眺めていた通訳の李を振り返える。

「隊長殿、今度は大したものですよ」

李は意味あり気にやにやと薄笑いを三角

にとがった頬に浮べながら部屋を出て行く。この男は骨の髄まで日本軍に魂まで売り渡したような奴だ——この町で、いや華北の大半で絶対的威令を行っている権力の権化の日本軍、その中で鬼神のように恐れられている憲兵隊に勤務していることが、どんなに李を有頂天にさせていたか——恐らく私の機嫌をとる爲なら自分で同胞の首を絞め殺し兼ねないだろう。その李が大したもの、というからには余程手強い奴に違いない、私は思わずなぐり疲れた様子の笹本伍長と顔を見合わせて澁面をつくつた。

然し、やがて李に縄尻をとられておぼつ部屋に入つて来た囚われ人の姿を見た瞬間、私は余りの意外さに思わず椅子から腰を浮かしてしまった。それもその筈、日本軍の占領地帯に潜入して執拗な反日宣伝や謀略を繰返す八路軍工作隊員として逮捕されて来たの

「畜生ッ！ これでもいわんか」
ビシッ、笹本伍長が精一ぱい振かぶつた帯革が蛇のように宙を躍り走る。後ろ手に縛られた瘦せた赤茶けた背中に又一條の真赤な縞が浮んだ。紙のように蒼ざめた男の唇からううところえ兼ねた呻きが洩れた——だが血がにじむ程噛み締められた唇は依然として動こうとはしない。
「強情な奴、これでも喰らえ！」

は、まだ二十才になるかならずの小柄な女ではないか！

女は一瞬床にぼろ、層のようになぐり仆された男の姿を見て、さッと烈しい恐怖の色を顔一ぱいに浮べたが、きつと唇を噛むと、なじるような怨ずるような鋭い視線を真直ぐに私に向ける——大きな灼けつくような瞳……。

「女か、こいつも八路の工作員に間違いないのか？」

八路軍の中には数多くの女性、それも反日思想に凝り固つた女子大学生等が混つてゐるとは聞いていたが、工作員として捉えられ、私自身が取調べるのは最初だつた。

「間違いないです、さつきの男の女房だといつていますが、そんなことはない、まだ娘ですよ。延安仕込みの女兵に相違ないです」

李は得々とうなだれた女の白い首すじを覗き込みながらしゃべる。

私は形通り尋問を始めたが、この町に親類を頼つて夫婦で来たと繰返えすばかりだ。しかし、そう答える女の不安げな表情からも、ほつそりした腰の辺りからも、まだ固い誓を思わせる清純な処女の香りが仄々と匂つてくるようだ。嘘をついている！ そう直感すると、私はこんな小娘同然の女に愚弄されてい

る自分自身に滅茶滅茶に腹が立つて来る、ぐいと胸をつき上げられたような狂暴な憤りに私はいきなり立ち上ると殆ど無意識のうちに二つ三つ烈しい平手打ちをくれていた。

「少尉殿、こうすりやこいつの嘘が判りますよ」

たまり兼ねたように笹本伍長は私の平手打ちによりろとよるめいた女の肩を掴むと、いきなり中国服の細い襟に手をかけピリピリと引裂く、はッと身を縮めるのが精一ぱいの女は必死の哀願の意をこめた瞳を投げる——だが笹本伍長の指先はそんなことにお構いなしだつた。未だ成熟するに間のある小さな乳房が最初の槍玉にあがつた。

「こりやまるで生娘じゃねえか……それともまだ嘘をいい張るならもうひとつ調べる方法があるんだといつてやれ」

笹本伍長は李がその言葉を中国語で女にいつている間、片一方の手で無残に破れた中国服を脱がせにかかつてゐる。

だが流石に八路軍の工作員ともなれば決して前言を取消そうとはしなかつた。恐怖でぶるぶる唇を慄わしながらも、女は必死に抗弁する。私はじつとその様子をみつめてゐるうちに得体の知れない暴風のような昂奮に包ま

れて行くのを感じる。私自身躍りかかつてその女の衣服もいや五体そのものも、ずたずたに引き千切り振り廻したい衝動を、僅か李や笹本伍長に対する体面だけで辛うじて耐えていた。

「やれ！ 笹本、徹底的に責めて泥を吐かせろ！ 死んでも構わん」

理性の一片の影だにない狂わしい命令が私の口から飛び出す。それを待ち構えていたように、笹本伍長はおうと野獣のように呻くと猛烈な足拂いで女を床にたたきつける。後ろ手に縛られてゐる女は思い切り前額部をうつて、そのまま暫らく動かない。

「李、手を借せ！」

笹本は李と共に、荒々しい手付きで衣服をはぎ取る。薄黄ろいランプの灯りの下に女の肩が、胸が、烈しく波うつてゐる腹部が異様なうつくしきで浮び上つて来た。やがて水々しい円味を描いた太股が、小さな膝小僧が……。

蒼白い女の肌は私同様笹本伍長の粗野な神経にも、異状な激情を湧き起したらしい、いきなり帶革をとると滅多矢鱈に打ちおろし始める。見る間に女の肩に腹に太股に巾広い線がひかれる、打撃の度に喰いしめた咬い歯の

間から、ひイツ、ひイツとかぼそい悲鳴が洩れた。

「まだいわねえな、よし、娘が女房か調べてやる！」

既に一匹の猛獣になり果てた笹本だった。

鋭い叫び、つづいて津波のような慟哭が陰気くさい薄暗い部屋の空気を震わせる。私は思わず棒立ちになつてしまつた、だが全身を駆け廻つたのは決して非人道を敢えてやつてのける笹本伍長に対する憤りではなく、もどかしい焦々するような、狂暴な感情であつたのだ。

「少尉殿、絶対に生娘です……どうせ銃殺になる奴です、今夜少尉の部屋につないで置きましょう」

笹本は乱暴に娘を突き放してをいて、私の異様に波うつている心を見透したようにこういつた。赤い歯ぐきをむき出しにして……。

これは昭和十五年の夏、華北山東省のある町に憲兵分遣隊長として勤務していた時の出来事である。この最初の女の拷問に明けた一夜は私の心にどす黒い悔恨と、それにも増して異様な印象を参みつけた。

私はいつの間にか女を責めさいなむ阿片に

愛読者
通信

同性を求めて

今度御社で新傾向の雑誌発刊の由、大いに期待している者です。今まで我々の趣味に真に理解ある雑誌は、皆無と云つてもよい状態だつたのですから、心強く思い、蔭ながら発展を祈っている次第です。

又、御誌が我々同好の士の、よき連絡先、相談相手ともなつて頂ければと、慾張つた希望も抱いて居ります。

小生は現在三十一歳、四ヶ月前に種々な事

も似た快楽に憑かれてしまつた。助手役の笹本伍長と李通訳の残忍非情な性格が一層その傾向に拍車を掛けたのだが、津浦線の駅をもつたその町では私の部下たちはそれらしい工作員や通敵者を引つ張つてくるのは勿論、一寸目につく女は有無をいわず勝手に容疑者の名の下に次々と私たちの犠牲に供したのだつた……。

2

その後私は華北屈指の近代都市Tに転じたが、そこで思い設けぬ私の秘密の悦びを満足させる機会を与えられた。

情により、結婚しましたが、少しも幸福を感じません。小生のような者と結婚した妻も可哀想だとは思いますが、同性に対する憧れは止み難く、夫婦の交りも、真暗な中にて妻を幻想的に憧れの同性と思いつゝ辛うじて行つている状態です。

小生の趣好に御理解ある方、何卒御交際願いたく待つて居ります。小生の希望は二十から二十四、五歳までの、野性的男性美の方。御連絡切望しています。(大阪 T N 生)

かつて租界と呼ばれた地域を持ち、国際商業の中心地であつたTには数多くの外人がいたが、私が語学の素養があると知ると、隊長は私を外人掛りの主任に任命した。外人といつても一番数多いのは、中国人以上迫害されても苦情のいえない国を追われたエミгранト(無国籍者)がその大半なのだ。

私は取調べの現場を衆人の目にさらすことは国際上誤解を招くおそれがあるとの理由で、旧ドイツ租界の一角に公館を持ち、そこで対外人調査事務を行うことを許された。これは一時抑圧されていた私の残忍な悦び



を満足させるのに誠に好都合であつたし、私はつとめて私の手許に置く部下も酷薄無比の者たちを選び、そのチャンスを狙い始めたのだ。

太平洋戦争勃発の直前のことだ。敵地区、(日本軍非占領地区)に多量の運輸器材を流していた一派が検挙され、その入手経路の中に自系ロシア人の自動車部品商の名があげられていた。

私は即刻メチコフというその部品商の店の家宅捜査を行つた。机の中をかき廻し戸棚をひっくり返えして捜査をする私たち憲兵を呆然と眺めていたメチコフという男は未だ三十そこそこの若さだつ

た。

「従業員はこれで全部か？」

私はずらりと並んだ中国人たちを眺めながらメチコフにたづねる。

「そうです、私をいれて五名です」

「家族は？」

「南径十二号路にいます。母と妻の二人切りです」

卑屈な眼ざしでチラチラ私の顔を盗み視しているメチコフの言葉は、私の心に異常な波立ちを与える——この若いメチコフの妻ならきつと未だ若い女にちがいない、しかも外人——思わず引き吊るような笑みが私の口許をむすかゆく走つた。

「おい、この男がスパイ行爲をやつたのは疑いもないんだ。本部に連行して指示を仰げ……それから南径十二号路の自宅から家族を引っ張つて来い、俺が調べる」

私はこう部下に指示すると、哀願するメチコフの視線を背中に感じながらさつさと店を出た……

「あんたがメチコフのマダムだね？」

私はゆつくり煙草の煙を吐きながら口を切る。

女は不安の色を無理に押しかくし、精一ぱいの虚勢を張つて一氣にいつてのけた。

「私はフランス人です、私を捕えるのならフランス領事館を通じて下さい！」

成程フランス国籍が残っているならそうするのが順序にちがいない、しかしこの女が、つちりした骨組、顔だちからは生粋のスラヴ民族特有の匂いがする——どうせ金で買ったパスポートに相違ない、構うもんか、おどかしてやれ……。

「私たちは憎むべきスパイ、メチコフ氏の妻としてあんたを逮捕したんで、あんたがフランス人だろうとアメリカ人であろうとそれは問題でない」

「そんな乱暴な！」

両手を振つて烈しい昂奮を現わした女も見聞に萎れた来た——まだ二十五六才であろうか、灰色の瞳と濃くひかれた真赤なルージュがひどく官能的だ、それにぐつと前に突き出た大きな胸の隆起、くびれた腰から洋服を通して窺われる見事に発達した臀部。私は思わずごくんと唾をのむ。

「あんたの夫と同じように、あんた

もスパイ行爲をやつていたね？」

これは無茶な質問だ、女は身体全体のゼスチュアで否定する、憤る——又同じ質問を繰返す……。

全く筋書き通りに運んで行く。憤然色をなして何か声高に叫んだ女の柔らかな頬に、いきなり私の平手打ちが音高く鳴つた。

はッと思をつめた女、大きな瞳は痴呆のように見開かれ赤い唇を丸くつぼめた驚愕の表情には、私の狂わしい感情が一気に堰を切る奇妙な可憐さがあつた。

「おい、責めてやれ！」



傍らで待機していた二人の部下はゴムマリのように弾んで、女の身体に飛びついた。忽ち腕をねじり上げられた女は必死に金切声をあげる。私は日本手拭をとると、しつかり猿ぐつわをした。

「畜生、いいからだをしていやがる！」

部下の一人の不遠慮な嘆声——

「脱がせろ！」

ビリーツ、衣が裂けた、ドレスをはがれる、薄ピンクのシュミーズはむしり取られた。つづいて最後のパンティさえ白々と床の上に投げられた……。

床の上に二つ折りになつた豊満なロシア美人の肉体は妖しい美しさと、魂をとろかすような官能的な体臭——それは化粧品や香料の混つた一種異様な匂いではあつたが——を散する。

やがて、奇怪な、鮮烈な、拷問交響楽が奏でられはじめた。

何十分か、何時間か、悪魔の時間が過ぎると、私は痴呆のようになまなざしで、グツタリと床にころがつた真つ白な脂肪の塊——点々と美しい血の縞を描く脂肪の塊——を見詰めながら最後の言葉を吐く。——

「この化物を俺の部屋に運べ！……泥を吐か

してやる！」

3

翌朝、目が覚めた時にはさすがに、後味が悪かった。私室のベッドの下には、肌もあらわな女が精魂つき果てたように、ぶざまに転がっているのである。

それはもう女としてのたしなみ

も、羞恥も忘れ果てた、絶望の姿だった。私は悔恨がどす黒く羽根をひろげてくるのを感じながら、起き上つて身支度にとりかゝつた。しかし、なんとなく気になつて、倒れている女をふりかへつた時、アツと声をあげそうになつた。青く燃上るような、二つの腫が其処にあるのだ。まるで蛇のような、怨みのこもつた双眸――。

私はそれを見た瞬間、正直のところ、ゾツと背筋が寒くなるのを覚えた。なんとも執拗な怨嗟のまなざしだった。しかし、私は次の瞬間、おびえた自分に腹を立てゝいた。

この女はスパイ容疑者ではないかそして自分は憲兵隊の外人係主任である。こんな女の一人や二人、煮て喰ほうと焼いて喰ほうと、誰に文句を云われる筋合ひもないではない



か――

「なんだ貴様、文句があるのかッ！」

私は自分の威厳を傷つけられたように、カツとなると、丁度手に持っていたバンドを、その白い顔にめがけてビシリと振り下した。

「ヒイッ――」

と、女が呻いた。だが、両手で蔽つた下から、やはりあの憎悪の腫がのぞいているように思えた。それは何もこの女一人ではなく、今まで私が同じように手を下して来た、多くの犠牲者たちの怨みの腫だったのかもしれない。

内心の疚しさから、私は悪鬼のように暴れ廻つた。そうせずには居られなかつたのである。その時扉が開いて、

「少尉殿、この女をどうします？」

二人の部下はにやにや笑いながらこういつた。彼等はおこぼれを待っているのだ――私は彼等の口を塞いで置くために、こう答えることを忘れなかつた。

「お前たちで勝手に料理しろ、明晩までにスパイ自供書にサインさせたら、あとは……」

「これですか」
部下はぐつと咽喉を締める真似をした。

それから、殆どこれと同じような事件が繰返えされた。抗日のインテリ女性、豪商の二号、それから街の花売娘までも、容疑のあるなしにかかわらず、云いがかりをつけては連行してくるのである。

もう、その頃は敗戦のきざしが見えて軍規は乱れていたし、私はなにか自棄気味で、憑かれたように、そうした乱行を繰返えしていたのである。

だがこうした私達の狂態も、終戦によつて終止符をうたれた、それは無惨な、当然な終末だったと言えよう。

私はいま永い戦犯の刑から解放された身を毎日烈しい労働に酷使しながら、一日も早くこの悪夢のような記憶を忘れ去ろうと努めているのだ。



悲しき玩具

私のことを、極道者だとか、イカモノ喰ひだとか、世間の人々はいろいろな評判をしてくれる。決して自慢にはならないが、確かに放蕩も仕盡したし、遊んだ女の数も、永い間には我ながら驚く程にのぼっている。

「金銭には御不自由はないのだから……」
遊ぶなら一流芸妓を世話するなり、囲うなりしたらと、暗に私の娼婦買ひを非難する人

娼婦百景

——ある、娼婦に憑かれた男の告白——

木島 浩三

もいる。

しかし、私はどう云うものか、きらびやかに装った、いわゆる高級な女たちには何の魅力も感じない。又、素人女に対しても一向食指が動かない。だから、せつせと娼婦買ひはしても、未だ会社の女事務員を誘惑したり家の女中に手をつけたりしたためしはないのである。

人は驚くかも知れないが、実は私は、二十七才の秋に結婚するまで、真正正銘の童貞であつた。その頃読んだ、倉田百三の著書などに影響されて、結婚による、純粋な童貞と処女の美しい結合を夢見ていたのである。

しかし、富豪から迎えた妻は、既に処女で

はなかった。その上に万事権式ばかり高く、冷感症の気味もあつて、夫婦仲は至つて冷ややかなものであつた。その頃から、私の娼婦買ひが始つたのである。

最初に知つたのはすみ子という、福島生れの女だつた。同窓会の二次会くづれで、悪友から無理に、吉原に連れ込まれたのが病みつきになつた。

「寒い晩ねえ……」

部屋に通ると、女は霜焼けでふくらんだ手をこすり合せながら、無心に微笑んだ。色白で大柄といえは聞えがいいが、東北の女特有の鈍重な感じで、臉のあたりが、如何にも腫

れぼったい。

昔流行つた原色の、毒々しい様模の銘仙が借着のようにそぐはず、姉さんかぶりで、紺のモンペでもはかせれば似合うだろうと思うような、土臭い女だった。

ところがこの女に、私はふつとひかれて、通うようになった。こんな女だから、吉原も二、三流の店で、しかも一向に売れない。

しかし、足繁く通つても格別嬉しそうな顔をするでもなく、すべてに無感動で表情に乏しかつた。確かに何處か鈍いところがあつてそんな風だから主人にも馬鹿にされ、朋輩からも、相当意地の悪い仕打ちをされることがあるらしかつた。

だが、腫を赤く泣き腫らしている時でも、「どうしたんだ？」

と聞くと、何にも云はず首をふつて、弱々しい微笑を見せる。こちらの方が氣になつてしつこく問ひ訊しても、滅多にこうした娼家の内幕を打明けることもなかつた。

そんな自分の境遇を、とりたてて不幸とも辛いとも思つてはいないらしく、いはば飼ひ馴らされた家畜のように、運命に従順で無抵抗だつたのだ。

床の中でもその通りで、手練手管一つあるわけでなし、さりとて嫌々ながら勤めているといった様子でもない。他人はものたりないと感じたかもしれないが、私はかえつてこの女の、角のない、抜けた感じが氣楽で、又いじらしくもあつた。

馴染みになるにつれ、口重いすみ子も、ボツリボツリ身上話らしいものを語ることもあつたが、東北の小作人の、九人姉弟の次女だと云う女の話は、すべて貧しく傷たましい思ひばかりであつた。

そんな話を聞くと、すみ子の鈍重な性格も骨太い肉体も、冷害や貧乏に、幾代もくいたためつけられて来た、陰鬱な記憶の蓄積のようにも思はれて、私には憐れであつた。

私が泊つて帰る時でも、愛想らしい言葉も知らない女だつたが、或る時、私の足が冷めたいと呟いて、布団の裾の方に横になつた。豊かな胸をひらいて、私の冷えた足を暖かい素肌に抱くのである。

それは媚態でも手管でもなかつた。何か母を思はせるような、極く自然なしぐさだつた。私は女の素肌の暖さを感じながら、危く涙ぐみそうになつたことを覺えている。

すみ子は、失火でその娼家が焼けた夜に焼死した。風の強い夜で、意外にその廻りが早かつたとはいへ、朋輩たちはみな逃れたのにまして、同じ床に寝ていたその夜の客も無事だつたというのに、彼女一人が逃げ遅れて焼死したのである。

春 婦 情 話

アヤという女は大酒呑みで凄く氣前がいい。氣前がいいのは結構だとしても、まだ二十一、二の若さで、毎日のように飲んだくれているのだから、時には商売に差支えることもあるらしい。

「仕様がないうさ、父ちゃんもアル中で、卒中で死んぢやつたし、兄ちゃんだつて近所で鼻つまみの酒亂だもん。あたいはきつと、父ちゃんか酔っぱらつてる時に出来た子なんだよ——」

深川の生れたというアヤは、なんの屈托もなさそうにそんなことを云つて、ケロリとしている。

男好きのする顔で魅もいから、結構売れているのだが、年中ビイビイで、凄いとツッパ——などを着ているかと思うと、次に行つた時

には、垢染みた半纏を引つけて、如何にも塩たれた格好である。

そのくせ、

「アヤちゃん、凄いいお召の掘出し物があるよ。安いんだよ……、あんたもウチのNOW

ンなんだから、これぐらいのものは着なくっちゃ……

……、なあに、御帳場で立替えといてあげるからさ。」

とかけられると、すぐその気になつて仕舞う。

だから彼女の部屋には簞笥から長火鉢、姿見、電蓄のたぐひまで凄いい奴が揃っている。勿論それは彼女の牀を縛る金になるのだが、アヤはそんなことは頓着しない。

借金を重ねて買った癖

に、指輪でも着物でも、褒められれば朋輩にでも誰にでも、簡単に呉れてやる。だから主人にも仲間にも、至極気受けがいいのだ。

これではいくら売れても借金がかさむばかりだが、それとなくそのことを指摘しても、



「仕様がないうさ、お金は天下の廻りものつて云うもの。稼いでいりやあ、そのうち借金もなくなるだろう——」

と、真顔で答える。

かあさんだつて、みんなだつて、とてもあたいを大事にしてくれからと、アヤはいい気持ちらしいが、客がよくつくアヤを離したくないばかりに、チャホヤしたり、いろ／＼品物を押しつけて、借金で縛る作戦に出る主人の腹黒さなど、彼女は想像も出来ないらしい。

そんなアヤの生一本さは、見ていても氣持がいいし、何より彼女の庶民的なこだわりのない雰囲気

が、ますます私を放蕩に追ひやつたとも云える。

私は時に晝間からアヤの許を訪れて、隣りの部屋の歌子なども誘ひ、彼女たちと、のんびり花などをひいて遊んだ。アヤは勝負ごとにも割合淡泊だつたが、熱が入つてくると、着物のままあぐらなど組んで、子供のように無邪気な喚声をあげたりする。

そのアヤが酔うとひどくお俠んな毒舌家になつて、

「オイ木島、又来やがつて、助平野郎。今夜はあたいは商売は止めたからね。一諸に飲むなら遊んでやらあ——」

私は幾度、そのアヤの、酔ひ痴れた重たい牀を抱き上げて、床の中に運んだことだろう——。

そんな彼女も、翌朝は乱れた髪をぼんやり窓硝子に押しつけて、

「又雨だ——、兄ちゃんは今日もアブレなんだねえ。」

と、呟いたりする。アヤの兄は深川で日雇人夫をしているらしかった。

隣りの部屋の歌子は、上手にアヤに取り入っていたが、性格は凡そ対照的だし、年齢も

大分上だつた。何でも一度は足を洗つて世帯を持つたこともあるというが、又古巣に戻つて二度の勤めをしている。

だから、そんな過去から来る打算が、彼女の一举手一投足にもハッキリ現われていて、私にはなかなか興味もあつた。主人や、ためになると思う人たちには趣味が悪い程の御追従もするが、弱い者、下の者にはひどく意地の悪い当り方をする。

ケチで、凄く溜め込んでいると云う噂だつたが、誰も歌子の貯金通帳を見た者はない。だが、客のとり方も歌子らしく徹底したもので、さすがの私も舌を巻いた。

まづ彼女は、決して客の選り好みをしな。目的だけの金を持つてしているとアタリがつけば、油だらけの菜っ葉服だろうが、乞食のような爺いだろうが、一切おかまひなしである。

この街にも時に、ツンボや盲、片手、又は片足のないやうな不具者だつて来ることもある。

向う意気は強いようだが、案外に気の弱いアヤなどは、

「床に入つてみたら、お客の足が一本しかな

いぢやないのさ、ゾツとしちやつてあたいキヤツと飛び起きたら、足を蹴飛ばしちやつて――、義足を外して置いてあつたんだよ。いくら商売だつて趣味が悪くて、寝られやしない。」

と、眉をしかめるのだが、歌子のかえつて



そんな客ばかりを狙うやうな傾向すらある。

額やら首に、大きなコブをぶらさげた、醜い鳥屋の隠居や、歌子の胸までしかないやうな、印判屋だという因果な小男などが、せつせとこの女の許に通つてくる。

こんな片端者たちにとつては、己れの不具を全然気にもとめない歌子のような女が、何にも勝る救ひであつたのかもしれない。ずい分あくどい絞り方をしていたが、歌子の許にはこんな毛色の変つた客が始終絶えないのである。

私はアヤが酔つて寝入つて仕舞つた静かな床の中で、ひっそりと煙草をふかしながら、隣室の偉丈高な歌子の声と、ボソボソと女の気嫌をとりながら金を並べるらしい、不幸な男たちの氣配に耳を澄ませたものだ。

ところが、こんな惡どいやり方で、溜め込んだ金を、歌子が惜気もなく男に貢ぎはじめたと聞いたから、私は全く驚いて仕舞つた。

相手と云うのはドサ廻りの、薄汚れた芝居の二枚目ということだが、ノボリを贈つたり部屋着を新調したりする程のノボセ方で、あれ程チャツカリ屋の歌子が、すつかり男に丸めこまれて、苦勞して溜め込んだ金を、手もなく吐き出しているらしいのである。

だが、人の嫌がる醜い男たちに躰を売つてひたすら金に代えていた娼婦にも、ドサ廻りにしろ、二枚目役者に熱中する感情が残つていたかと思うと、なにか女の氣持の動きが、

私には哀れにも感じられてくるのだ。

白 い 野 獣

由美はいわゆる娼家の女ではない。ちゃんとしたしもたやの三階に部屋を借りて暮している。ぜん／＼搾取されることもなく、独立した商売だから、彼女は豪奢で奔放な生き方をしているのである。

しかし、彼女もやはり一人の娼婦には違ひなかつた。原語でシャンソンなどを口ずさみ全身刺青だらけの、土地の親分と寝たあとで指にエナメルなど塗つて、パレーの公演を観にゆくような、ちよつと風変わりな女ではあつたけれど……。

由美に聞いたことはなかつたが、ひどくエキゾチックな容顔で、その父か母が、スペインか、イタリー系の血をひくのではないかと私には思はれた。

その豊かな肢態は、私の知つた数多い女たちの中でも随一の美しさだつた。私は今でも由美の、青く静脈が透いて見えるように白い胸の突起や、豊満に力のみなぎつた腰部の線を思出す。

一流のスリッパにだつて、あんな美しい牀の持主はない。しかし、ひどく毛深い質で背中など、一面に金色の毛が光っているのが、かえつてなにか煽情的な魅力でもあつた。

この由美は又、恐しく淫蕩的な女でもあつた。洋服の好みでもなかなかシックだし、音楽や絵画の話にしても、ちゃんと世間に通用する感覚を持ちながら、骨の髄からの娼婦なのである。

第一、羞恥心といったものは毛筋ほども持ち合はさない。客をとつてゐる処に新しい男が訪れると平気でその部屋に招き入れる。座布団など放り出しておいて平然としている。

なんといつても、由美の肉体は素晴しかつたから、一度知つた客は、必ずあとをひいた。私もそうした男たちの一人である。

類のない、甘美な肉体の陶醉にひかされて私は殆ど毎日のように由美子の許に通つた。必ずといつてよい程先客がある。その男と、由美との売買とは云えぬ程の原始的なたわむれが私の寸前で展開される。

始めは苦痛だつたが、やがて、云ひようのない刺戟と亢奮を伴つた。由美の肉体の前で

は、私もすべての理性を失ひ、官能だけが燃え立つのである。彼女は興に乗ると、どんなことでもやつてのける。手のつけようがなく奔放で、性の知れぬ妖婦であつた。

権式の高い、取り澄した妻に比べると、如何にも天衣無縫で潤達な由美の魔力は、私を骨抜きにして仕舞つた。私は憑かれたように女の許に金を持つて通つた。

女は、或る時は髪をふり乱して転げ廻るかと思えば、或る夜は私の亢奮を嘲笑するやうに最後までガムを噛みながら、本を讀んでいたりした。

その頃、私が知つてゐるだけでも、数人の男たちを、毎日相手にする生活をつづけていながら、由美の疲れた顔は見たことがないし、牀もますます白く脂が乗つて、輝くように健康な美しさだつた。

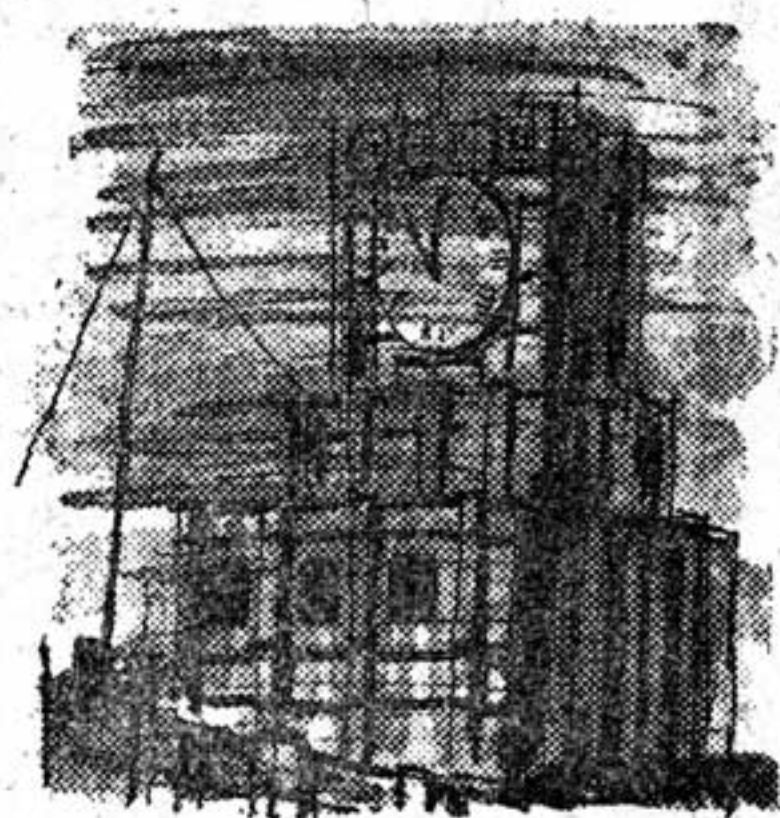
私が知つてから、半年ほど経つた或る日、由美はフツと私達の前から姿を消して、行方を絶つて仕舞つたのだが、そんな謎のような失踪も、彼女の妖しい記憶を増すばかりで、私は今でも由美の豊かな姿態を、巷に求めつづけている。

針の椅子

古庄英生畫



みよ 女と椅子と針の山だ
 非情な鉄のトゲが、舌なめず
 りして
 白い肌を待つている
 だから――
 狂暴な男の虐たらしさを、人
 は云うだろうか？
 私は嘲う、女は魔物。
 片々たる男のサデズムよりも
 もつと、もつと恐しいなにか
 を、女はその無惨な、とらわ
 れの姿態にひそませている
 その恐しい希ひが、
 大の男をかりたてるのだ
 此処では苦痛と恍惚が紙一重
 恐怖とすり變る陶醉――。
 その前では 男の狂暴なぞ
 なんと空虚な愚かしさ。
 だから、私は云うのだ、
 女の牀の中には魔物がいる。



A

そどみあ・すとおり

美^ア少年^ボの街^{まち}

志 麻 雪 夫

冷房装置の完備した館内は、ヒンヤリと心地よかつた。八分どおりほども入った観客の、シャツの白さがほんのりと漂つてみえる。その視線は一齊に、スクリーンに吸いつけられていた。

戦後のフランス映画に、その官能的な姿態で急激に売出して来た、ジェラル・フィリップのなやましい表情がアップになる。野性的な若さと、孤獨な熱つばさ——。かすかな吐息が湧いた。

洋は息苦しかつた。胸が圧迫されるようで、動悸がする。画面からにじみ出る熱つばさが、ジカに中枢神経にふれる。ふれられた神経が息をひそめている。

友達が云つたとおり、凄く官能的な映画だな——。そう思った。

「観てこいよ。凄げエ映画だぜ。ミシユリイヌ・プレエルつてフランスの女優、ちよつとタマらねえぞ、ゼンゼン肉体派でやがる！」ところが奇妙なことに、洋はその女優を、少しも観てはいないのだ。相手役のジェラル・フィリップの姿から、片時も瞳を放なさない。

その眉根をよせた額のあたりや、男性的な顎のハリがよかつた。それから均整のとれた、腰から下肢へかけての線——。ほれぼれとみつめているのだが、自分ではそのことに気づいていない。ただ熱っぽく、魅せられている。

ふと、何か触れた。膝の上だつた。手、と気づいた時、隣の人はいもうその手を引いていた。洋は暗い中で、チラと隣を見た。

端整な横顔と、白カラー。尋常な背広である。なんの変哲もなかった。だから、瞳をスクリーンに戻した時、洋は、もうそのことは忘れて仕舞つていた。

映画館から、陽のくれぐれの街に出ると、もう息苦しさはなかった。あんなにも熱っぽい想いをしたことも、嘘のようだった。洋は平凡な高校生の表情にかえって、必要以上に大股に、日比谷から有楽町駅に向って歩いた。

だがK書店の前に来ると、ちよつと立止つてから、ツカツカと店の中に入つた。インクの色が匂うような、新しいカバーをつけて、新刊書が並んでいる。買わなくとも、洋は本屋の雰囲気が好きだった。

手近な一冊を取つて、パラパラと頁を繰つた。その時が何かに触れた。混んでいると云う程でもなかったし、予感がなかったからギリとしたが、身近に客の一人が立つているのだ。

ちよつと身をズラしてから、又、頁の上に視線を戻した時、洋は、再びギリと胸を衝かれていた。

さつきの男！

端麗な横顔も、上体がまつすぐにのびた姿勢も、確かに映画館で、隣りの座席にいた男に違ない。

妙な偶然なんだ——。と、思おうとして、もう一度見返えした時に、その紳士はニツコリ笑った。

「やあ、よくお目にかかりますね。君は彫刻が御好きですか？」



その人の視線は、洋の手の上にひらかれた、本の頁にそそがれている。ギリシャの彫刻のグラビア。槍を片手に、正に投げんとする古代の青年の、力に満ちた一瞬。その美しい筋肉美——。

洋は赫くなつた。無意識に手にした本だつたけれど、この、如何にも嗜みのよさそうな紳士の前では恥かしかった。彼は匆々に本を置いて外に出た。

かすかに予期したとおり、この紳士は如何にも以前からの知合いのように、洋と並んで舗道を歩くのだ。洋は当惑しながら、そつとこの人を盗み見た。

青灰色リネンの夏服に、品のいいパナマ。晩夏の街の灯の中に、

濃いネクタイの色が爽かだつた。帽子でカゲになつて見える鼻筋から口元にかけて、引き締つた緊張を見せて意志的だつた。それに姿勢のいい胸が厚く張つて、思いがけず、逞しくさえあつた。

それは如何にも良家の育ちと、躰が身についた感じの、三十五、六の紳士である。洋は、なにか圧迫を感じて、並んで歩いている、その足の運びさえギョチなくなつて来るのだ。

だから、黙って歩いていた相手が足を止めて、

「御一緒にコーヒーでも——」

と、誘われた時には、訳は判らぬながら、ホッとしていた。

B

ドアを明けると、古いシャンソンが流れて来た。喫茶店にしてはひどく暗いと、洋は思つた。ガス燈のようなにぶい灯りが、卓と卓との間あたりの壁に、ポツンポツンと灯つているだけで、その壁は少し濁つた感じのレモン色だつた。

中世紀風の卓とソファが、如何にも神経がゆき届いた感じで配置され、腰を下すと、すぐ横の壁は眼の高さのところが凹んで飾棚になつてゐる。パリの裏町のデッサンと、ランボウらしいデスマスクがかけてあつた。

思つたより広く、奥にはスタンドがあつて、どうやらバアも兼ねてゐるらしい。洋のソファの後の、一面に彫刻された、細い鉄格子の向うに、洋酒の壺が藝術品のように並んで見えた。

客がたてこんでいたが、薄暗いのが有難かつた。それでもなければ、

ば、見知らぬ紳士とそうして向き合つてゐるのは洋にはなんとも面映ゆい成行きだつた。

「畑さん、凄いの。贅つて貰おうかしら——」

洋が驚いて顔を上げると、白い御仕着せの、ギヤルソンが立つて、ジツと彼の顔をみつめてゐる。十七八の、透きとおるような美貌だつた。畑と云われた紳士は、氣持よさそうに、声をあげて笑つた。

「いいさ、贅るよ。——だけど新ちゃん、今夜はひどく混んでるね」

「そうよ、土曜日じゃないの——」

氣がなさそうに、まるで上の空で答えて、まだ洋から瞳を放さず

「こちら、ナイーヴで、凄いいシャルマンねえ」

「まあまあ、虐めないでくれよ、まだ赤ん坊なんだから……それより、ジンフイズでも持つて来てくれない？」

蒼白い皮膚をしたそのギヤルソンが去つてから、洋は自分のことだと氣が付いた。そう云えば、ほの暗い部屋の方々の卓から、自分に視線がそそがれてゐるようにも思われる。その客たちの間を縫う、他のギヤルソンたちも、一風変つた表情を向けて通つた。

畑は、そんな落着かない洋の様子を、たのしそうに見つめてゐる。その上品な物腰には変りないが、この店に来てから、彼は明らかにくつろいでいた。

グラスが運ばれて来た。

「君、洋ちゃん、今夜の邂逅を記念して！」

「……………」

ドギマギしながらグラスを合せた。先ほど、名前だけは名乗つたにしても、慣れ慣れしく呼ばれるのは腑に落ちない。しかし、不愉快



快ではなかった。

「此処はね、ちよつと変つた店なんだ。殆ど常連ばかりなんだけれ

ど——。此処に来れば僕と連絡がつくんだ。洋ちゃん、又来てくれるね？」

ためらいながら、少女のように肯くのを、畑は嘗めるように眺めた。

夏期休暇中のことで、白のオープンシャツに黒サージのズボンだったが、製帽をとつた跡の額がきわ立つて白い、汗ばんだみ上げの辺りも清潔で如何にも好もしかった。つくづくとみつめていると畑は誇らしさに身震いさえ感じてくる。

あちこちに、一人、又は二人づれ、或は四、五人づれの知つた顔に相好をくずした笑顔を、我知らず見せていた。袋物問屋の若主人も、郵政省の御役人も、中国文学の研究家だと云う六十近い老人もそんな畑の笑顔に一人一人肯きをかえす。

マスターまでが、こちらにウインクしてみせる。畑はスタンドに立つていった。

「畑さん、御祝盃ですね」

グラスを掌につつまこむようにして、スタンドにかがみこんでいた柳沢が、漆黒の長髪をふり向けて云つた。有名な交響楽団の指揮者である。

「いやあ、でも、ちよつといい子でしょう？」

傍から蝶ネクタイのマスターが口を出して、

「ちよつとどころじやない。それで新ちゃん、すつかりスネちやつてますよ」

「マスターに折紙つけられれば、これは光栄だなあ」
声を立てずに、三人で笑っている。

「でも、一体何処で？」

「ええ、あの子は今日、映画館で偶然逢つたつて思つてますけどね」
「それまでに、並々ならぬ御苦心つてわけですね。まったく、とてもいい子だもの——」

「ピンと来たんですよ。この感じは男女間にもないと思うな——」

二人ばかりのギヤルソンから、何彼と話かけられて、当惑したように壁を見ている洋の後姿を、グラスを嘗めながら畑はジツとみつめた。同性同志でも、やはり酒の力がある方がよかつた。お互に大膽になれたし、虚飾をふり落して本能だけに戻れるのだ。

「あの子の本能は、どんな濃艶な女にも用はない。まだ全部を知らないだけなのだ」

ソドミアがソドミアを知る、それはまったく神秘的でさえあつた。畑は洋のために自分でグラスを運んだ。レコードが変つてハープのソロが流れている。

「洋ちゃん、思い切つて飲んでごらん」

「僕、大丈夫かなあ——」

オズオズと微笑んで、細い指がグラスにかかつた。

やがて車が呼ばれ、二人を乗せて虎の門の方へ走り去つた。洋は何の抵抗も感ぜずに、畑の膝にうつ伏している。酔いの爲ばかりではなく、そのことに恍惚としていた。

眠つていた何かが呼び覚まれ、かわりに、理性が眠つているのだ。

C

自動車会社の渉外部。畑課長は多忙だつた。ワイシャツ姿で次々と決裁書類を捌いてゆく。電話が鳴る。タイプが響く。社員が出入りする。どんな些細なことでも、必ず課長の処に持込まれ、それに明快な断定が下される。

女給仕が三時のお茶を配る。勿論、課長のところに一番先に持つてくるが、畑は手をつけない。この肥つた女給仕の化粧品匂いもだらしない歩き方も嫌いだつた。だからラッキーストライクに火をつけて、ゆつくり課内を見廻している。

実は、この春入社した、一番若い少年給仕が配つてくる茶なら、飲まないこともない。黒い小倉の服でチマチマした給仕だが、まだ如何にも幼いし、畑にしても、単に仕事の合間の、疲れ休めに眺めているに過ぎない。だが、こんな秘密は勿論誰にも知られていない。絶対に女事務員の方は見ないし、名前を覚えるのも骨折るくらいだが、彼女たちの間では、課長の評判は悪くはないのだ。

妻帯者だが子供のない、女性にやゝ冷淡と思われる少壯課長。騒がれる條件は揃つていた。

ベルが鳴つた。畑は受話器をとり上げる。

「ああ、僕。もしもし、ああ、なんだ洋ちゃん——」

何気なく辺りを見廻してから、

「なにか、急な用？」

「急つてこともないけど、会えたら……、だつて畑さん、僕、もう一週間も会つていないもの——」

「何処にいるの？」

「日比谷。会社がひけたら、公園の公会堂のあたりに来てくれない

かなあ——」

「公会堂のあたりつて、君、あそこは……」

「そう、知ってます。だから……、とにかく僕、待ってます」

黄昏^{なすかれ}ごろになると、この公会堂附近には何処からともなく、不思議な男たちが現われる。十人も、時には二十人以上も、それぞれキチンとした身なりで、人待顔に立っているのだ。一つのグループのようで、実は一人一人孤立している。

洋のような学生から、中年の男まで、さまざまな姿勢で佇んでいる。それが、道行く人々をそれとなく吟味している風だった。奇妙な光景だが、気づく者は少い。その道の者だけが知る事柄が、立っている男たちの躰からにじみ出ていた。

「あ！ 畑さん」

背広をはにかんだように着込んだ洋が、駈けよつて畑の腕に手をかけた。

「洋ちゃん、どうしてこんな場所に來たの？ ランポンで待つてればよかったのに……」

「だつて……、こうして畑さんと歩くところ、此処の人たちに見せてやりたくなつたんだもの」

洋は甘えるように肩をよせて、

「本当はね、昨日、新ちゃんに連れられて來たの」

「新ちゃん？ 彼奴、妙なことを考へてるんだな」

「昨夜新ちゃんと立つてたら、外人の將校が二人來て、新ちゃんは一緒に行つちやつたけど、僕、断るのに汗掻いちやつた」

「いやだな。ヘンなこと止してくれよ」

畑は真顔になつて、洋の顔をみつめた。

「新ちゃんはね、妬つかんでるんだよ！」

「ええ、知つてる。畑さんは今迄、誰とも、三ヶ月以上は続いたことがないつて、僕のことオドしてるの。でも、オドかしばかりじゃないのかしら？」

そう云つてから、彼は赫くなつた。

「君に逢うまで、孤独だつたからさ——」

「だつたら畑さん、どうして一週間もランポンに來なかつたの。僕少しヤケだつた——」

「うん、少しむづかしい問題が起きてね、僕はひよつとしたら、アメリカに出張することになるかもしれないんだが……」

「嫌だそんなの！」

足を止めて、顔を見合わせた。明るい洋品屋の奥から、ラジオのメロディが流れてくる。

「ほら、畑さん、あの曲。始めて逢つた夜、ハープでソロやつた……」

畑は洋の指をソツと握つて囁いた。

「車を止めよう——」

D

ランポンの夜は何時もと少しも変わらない。ただ、土曜日の夜は、二人づれや待合せの客が多いのだ。時々入つて来るフリの異つた種類の客は、何しろ女つ氣がないのに驚いて仕舞う。白い御仕着せの

ギヤルソンたちも、極端に冷然としてゐるから、そんな客は自然落着きが悪くて匆々に出ることになる。

常連たちが吹き上げる煙草の煙が立ちこめて、ますますどんよりと暗い。スタンドのあたりだけは、それでも少し明るくなっている。

「え？ 何処のリンクです？」

マスターが忙しくシェーカーを振つて、

「あたしも、凄いいキヤデイがいるつて噂は聞いていたんですけれど」

「いや、わざわざ出掛けただけで、例の小松の殿様がね、ピタリと傍に引きつけていて、どうにも——」

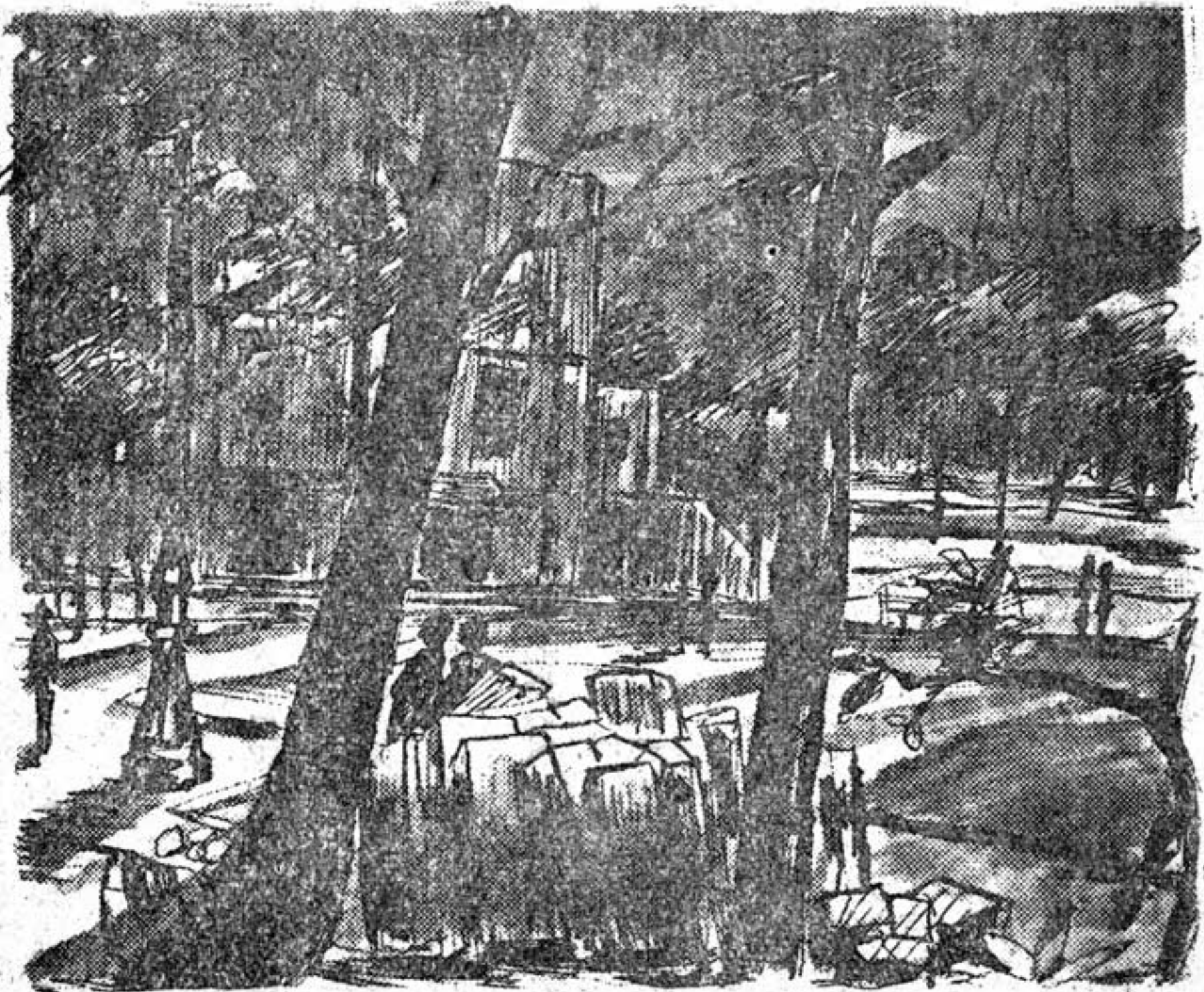
中年の客が首をすくめて笑つた。スタンドにいる客は殆ど相手がない。だから、美貌のギヤルソンたちが此処ではしつこい程の媚態を示すのだ。

一つのグラスから酒をすすり合い、客の膝の上に、その敏捷な躰を乗せて鼻声になる。客のネクタイを讃めたり、気早やにキッドの手袋をねだつたりする。充分客の顔色を見ての上のことだが、それが如何にも愛らしく、無心にサラリと見えるのはさすがだつた。

「おい洋ちゃん！ もういい加減にしてよ。さつきから、何時間ハープのソロばかり聞かされるのかしら……」

「駄目さ、放つときよ。洋ちゃんはボケてんだから、留守ボケ。なにしろ畑さんが羽田を発つ時には、奥さんが冷めたい顔して澄してるのに、洋ちゃんたら小刻さみに震え出したりしてさ。とんだお供をして、あたし、弱つちやつたんだから……」

新ちやんの憎まれ口も聞えないように、洋は電蓄の横に坐つてい



る。その極く淡い影が、細い鉄格子の影と重なつて壁に写つている。今夜は制服を着て、額に髪が垂れていた。

夕方になると、母や姉妹だけの家が無性にわびしくて、フラフラ

とランポンに出てくるのだ。試験勉強も何も手につかない。此処には家にはない、自由とくつろぎがあるけれど、はしやいでいる客たちを見ながら、ぼんやり電着にもたれているのは辛かった。畑が恋しくて、胸中の血が鬱血しているようだった。それに、実はハーブの陰気なメロディを聞いていると、洋自身も気が滅入ってゆくばかりだった。だが、それが止められない。

「洋ちゃん、まあキュラソーでも飲まない？」

珍しく柳沢から声をかけられて、洋はスタンドの高い椅子に腰をかけた。うす青いグラスに酒をつぐ柳沢の手が、筋ばつて細長いのを黙つてみつめている。

この、作曲家であり、日本有数のシンホニーのコンダクターである柳沢にまつわる噂を、洋も何時か耳にしたことがあつた。彼に愛された男が二人までも、死んだと云う。一人は作曲の弟子で縊死をとげ、もう一人は楽団の第一ヴァイオリンを弾いた男だった。テープで亡くなつたと云うのだ。

だが、洋にはそんなことはどうでもよかつた。すすめられるままにグラスをあげた。

「畑さん、もう帰る頃なんでしょう？」

真顔で洋をみつめたマスターに、彼は五月蠅そうに、

「いいの、そんなこと——、もう、始めの予定よりも、一ヶ月以上もおくれているんだもの」

「さては畑さん、あちらで、白哲金髪のシャルマンにとりつかれたかな？」

客が二、三人笑つたらしい。洋はそれでカッとなつた。或は、一

時に酔いが出たのだつたかもしれない。

骸がグラグラして、傍の柳沢の膝に肘をついた。新ちゃんらしい声が、頓狂な声で何か叫んでいる。

「かまうもんか！」

と、洋は思つた。

僕をこんなにしちやつて、外国に行つちやつたんだもの。死んだつていいや！

柳沢の光る瞳が目の前にあつた。

そうだ、僕はこの人の、湖のように光る瞳と、この漆黒の長髪が以前から、好きだったのかもしれない——。

洋の麻痺してゆく神経が、そんなことを思つていた。

原稿大募集！

新時代の耽美雑誌として、病的な美や性癖を愛する方たちの爲に本誌は誕生致しました。さじずむ、まぞひずむ、そどみい、さつふいずむ等々、現代人の心に棲む病癖を共に慰め合い、高貴な芸術にまで昇華させる爲に、何卒皆様の積極的な御後援をお願い致します。手記、告白、(眞實の記録)文藝、愛読者通信、レター交換、なんでも結構です。枚数期日に制限を設けませんから、どしどし御寄稿下さい。

採用分には四百字一枚に壹百円から貳百円迄の間で稿料を差上げます。宛先は

東京都千代田区神田神保町二の三四

日本特集出版社

江戸刑罰十態





最近の新聞広告欄を見ると、甚だ気になる活字が目につく。曰く、

結婚と援助、初再婚年齢不問極秘迅速親切

斡旋良縁多数有

結婚交際援助、紳士淑女未亡人申込多し

真面目相談 貴名極秘

等々、同じような文句

の広告がズラリと並んで

いる。どれもこれもまつ

たくの紋切型で、紳士淑

女歓迎であり、当方誠実

極秘斡旋である。

しかもそうした同じ性

質の広告が、ズラリと並

んでいるのだから、折角

呼びかけられた紳士淑女

諸君にしても、どの相談

所を選んだものか、少な

からず迷うことだろう

。

それに、結婚、交際、までは明瞭だが、援

助とは一体何を意味するのだろうか。丁度、結

婚相談所をめぐつて、よからぬ噂もある際だ

からと、筆者はこの相談所探訪を思いついた

のである。

そもそも援助とは如何なる仕組みである

か、果して紳士淑女であり、又、当方親切誠

実であるか——。ところが、調べたところ、

現在都内には大小七十近くも、この種の相談

所があつて、それぞれ股賑をきわめていると

つ子なら誰でも知つてゐる、有名な神社につ
き当つた。この神社の石垣について、グルリ
と裏の方に廻る。

ゴソゴソ新聞の切抜を取出して番地を確か
め、どうやらこの辺りらしいとウロウロして

いると、木造二階建の家
の入口に、それらしい看
板がかつてゐるのが目に
ついた。

ちよつと緊張してドア
を明けると、正面に衝立
があつて、「〇〇会にお
いでの方は二階へ」と貼
り紙がしてある。二階に
上ると、踊場の左側が
五、六坪ばかりの、ガラ
ンとした感じの事務所
で、先客らしいのが二人
いる。

その女客の方とチラリ

と視線が合うと、さすがの筆者も少々テレ臭

く、モジモジしていると、

「いらつしませ、御申込ですか？」

と、ふちなし眼鏡をかけた、小柄な中婆さ
んが声をかけてくれた。どうやらこの裾長の

結婚相談所で會った女たち



結婚相談所は今や、絶

對に儲かる企業である

ある女は此處で夢を壊

され、又ある女はこれ

を足場に、太々しく生

きるのだ。

黒丸慶二

黒い洋服を着た婆さんが、この主任らしいが、案外きさくにいろいろと説明してくれている。

「まづ、パンフレットの会則なるものを呉れたが、この紙がなかなか上質のピンク色で、胸がときめくように出来ている。」

「人生幸福になるには、社交を広くし、良いフレンドをつくることと、良い結婚に依つて解決するものと思ひます。一人淋しく毎日悶々と日を送り、若き青春に果しなき悩みを胸に抱いて、悲観の淵に立されている方はありませんか」

と云う趣意から始つて、約十五ヶ條に及ぶ会則がかかげられている。

この会則に添付してあるのが、フレンド申込書なるもので、職業、収入、希望條件等が書き込まれるようになってゐる。

入会費は三百円。毎月の維持費百円。他に一人紹介の度に百円拂ひ込み。と、なかなか明確である。係の婆さんはしきりに、

「東京ではねえ、私共が一番安いんですよ」と、力説する。

先客の一人は、三十七、八にもなろうかと

思われる、如何にも世帯やつれのした女で話の様子では未亡人らしかった。

「子供が一人居ますしねえ……此処は若い方が多いんでせうねえ？」

「いいえ、五十過ぎの方でも見えますよ。しかし、どうも中年の男の方は、フレンド注文が多いんでしてねえ、未亡人の方の再婚も時折は成立しますが……」

どうやらそのフレンドなるものが、新聞広告では、交際、援助と表現されるらしい。

係から、淑女側の結婚、交際希望者のカードを借り受け、バラバラとめくつて見ると、名刺版ぐらいの写真が貼付してあつて、名前、職業などが書き込んである。

写真によると、いづれも十人並と云つたところで、大した美人は見当らない。年齢は二十四、五から、三十二、三までが、圧倒的に多い、希望条件欄には、「交際、多少の援助」と書き込んだものがある。つまりお妾志望というわけ。

先客の若い青年の詮衡が終つたらしく、係の婆さんは、しきりに先方に電話をかけている。

「しかし、ですねえ、こんなことは縁のものですからねえ、折角今、希望者が待つていらつしやるんですから、少々無理でも都合して出て来て下さいよ。まづたく、縁の分れ目ですからねえ——」

青年は案外初心らしく、電話を聞きながら、身を堅くしている。一見、なかなかの好男子で、どうしてこんな所に來るのか、不思議なくらいだった。

この青年の申込に勢を得て、筆者も大急ぎでまあまあと思はれる女性を物色した。何しろ、もう入会金をとられて仕舞つたのだから、一人ぐらいには逢つてみたいと思つたのだ。

五人ばかり選んで、大至急紹介して欲しいと申込むと、

「この方は千葉ですからねえ、急には……この方は木曜日と土曜でなくつちや駄目なんです。この方は……」

と云うわけで、やつと残つた一人に連絡して貰つたところ、一時間後に現はれると云う。





そこで筆者は、駅の方に出て、しばらく時間をつぶした。もう結婚して五年、子供もいる始末だが、一時間後に、未知の女性に逢つて、見合をするのだと思うと、少なからずソワソワしてくる。

双方氣に入りさえすれば、交際、援助と云う、テがあるのだから、妻帯者でも尻込みすることは無い。濃艶な女性が現われて、

「多少の援助方を——」

希望したら、大いに発奮しないこともないと思つたりすると、閑つぶしのパチンコさえ、他愛なく玉をとられて仕舞うばかり。

時間を見計らつてもとの二階に戻つて見ると、今しも隅のソファで、先刻の青年が見合の最中である。しかも、その相手方の女性がハツとする程美しい。

思わず見惚れていると、筆者は又別の隅に案内されて、其処で二十六、七の女性に紹介された。

係の婆さんが、しきりにとり持つてくれるが、この女性は内気な性格らしく、余り口も利かないし、態度が如何にも四角四面で窮屈だつた。上背はあるが平凡な顔立で、しか

し、育ちはよいらしく、おつとりした感じはあつた。

その頃から何となく客が立てこんで来て氣づまりだつたから、筆者はとにかくこの女性をうながして、外に出ることにした。出がけにチラリと先程の青年の方を見返えると、相手の美しい女性と熱心に話込んでいる。少々浅間しいが、筆者はなんとなくそのカップルに嫉妬めいた感情さえ味はつたものだ。

外へ出るともう黄昏近い。とにかく、袖すり会うも他生の縁だからと、池袋に出て、駅近くの喫茶店に入つた。彼女は従順についてくる。こんなに大人しい女性なら、交際するのも悪くないと思つた。

「どうですか、暫く交際してみませんか？」

「……」

無言で躊躇している。相当良家の、オールドミスらしく思われた。

「あのフレンド申込の趣意書は、なかなか近代的なセンスがありますね。」

いい氣持になつて喋つていると、

「あの……」

と来た。

「あの、私は結婚の希望で申込んでいるのですけれど……」

「いや、僕は世帯持ちですよ」

思わず云つてから、二人は氣まずい顔を見合わせた。

「あの趣意書が暗示する交際を御希望ではないのですか？」

「いえ、私、そんなお交際は……」

これではゼンゼン興醒めである。

相談所の斡旋によつて、男女の交流がどのようなにして、どの程度行われているか、又、それ等の援助組の女性の生態などを探ぐるつもりだつた筆者は、ゼンゼンコチコチの素人娘に當つたわけである。

こちらも失望したが、先方の女性の方こそ、いゝ迷惑であつたかもしれない。何となく味氣なくなつた筆者は、彼女と別れて、余情やる方なく、ついにその晩は、池袋の飲み屋でトラになつて仕舞つた。

☆

しかし、翌日になつて考えて見ると、大塚の〇〇会では、あの係の婆さんが何氣ない表



いと甚だ残念だから、もう一軒、今度は中野の方を当つて見ることにした。

前にコリて、先輩の借着ながら、リユウとした服装で出かけた。此処は中野でも、私鉄の某駅の極く近く、ゴチャゴチャした店つづきの一廓にある。

貸屋、貸間の貼紙が一杯貼られた、家屋敷旋所と同居である。こゝは大塚に比べると、大分品が劣り、応待に出た五十がらみの男

も、如何にも商売と云つた感じである。

つき当りの壁には、大きく、「老若男女の区別なく、独身者、有配偶者を問わず申込が出来ます。一日も早く、楽しい意義ある人生を——」と書いた紙が貼つてある。

「楽しく意義ある人生」とはどんな人生だか

知らないが、此の相談所では、殆ど真面目な結婚の斡旋はされず、享楽を望む男女の相互紹介、又は二号斡旋所と云つた種類のものがあることが察しられた。

ここでも先客があつて、三十二、三の、立派な服装のマダムタイプが、主人と親しうに談笑している。どうやら話の模様では、紹介された相手が気に入らぬらしく、「若い学生で、健康で、学資が少し足りない」と云つたような、気の利いたのは居ないかしら？」

実に憶面もない。このマダムは、男性の方に、多少の援助を申出ているわけである。相談所で若いツバメの斡旋までするとは、なんとも便利な世の中である。

筆者は例の淑女カードによつて、二、三の候補者を拾い出してみた。主人はロクロクカードも見ずに、その番号によつて、年齢から職業、趣味、希望条件まで、スラスラと説明するのは、さすがに商売である。

例によつて連絡がつくまで、待つことにした。新品の服装がモンを云つたのか、主人の態度はなかなか愛想がいい。

情をしながら、早くも筆者をジャーナリスト臭いと睨んだのかもしれないと思えた。そこで、会の内容をあばかれぬように、選りぬきの素人娘を紹介したのかも知れない。とにかく、相当悪い、媒介業者がいると云う噂なのに、そのしつぽもつかまえられるな



先刻から氣になつていた、右手のカーテンのかかつた、四疊半ばかりの和室から、母子づれらしい二人が出てくる。母親の方が主人を隅の方に連れてゆき、ヒソヒソと耳打ちを始めた。どうやら援助の金額の引上げの件らしい。

主人がカーテンのかげに入つて行つたが、やがて話が成立したらしく、自動車と呼ばれて、男と娘の二人が何処かへ消え去る。見送る母親の、ヤレヤレと云つた表情は、どうにも奇怪なものである。

入れ違いに、草臥れた銘仙の単衣の、三十がらみの女性が、オズオズと入つて来た。主人は人が變つたように横柄な態度で、いろいろ境遇を聞きただしてから、

「正式な結婚を希望ですか、しかし、それは考えものですなあ、初婚ならとにかく、再婚の場合だと——」

瘦せた女はうつ向いていたが、主人はそれに押かぶせるように、

「まあ、こう云つたら変だが、こうした処で紹介されて、正式に結婚する男は少いんでしてねえ、結婚とは別に、異性と交際するのが

目的ですなあ。」

ジロリと女の反応を見すましてから、

「正式でなくてもよければ、條件のいい口が沢山ありますよ。土建会社の社長で四十五才、月収数十万。これは絶対確実な先です。それからこれは毎月九州から上京してくる工場主で少し老人だが、手当は凄くハズム口がある……。どうです？ まあ暫く、援助を伴う交際といった方法でやつてみちやあ……」

淡々とそんなことを喋る

主人の前で、女は深刻な表情で、どうやら迷つて来たらしい。

人の出入りに氣をとられていると、例の和室に案内される。見まわすと、案外清潔な疊に、粗末な四角い応接台がおかれて、一輪挿しに二、三本、赤い花が活けてある。外には薄



い座布団が二枚きりで、如何にも白々しい。紹介されたのは、案外若く、二十二、三の肉づきのいい女性だつた。エバグレイズのワンピース、ノーカラーの衿元にパールまがいのネックレスをつけて、なかなかの美人である。筆者は俄然元氣になつたが、前にコリてゐるから、念ため「結婚の御希望ですか？」

と尋ねてみた。女は白いハンドバックをなでながら、どつちつかずに、プムムムと小さく笑った。

エタボなどあつて、なかなか愛くるしい。こんなに若く、こんなに美しい女性が、まさか援助希望でもあるまいと思つて、

「氣心が知れるまで、何となく交際してみませうか？」

と、虫のよい申出をしてみると、彼女はチラリと私を見上げてから、

「私、交際して、御援助を頂きたいんですけど——」

と云う。それが実にハッキリして、こうした種類の見合も、今日が始めてではなさそうに思はれた。

「それは、その、條件はどんな……」

と、こちらの方が思わずしどろもどろになつたが、彼女の方は実にハッキリと、希望條件を述べるのである。

火曜日と土曜、日曜以外の日で、それも月の始めから一週間ばかりはダメ。それ以外の日なら、週に一度の割で月に七千円程度、週に二度なら月一万円以上欲しい、と、明白に

ニコニコと述べ立てた。

どうにも返答に困つたが、それではとにかく、外に出て、食事でもしながら相談しよう

と、彼女を連れ出すことにした。この相談所の主人は露骨に嫌な顔をしたが、それでも彼女に何か囁いてから送り出してくれた。

新宿に出てから、天ぷら屋に入つた。筆者はもう破れかぶれである。月一万円以上の御援助など、到底出来つこない。とにかく、ゆきがかりの駄賃に、この恐しく先端を切つた生活をしているらしい女性から、相談所の内幕を聞き出すつもりである。

ビールが運ばれると、彼女も少し酔つたらしく、卒直に自分の生活を打明けてくれる。この、まだ幼顔の残つていような、若い女の生活設計は、次のようなことになつていらしい。

彼女は今、晝間は美容学校に通つてゐる。もう一年もしたら卒業だが、卒業したら、何処か目抜き場所に、美容院を開業したい。それにはなんと云つても資金であるところから、彼女のアルバイトが始る。

まづ月の初旬は、大阪から船会社のなんとか部長をしているパトロンが、決つて出張してくる。この間はこの五十男専門に夜を共にする。火曜日は澁谷辺りの、帽子屋の主人と契約が出来てゐるらしい。

筆者は啞然として、ビールの酔もさめる思ひだつたが、彼女の口ぶりでは、こうした種類の女は案外多いらしい。

会社の事務員、洋裁のお針子、未亡人、短期大学の生徒などが大部分で、方々の結婚相談所を渡り歩いていると云う。そして、こうした二号の取引が成功すれば、男女双方から、その一ヶ月の援助費の、二割内至三割の斡旋料が相談所に支拂われる仕組みである。

だから、女と相談所がグルである場合が多く、契約も殆ど三ヶ月から半年の間には御破算になり、男の方も女の方も幾回となく、新しい斡旋を依頼するのだと云う。

なんとも、寒氣のするような話になつたが、筆者は夜の街角で、バイバイと、至極あつさり手を振つて、雑踏の中に消え去つてゆく彼女の後姿を、感慨深く見送つたものである。



鞭むち

の 家

——まぞひずむの女たち——

崖 下 の 家

あれは夏の始めの、急に蒸暑くなつた夜のことだつた。

私は一度蚊帳に入つたものの、なにか寝苦しくて寝つかれず、とうとう団扇を片手に暗い庭に出たのだつた。夫はその頃、丁度学会の前の準備で、毎夜遅くまで書齋に閉じこもつていた。

この家の庭は二百坪ばかりで、大して広いわけではないけれど、何しろこの家を買取つ

て、私達が引越して来てから、まだ一月にもならなかつたから、夜の庭が多少珍しくもあつたのだ。

私は自分の屋敷内の気安さに、蚊帳から出たままの、浴衣に伊達巻姿で、庭のあちこちを歩き廻つた。ヒンヤリした夜気が、ホテつた躰に心地よかつたし、思いがけない木蔭に夕顔の花が咲いていたりして、夜の散索は思ひがけずたのしいものだつた。

とうとう庭の外れの、崖の近くまで来た時私はふと、下の方で何かの叫び声を聞いたよ

須 川 夏 枝

うな気がした。其処は、榎や落葉松の間にツツジの株が一杯に植え込まれた庭の境界線で、其処から下は一間ばかりの崖になつていた。

私は何気なく榎の幹につかまりながら、その崖下をのぞきこんだ。そして、次の瞬間、ハツと身を引く姿勢になつた。押殺したような叫び声は、その崖下の家から洩れてくるのだつた——。

その家なら、晝間見たこともあつたが、もう壊れかかつたような古い、三間ばかりの家

で、丁度一軒だけ、ポツンと離れたように建っている。家自体も家の周囲も、何だか乱雑な、不潔な感じで、始め見た時、私は夫に、「近くにあんな家があつちや、嫌ねえ——」

と、露骨に眉をひそめて見やつたが、夫は「しかし、交際するわけじゃあないから——」

と、穩かに私をなだめたものだつた——。もう十時を過ぎた頃だつたらうか、私は始めて、夜、その家を見下したのだ。そして、私はアツと声をのんで、つつ立つて仕舞つた。

それは、なんという光景だつたらう！ 私は今でも、その時の驚きを思出すと、胸が波打ってくる——。

夏とは云え、明け放たれた座敷に、皎々と電気が灯つている。その座敷の真中に一人の女が倒れていた。しどけない半裸姿で……。そして、急に私の視界に大きな男が現われて翳となつた。

私は闇の中でサツと赫くなつたが、次の瞬間、震え上つて仕舞つた。この男は麻縄らしいものを手に持つて、女を幾重にも縛り上げ始めたのだから——

私は木につかまつたまま、躰がすぐんで仕舞つていた。

「強盗？」

そんな思いが一瞬頭をかすめたが、二人の男女の姿態には、それを裏切るものがあつた。男は小さな、丁度小学生用のような、粗末な机をひきづつて来ると、その四ツの足に、女の手足を縛りつけるのだ。

なんという奇怪な姿態だらう！ それはこの世のものとは思えぬような、無惨な拷問かと思わせたが、男は何か短く叫ぶと、ガタンと音をさせて、その机を蹴倒すのだ。女はウウと呻いて、髪をふり乱した。

今度は逆さに机を背負つて、その空を向いた四ツの足と一緒に、無慈悲に女の手足は動かない。大男はなおも、ガタンガタンと机を蹴上げる。それにつれて、机は横倒しになり、危く縦に立つたりころがつたりするのだ。

その女の姿態から、恐しい苦痛が想像されたが、それだけではなく、何か不思議な雰囲気私には感じられた。

それが何であるかは判らなかつたけれど、私はガタガタと異様な戦慄を感じながら、木かげに立ちすくんだまま、瞳を据えていた。

「怖い、帰えろ——」

と思ひながら、どうしてか私の足は動かない。

半裸体の男がふりかえつて怒鳴つた時、私は始めてその部屋に、別の女がもう一人いることに気がついた。その女は驚いたことに、部屋の隅の壁にもたれて、先刻からもう一人の女に加えられる拷問を、冷ややかに見ていたのだ。

男はその女の髪をつかんで座敷の真中にひきづり出してくる。鋭い鞭音がして、その白い躰がそりかえつた。両手が虚空をつかんで「ヒイ……」

と、苦痛とも歡喜ともつかぬ声が流れてくる。

そして、もう一人の女は机を背負つて、手足をその足に縛られたまま、ギラギラと瞳を光らせて、喰い込むように、眼前のそうした二人をみつめているのだ。

倒錯の世界

その翌朝、私は陽を浴びながら、又あの崖下を覗いた。其処には何の姿もなく、あの古い家があつた。昨夜の奇怪な光景を物語る痕跡は何一つなく、物音もなくしづまりかえつていた。

「夢を見たのだらうか……」

と、私は呟ぶやいても見た。

しかし、あの鮮烈な記憶は、昨夜のように、私の惱裡にこびりついて、一刻も私から離れようとはしない。生れて始めての異様な亢奮が私の軀を駆けめぐって、私は何の仕事も手につかないのだ。

午後になつてもう一度覗いてみると、確かに昨夜の女の一人が、井戸端で後向きに洗濯している姿が見えた。しかし、昨夜のあの激情の跡は何処にもなく、ケロリとして唄をうたいながら、洗濯をしているのだつた。

男の姿はなかつた。私は何故か淡い失望を感じながら部屋に戻つた。

そして、毎夜と同じように、その夜も又夫は書齋に入つて、学会に提出する論文ととり組んでいた。子供もいない私には、耳の少し遠い婆やが女中部屋に引込んで仕舞うと、話相手もなく、仕事もありはしない。

私はぼんやり坐つていたが、何時かフラフラと立ち上つて、無遊病者のように、又あの庭のはずれの崖の上まで来て仕舞つていた。

崖下の家では、再び昨夜と同じ光景がくりかえされていた。裸体の男と女二人、其処には狂気のような責めが、さまざまな姿態で展開された。

私は蚊に喰われるのも忘れ、悪夢を見るよ

うな想いで立つくした。何か、軀がしびれるようである。とりわけ、半裸体でノシノシと動き廻る、大男の姿態から、私は眼を離すことが出来なかつた。

キリキリとひき締つた、頑健そのものの男の軀は、実に見事なポリウムを以て、圧倒するように、私に迫ってくるのだ。私のいる木蔭は真の闇で、崖下の家は咬々と灯がとぼつていたから、私にはその一挙一動が、手にとるように見えるのだ。

三人の男女が、やがて、寢入つて仕舞つてから、私がぼんやり寢室に戻ると、間もなく夫が入つて来た。

「なんだ、まだ眠つてなかつたの？」

私はまだあの亢奮から覚めきれず、思わず夫にしがみついて仕舞つた。

「どうしたの？」

夫は当惑したように、ちよつと躊躇したがソツと私を抱いた。月に二、三度行われるそのように――。

だが、それは飽くまでもの靜かに、上品な営みだつた。夫には、あの野卑な男の、十分の欲望も力もない――。

スヤスヤと眠つて仕舞つた夫の傍で、私は一人相撲に終つて、切なく身もたえする軀を

もて余しながら、あの男の裸体を思い浮べていた。そして、あの男の思いのままに責められながら、呻き声をあげる二人の女に、云いようのない羨望を感じているのだつた。

私はそれから、崖下の家に就いて、出入りの者や、近所の噂を熱心に聞き出した。あの男は屋根職人と云うことだつた。崖下にボツンと一軒だけ離れているし、勿論崖上のお邸とはつき合ひもなく、何となく気味の悪い家として、敬遠されているらしかつた。

しかし、私を驚かせたのは、あの家の女二人が、実の姉妹だと云うことだつた。そう云えば、確かに二人は似ていたし、若い方が、

「姉さん！」

と、呼んだのを聞いたような氣もする。

実の姉妹と、男一人――。

「まるで、獣だわ……」

と、私は呟いたが、やはり、夜になると、あの崖下を覗くのは止められなかつた。

その家の座敷は、崖の上の、私の庭からだけしか見えなかつたから。暗く人氣のない庭の木立に安心しているのだらう。彼等は実に奔放だつた。

男が鞭をふりあげる度に、私は自分が打たれるような錯覺を感じながら、奇妙な戰慄を



感じるのだった。毎夜毎夜、こうして私は崖の上の木かげで、不思議な世界のトリコになつていた。

その頃、私は買物に出て、あの男が自転車に乗つて疾走してくるのを見た。私は棒立ちになつたが、男は無表情に走り去つた。

その頑丈な後姿をみつめながら、私は、

「一度でいい、あの男に、力の限りブタれてみたい——」

と、思つてゐる自分に気づいた。

棒しほり

もう真夏になつていた。

或夜のこと、私は何時ものように寝巻姿のまま、例の場所に行つた。覗いてみると座敷には女二人が坐つてゐるだけで、男の姿はない。

どうしたのだらうと思ひながら、私が檣の木の下に佇んでゐると、傍の繁みがザワザワと動いた。アツと胸をつかれながら、二、三步後にさがろうとすると、眼の前にニューツと立ふさがつた男がいる。

「どうした奥さん、今更怖がるテはないだらう——」

あの男だ、と気がついた時には、もうム

ズと手首をつかまえられていた。

「な、なにをするの！」

「へッ、毎晩覗いときながら、そんなにシンシンすることないや。あんまり餓^いじそうだから、ワザワザ迎えに来てやつたのよ」

男は私の躰をしつかり抱くと、そのまま木立の間をくぐり抜け、庭境いの灌木の上を無造作に乗りこえて、ズルズルと崖をすべり下り始めるのだ。

「よしして！」

「なあに、遠慮することないや、見せるだけじゃ気の毒だから、お前にもたつぷり面白い目を見せてやらあ——」

裾もあらわに、浴衣を泥だらけにして、私は座敷の上に放り出された。

「オイ、脱ぐんだ、トットと裸になんな」

男は横柄に顎をシャクつたが、私はワナワナと震えるばかりだつた。

「フン、手のかかる奥さんだ」

男の手がやにわに胸にかかつて、伊達巻がズルズルとほどけると、ピシッと音がしてハッ口がさけ、浴衣が剥^はがれて仕舞つた。

二人の女が、ニヤニヤと、面白そうに見ている前に、半裸になつた私はドンと蹴倒された。

「アッ！」

叫んだ瞬間、激しい痛みと同時に背筋を戦慄に似た快感が走つた。

「とうとう、とうとう私はこの男に責められる！ なんとという力！ 虐められる！ 殺されるかもしれない！」

しかし、それが少しも怖ろしくはなかつた。「素人女は、音ばかり立てやがつて、仕様がねえ」

男はそんなことを呟きながら、布を持出すと、それを私の口の中に恐い力で押込んだ。それは異様な臭気が匂つていた。この部屋には、種々雑多の責め道具が用意されてある。それが、次々に、私の躰の上にこころみられた。

丁度棒しばりの踊りのように、三尺棒を肩に乗せられて、その両端に、私の手首は縛りつけられる。それと同じ棒が持出され、両足もじやけんに左右にひらかれて、くくりつけられる。

そして、両手両足を縛られたまま、私は天井からぶら下げられるのだ。男の手の縄が引つぱられる度に、私の躰は真直ぐに大の字になつたまま、キリキリと、コマのように廻つた。女たちはゲラゲラ笑いながら、下からそ

んな私を見上げている。全身を焼くような屈辱と奇妙な陶醉感——。

それから——ふと気がついてみると、三人の女がころがつているのを眺めながら、男は満足りたように一人酒を呑んでいるのだ。

狂氣の女

泥のような眠りから覚めた時、私は自分の家の寢室にいた。たとえようもなく躰の節々が痛んで、暫くは起上る元氣もなかつた。ジツと横になつてしていると、悪夢のような、昨夜の出来事が思出されて、胸が騒いだ。

「どうしたの、元氣がないね？」

もう朝の着更えを済した夫が入つて来て、声をかけると、私は思わず布団のかげに顔をかくした。

「躰の具合が悪いのなら、医者を呼ぼうか？」

「いいの！ 黙つて放つておいて頂だい！」

私は我にもなく激しく、ヒステリックに叫んで仕舞つた。

夫は私の見暮に、吃驚したようだつたが、

「じゃ、今日は静かに寝てなさい」

と穏かに声をかけて、大学に出かけて行つた。

優しい、親切な夫——。私はこの夫を、遂

に裏切つて仕舞つたのだ。

しかし、私のこの我儘に對し、叱り飛ばし時には腕力を振うような夫だつたら——。私は躰の痛みと、夫に對する良心の苛責に苦しみながら、この一日を悶々と過した。

だが、私は一体何と云う女だろう——。その夜、再び何者かにひかれるように、フラフラと、崖下の家に来て仕舞つたのだ。

男は当り前だという顔でニヤリと笑つた。

そして、昨夜と同じ狂態が、一人の男と、三人の女との間に繰返えされたのだ。二人の女は、別段闖入者の私に對して敵意も示めさなかつた。つまり今は、男の喜びと満足が、私達女三人の喜びでもあつたのだ。

晝はお邸の教授夫人。夜はその女が、奇妙な獸の一匹にすぎない。晝間の、どんなにきびしい理性も自戒も、夜の私をセーブすることは出来なかつた。こうして、恐しい私の二重生活が始つた。

すつかり無口になつた私を心配して、夫は研究も手につかなくなつたらしく、夜はなるべく私の傍で、相手をしてくれるようになった。それが一層私をイライラさせるのだ。

何も知らない、氣の毒な夫——。

「神経衰弱かもしれないね。暫く二人で、温

泉にでも行こうか？」

「嫌！ 私、何処にも行かない！」

今頃はもう、あの崖下で、何時もの饗宴が始つてゐる頃だと思つと、私は居ても立つてもいられぬ焦燥を感じて、氣が狂いそうになつてくるのだ。

「あなた！ 救けて！」

「なにを云つてゐるんだ君は——。へんだよ。神経が病的になつてゐる。やつぱり、医者に見て貰つた方がいい」

こんな夜が、十日ばかり続いた。夫は私の躰を案じて、晝は婆やをつけ、夜は自分でつきつきの状態だつた。だから、私は崖の傍に、近づくことさえ出来ないのだ。

夜になると、私はイライラと泣き、亢奮しては夫を当惑させた。夫がいたわつて呉れる程、私の神経はイライラ立つばかりだつた。

あの喜びを失つて、十二日目の夜のこと、床に入つてゐた私は、ふと、あの鋭い鞭の音を聞いたと思つた。そのまま、私はガバツと起き上つた。

「夏枝！ 何処に行くんだ！」

その夫の手をふり拂つて、私は跣足のまま夜の庭に飛び下りて、仕舞つてゐた。

夫は、私が氣が狂つたと思つたらしい。事

実、私はもう狂人同様だつた。思慮も分別も忘れ、ただ一つのことだけを目ざして、心も躰も、まつしぐらに駆けてゐた。

夫の呼声を後に聞きながら、私は崖を転がり下りた。喘ぎながら、男の傍にかけよつた。此処にだけ、私の生きる世界があつた。

驚愕の眼を見張りながら、崖下に近づいて来た夫を意識しながら——。

「夏枝！ おまえは……」

しかし、男は何時もと変わらず、ニヤリと笑つと、その手の中で鞭が鳴つた。

それから、そのまゝ、私はもう崖の上の家には戻らなかつた。物質的には何不自由もない、教授夫人のプライドでさえ、私を夫の許に呼び戻すことは出来なかつた。

夫との生活はたしかに満ち足りてゐた。たつた一つのものを除いては、——そしてその一つのもののゝ魅力が、どれ程大きな比重をもつて、私を引きずつてゐることであらう。

あれからすぐに、傷心の夫は、家を売り拂つて、何処かに引越して行つた。こうしてノーマルな社会から、私は自から逸脱して仕舞つたのだ。それを悔いてはいないと云つたら、人々は私を嘲うだろうか？

艶 具 餘 談



(性風俗研究家)

中 野 榮 三

こんなものは天下泰平の時代にだけ流行するのかもしれない。なかなかなさうでない。かつて第一次欧州大戦のときに出来た「貞操保護器」というのは独乙の出征軍人によつて發明されたもので、夫が出征中でも留守居の妻は他に異性の相手を求める要がないように、家には夫がちゃんとその代用を残して行くといつた仕組のものであつた。つまりそれは活きた人間ではなくて、その方の代用をさせるものであつたから、我国で元祿時代に云つていた所謂「御用のもの」というわけである。

そう云えば中世紀に欧州で盛んに行われたという「ヴェヌスバンド」つまり貞操帶も、彼の十字軍に従つて遠征した兵士が、妻に帶びさせて出掛けたものだつた。尤もこれは秘具と云つても少々目的が違ふものだが、兎に角これは単なる玩弄物ばかりではない。

「胴人形」といつて空氣枕式にふくらませると女になる珍具が、昔から船員などの間に用いられたというが、それと同様な意味で或る変り者の老人は愛妻に先立たれた悲しみの余り、亡妻その儘の姿を人形師に製らせ、美しい丘には春草まで植えて、妻ありし日を忘れ難く、人形と共に寝起きしたという話もある。古い物語で『昨日波今日能物語』だつたか

には、京へ上る途中、畑の瓜で女のことを思い出した武士のことがある。そして遂に之れを切つて念をはらしたと云い、歸りに同じ場所を通り掛つたところが、此の瓜を喰つた娘があつて思いがけない問題を起したとの後日物語もあるのだが、兎に角、さきの胴人形から斯うした部品の珍具となり、それにも段々の新式が考え出されている。戦前には男と女のをゴムで作つた箱入のものを売り歩いてゐたのに出会つたことがあるが、頗る巧妙に出来ていて恰も模型品のようなつた。

その後既に十数年を経たわけだが、その間此の方面にも幾多の変遷があり、依然として一部には行われているようである。そこでその道の専門家に聞いて見た。

○
「こんなものは今でも使われているんですかね」

「マア買いに来る人があるんですから、やっぱり何にかに使うんでしょう。それに器具には自分だけで単独で用いるのと相手があつて二人で使うのがありますからね、それによつて違ふわけですよ」

「近頃の新形というのも、いろいろ出来てる

でしようネ」

「それはいろいろありますネ、我々のところへは、そうした関係のことで相談に来るわけです。別に器具を売るといふのではないのです。勿論所謂性具店というのがあるにはありますがネ」

「相談もそうでしょうが、器具を買う者は何か斯うバツが悪いものでしょう、それにも商売の方法があるものでしょうネ。昔の話によく云われるように、張形屋へ女客がやつて来ると、先づ思い切つて大形のものを出して見せる、すると先方では何んぼ何んでもそんなのでは、と云つて買い易いけれども、若しももつと大形をというのは云い難い、その辺が商売の上手下手になるといいますネ、この話なんか或は学者が考へついた逸話かも知れませんがネ」

「多少その傾向は確かにありましよう。だから昭和の初め頃の性具店では、手だけ見えるような小さい窓口で売つていました。顔が見えなければ、きまり悪くないというわけでしょう。そこへ行くと近頃の人たちは案外平気ですネ」

「それはどういうわけなんですか、図々しくなつたんでしょうか」

「イヤ、個人的になにも差支ないぢやないかという自由主義のつもりでしょう。それに今は公然と人口制限が認められているから制限上の必要品だというわけもあるし、或は制限する爲に一体慾望の調節はどうするかの問題もあります。だから一向平気だというよりも寧ろ真面目な問題なのです」

「なるほど、此の方面の考え方も随分進んで来たものですネ、然し享樂の方の器具はどうですか」

「それだつて、自由なわけですし、男女の人口差から云つても、またその他の社会事情から云つても、個人的な秘められた享樂まで干渉されるわけではないのでしょう。昔と違つて時には実際に必要な事情があるかも知れませんが、相手に逃げられて済ましては居られませんからネ」

「それもそうだ、逃げられたからつて誰も責任を持つては呉れないでしょうからネ、ところでなにか面白い話はありませんか」

「先日も年増の美人がやつて来ましてネ、ずゐきのことを聞くんです、一応説明して帰したら翌日は、相当の年配でデブプリ肥つた旦那らしい男を連れてまたやつて来ました。そして今度二人で説明を聞いて帰りましたヨ」

「女は妾かなんかですか、実際に使うつもりなんですかネ」

「そう云う女になると、やはり実用するんでしよう。何か変つたことはないかと思つたらしい」

「お互に余り遊び盡してしまつと、そんな風になるものですかね、他にも近頃変つたのがあるそうぢやないですか。スポイトのついたのなんか」

「あれは昔の助け舟といった器具でしてネ、長い管と其の先にゴムの球がついています。つまりポンプ仕掛けですね」

「ポンプ仕掛けとはユーモラスなものですネ、もつと奇抜なものはありませんか」

「昔のりんの輪とか、姫泣輪などは先に用い



たけれども、近頃のはゴム製で元の方に用いる。細工がしてあつて二人用という訳でせう」

「単独用の新製品もありますか」

「それはいろいろありますネ、業者は外国向けと云つてますが、七八寸のエポナイト製で電流が通じる。これは案外に外人がよく買つて行くそうです。妙な按摩器が出来たものです」

「然し何にも知らずに、いい加減な代用品を使うよりも危険は少いかも知れない」

「それやそうです、代用品なら随分あるけれども危険が多い」

「それよりも一層器具など使わずに済ませたいもんですね、実際に無駄なことだし、弊害だつてあるでしょう」

「従来からあるものなら危険性は少い。だが使わないで済ませるとなると、やつぱり他の方でいろいろな問題が出て来ますネ、以前には所謂新貞操帯とか処女帯などと云つて、此のバンドさへ用いていけば、凶漢に出合つても貞操が守れるというわけだったが、実は却つて合意的にこれを使つて、隔絶さへしてあつたら心配はないと云うし、直接に血のつながりがないから、それきりで赤の他人だとかクリニング処女と大差ないような考え方はど



うかと思う。尤も最近では実用しても平氣でいるのが多くなつたから、此の面での考え方は我々にはもう判らなくなつて来ましたヨ」

「そうかと思うと、まるでその方面の知識がなくて、その結果はどうなるか知らない者もあるとか、困つたことだ」

「男にだつて案外智識を持たない者が多いそうだ、殊に戦後の若い者には器具どころか感覚がないとさえ云われる」

「そう云えば女などでも、服装こそ派手にして、何か求めているようだけれども、そのくせ表情や態度には少しも女らしい艶情が認められないね」

「一寸話が違ふが、かつて囚人がコッペパンにも異状な魅力を感じて、それを喰うよりも弄んでしまふ、との話を聞いたことがあります、娑婆から隔離されて長い間独房になど入れられていると、その位に気が変になるのも無理はないと思いますネ」

「そう云う思いやりでもあるまいが、私の知

つてるパン屋では、コッペパンには斜に筋を入れてます、あれなんかよくやかましく云われないもんですネ。そんな囚人などだとパンに限らず、カーテンでも何んでも恋しがるそうぢやないですか。殊に匂いに対しては最も鋭敏だとか言いますね。」

「話が十分横道にそれたようだが、兎に角余りやかましく云つて禁慾させると、却つて異常性になるか、不感症になる、どちらも困つたことだし、危険性も生じる。そこへ行くと昔の珍具なんて極めてユーモラスなものだつたと云えるでしょう」

「秘薬の黒焼なんか殊にそんな気がする」

○

こうした業者は今も猶存続しているらしいが、新製品のカタログなどはないのかと云つたら、ひそかに通信販売をやっているのはあるらしいとの話だつた。しかしそのカタログは遂に手に入れることは出来なかつた。

限定版につき速刻御申込を乞う

凄艶女体拷問秘画集

艶麗・爛熟に酔いしれた江戸に、くりひろげられた凄艶女体絵巻――。

苦痛にもたえる雪肌、悦虐のしもとは飛ぶ、縄目はギリ／＼とふくよかな素肌にくい込んで行く。裾もあらわに羞恥と悦楽の境を彷徨う女体のあえぎ、紅唇にまつわりつく乱れ髪は何を叫ばせ、何を訴えさせようとするのか、悦虐の極致に放心した瞳に映るものは何か？五十余年の彩管生活を一貫風俗画に賭けた不世出の名人伊藤晴雨先生が後世に残す愛憎絵巻の傑作秘画集

手梳和紙台紙付豪華極彩色特型帙入
限定会員頒布版
第一集（五枚一組）
会員 価五百圓
頒布

萬天下の愛好者諸兄の御希望によつて秘畫集の刊行を斷行致すことになりました。

從來のこの種のものとは全く趣を異にした良心的限定版です。限定部數以外は絶對入手出来ません、それ丈に嚴選又嚴選、傑作のみの秘畫集です。

速刻御申込み下さい。

第二集、第三集と素晴らしい、傑作秘畫集を刊行致します。御期待下さいませ。未發表の第二集第三集にも豫約御申込の方は優先御送本致します。畫集名發表の際御氣に召さぬ折は豫約破棄されても結構です。

（情實關係の御申込でも本畫集に限り特別扱は一切致し兼ねますから御諒承下さい。）

☆ 會員募集 ☆

通信 風俗 草紙

愛好者同志、會員同志の相互通信をほしいままに出来るのがこの通信です。そして又、本誌には、一寸はばかられるいろいろなことが、ざつとばらんに發表出来るのもこの通信です。至急會員になつて頂いてお互いに、思いのままを、何ものにもせいでちゆうされたいおつき合いをいたしましょう。言うまでもなくこの通信の會員には素晴らしい特点があります。百聞は一見にしかずとか、入会御申し込み下さい決して期待外れはありません。一ヶ月会費は五十圓です。

申込所

東京都千代田区神田
神保町二ノ三十四

日本特集出版社

のぞきの悦楽

—ある女のモノローグ—

最上京子

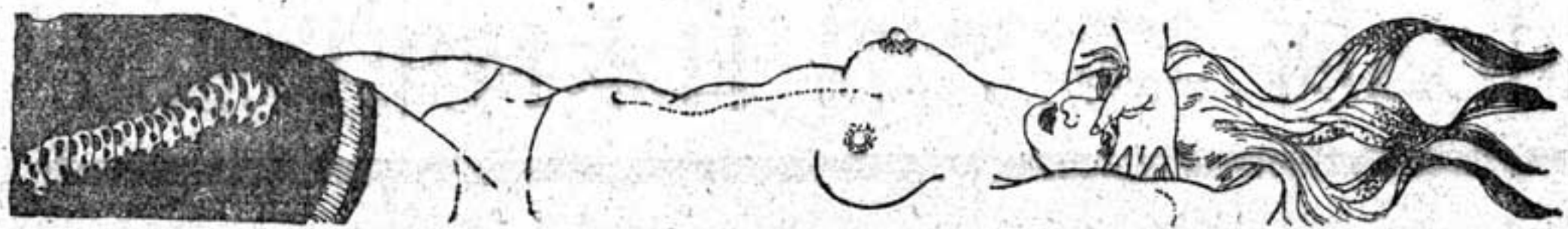
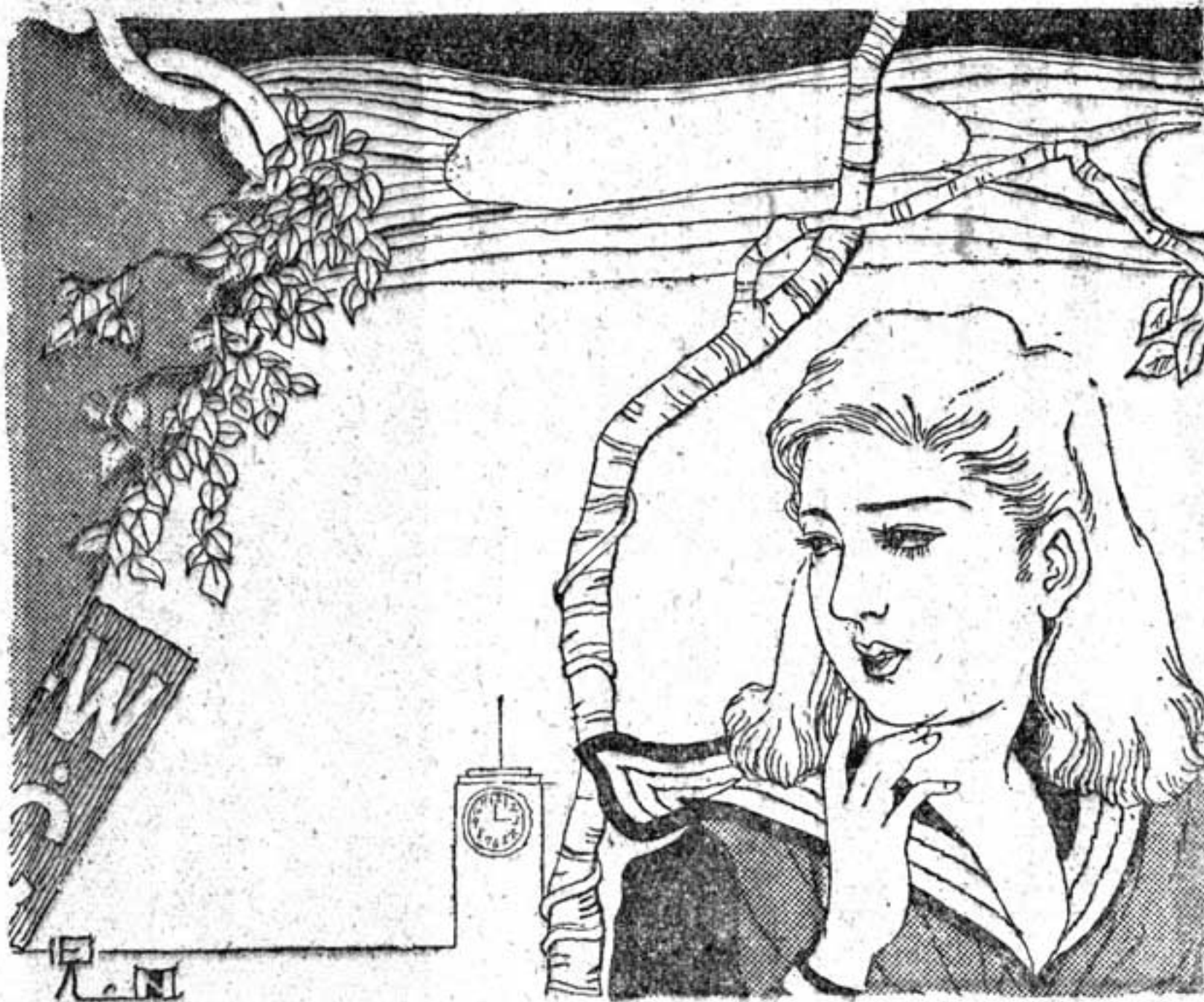
(A) 幼時の記憶

私の異常な性癖を赤裸々に告白したら、性心理学の大家たちは、私に対して簡単にレッテルを貼るだろう。その名は女性窃視症——。

しかし、この窃視症という、干からびた学門用語の実体がどのような亢奮をもたらすものであるか、これを知る人は少いのだ。

だから、私はこのような、恥ずべき奇妙な性癖の持主であることを、悔いてはいない。いや、実は私は、この性癖を、異常とも、恥ずべき、とも思っていないのである。反対にこの窃視による悦楽によつてのみ、喜びを知り、生甲斐を感じると云つたら、世間の人々は嘲うだろうか？——、そしてそのノーマルな人々の嘲笑の前に、私はあの魂きはまるような感情を、どのように説明したらいいのであろう——。

私が始めて、男女の肉体の相違を知つたのは、七歳の夏だった。母と姉の、女三人の家庭に育つた私は、急に自分と全然異つた異性の肉体の一部を見て、実に驚いて仕舞つた。遊びに来ていた近所の男の子が、庭木に向つて、何気なく放尿



を始めたのである。

私と同年のその男の子は、実に元気よく、誇らし気に放尿するのである。それがまったく立派で勇しく見えた。私は感嘆して、無邪気に見惚れて仕舞った。私の異常な性癖は、この時から始つたのかもしれない。

幼児のことだから、その驚きは永くは続かなかつた。しかしその時の印象は私の脳裡に強く刻みつけられて仕舞つたのである。それが芽を出し始めたのは、十五歳で初潮を迎えた後のことである。

忘れもしない、女学校三年の秋、運動会が済んだ後のある日のこと、学校の便所に入つた私は、その壁に書かれた生々しい落書を見て打たれたように立すくんだ。

それは例の、何処の便所でも見られるような、卑猥な落書だつたが、私に凄しいショックを与えた。確に、運動会の時に外部から来校した男の仕業に違ひなかつた。

しかし、その時の私は、そんなことを考える余裕はなかつた。女ばかりの家庭に育つた私には、余りにも強い刺激だつたのだ。それまで、すっかり忘れていた、幼時の記憶も甦えつて来た。

見事なもの、立派なものに見惚れた、あの時の印象を思い浮べながら、私は便所の中で、用を足すのも忘れて、この落書きに見惚れた。

私は休み時間の度に、あの落書きのある便所に入つた。それに見惚れていると、始業の鐘が鳴つたのも気がつかないのである。

その裡に、誰かの手によつて、その落書は消されて仕舞つた。私はひどく失望した。図を見ることによつて、未知のものに憧れていた私の、唯一の楽しみが失はれたのである。私はそのことにのみ心を奪はれていたから、或る日のこと友達に思はずそのことを云つてしまつた。

「御不浄にヘンな落書があつたわね？」

「そう、嫌だわねえ——」

友達は露骨に眉をしかめて、

「どうしてあんなこと書くのかしら、いやらしいわねえ、公衆便所のなんか、とてもひどいわ」

私は、ああそうなのかと、気付いて、飛立つ思ひだつた。

公衆便所！ どうしてそれに気が付かなかつたのだろう、

そう思うともう我慢が出来ず、私はその日の学校の帰途、カバンを持つたまま、街に出掛けた。

そして、私はその日、グツタリと疲れて家に帰つた。何と

云う強烈な刺激！ 公衆便所、駅の便所、映画館、その他、

求めるものは何処にでもあつた。

私は馬鹿のようにさまざまの落書を見て歩いた。

しかし、そのうちに私は、図では満足出来なくなつてい

た。なんとかして、男性の、逞しい肌を見たいと思ひ始めたのである。しかし、これは勿論困難だつた。私ももう一人前の娘になつていたから、男性の裸体から一切遮断されて仕舞つて居た。

(B) 恍惚の瞬間

しかし、そのうちに私は、図では満足出来なくなつていた。なんとかして、男性の、逞しい肌を見たいと思ひ始めたのである。しかし、これは勿論困難だつた。私ももう一人前の娘になつていたから、男性の裸体から一切遮断されて仕舞つて居た。



私はこの頃、可笑しい程、焦っていた。

ところが、家の風呂が壊れて、暫く街の洗湯に出掛けることになったのである。洗湯の出入りに、番台越しにチラリと覗く男湯の、脱衣場の光景は、どれ程私を喜ばせてくれたことであろうか――。

湯上りの、隆々とした筋骨の、赤裸々な異性の肉体――。

洗湯に出かける前から、私は亢奮に胸を躍らせたし、入浴中も、隣りの男湯の気配に耳をすましては、裸体の男性が大勢入湯している光景を臉に描いた。男子脱衣場を一瞥する時の快感は、何者にもたとえようがなかった。

しかし、それもほんの一瞬間であることがもの足りなかった。私の欲望は押え切れぬ程強く、私は殊更に番台に坐っている湯屋の小母さんに、なれなれしく話かけたり、さまざまに智恵を絞った。

ところがその夏のこと、私は始めて全裸の男性を、心ゆくまで眺める機会を持ったのである。その時の私の亢奮と喜びを、人々は想像出来るであろうか？――

夏休みになつて直ぐ十日ばかり、私は鎌倉の御友達の家に滞在した。存分に泳いで、夏の生活を楽しむ計画だったが、何しろ半裸体の異性がゴロゴロしている海岸だから、私の毎日は実に輝かしいものだった。

ある日のこと、友達と一緒に海岸に出掛けた私は、途中で忘れ物を想出し、一人で引返した。部屋に入つて忘れ物を取り出そうとしていると、誰か隣室に入つて来た気配に、私は何気なく振返えつた。

その時の光景を私は一生忘れないだろう。私の友達の兄にあたる大学生が、これから泳ぎにゆく支度をするらしく、さつさとシャツ、パンツまで脱いで、裸体になつて仕舞うではないか！

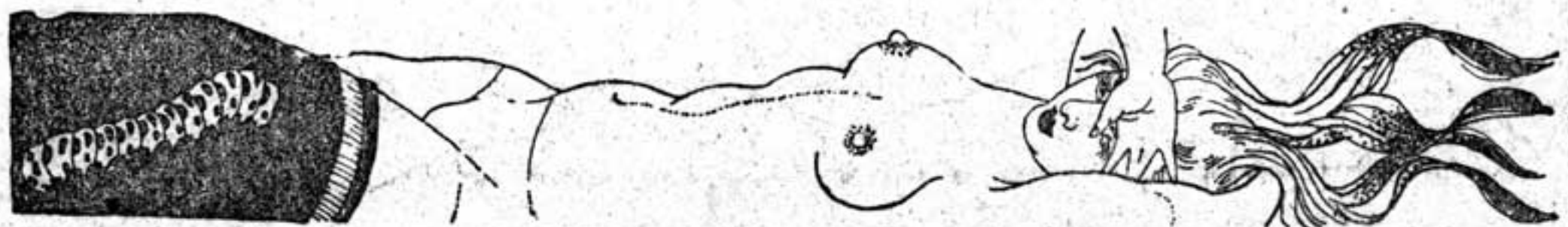
家中留守だと信じている彼は、何の躊躇もなく、一糸纏はぬ姿になつて、すぐには水泳着もつけず、そのまま体操をしたり、部屋の中を歩き廻つたりしている。簾戸のかけからその光景を盗見ながら、私はワナワナと震えてくるのだった。

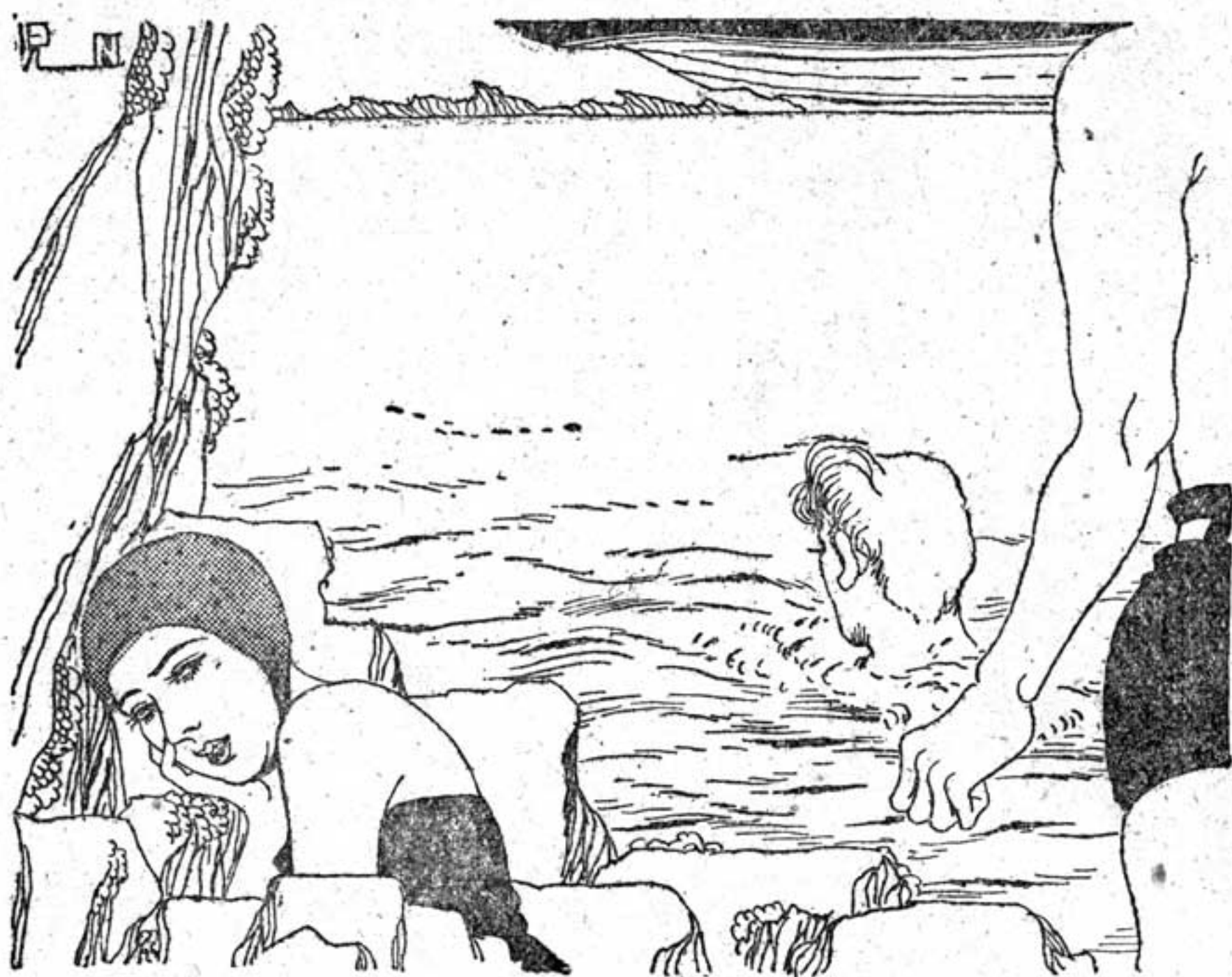
大学のボート部で活躍している彼の肉体の、何と云う若々しい、力のみなぎつた見事さだろう！ 私は恍惚として我を忘れ、この時生れて始めての、激しい感情の亢ぶりを覚えた。

それはまつたく強烈な、生々しい亢奮だった。私はその日一日を、馬鹿のように安心して過して仕舞つた。何も知らぬ彼を見るのが、ひどく恥かしく、その時の恍惚とした感情は永く尾をひいて残つた。

こんな状態が続いて、私が二十二歳の時に、私の家の環境はグツと変化した。私の姉が養子を迎えたのである。義兄もスポーツマンで、ひどく長身であつた。幼い頃から男気のなかつた家に、こんな頑健な体格の義兄を迎えたのだから、私の気持は大きく動揺した。

何しろ同じ家での生活だから、着更えをしたり、入浴したり、チラチラと、義兄の体を見る機会が多い。さすがに処女の私に対しては、全裸を見せることはなかつたが、廊下の通りすがりに、姉たちの部屋をチラと覗く時、寝着に着更える義兄の姿などは、私を悩まさずには居なかつたのだ。





このような異常な性癖を持つては居ても、私はまだ完全な処女だったから、夫婦の性生活がどのようなものか、漠然と想像するだけだった。しかし、姉夫婦と同居しているうちに夫婦の生活とは、どのようなものであらう——、と云う思念

に、ひどくとらわれるようになった。

私はさまざまに空想して気をまぎらはせていたが、とうとうそれだけでは自分を押えることが出来なくなつて仕舞つた。見たい、一目だけでもいいから覗いて見たい、と云う執念に憑かれて、神経衰弱気味にさえたつたのである。

私の部屋は二階、母は離れで、姉夫婦の寝室は丁度階段の横の部屋であつた。つまり、階段の中途にうづくまると、其処が丁度姉達の部屋の障子の上部に当るわけである。

或る日の夕方、姉が買物に出掛けた後で、私はその障子にある細工を加えた。それは寝室から見れば普通と変りがないが、上段の一マスだけはピンで止めてあり、裏側、つまり階段の方からは、そつとめくつて覗き込めるように工夫してあつたのである。

夜が来るのを、私はどんなに待つたことだらう！ その期待の爲に、私は夕飯さえ喉を通らなかつた程であつた。運よくと云うのか、その夜は風雨が激しく、階段をおりる足音も寝室の姉夫婦には悟られなかつた。私は亢奮にふるえる手でソツと障子の紙をめくつて、新婚の夫婦の寝室を見下した。寝室用の暗い豆電気の灯の下で、繰りひろげられた光景。

この光景は、私の異常な性癖、性生活の疑問、その他を全部満足させてくれた。私はあまりの亢奮に、実際に息がつまる程の思ひだつた。

(C) 窃視の極地

しかし、私の病的な窃視が度重なると、自然に、姉夫婦に



も悟られぬ筈はなかつた。この爲に私は家族の者と感情的に
気まずくなつて、とうとう家出同様に家を出て仕舞つたので
ある。

それからは捨鉢な気分も手伝つて、私の病癖はつるのばかり
であつた。始め何気なく借りた部屋の隣室に、中年夫婦が
住んでいたから、早速私の窃視の対象になつた。この夫婦の
性生活を見飽きると、私は次の間借りの部屋を捜し始めるの
である。

なるべく襖一重、或は板壁越しで、しかも夫婦者がその隣
室にいる、と云うことが、私の間借りの絶対条件なのであつ
た。アパートでも間借りでも、窃視しようと思えば、工夫は
いくらでもあつた。

欄間からの隙見、又は壁や襖への覗きの工夫に私は全力を
あげた。そして、そんな苦心の末に、新しい人達の、新しい
姿態を覗くことは、何と云う素晴らしい歡喜であつたことだろ
う！

そうした流転の間に、私も人並に男性と関係を持つようにな
つた。始めの間こそ、夫の肉体を何の遠慮もなく眺める
ことが出来るのは楽しかつたが、後には余り魅力を感じなくな
つて仕舞つた。

どういうものか、私は相手に知られず、こつそり覗くところ
に、無上の快感を覚えるようになっていた。だから、異常
な病癖の割には、夫に喜びを見出せなかつたのである。

だから、夫との間でも、私は過去の窃視のある瞬間を思ひ
描かねばならなかつた。何時でも、何の心配もなく接するこ

との出来る夫の肉体より、骨折つて窃視する、隣室の学生の
裸体の方が、私には強く訴えるようになった。

このような不思議な私の性心理から、私は遂にはこの夫と
も別れるようになって仕舞つた。どう云うものか、自分自身
の性生活そのものには、それ程エキスタシーを感じなかつた
のである。

こうして私は、窃視の喜びを味う爲に、転々として居を移
り、職業を代えては流転をつづけて来た。そんな苦勞もみん
な、この異常な性癖の爲だが、それでも私はこんな奇妙な性
癖を悔いてはいないのである。

現在はどうとう待合の仲居にまで転落して仕舞つた。他人
には哀れだと思はれるかもしれないが、実は私にとつて、こ
れ程結構な職業はないと思つてゐる。収入にも不足はない
し、何より素晴らしいことは、毎夜、幾組ものお客の姿態を窃
視することが出来る。さまざまの人々の、さまざまの姿態
を、盗み見ながら、私はその当人たちと同様の、或はそれ以上
の感情の起伏を味はつてゐるのである。

又、数あるお客の中には変つた好みの人たちもあつて、私
と反対の露出症の客にぶつかつて、面喰うこともあつた。

仲居や芸妓に対して、自分の肉体を不必要に露出して見せ
るのである。そんな客は蛇の道は蛇で、すぐピンと来るから
その客が気に入るように仕向ければ、ひどく喜ばれるのであ
る。しかし、私のような性癖の者の何よりの悦楽は、健康な
異性の肉体をかい間見ることである。

私は自分自身のこの異常性慾を、決して怨んではない。





特集・現代風俗の病癥 犯罪篇

戦後の性犯罪にみる病癥

戦後の性犯罪の大きな特徴は、單なる情癡によるケースが減つて、異常な變質者による犯行が大部分を占めていることである

足尾喬三



★

戦時中の緊迫感から解放された終戦後には反動的に犯罪の發生件数が激増した。これは一応止むを得ない現象かもしれないが、中でも性犯罪は急カーブの激増をみせて、心あるものをして、真に眼を蔽わしめるの狀態であつた。

自由主義の履き違えで、性道德は低下して野放し状態になるし、復員、引揚と、狭い国土の中にはワヤ／＼と人間が増えるばかり。その上に戦争による破壊で何一つ娛樂らしい

ものはないし、食糧は極めて乏しいと来ている。

これでは性犯罪を挑発する條件が揃い過ぎている。果然、何一つ慰めのない国民大衆のウツプンのハケ口として、性醜廢の風潮がまき起り、幾多の無慘な性犯罪が惹起されたことは、まだ記憶に新しい。

昔から、戦争と性犯罪はつきものではあるが、戦争による被害が大きかつただけに、今次の戦後に於ける性犯罪の股振ぶりは、今まで例がない。勿論戦時中に於ても、この種の犯罪がなかつたわけではないが、国民の士氣

に影響するものとして、センセーショナルには扱われなかつた。

終戦の二十年は、さすがに敗戦の打撃による疾勞困憊の爲か、犯罪件数は少いが、それが二十一年から逐次上昇して、二十三年には前年の二倍強という、有難くない躍進ぶりを示している。二十三年から二十五年へかけての三年間に於ける、性犯罪の数字と記録は、さながらその当時の世相を裏書していると云えよう。

しかも、全般的な犯罪は減少して来ても、ひとり性犯罪だけは増加する一方であつた。



これは衣食住にはやゝ満たされて来た人心がパン／＼其他による社会の風潮に刺戟されていよく性的放縱に墮していったことを示している。

たとえば、性犯罪と云えばまづ強姦があげられるが、強姦だけ見ても、二十七年には二十一年の約六倍という数字があげられる。それにその七〇%が二十五歳未満の青少年であることは慄然とさせられる問題である。

て述べてみよう。

変態性慾者による性犯罪が多いことは当然かもしれないが、統計によると、好奇心、出来心について、全体の約、十七%から二十%をしめている。これ等の異常病癡は、単に性的な面に於てのみ現われる場合が多く、普通は何等常人と変りなく、社会に滲透して生活しているから、その病癡による被害は意外に傷ましい結果となつて現われる。

これ等の青少年の犯罪動機は、好奇心、又は出来心と云うのが圧倒的に多く、次に異常性癡、飲酒によるいたづら痴情と云つた順になる。好奇心、出来心を養つたものは、巷に氾濫したエログロ雑誌や家庭の環境であろう。

このように、幾多の性犯罪が我々の身近に於て頻発したが、これ等を単に、戦後の性頽廢の爲めと片付けるには、あまりにも龐大な数字である。どのようにしてこれ等の性犯罪が成立したか、その犯罪に現われた異常病癡について

この種の犯罪には、サチズム、マゾヒズムによる殺傷。通りすがりの異性に負傷させたり、又その衣服を切りとつたり汚染したりする処女刺衝者。屍体に性行爲を行う屍姦症。異性を殺害又は身体の一部を損壞する殺人淫乱症、幼女のみを姦する児姦症と云つた種類があげられる。

無心の幼女を狙う淫魔

世間にはしばしば、幼女に対して猥褻行爲又は性行爲を行う者がいる。大体に於て中年の男に多いが、稀れには青少年に於ても現われることがある。

その対象も初潮前後の少女から、三歳の童女まであり、このような幼女に性行爲を行う場合は、勿論局所を損傷し、遂には死に至らしめる場合が多いのである。

これは対象が一人前の女性ではなく、玩えない幼女であるだけに、世間はその罪を憎むが、犯人は概して内気で小心な、非社交的な性格である。開放的な性格の者には、こうした異常病癡は認められない。

概して子供のいない、初老期の男が多いが若くしてこのような児姦病癡のある者は、大人の女性に対しては、無意識に劣等感を抱い

特集・現代風俗の病癡

ているものである。

昭昭二十三年の夏、都下西多摩郡に於てキャンプ中の、杉並区、某小学校六年の女生徒が、二十数名も、同校教官、武津孝郎(26)によつて犯された事件は、世の親たちを愕然とさせた。

これはキャンプ引卒の教官が犯人である爲に、一層世の噴激を買つたものだが、教育者の中にもこうした児姦症的病癡の者がいることは、実に恐しい事実である。

この武津の場合、病的な児姦症ではなく、性慾の旺盛な青年が、たま／＼キャンプと云う條件に女生徒と生活して、慾情を自制出来ず犯行に至つた、と見る向きもあるが、一人、二人ならばともかく、二十数人も犯したと云うことは、やはり武津にこうした病的な傾向があるを見るべきであらう。

この場合には大した損傷はなかつたようであるが、終戦直後の横浜で七歳の童女が山中に引き込まれ、全裸にされて犯された上、局部に針金を突き通し、顔面其他をナイフで抉られて殺された事件があつた。

犯人は被害者の隣家の、二十五歳

になる青年で、隣近所の人々からは、模範青年として讃められていたと云う。つね／＼この青年は、隣家の被害者を可愛がつていたと云うが、遂に死に至らしめるとは、大変な可愛がり方をしたものである。

少女姦の場合は、このように隣家とか、近所の顔見知りである場合が多く、二十三年にも鎌倉で、五歳の少女が、隣家の変質少年にもてあそばれた上、出刃庖丁で全身四十ヶ所も傷つけられて殺害された事件がある。

二十三年には例の有名なカナリヤ男が出現した。これは豊島区長崎町の教材製作社長で小久保と云う中年の男である。

「あちらにカナリヤがいるから、獲つてあげましょう。」

と、言葉巧に少女を林の中に連れ込んで無邪気な少女を犯したと云う。

このカナリヤ男の犯行は、多年に亘つて発覚せず、彼の犯した少女の数は、実に四百名に近いと云うから驚くではないか。

この他には少女を見ると慾情を抑えきれぬと云う、茨城県の農村の青年や、美少女ばかり十三名も毒牙にかけていた、文京区の司法保護委員をしていた、六十二歳の老人などがある。

このような少女姦の犯人は、無意識に性的弱少による劣等感を抱いているのだが、外見は至つて穏和な人格者である場合が多く、時々意外な事件が発生しては、世間を驚かせるのである。

殺人淫亂症の常習者

戦後に於ける殺人淫亂症は、かの小平義雄によつて代表される。もと／＼この殺人淫亂症は、加虐淫亂症から派生した、変態性慾現象であるが、彼の場合、易々と服従した女は暴行のみ行い、抵抗した者は絞殺している。

こうした犯人は、異常に性慾の旺盛な、若い年配の男に見る場合が多い。

小平の場合でもそうであるが、こうした淫亂症の犯罪は、機会がある度に、何度でも行う常習者が大部分である。しかも、本人は本能的に抑制出来ず行われるのであるから、犯罪として反省することは少い。

二十二年の九月、澁谷署の裏に草紐で絞殺された女の死体が発見されて、センセーショナルに報道されたが、これが小平につぐ淫魔として巷間の話題をさらつた、辻勝次の強姦殺人事件の端緒であつた。

彼の毒牙にかゝつた女性には、四十数名と云

われるが、彼には他に強盗、詐欺、恐喝などの余罪もあつて、騒がれたものである。

この頃はまた食糧の買出しが多く、この爲に人里離れた林の中や山の中で、数多くの婦女子が、淫魔の犠牲となるが多かつた。

当時、買出しで米や野菜を背負つた女性がニセ警官の爲に、

「調べる必要がある」

と、人影ない場所に連行されて、暴行、傷害を蒙つた事件も少くない。

二十六年七月には夜の女が殺されて、話題を投げたが、これは前科のある高野一郎(31)で、異常な変態性慾者であつた。

上野の公園下で客引中の女に出会つて、台東区金杉町の女の宿に赴いたのだが、異常性愛が昂じて、女の腰紐で絞殺したのである。何も知らぬ女こそ哀れな話だつた。

印旛郡人妻事件

阿部定事件はも早や古典に属するが、戦時中にも名古屋の老菓子職人が、その情人の身体をバラ／＼に切り取つた事件がある。

異性の肉体を切り取るのは、このお定や菓子職人の場合のように、激しい煩悩

の末に、相手に対する愛着から犯す場合と、憎悪復讐の爲になされる場合がある。

愛憎両極端するわけだが、このように情人の体の一部を切除すると云うことは、やはり常人の出来ることではない。

二十三年の正月、東京の会社員の人妻が、千葉県印旛郡の山中で、局部を抉られて殺害された事件が発生した。これもやはり買出しに出て災難に会つたものである。

犯人は山芋堀りの越川栄助と云う、四十歳の土地の男であつたが、始めは「金を出せ」

と、脅迫して金を奪つたが、恐怖に震える女の様子に衿巻で絞めて仮死状態にして暴行を加えたのち、衣類までも剥いで、損傷を加えたものである。



強盗、暴行、殺人は珍しくないが、情痴でも、怨恨でもなく肉体に損傷を与えた事件は稀である。これは犯人がならず者で、村の女たちからも相手にされなかつた爲に、女性の肉体に対して憎悪を抱いていたものと見られてゐる。

二十三年には四国で、お定事件に類似の犯罪があつた。四十一歳の農村の人妻が、同村の若いツバメと情交中に、いきなりその肉体の一部を切断して仕舞つた。

男の方から別れ話が出た爲めに、女は家を出る時から刺身庖丁を持出したものと云うから、四十女の執念は恐い。

節片淫亂症

二十六年春頃から、横浜市に横行した、婦女子の臀部切り魔は、世人を驚かせたものである。何しろ被害者は数十人に達し、一時はパツタリと、女性の夜間外出が絶えた。

この犯人はこの年の十月になつて検挙されたが、中年の変態性慾者と思いきや、同市に電気商を営む、町内の人気者で、柳原和年と云う、二十四歳の青年であつた。彼はキリヤカミソリを持つて、後から婦女子を傷つけたが、又、用便中の女性を狙つて、便所の掃き

特集・現代風俗の病癖

出し口から、竹の柄にとりつけた鋭器で臀部を切りつけていたものである。

このような、異常性癖による犯罪に、アベック殺人事件がある。これは二十五年の東京の若人たちに、異常なセンチシオンをまき起したから、読者はまだ記憶に新しいであろう。犯人は一九歳の少年であつた。

こうした年少者の異常犯罪も珍しくはない。節片淫乱症の傾向のある犯罪として、新制中学二年生を窃盗容疑で調べたところ、ズロース其他、女性用品を数十点蒐集して、大人共を啞然とさせた事件があつた。

があつた。

このような節片淫乱症には、空想性の強いものが多い。

従つて神経質で内気な青少年に多く、特定の、愛人の持物を盗む場合と、ズロースや腰巻など、誰の物でも、手当たり次第に蒐集する場合がある。

同性愛の男たち

同性間の倒錯性慾者は案外多いが、その最もいまわしい現われは、



極く最近の、小岩の殺人事件である。これは男三人の三角関係であるが、被害者である白川某が、最も倒錯が甚しかつたと云われる。

この場合も、殺人の主な原因は一方の嫉妬であるが、男女間と同じく、嫉妬、独占慾が著しいから、戦後に於てもこうした種類の犯罪が少くない。

二十七年の一月に、長岡市に於て、十二歳になる美少年が麻縄で絞殺された事件があつた。場所は国鉄の専用風呂で、犯人はその風呂番であつたが、四十五歳になる醜男で、美少年を溺愛の揚句、少年の父が転任することになり、手放すに耐えず無理心中をはかつた

ものである。

又、新宿に於ける男娼殺しは、家出した少年が始めて夜の女(?)を買い、女とばかり思つていたところ、男娼であることを知り、持つていたナイフで殺害した。これは同性愛による犯罪とは意味が異なるが、非常に毛色の変つた事件で騒がれたものであつた。

三島由紀夫の「禁色」に見られるように、同性愛の社会が、現在の日本には実在していることは事実である。英国などに於ては、同性愛的行爲を、一つの犯罪として処罪しているが、わが国に於ては、刑法上の犯罪としては成立せず、単に風俗上取締ることになつて

愛讀者通信

突然お手紙を差上げる失礼をお許し下さいませ。どなたか私を救つて戴きたいのです。家庭や容姿に恵まれ切つていた私を一挙に絶望のどん底に突き落したあの終戦直前の大空襲、その夜以来私の左頬に焼きついた醜い傷跡。私は毎夜人一倍豊かな体を抱いて惱ましい夜を過しているのです。どなたかお友達になつて、心からのお便りで私を慰めて下さいませ。(横浜市櫻井真知子)

手記 持集

倒錯の夜

男女同性愛者の

歡びと嘆きと……

まえがき

同性愛は、今や、特殊なものではなくなりつつある。ある性心理学者は、全男性の三分の二以上がそどみあ（男色愛好者）であると言っているが、この一見アブノーマルな性的嗜好が、一種の流行となつ

て、性風俗の秘密な部分に大きな根を張りつつある。

一寸した盛り場なら、こうしたそどみあが集る酒場や喫茶店が、必ず一つや二つはある上に、こうした同好者だけを相手のパンフレットの領布や、駐留外人のなかに意外にそどみあが多いことなどが、こうした傾向にます

ます拍車を加えることゝなっている。

そどみあは戦後の一現象かも知れないが、女性の同性愛は昔も今も変わらず盛である。男性と違って、女性の場合は、彼女達の性愛感情の中に本質的に同性愛の粒子が宿命的に混り合っていると言えるだろう。



うーるにんぐの嘆き

女性的ソドミアは夜の底でいつも孤獨だ……

真下 光二

私は本年二十七歳の某銀行員です。

自分の性的傾向についても、三年ばかり前に専門医に相談した時には、

「まだ心理的にも肉体的にも少年期の名残りがあつて、異性愛へ移る機会がないのである

う。」

と云はれ、一時自分でもその気持になつて倒錯を克服しようと努力したこともあつたのです。

しかし、そんな悪掻きは、結局自分を苦し

めるだけでなんの効果もなく、かえつて後味の悪さを増すばかりで、本当に絶望的になつたものでした。

そんなこともあつて、今ではこのソドミニズムの泥沼に私は性根をすえて居直つた感じ

です。しかし、この形容にもまだ、虚飾が残っているようです。つまり私の自然な気持では、この世界を泥沼だとも、アブノーマルだとも思っていないと云うことです。

それどころが、世間の男女関係ほど、私には滑稽でナンセンスなものはありません。毎日の新聞に現はれる、情痴、心中事件などの記事は、勿論読みもしないが、その女の写真など眼に入ると、

「こんな、醜惡な女のために、生命や金を賭すなんて、なんと云う哀れな奴だろう」

と、呆れて仕舞うのがオチです。

同じソドミアといつても、異性もよいと云う者、女の美しさも判ると云うもの、ゼン／＼異性には関心ない者、又、異性に対して激しい憎惡を抱いてるものと、程度の差があつて、千差万別です。

私の場合は、女性と云うものは醜惡以外の何者でもなく、時に、たまらない憎惡を感じるのです。それは私がソドミニストの中でも、女性として相手方の男性に對する、いわゆるウールニング、受動的ソドミアであるため、当然、女性は敵になります。

私の銀行にも美貌だと云はれる女性が幾人もいますが、私は殆ど口を利くことも好みません。しかし、彼女たちの誰かが何かの拍子に、私の職場の同僚たちに、媚びるような態度や会話をする時、私は敏感に誰よりも早く気がつきます。嫉妬以上の、本能的な憎惡です。

以前はそれ程でもなかつたのですが、最近とはとてもそれがひどくなりました。しかし、それは私の場合、自然な現象とも云えます。つまり、ウールニングである私が求めるのは、その相手方たるペダラストですが、だん／＼それが求め憎くなるのです。

ペダラストは三十歳以上にもなると、大抵がいろ／＼な事情で結婚する場合が多く、諦めて普通の生活に戻ります。まあ、そう簡単には諦められないので、二重生活、つまり浮気をする人もありますが、そんな時でも、

「ワイフも可哀そうでねえ——」

と、云つたりしています。そして彼等が望むのは美少年乃至、二十五、六までの青年である場合が最も多いようです。

三十、四十を過ぎたウールニングの悲哀を

思うと、絶望的になります。しかし、私達はその先のこととは考えて居られません。まづ、今夜の満足が先決問題と云うことです。現在東京都内だけでも、ソドミアの数は、世間の常識を遙かに上廻っている筈ですが、どう云うものか、最近その数が増加する傾向にあるようです。しかし、御承知のように、ソドミの相手というものは、そう簡単に転がつているものではありません。しかも、私達のような、ウールニングの場合は尙更なのです。

だから、灯もし頃ともなると、街に佇み、さまよつて相手を捜し求めるのは、みんな私のような受動的ソドミアばかりなのです。まつたく、一口に性慾倒錯症と云つても、私たちは最も業の深いもの、と云えるかもしれません。

こう云うと、世間の人々は、私達を男娼、つまり、オカマと同一視されるかもしれませんが、私達はもつと本質的に純眞であり、殆どの場合金銭は介在しないのです。其處には何等不純なものはなく、本能的な献身と憧憬があるばかりです。





勿論、やみ難い性的衝動もありますが、精神的な渴き、寂しさの方が大きい場合もあります。だから全然肉體的接觸なしに、プラトニックな関係だけでも、充分満たされ、幸福を感じます。これが男娼と、私達のようなノンプロの場合の相違だと云えるかもしれません。

私は主に新宿にある某喫茶店に出かけますが、此處は仲間の溜り場です。二人づれで、ヒソヒソ囁き合っている傍で、ボツネンと一人コーヒーカップを前にしていることほど、味氣ないことはないのです。まったく死にたいほどの孤獨にとりつかれて、身も世もない思ひです。

そんな時に、
「どうした、一人かい？」

と、肩を叩かれて、前に喜ばせてくれたことのある相手などが、笑いながら立っていたりすると、可笑しいかもしれませんが、實際涙が出る程嬉しいのです。

又、私共の仲間では、それぞれ好みのタイプが決つていて、筋骨隆々とした野性的な人とか、同年輩の快活な人がいいとか、それ

と向き向きがあるのです。だから、自分の好みと、ピッタリ合った相手を得た時の嬉しさは、まったく天にも昇るような思いで夢中になります。

私はどう云うものか、年輩の落着いたインテリタイプの人を見ると、惚れ惚れするのです。抱かれないなあと思います。新宿の店に時々現われる初老の紳士が、私のぼんやり描いていた、理想の戀人の條件にピッタリしている方だつたのです。

三ヶ月ばかりは片想いで、毎晩一人で煩悶していたのですが、マスターの紹介で知合いになり、始めてホテルへ誘われた夜は、まったくこの夜が、永遠につづけばよいと思つたものです。すすり泣き、叫び出しそうになりました。

店では近藤さんと呼ばれていましたが、大變學識のある方で外國で暮されたこともあるらしく、身だしなみの良い、本當に氣持のいい紳士だつたのです。この道の経験も永い方らしく、私はいろいろの喜びを教えて頂いたわけです。

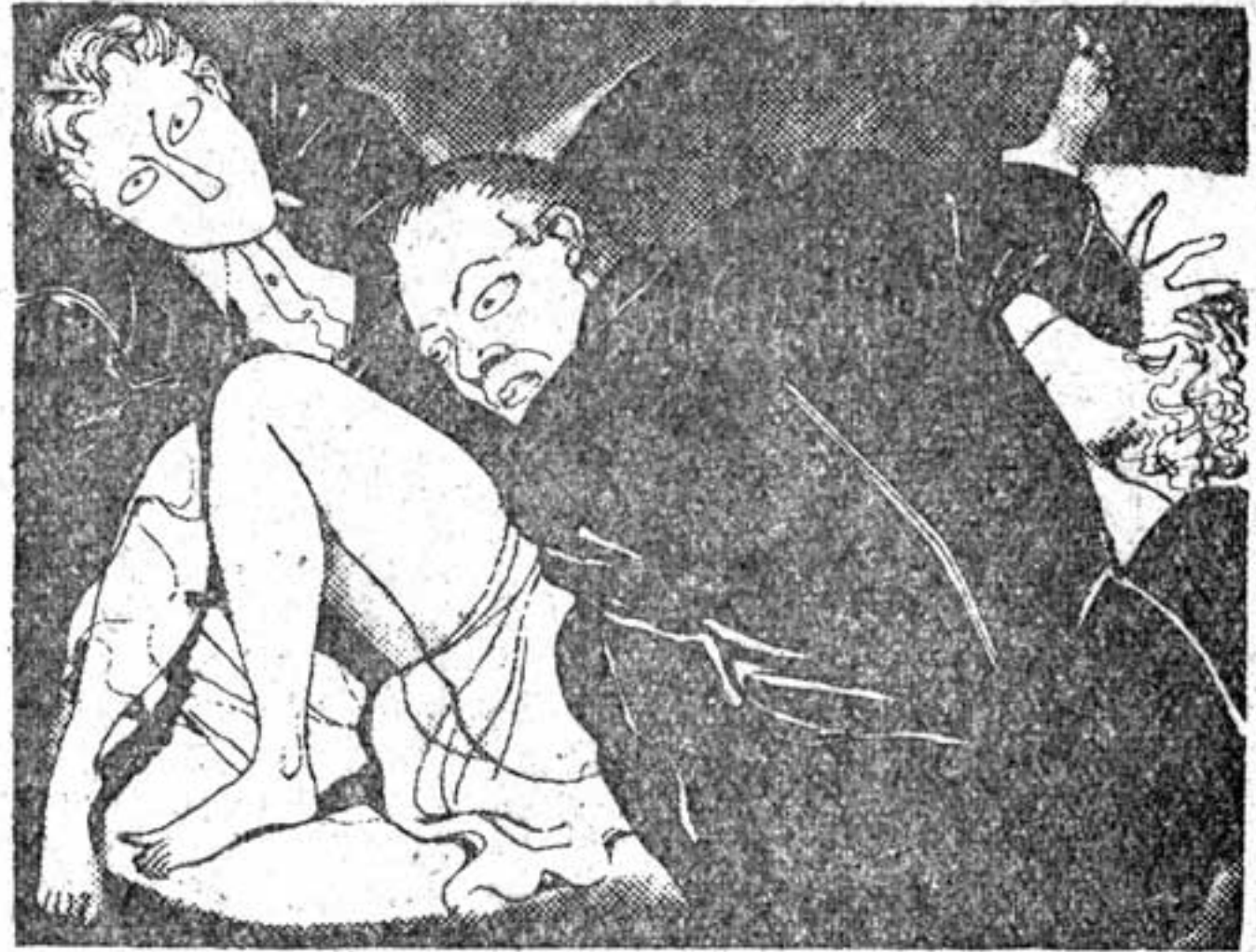
何分年輩の方だから、肉體的な關係は、月

に二三度に過ぎませんでした。私はそれで、充分満足していたのです。だから、この方と御交際していた九ヶ月ばかりの間は、私は全然他人とは交渉を持たず、戀人に貞操を守り通していました。

しかし、逢うのは、殆ど隔日に逢つていたのです。卓に向き合つて、音楽を聞きながら、ボツリボツリと話しているだけで、それがその頃の、無上の樂しみでした。戀人のちよつとした素振りや、彼の慾するものが察しられ、ケースを出したりをライターをつけたら、まったく、私も夢中だつたのです。

少し、アルコール分でも攝ると、向き合っているだけではもの足りなくなつて、ピッタリとよりそつてソファに坐つては、手をからませたり、ベージュしたり、皆に冷やかされるくらい、私はノボせたものです。彼の方は駄々子をあやすように、私を暖かく扱つてくれました。

この紳士は、知り合つてから十ヶ月足らずで、急病で亡くなつたのです。婆やが一人居るきりの、孤独な方でした。この時は私も本氣で後を追おうかと思つたものです。暫くは



神経衰弱気味で、まあ、戀人に死なれた娘さんそつくりの態でした。

それからもう、この人のようにすべてピタリする戀人には逢えません。始めは夢中になつても、永續きしないのです。これは、誰の罪でもないのでしょう。

私は何故、こうした負い目を感じなければ

ならぬ、性欲倒錯者になつたかに就いて述べれば（どうも話が前後しましたが）それは宿命と云うより外にはないのです。性科學者の言によると、ソドミアとなるのは、先天的に若干女性分子が多い體質の者が、幼少時、又は青少年時の境遇によつて性的に変質する、と説明されているのですが、これは思い當ることばかりです。

自分のアブノーマルな性癖を自覺したのは、中学の後期頃でした。その頃、姉が妊娠して流産したり、若い頃から寡婦だった母が、いろいろな心勞から、ひどいヒステリー症状にかかったりした事件があります。異性に對して失望し、嫌惡を抱き始める、無意識歪曲になつたのであろうかと思われます。しかし、今になつて、そんな原因をつきつめてみたところで仕方ありません。

ただ、同じ受動的ソドミアでも、巷のプロ男娼たちは朝から晩まで、服裝も、氣分的にも、すつかり女になり切つて居るのに反し、私の場合は、異性に嫌惡を感じ、同性同志の清潔な（と、私は感じるのですが）交りにのみ憧憬を感じる點が、異つて居るのです。

そのために、私はこれ等のプロ男娼を好みません。止むを得ぬ場合には、遊ぶこともありますが、その時も私の方が受動的であり、その交りは、私の方では幻想的な想像の裡に行われるわけです。

私は銀行員ですから、客に接する機会が多いのです。たまたま、同好の士が来行することがあると、それが見ず知らずの他人でも、ピンと感じるものがあります。この第六感先方でも同じらしく、私共は複雑な微笑を交し合うのです。又、ソドミアでなくとも、私の好むタイプの客が来ると、自然応接も丁寧になり、時には媚びるような態度を、無意識の裡にして仕舞うこともあつて、悲しいものです。

こんな私を、若いのに似合わぬ朴念仁だとか、不具じやないか、等の噂はあるようですが、幸に、まだ周囲の人々も、私の倒錯症に氣付いてはいないようです。毎夜バーやホールへ出掛ける同僚から一人だけ離れて、孤影消然と、巷に理想の同性を求めて歩く私の生活が、きつと、生涯続けられるのであらうと思われます。





保^{やす}名^な狂^{きやう}亂^{らん}

日頃氣性者の師匠が人が變つたようなとりノボセ方て……

有馬千鶴子

師匠の名前を出せば、女流の舞踊家で相当知られた坂東流の中堅ですから、ネームヴァリユーとやらはあるのでしょうか、これは絶対に出せません。

順序として云えば、私は神田つ子で、五年前に今の師匠の処に、叔父の口利きで内弟子に入りました。その時が十七で、実科女學校があと一年あつたのですが、好きな道ですから、あつさり退学したのです。

今でも覚えているのは、師匠に初御目見えの時のことです。叔父に連れられて行つた時は、丁度外人のお客様が五、六人あつて、師匠は自宅の舞合で衣裳をつけて保名を踊っていたのです。お客さんたちは皆、カメラを向けてパチパチ撮っていました。ほんとうに美しい保名で、今でもその姿が眼に残っている

くらいなのです。

私は緊張していました。しかし、その外人や通訳たちがドヤドヤと引揚げると、まだその自動車の音が残っているかどうかと思われる頃に、師匠は氣早やに、

「都鳥でも踊つてごらん」

まるで足元から鳥が立つような思いです。あんまり勢急で驚いて仕舞つたし、銘仙しか着たことのない娘が、二間に三間半の、磨かれ抜いた舞台に一人で追いつけられて、不当に虐められてるような、情ない氣がしました。

どうかにかこうにか、長唄についてゆくのを、保名の、あの素襖袴だけをとつた姿で、師匠はピタリと坐つて見つめているのです。腫の大きな人だから、それがとても怖かつた

のです。

どうかにか、内弟子において貰えることにはなりましたが、芸熱心だけれど、氣の短い、癩性な人だと、恐れる氣持が先になりました。例えば、煙草を吸う時でも、指でパタパタと、何度も何度も灰を叩くと云つた風です。

こんな風にのんびりだらりと書いていては、何時終るかもしれません、世間ではただ、達者な坂東流の踊手と知られている師匠も、こんな風に相当クセの強い人だつたのです。踊りのタタキこみも堂に入つたもので、内弟子の腕はグングン上るのですが、師匠は御天氣屋で、好悪がはつきりしているものですから、内弟子こそいい迷惑です。

好かれた者はいいいとしても、御氣嫌を損じた者は氣まづくなつて、辛棒出来なくなり、

暇をとる者も出来て来ます。名の売れた割には内弟子が少く、私を入れて三人だったのは、そんなことが主な原因だったのだろうと思われました。外に師匠の母親に当る御隠居さんと下働きが一人で、都合女ばかり六人家族と云うことになるのです。なにしろ実力のある流行つ子の舞踊家ですから、師匠も多忙でしたが、私共も一日中フルに動き廻っていたのでヘトヘトです。

結論から云いますと、私が普通でない性癖に陥入ったのは、御祭しのおり、この師匠の仕込みによったわけです。舞踊家としての師匠の、絢爛たる舞台姿を知る者には、想像も出来ぬことでしょうが、彼女は完全な変質者だと云つてもいいでしょう。

しかし、ここでは、師匠のことを書くのが目的ではありませんから、私に関係があることだけに止めます。私達内弟子三人は、どう云うものか、夜は別々の部屋にやすまされていました。F枝は御隠居さんの部屋に、O子は下働きと一緒に、と云った風で、内弟子だけが一緒に寝ることはないのです。

可笑なことだとは思っていました。それ

に、先輩のF枝やO子の、思わせぶりの会話のはしばしを小耳にも挟んでいたのですから、少しは気がつきそうなものですが、なにしろ、そんな世界があるとは夢にも思っていないのですから――。

私の直接の体験は、吉例の温習会の跡で、師匠の部屋に呼ばれ、
「疲れちやつたよ。少しばかり揉んでおくれな」

と、云はれた時に始つたのです。

師匠の部屋は中二階ですが、二つ折りの小屏風を廻し、粹な中形を着て横になっていました。一体に師匠は癪性で、下駄の緒でも、帯メめにしても、痛い程に締つたのが好きな人でしたが、この時もいい好みの伊達巻が、胴をくびれる程にも締め上げていたのを覚えています。

急に手をとられて、ジツとみつめられた時には、吃驚しました。その時はただ、気嫌を損じまいと、ただそればかりで、云われた通りにしました。気味が悪くて震えていましたが、だんだん不安な気

もするし、又むせかえるように熱っぽくなつて、恥かしくて恥かしくて消え入りたい想い



ばかりです

しかし、日頃気性者の師匠が、人が変つたようなとりノボセ方で、哀願したり、気嫌を





とつたりするのですから、清更、嫌ばかりではなく、なんとなく甘い気持もあつたことは確かです。

相弟子たちが、万事心得顔で、ヘンな笑顔を見せるのが癪でしたが、世の中にはこんなこともあるのか——と、あまりつきつめて考えはしませんでした。

ところが、翌日から、師匠の態度が少し異常なのです。お隣の若奥さんと、垣根越しに花の話などしていると、キンキン声で呼び立てられる。おくれて来た御稽古のお嬢さんに、一人で稽古をつけていると、幾度も稽古所を覗く、と云つた具合です。

まったく他愛ないことばかりですが、どう云うものか師匠の神経に触れるらしい。ヒステリックに捨合詞したり、師匠らしくもなく陰にこもつた嫌がらせを云つたりして、私はメチャメチャに小づき廻される思いでした。その頃から、私はいろいろなことが、正確に判断されるようになりました。内弟子が居つかぬ理由も、師匠の変態的な同性愛によること、何等かの関係を持てば、ひどく嫉妬深くなることなどですが、思えば、私も奇妙な

位置におかれたものです。

もともと中性的な傾向が見える人で、舞台でも男舞いを得手にした人でしたけれど、こんな秘密があるとは思いませんでした。どう云うものか、異性には興味がないらしく、彼女の創作に見せる女の愛情や嫉妬の表現は、実は自分と関係のあつた同性への感情だつたのかも知れません。

何処がよかつたのか、彼女は一途に私に対して溺れて来るのです。それだけに嫉妬も激しく如何にもアブ・ノーマルな感じでした。

私の方では、反撥しながらも、その肉体の遊びは、知つてみれば確かに一つの誘惑でした。だから、何時かズルズルと引きずり込まれるようになり、私までが、このことを喜ぶようになつて仕舞いました。

ここまでは、私の異常性癖の発端に当ります。師匠は、もう外分も忘れて、毎晩私を離しませんし、晝間は晝間で、私から監視の瞳を離しません。毎日毎日、十歳位から妙齢のお嬢さんまで、大勢の方が御稽古に来られ、私達がその代稽古をするのですが、

「必要以上に接近して踊つた」

「何時迄も手を離さなかつた」
などと云つては、夜になると彼女は怒り狂うのです。

本心の嫉妬らしくもありませんが、又、情熱をいやが上にも燃え上らせる手段でもあるらしく思われます。私の方でも、もともと浅黒い美貌の彼女が、瞳をつり上げて異様に感情を爆発させるのを見るのは、胸がつかまる程の快感があるのです。

そんなことが続いている裡に、私の性癖はだんだん進行して、我ながらアブ・ノーマルだと思ふようになりました。前夜は、あのよう慕はしかつた師匠が翌日は顔を見るのも嫌になります。そして、御稽古に来るお嬢さんの方の方にグツと関心をひかれるのです。

私と同年輩のお嬢さんがその関心の対象になります。稽古をつけていると、たまたまになつて、その牀に触れてみたかつて仕方がないのです。稽古中ですから、口実はいくらでもあります。そのふくよかな胸にあれ、手を握っていると、目のくらむような陶酔感があり、抱きしめて仕舞いたい衝動に馳られるのです。大部分の娘さんに対して愛情を感じて

いますが、そのうちの二、三人に対しては、殊にその感情が強く、稽古に来るのを、ソワソワと待っている有様です。

師匠は、もとより、私のこうした変化に気がつかぬ筈はありません。毎夜毎夜責め立てられ、泣いたり喚いたりする騒ぎです。そんな彼女の姿も、私には悪くはないのです。

しかし、理性的にどんなに押えようとしても、同性に対する関心が抑制出来ず、苦しん



逃げた妻

あれは、それと目こそ男ですが、男ではないのです……

私は、とうとう暴力をふるつてしまいました。

そして、腹立ちまぎれに、あれを叩き出してしまったのです。

あれ——といっただけでは、おわかりにならないでしょうが、あれというのは私の家内なのです。

でいます。つまり、私の躰の裡に、第二の師匠が生れたわけです。彼女によつて、私の躰の上に押された烙印が消えないのです。丁度十六、七で、自然に異性に向つてひらくべき花が、彼女の手によつて、無惨に向きをかえられたまま、元に戻ろうとはしないのです。

御稽古に来るお嬢さんの中には、私の性癖に気づく人もあつて、一、二人は、ラヴェタ1のようなものをくれる方もあります。師匠にかくれて、お汁粉屋に行つたり、散歩したりしたこともあるのです。今のところはこんな程度ですが、この先どんなことになるか、自分でも恐いと思います。

内部の、こんな醜い関係にもかかわらず、師匠の名声はあがるばかりです。事実、彼女は芸術家としては、日に日に進歩してゆくのです。先日、一門の新作発表会の舞台も綱爛たるもので、非常に好評だったようです。

家内と云つても、感違ひをされると、こまるのですが、私の家内というのは女性ではないのです。

お互、しがないドサ廻りの一座のものでしたが、あれが、何かと私の身の廻りに心盡しをしてくれました。

私も何かと、あれのかげになり、ひなたになつて面倒を見てやつていました。それは東北での旅先の事でした、あれが突然熱を出して寝込んでしまいました。かなりな熱でうなされてゐるのを一座の者は荷やつかいにしていました。もつとも二日後には次の土地へ廻る事になつていましたので無理もなかつたのでしようが——

香川扇次郎





私は寝ずにつきつきりて看病してやつてましたが、少しは熱もひいたようですが、一座と一緒に出かけける事など、とても無理な状態でした。

癒り次第後を追うということにして、僅かの金を置いて

遂に一座は私とあれを置いて出かけてしまいました。

木賃宿のフトン部屋では病人のあれも苦しかったでしょうが懐具合を考えると、私には、どうする事も出来なかつたのです。

風通しのいい部屋に寝かしてやれないうめ合せに、私は親身になつて看病しました。

熱も引き、段々快方に向つて来ますと、あれは私の親切が身に沁みると云つてはいつも涙ぐんでいました。

余りのしおらしいとおしさに私が頼ずりをしてやりますと、あれは、すすり上げながら私の首に両手を廻して来ました。

私はその時とうとうあれの唇を盗んでしまったのです。

十日程で、あれはやつと全快しましたが、意外に長びいたので懷中が気がかりでなりま

せんでしたが、あれは、その事をちゃんと承知していたのでしよう。

私には只手紙を出して来て呉れと云つた丈でしたが、その返事の手紙には爲替が入つて来ていたのです。

あれの伯父というのは埼玉で旅館をしているとかで、その旅館はもともあれの父親のものだつたので、父の死後は一応あれの財産なのですが、あれが旅役者で年中旅歩きばかりなので伯父が経営しているのださうですが、その実はもう伯父の物にされてしまつている様なあれの話し振りでした。

でも一寸まとまつた小金ならば出して貰えるというので、私達は、一座の後を追わずに埼玉の伯父の処へ行つて、一杯のみ屋を始めから資金を出して貰い、現在の飲み屋をやつてゐる訳なのです。

お蔭様で、どうやら、店にもお客様がついて、やつて行けるようになり、

私達はしあわせだつたのです。

私が盗んだ、あの可愛い、あれの唇が、私の唇といわず、何から何までを愛撫して、私を悦楽の絶頂におし上げてくれたのでした。

近所でもポツポツ私達の噂が立つようになつて来ました。

その噂が噂をうんで、近頃では、私の処に来るような筋でないお客さんまで、来て頂けるようになりました。

何だか、物珍らしそうに私達二人をじろじろ見乍ら飲んで歸られるお客様も相当ありました。

しかし、そんな事は一向気にも止めず、二人はせつせと働いていたのです。

ところが、若いやさ男を連れた中年の女性がひよつと店へ飲みに来られたのです。

二三月も前でしたでしょうか、それから毎晩その二人連れのお客様は店へ来て下さつたのです。

なんでも御婦人の方は洋裁店とかをやつていらつしやるとかで、男の方は、さしずめ若い燕という処だろうと、あれとも蔭で噂していたのです。

仲々金離れのいい方なので私達も上々のお客様にして、出来る丈のサービスはして居りました。

一ヶ月も前になりましたようか、いつものよ

うに自動車でおみえになりましたが、その時は御婦人がお一人のようでした。

何でもお連れを先方に待たせて来たのだと云われて、あれにも、おつき合いをと誘いに来られたのでした。

別に忙しくて手が足りないと言う程でもありませんでしたので、あれをお供させたのでした。

それから二三日たつて、始めて気がついたのですが、あれの様子が何だか変なのです。やきもちを焼いた目で見るからだろうか——とも思つて見たのですが、どうも確かに変なのです。

いつもの事なのですが、おつまみ物の買出しに行くのにも近頃では下着まで取りかえてめかし込んで出かけるのです。

今迄そんなことなど、一度だつてありませんでした。

それに、あの時以来、あの御婦人はお連れさんなしでいつも一人で来られるのです。

気のせいかな、その御婦人が来られると、あれがそわそわしはじめるのです。

何かあるな——そう感じると、何から何ま

で曲げて考えるようになってしまふのですが最後の点まで来ると、何とも解しかねる一点にぶつかつてしまふのです。

あれはそと目こそ男ですが、男ではないのです、いえ、男には違いありませんが、世間様のお考えになるような男ではないのです。

そして、あれは私の女房なのです。ですから世間の男のように女性になど全然魅力を感じない人間なのです。

ところが、私がやきもちを焼いている相手は、れつきとした女性なのです。

ここまで来ると、やつぱり私はあれを信じなくなつて来るのです。

でも、店で二人が向き合つて話などしている処をじいつと見ていますと、やつぱり何かあるに違いないと思われて、胸苦しい迄に嫉妬を感じるのです。

私は遂に思い切つて、店をしまつた後であれに、その事を切り出して見ました。

ひよつとして、あれの体に何かしら変調でもあつて、女性を好きになるような体になつて来たのではないかと思つたからです。

始めのうちは、何もないと云いはつていま

したが、とうとう私の膝に身体を投げ出して泣きながら告白したのです。

やつぱり私の考へてた通りあの女性と関係していたのです。

でも、あれの身体は私の考へていたような変調はなかつたのです。

もし、そうだつたとすれば、私もあきらめたかも知れません。

だつて女性を好きになれる様な身体になつてしまえば、もう私の女房になつていられないでしょうから——

しかし、そうでないだけに私はむしろ腹が立つのでした。

あの女は計画的に家のあれをハリに来ていたのです。

そして遂にものにしてしまつたのです。

あれがああ女の燕の役をつとめたり、旦那の役をつとめたというなら浮気にもなりますまいが、そうでなくて、あれはあんな女の女房役をつとめたと云うのですから、完全に姦通です。

あれが私に打ち明けた翌日から店は臨時休業にしました。





あの女は毎暗自動車でやつて来ては幾度か店の戸を叩くのですが、私はあれを睨みつけたまま、返事をしないでいました。

あの女も鍵はしまっている、返事もないわでいつも帰つて行つてしまいました。

あの女が帰つてしまふと私は狂人のようになつて、あれに飛びついて行きました。

あいつはこうして、お前を可愛がつたんだろう、こうして喜ばせたのか、それともこうやつてか——私は情痴の限りをつくしてあれを愛撫でせめさいなんでやりました。

あれも、私の愛撫にもだえながら昂奮に目をぎらつかせて、女ひよりの様に私に飛びついて来るのでした。

しかし、私は口走つていたのです。そうやつてあいつを喜ばせたのだろう、うむ……そうして、あいつを夢中にさせたのだろう……あれは、ぎよつとしたように、目を据えて私から飛び離れてしまいました。

そして部屋の片すみに身をかくして座り込むとすすり上げて泣き始めたのです。

私があれば何を云つてもただ、——ひどいひどいと云うばかりでした。

あれの目を据えた顔は今思い出しても、ぞつとする程のぎようそうをしていました。

私が靜かに寝かせようすると、あれは私の手をふり切つてわめき出したのです。

殺せばいいじゃないの、殺せば気がすむんでしょ、そんなに私が憎いの、殺しなさいよ

殺して呉れないなら、私は出て行つちやうから、そして死んでやるんだ——

十日近くも家の中にとじ込めて、監視の目でじろじろ見られていたのでは、つらかつたでしょう。

それにあの女とも逢えないでいたのですから無理もないと今では思えるのですが、売り言葉に買い言葉、両方とも常規を逸して神経がたかぶつてゐる時ですから、私は自分が何をしているのかもわからぬ程激昂して、自分の手がしびれて分らなくなる程あれをなぐつてしまつたのです。

そして、そんなにあいつの処へ行きたけりや、行くがいいと叩き出してしまつたのです。

今日であれば三日も帰つて来ません。

あの女のやつてゐるといふ洋裁店らしい店

の前を何度も行きつ戻りつして見ましたが、店が違つてでもいるのか、それらしい女もあれの姿も見当りませんでした。

可愛そうな事をしてしまいました。あれは私でなくては長続き出来ないのです。

あれも魔がさしたのでしよう。あの女がどんなにあれを可愛がつても、あれはきつと私の処に戻つて来て呉れると思つてます。

しかし、この三日間の様な辛らさを後何日続けなければならぬかと思つと、とてもいたたまれません。

ふぬけた様な私の店番ではお酒を飲まれるお方も、まずいのでしょうか、開けることは開けているのですが、あの頃とはお話しにならぬ程客足が遠のいてしまいました。しかし、どんなにお客様が無くても店丈は開けて置くつもりです。

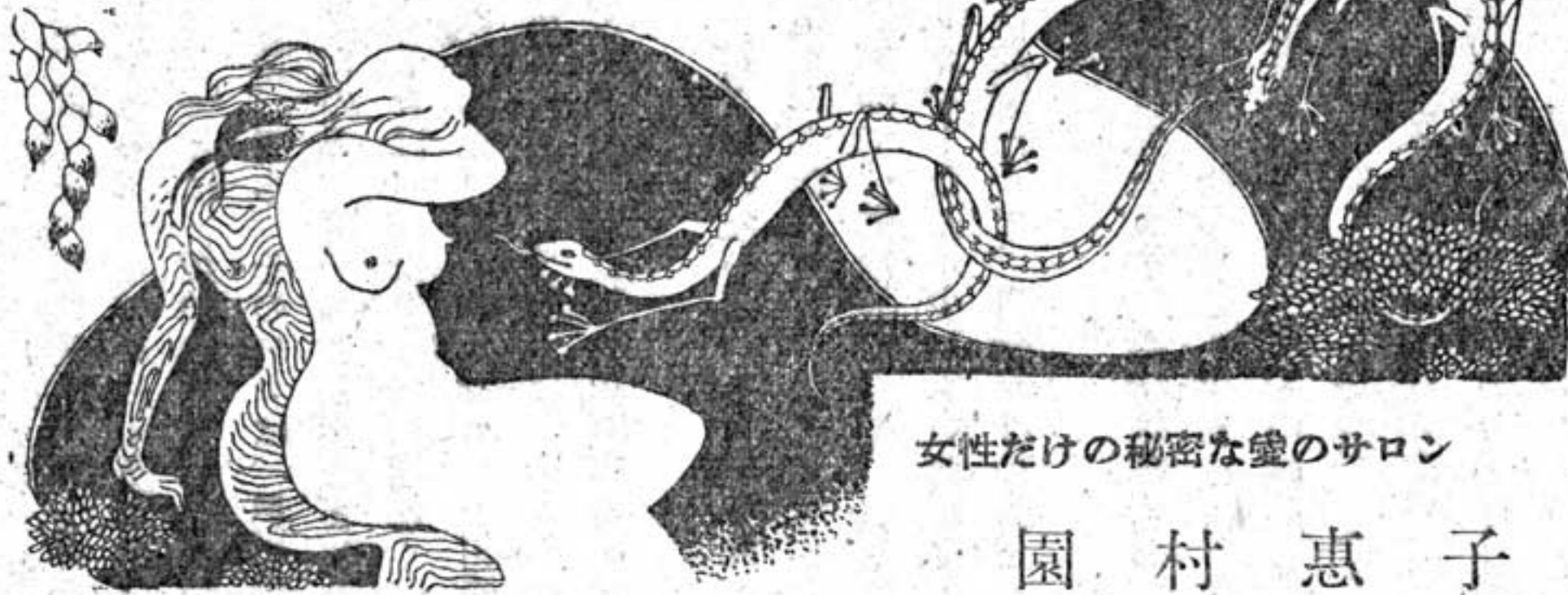
しめていれば、あれが帰つて来て呉れた時とまどいすると可愛そうですから——。

☆

☆

☆

レスポス通信



女性だけの秘密な愛のサロン

園村恵子

じつとしていても、肌がしつとりと汗ばむ季節となりましたわね。夜など、窓をあけ放つて休んでおりますと、お庭の木犀の香りが、部屋中に流れてきて、故知らぬ惱ましさに、思わず身もだえする事もありますの。：

今月から、この欄を借りて、秘密多い女性のみが知るレスポスの同好者にお呼び掛けする事になりました。でも、こんな事ははじめてですし、果して、恵子のお呼びかけに、応えて下さるお方があるかどうか、とても恵子心配ですの。恥かしさを忍んでのお呼びかけどうか空しいコダマとなりませんように。この雑誌の読者のなかには、きつと、御返事を下さる方もあるだろうと信じますわ。

お断りしておきますが、男の方々は恵子お附合いたくはありませんの。私とても恥かしがり屋なので、男の方の前へ出るとドキドキしちやつて、とてもダメ。恵子が、欲しいのは同性のお友達ですの。恵子つて、そんな娘なのです。

もし、私に、お便りを下さる方がありましたら、編集部氣付で、必ず封書で下さいま

せ。

開封しないで、そのまま、恵子の方へまわして下さるように、雑誌の方をお願いしてありますから、秘密なことも安心して打あけて頂きたいの。……お手紙を見るのは恵子だけなのよ。住所も、お名前も、愛のお言葉も、お許しがなければ、決して人にもらいませぬ。それだけは恵子を信じて下さい。第一、他人にもらせば困るのは、恵子自身なのですもの。

私、ひとりで胸をだいて空想しますの。このお呼びかけが縁になつて、秘密の愛のお附合いがはじまつたり、また、同好の、気の許せるお友達だけ集つて、座談会や、パーティーのような事したら、どんなに素的でしょう！ 思つただけでも、胸がドキドキしちやうわ。……

恵子の写真をのけるといいのですけど、それは出来ませんから、かわりに簡単な自己紹介を致します。恵子は、二十五歳。まだ未婚ですわ。せいは五尺二寸ですから女としては少し高い方。どつちかつて云うと、やせぎすです。でも骨皮スジ衛門ではありません。

「お姉さまの眼、とても情熱的でキレイね、そんな眼で見られたら、ここん所がキュンとなつちやう」とは、女学生チョコが、私をほてくれた言葉。でも、そのチョコは、男の子の恋人が出来たので、惠子のこと棄てました。惠子、そのときは、切なくつて、切なくつてお酒をのみました。あのシコシコした可愛い体、男に、自由にさせてんのかと思つたら、ゼラシーの熱いほむらが胸に炎えて……

惠子が、男ぎらいなのは、そういう風に、可愛い娘をみんな、男が、うばつてしまうからです。男つて、動物臭くつて、粗暴で、乙女のデリカシーなんか少しもいたわりません。どんな愛撫だつて、自分だけの満足の爲なんですもの。

惠子の愛撫は違います。惠子は奉仕したいのです。惠子自身なんてどうでも良いんです。自分の好きな乙女が、惠子の腕のなかで、やさしい愛撫に、恥かしがつて、身もたえしているのを見るのが、惠子のよろこびなのです。頬を真赤に上気させながら……息をはづませて、……

「大丈夫よ。お姉様に委しなさいネ……」

そんな事を云うのです。乙女の花を、きずつけないように、そつといたわりながら咲かせるのです。……惠子、若いお嬢さんに、そんな秘密の遊びを教えて上げるのが好き！その爲には、惠子の財産なんか、みんな上げてしまつても惜しいとは思いません。

○

今、惠子の家へ一週間に一度位、遊びにくるおかつばのお嬢さんが居ます。

糸子さん（仮名）と呼ぶ十八になるとても可愛らしいひと。K市の駅前通りに本屋さんをひらいているお家のお嬢さんです。

糸子さんは、このお正月、私がある雑誌に同性愛の小説をのせたのをみて、編集部気付で、私にお手紙を下さつて、それから、親しくなつたのです。

その手紙はとても切ない感情にあふれ、私の胸をうちましたので、今でも、手文庫のなかに大切にしまつてありますが、同じような悩みを悩んでいる乙女のかたが、あるかと思えますから、糸子さんの承諾を得て、その一部をぬき書きしてみます。（私が一度返事を出して上げた分に対する返信）

「（前略）こんなに早くお手紙下さると思

いませんでしたわ。でも、自分丈の秘密を他人に打明けた以上、少し針小棒大ですけれど一年でも、二年でも待つ積りでした。本当に御心配おかけして、申し訳ありません。私は現在満十八歳。（中略）年中あんな大人の本ばかり読んでる様で、はづかしいのですけれど、私のような云う身体の状態にある者のことは普通の本より、くわしく、ていねいにお教え下さつてくれる様なので、ついお店から失敬しちやいます。おかげであなたという素晴らしい相談相手を見つけたのですもの。感謝感激ですわ。——さて、私の行爲は、凡そ、小学六年生頃から始めました。そして断続的ではございますけれど、高校二年頃までつづいて参りました。それまでは無意識にやつて参りましたけれど、その頃になつて、やつと、いけないことだつて気がついた時にはもう遅く……何しろ土地が狭い上に、すぐく顔見知りが多いので、こつそりお医者えも行けないのです。こんな事になつてしまつて、死んぢやいたい位ですわ。元はと云えば、文学的精神がこうじて起つたものです。私はいつも詩や文のなかにひたり雑誌へ出した事もございます……いけない事だとは思いますが

床へ入ると、誘惑にうち勝つ丈の勇氣が無くて……こんな状態になつてしまつたのですけれど、治りますでしようか、私の病氣。楽しい事をしている、ふと自分の身体のことを考えますと、皆と一緒ににはしやぎ廻つてられない氣がして、滅入つて了うんです。性格は実に朗らかなのですけれど、人一倍ものにこだわる方ですから、ちよつとのことも氣にするんです。私みたいな悪いことをしているひと。世界中にいるかしら。もし居るのなら、同病相憐むで、きつと一緒に心中しちやうかも知れませんわ。どうか、お心易い先生を紹介して下さい。もし先生の所へ行つたら、もう絶対に致しませんつて、三拜九拜するつもり……本当にあつかましいんですけれど、入院する必要はないかどうか……(下略)

このように、糸子さんは、可憐にも、悶々の胸のうちを、打あけてきたのです。私は早速長いお手紙を書き、一、だれでも乙女はひそかにそんな事をするのだから、決してよくよしてはいけない。勿論、病的でもないし手術の必要もない。二、早くそんな事忘れて朗らかなお嬢さんになつて遊びにいらつしやい、と云つて上げました。

そうしたら、早速、お土産をもつて、糸子さんは訪ねてきてくれたのです。水晶のような眼をしたキレイなお嬢さん。私は一目見て、胸に抱いてなぐさめてあげたくなつちやいました。もう、秘密をうちあけてしまつた氣安さからか、糸子さんは、すぐ私をお姉様と呼んでしたつてくれました。

私は、糸子さんの心配をすっかり解きはなつてあげました。勿論、彼女の軀に病的なところなんて、少しもなかつたのです。……バラのつぼみのようにきれいでしたわ。……皆さんのなかに、この糸子さんのような悩みをもっている方はないかしら。あつたら、何でも恵子に打あけて、御相談下さい。必要ならお医者様も、紹介しますし、力にもなりますわ。また、御希望をお寄せ下されば、嬉しいレスボスの遊びかた、私のレスボスの経験談、文献の御紹介なども、して行こうと思ひますの。この欄をどうか、楽しいものにする爲に、御便り、御希望などを編輯部氣付園村恵子宛に下さいませ。胸をときめかしながらお待ちしておりますわ。

では今月はさようなら。

女性だけの秘密な愛のサロン レスボス通信

にどしどしお便りを

下さい！

ここは女性だけのもつデリケートな愛情の交換室です。同性を愛する悩み、歡びの告白、もつと深い肉體上の疑問など、何んでも結構です。またレスボスの愛に興味をお持ちの男性の方の御投書も歓迎します。園村女史が一つ一つお答えを致すことになつておりますから……。

編集部

本誌に使用される用語解説

そどみい……そどみあ、そどみにずむ等々と転用される。男色の意

レスボス……一世の女詩人サツフオを生んだレスボス島は、最高のギリシヤ文明が爛熟し、そこに「レスボス」の女と称する同性愛の典型を後世に遺した。と辰野隆博士は註している。女子同性愛の意

そとみあ通信

読者
交
歡
室

藤井 晃

讀者の皆様へ

編集部

「そとみあ通信」は「レスポス通信」と同じく同性を愛する方、つまり同性愛に興味を持たれている方の、心からなるサロンです。愛する悩みや孤独な魂の訴へ、または肉体や技巧に関する様々な質問を、どうぞどしどしお寄せ下さい。

「そとみあ通信」は藤井晃氏が担当して、お答へ致します。この号では第一回です。で、自己紹介を兼ねて藤井氏のそとみあ歴を語って載せました。

ギリシヤの哲人プラトンは、彼の有名な著書である「饗宴」において、男性の男性に対する恋愛を口を極めて讃美しております。彼は、異性愛を低級なもので動物的だと考えます。異性愛は種族を保存するためには必要だが、男性にとつては一つの恥辱である。エロスは、彼自身を同性愛^{ホモセクス}によつて動物的羈絆^{ケイン}から解放し、この迂回的方法によつて善良な美わしい人間愛の真実として、より高尚な恋愛に到達せしめる。これがプラトニックラブと呼ばれるものであることはご存じでありましょう。

プラトンの考えは、人間を肉体から解放することになりました。その標語は、「女性か

ら遠ざかり、善にして美なるものに向つて進む」でありました。そして、それは、男性が男性の愛によつて、導かれると云つております。

全国男色党の読者諸兄、私がこの通信の冒頭第一に、以上のようなプラトンの言葉を掲げましたのは、決して故ないではありません。

というのは、私の知るかぎりにおいて、或は書物雑誌などを見たところによつてを、ソドミアというものは、大体自己のホモ癖も卑下するものです。異性愛が正常なるものとするれば、同性愛は異常でありましょう。だが、その愛情の純粋さにおいては、同性愛は異性愛よりは遙かに優れているではありませんか。それは沢山の事実が立証してくれそうです。われわれはすこしも、自己の男色癖をすこしも卑下することはありません。プラトンのごとき強い信念をもつて、われわれの愛情を育み成長させ貫いてゆくべきだと思い、先ず冒頭にこれを掲げたわけです。

さて前置が長くなりましたが、私はこれから、私のいままで体験し、かつ又体験しつつあるソドミア歴を記して、真実の同性愛がいかに神祕的であり、いかに献身的であるかを



申しあげようと思います。

私は今年卅一歳になる青年です。世に云う結婚適齢期ではありますが、プラトンの説を奉じる私は、勿論独身です。そして永久に独身でありましょう。大学を出ましてから現在の所に就職し、今年で五年になります。身長五尺五寸三分、体重十五貫六百、まあ体格はいい方でございましょう。趣味はスポーツで、スポーツなら何でも一応熱中しましたし、いまでも機会あるごとにやつております。

私は世に云うナイスボーイというような、色の白い華奢な男ではありません。色の浅黒い、どちらかといえば丸顔の、比較的男色党の人から好かれる型の容貌です。

意識的に同性愛を感じはじめたのは十二三のころでした。同級の秀麗な子に恋心を覚えたり、中学に入ってから上級生からチゴサンにさせられたりしたものです。肉体的な交渉はありませんでした。

中学二年、十五歳の時でした。二級上に町の材木屋の次男

坊で、Tという少年がいたのですが、その子から愛されまして、或夜、Tの家に誘われました。彼は立派な勉強部屋を持つていまして、そこで彼からウイスキーを飲まされ、結局その家へ泊つたのですが、そのとき彼から相互の愛を教えられたのです。そのとき、いままでも感じたことのない興奮にかりたてられその気持にすっかり酔つてしまいました。これがこの道への私の最初の洗礼でありました。

ご存じのように私の生れた鹿児島は、昔から男色熱が高調されておりました。その当時私たち学生の間には opama が一般的な行爲となつておりました。硬派の不良少年のような者が出没して、学校の帰途を擁して美少年をとらえて意にしがわけてはいたもので、私たちもその時分夕方帰宅するようになるときは、自分のニセサンに送つてもらふようなことも度々ありました。とにかく美少年は少なからず彼らに脅やかされたものです。

話が少し横道へ入りましたが、私はTから洗礼をうけて後、一週に二度位彼の家を訪ねました。Tは私のほかに、なお三人のチゴサンを持つておりましたが、中でも私をいちばん愛してくれました。そしてその愛の方法

は、いつとなく前に上げた一般学生間の代表的なホモ行爲となつておりました。

私は最初のうちは、それにただ苦痛があるばかりでTに盲従的に愛されておりました。が、そのうちいつとなくそれに妙感を覚えてきて、彼を恋するようになりました。したがってTと私は非常な親密さになりました。

Tは中学を出ると故郷を去り、中学時代からあこがれていた北大農学部の子科へ入学するようになりましたので、彼との肉体的交渉は四年間で終止符をうちました。いまでは書翰の往復にすぎませんが、その親密さは少しも変りはありません。Tは今では二人の子供の父親となつております。

◎

神経病学者であり、同時に精神分析学者であるF・ウィッテルスは、その著「愛の精神分析」において、こう云つております。

「誘惑、殊に人生の初期における誘惑は、同性愛の発展に關して重要な役割を演じる、若い人たちは、性的な愛を始め、多数の者は彼ら





の同性とその最初のクライマックスを経験する。多くの者は年上の同性愛的罪人によつて秘密の場所に誘惑される。さいわいにも、若い人た

ちの大多数は、かかる経験を経験し、忘却する。その他の者には、この誘惑が一種の致命的な宿命となつて働くのである。しかし、この宿命は、誘惑される前に、すでに確定しているものである。その道をすでに準備しているときにのみ、一個の人間を終生の同性愛者になし得るのである。いかなる人も、ただ自己に経験し得ることのみを経験するのであると云うことができる。誘惑された多くの人々は、かくの如くなることを願っている」

この学者の言によれば、私はTから誘惑される前に、この道をすでに準備していたものであつて、それがTとの交渉が契機となつて終生のソドミアにならんとしているといえましよう。「誘惑された多くの人々は、かくのごとくなることを願っている」とは、まことに心憎いことを云つたものです。

この片言隻句は、おそらくすべてのソドミ

Aの心理をついたものといえましよう。ソドミアというものは、自己のホモ癖を矯正しようなどというものはおそらく一人もおらず、皆この道へ入つたことを心ひそかに幸福に思っているものであります。

さて、私はTと交渉中にも同級生は云うまでもなく、上級生下級生にもホモ党の同志をもとめて、十数人と関係を結びました。なぜならば、Tから得た其時のあやしいまでの心の、又肉体の興奮が忘れがたく病みつきとなつてしまい、かくは私を多情にさせたものです。

そして、そのうち下級生の六人に対してはアクティヴに、同級生三人とは相互的に、又上級生の五人からはパッシヴに愛されることをよろこびました。そのうちのKとSとを除くほかは、まつたく一時的の關係にすぎませんでした。

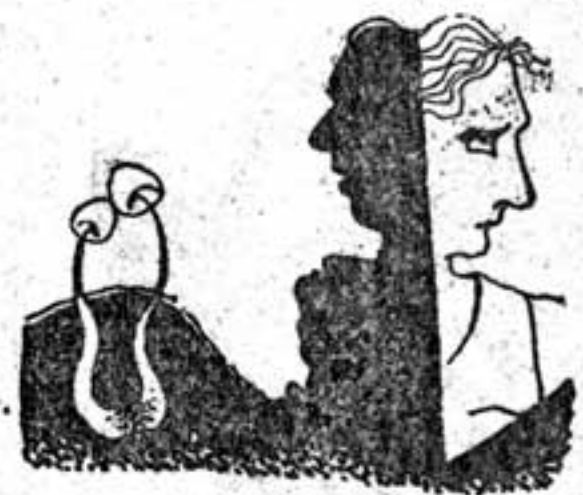
中学を出てから上京し、或る大学へ入りました。田舎者のことですから、盛り場が面白くてたまらず、銀座、浅草、新宿と毎日のように遊んで歩きました。

その年（昭和十六年）の夏でした。浅草の或る映画館に入りましたところ、映写中の暗闇で、隣席にいた男がソーツと私の膝に手を

やるのです。瞬間、私はちよつと驚きましたが、その男は鼻下に髭をわたくえたリッパな中年の紳士だつたし、その手付きでスリだとは思いません。

どんなことをするのだろうと、私は半ば怖れていながらも、半ばは好奇的な求める気持ちもあつて、その手を拒みませんでした。と、紳士の手が徐々に私の膝の上を這つてくるのです。紳士はまた、一方の手で私の手を握り自分の方へ引きよせました。それは前申上げたTが最初に私におしえた行爲と同じことでしたが、ただ中年男らしい執拗さがありました。

一度始まりだすと妙なもので、映画館の中のそのような行爲に、その年のうちに六七回ほど出合いました。相手は三十から四十五、六位までの男が、主で、中に二人は二十代の青年でした。行爲はもちろん其場かぎり、映画館を出ると、私はおそろしく、いつも逃げるようにコソコソと人混みの中に姿を晦ましたものです。





は、こんな所へも来た甲斐があつたと思ひました。Rはそのとき廿九歳、見るからに男性的な風貌のクレイン工でした。Rは私の顔を見ると、いつも一緒にクレインに乗れと勧めまし

ご承知のように、その年の十二月に、英米を相手とする戦争が開始されたのですが、翌年私は、同級生のZとはからずも愛情を交すようになりました。二人は互に熱烈でした。Zは私と同じ下宿に移つて来まして、夜毎に私と衾を同じくしました。

戦局は日を逐うごとに苛烈になつて来て、私が予科を終つて学部へ入つた年、それは十九年でしたが、その年の秋に、私は同級生十人ほどと共に、都内の或る大きな製鋼会社に学徒動員されることになつたのです。

私が配置されたのは現場の事務所でした。仕事という仕事はありません。事務所の人のあとについては、現場を廻つていればいいのです。考えてみれば、大事な時間を、まつたくバカらしい事に費したものです。

しかし私は、その現場で、Rと知つたときは、こんな所へも来た甲斐があつたと思ひました。Rはそのとき廿九歳、見るからに男性的な風貌のクレイン工でした。Rは私の顔を見ると、いつも一緒にクレインに乗れと勧めまし

た。私たちは、轟々と唸るクレインの内、下方に真赤に灼ける鉄塊をのぞみ見ながら、誰知る者なき愛撫を交したものです。Rは肉体のすべてが逞しい青年でありました。その美事さだけは、私はいまでも忘れることができません。目の前にハッキリと思い描くことができます。

私たちがソドミアの関心も、つまりはそこに凝結するわけなのです。或る性心理学者は、「ソドミアの夢は男性の肉体そのものであつて、鶏×は大抵やむを得ないからそこを借りるだけだ。フアルス憧憬の精神のはげしさのため、男女間の場合とはちがい、ソドミアは心だけでエクスタシーに達するのではあるまいか」というような意味のことを云つておりますが、まことに然りだと思ひます。

さて、こうして私は、下宿ではZと相互的な歡を交しながら、工場に出てはRから受動的に愛されつつ日を送つておりましたが、年が改まるや間もなく、Rは赤紙をうけて戦線に送られ、その後彼は全然消息がなくなつてしまいました。

又、Zは卒業後地方へ就職したために、彼との交りも中絶しました。Zは現在三人の子

の父親となつて、円満な家庭を作つております。最初のTも、またこのZも、ホモ好愛者ではあつたのだが、プラトン派ではなかつたのでしよう。

◎

かくのごとくにして、私は、卒業後自分がパッシングの置位に立つ愛人を失つたために、一日と男性的な同性がいままでよりもいつそう烈しく眼に映ずるようになりました。

殊に学生などの筋骨逞しく、色の浅黒いそしてまた真白なカラーをピッチリつけた清潔そうな青年を見ると、それが自分より年少であれ、年長であれ、我を忘れて恍惚として見とれることが、度々あります。また時としては、なんとかして、其人とのチャンスを作りたいと思ひ、後を尾けたことも稀れではありません。

又、銭湯やプールなどで、ガツシリした体付の、美しい、そして特に腋毛が真黒に密生した同性を見ると、息苦しくさえない、思わずゴクリと生唾を呑みこみ、抱きついてゆきたくな





つてしまうのです。

実に私は、歳と共に自分が受動的に愛されることのますます少くなるのを、淋しく悲しく思われて堪えられまん。できることなら少年時代に立ち帰つて、好みの男性から思いきりモミクチャに愛されたいと願わない日はありません。

しかし今でも一年に僅か数回くらいは、中学時代から関係のあるKやSに対しては自分がパッシヴの位置に立ち得るのを、せめてもの楽しみとしております。KもSも妻帯者ではありますが、近県に居るため上京の度毎に私の心情を察してかならず私に受動的な満足にあたえてくれます。

なお又一方では、私は能動的に満足をもててもいるのです。

話が前後しますが、中学卒業後私は、私の隣家に居た他校の学生で、私よりも六歳年少のWと交りました。そして私は、大学入校当時までWに対して能動的に関係をつづけておりました。その後は或る事情で父君と共に遠地に赴いたため、私との交渉も一時中絶しま

した。

ところが、大学卒業後、前述のZが東京を去つてから二、三カ月して、そのWが上京し私を訪ねて来たのです。久しぶりの再会に二人は燃え上り灼けるように強烈な愛撫を交しました。

再会後のWと私の交渉は、はなはだ変形のものでありました。が、不幸にもWは、私の再会の二年目に、感冒から肺を病んで、ついに不帰の客となつてしまつたのです。Wの死は、幾度私を死の淵へ導いたかも知れませんでした。しかし私はようやく氣をとりなにして、それから二ヶ月目にWの友人であつた某校の学生Yを知りました。Yは今年廿一歳の青年ですから、所詮は私が能動的な位置をとるようになり、未だにパッシヴの願ひは果されません。

全国のおモ覚諸兄、以上が私の男色歴の概略なのです。縷々と申上げましたごとく、きわめて多情的であり、肉体から解放されることのできない私は、敢てプラトン派などとは申しません。しかし、プラトンのごとき強い信念の下に、精神的愛情を主に、肉体的愛情を従として生涯をソドミアとして貫き、すこしも悔いなくつもりであります。

愛

読

者

通

信

貴誌にソドミアのサロンが新設される由を聞き、早速ペンをとりました。貴社の企画に双手をあげて歓迎する同好の士が、多数あること信じ、実は今から胸を躍らせている次第です。

私の男色歴は相当多年に亘つて居ますが、最近では好みもむつかしくなり、なか／＼よき相手にめぐり逢えず、不幸をかこつて居ります。純情な、なるべく経験なき方との邂逅を、切に望んで居ります (九州U・T生)

★

全国のおモ覚の諸兄に訴えます。私は目下三度愛人と離別する宿命に逢ひ、泣いている者です。

一度目は事情あつて生別、二度目は裏切られました。三度目、私は全霊を傾けて彼を愛し、理想的な関係を楽しんでいましたところ、彼は不慮の事故によつて死亡したので、私の氣持をお察し下さい。

現在は彼のことばかり憶ひ寂しさに耐えられないのです。もう一度と悲願しています。御同情ある方御連絡下さい。(大宮 川辺生)



幻想殺人

比企狂一郎

画 大橋 彌生

嬰 犬

その洋館に人が住んでいることを知っている者は稀だつた。附近の人でさえ、空屋だと思つていたのだから――。

尤も附近の人と云つても、近くの馬鈴薯畑を耕^かしにくる百姓か、この奥の林にモズやツグミを捜しに来る、鳥糞竿^{うんすぢ}をかついだ土地の子供たちである。この人たちは、この廃屋に近い洋館の窓が開いているのを、ただの一度も見ることがない。土地の郵便配達にしても、恐らく近來、この家に郵便物を配達したことはあるまい。

だが、人が住んでいたのである。尤も、前住者のことなら、この辺の者は誰でも覚えてい

孤独なドイツ人の老爺がひつそりと暮していたが、戦争末期に首を縊つて死んだ。それは死後一ヶ月も経つてから発見されたのだ。

そんなに辺鄙な環境に、この洋館は在った。軽井沢といつてもずつと山沿いで、軽快な別荘が並んだ中央からはほど遠い。ポツンと孤立して、半ば草に蔽われてこの家は在った。何処から見ても廃屋に近い空屋である。そして、土地の者たちは空屋に馴れている。軽井沢の多くの別荘に灯がとぼるのは、一年のうち、せいぜい二ヶ月ばかりの間だつたから――

ところで、その、何処の別荘の窓も開け放たれた八月だと云うのに、この洋館には人の気配もない。以前は白くペンキを塗つた木柵もあらかた朽ちて、アーチ風の門も、野性にかえつたバラがこんもりとからみついて傾いている。風が吹くと、それが根元からグラグラ揺れた。

白壁の色も無気味に沈んで、鎧戸は重たく錆びついている。其処からは一片の灯もささない。庭一面に、壁ぎわまで生い茂つた雑草が人の丈よりも高く、この窓をこすつてザワザワと鳴るのだ。

今夜は月がない。建物も庭も重たく闇に沈んでいる。ただ虫の声ばかりが如何にも生々しく、傍若無人だつた。今はこの小さな虫共が、この闇を支配しているのだ。

ギイーツと戸が鳴つた。ドアが明いて、其処でかすかに空気が乱れる。虫の音が止んだ。黒い影が雑草をかきわけける。その草が門まで一直線にゆれて、やがて前の道に一人の男が出て来た。やはり人が住んでいたのである。

人だけではない。その男が歩き出すと、ピタリとその後について大きな犬が一匹、黙々と従つてゆくのだ。人も犬も、その足音は殆ど聞えない。ただ、道端の虫がほんの一瞬鳴き止んで、呆れたように見送るのだ。

男はひどい猫背である。高原の夜といつてもこの真夏に、黒いコート、黒のソフト、ズボンも、靴までも黒い。両手をかくしに入れて、格別急ぐでもないらしい。深夜の道を、犬を連れて歩く男。

それは、男一人の散歩姿よりも、遙かに孤独な影があつた。別荘地帯の大通りに出た。まだ灯のついた窓も見える。ほんの時たま、ヘッド・ライトを光らせて自動車が行き抜けた。若い話声をひびかせて、二、三台の自転車が追い越してゆく。しかし、男は顔もあげない。何も見てはいなかつた。

男が立止つたのは、テニスコートの前である。柵の間に手を入れて暫くすると、静かに木戸を開けた。黒い犬は、もう音もなく柵を飛びこえている。柵について角を曲つた。隣は如何にも避暑地らしい、南佛風の別荘である。人も犬も、その黒い枳殻の生垣に身をひそませた。

テラスにつづくホールにあかあかとシャンデリアが輝いて、レースのカーテンが高原の夜風にかすかにゆれる。ガラスをあげた影と抱き合つて踊る影が重つてそのカーテンに映るのだ。タンゴの合間に笑声が沸いて、高級煙草の煙と、有閑婦人たちのさまざまな香料の余薫が流れてくる。

恵まれた軽井沢人種の中でも、最も選ばれた人々が集る奈知家のサロンである。美酒美肴にも美女にもなんの不足もない。其処にはないものは何一つない。恐らくはロマンスも、スキヤンダルでさえも――。

上背のある、豊かな肉付の女性が、人々の間を縫うように廻るの

が見えた。名品の薔薇にみるような、典雅な黄の色の、シャンタンのカクテルドレスをつけている。動く、遠目にも豪華なイアリングが、キラキラと輝くのだ。

邸の女主人奈知燎子（なりちりょうこ）の身边には、何時も人々の視線が集中して、其処から談笑の渦が湧いた。彼女が白い指にグラスをかがげると、一座の紳士たちがみな弾んで起ち上った。天のなせるたぐいなき麗質が、満ち足りた財力で磨き上げられた燎子の美貌には、なにか飽満な贅（さか）りが見えた。それに其処にはかすかな、淫蕩の匂いもあつた。

しかし、午前一時近くなると、大勢の客たちは口々に謝意をのべて、この家のポーチからそれぞれの車に移る。ざわざわのその辺りがゆれ動いて、やがて車の音が遠ざかると、ピタリとドアが閉される。ホールのシャンデリアが消えて、辺りの闇につながつて仕舞う。そして、今度は二階の寢室に灯がとぼるのだ。

枳殻（からがら）の垣から、人影が離れた。音もなく動いて、コートの端に片よせてある審判台に登った。男は遠く奈知家の二階を見上げながら、上衣のポケットに手を入れる。とり出したのは黒い双眼鏡であつた。彼は寢室の窓にピントを合わせるらしかつた。その両手にも黒い手袋がはめられている。ジツと双眼鏡をあてたまま、男は闇の中で微動もしない。

その台の足許に、あの黒犬もまた、声もなくうずくまつているのだ。

淫婦

「あら……」

燎子は夫の手を軽くはらいのけて、ベッドの上に半身を起した。

「なんだい？」

「だれか、見てやしないかしら——」

「なにを云つてゐるんだ、この真夜中に、そんなもの好きがいるものか——」

燎子は広い窓の外をみつめた。月のない真の闇である。

「そうね……、でも、なんだが、誰かに見られてゐるような気がするの」

「ふん、ロマンチックなことをおつしやるマダムだ。——あああ、帰つて来なければよかつたよ。暑い汽車に乗つてわざわざ軽井沢まで来ても、毎晩、パーティーだ、ダンスだ、いつそ東京の方が涼しいくらいだ」

「そうだわ。帰つていらつしやらなきやよかつたのよ。わたくしだつて、その方がよかつたのに——」

康祐は傍の妻をジロリと見た。眼の前にうすいピンク色に息づく生あたたかい彼女の二の腕がある。ほとぼしり出そうとする言葉を呑みこんだ。云つてみても、無駄だと云うことは判つていた。

新橋でも柳橋でも、涼しく気楽に遊べる場所にはこと缺かない。康祐の財力を以つてすれば、どんな気散じでも可能の筈だつた。ところが、パーティーもダンスも苦手の彼が、週末になると必ずこの別荘に戻つてくる。此処には美貌の妻が、女王蜂のように気ままに暮している。

「あんな連中を集めて騒いで、一体なにが面白いんだか——、燎子はどうして、あんなパーティーが好きなんだね？」

「そうね、別に御祭り騒ぎが好きなのでもないわ、ただ……そう、

寂しいのかもしれないわ……」

療子は天井を見上げたまま答える。その顔の半面がカゲを作り、額から鼻筋にかけての線が見事に浮上つて冷めたいのだ。

「寂しいから？ ふーん、俺がいてもね？」

「そう、あなたがいてもよ」

それで、康祐は黙つた。彼はもう五十に手が届く。二十も歳下の妻と、そうした問題を争うほどムキにもなれなかつた。妻は美しく驕慢であればいい——。そんな諦めもあつた。

「ところで、目下、その君の寂しさを慰めているのは誰だい？ もちろん、今夜のパーティーにも来て居たんだらう？」

「そんなこと、御知りになつてどうなさるの？ あなたはあなたで御好きなことをなさるし、わたくしはわたくしで束縛しないつて、御約束だつたわね、結婚する時から——」

療子は始めて夫をみつめた。黒いその瞳に、迫るような強い意志が閃めいている。

とても、俺の手に負える女ではない、と、康祐は改めて思つた。それから、カツと怒りがこみ上げて、妻の肩に手をかけた。その肩から音をたてて、レースのガウンが剝がれるのだ。

窓は門け放たれたままである。闇の中から夜風が吹き抜ける。カーテンが丸くふくらむのだ。

夫はなにも嫉妬することはない、と、療子は思つた。どんな放埒な淫蕩にも、わたしはただの一度も酔つたことがないのだから、どんな男との浮気にも、身も心も焼けるような、宇宙が粉々になつて吹つ飛んで仕舞うような、陶酔はないのだから——。

一度恋を失つてしまつた女には、それはもう与えられないのだろ

うか——、療子はそれが知りたかつた。それを、自分の牀でためし

てみたかつたのだ。軽井沢の女王奈知療子の周囲には、彼女が黙つて坐つていただけで、あらゆる種類の男たちが群り集つてくる。そんな男たちを相手に、療子は十年前に燃焼した炎に、もう一度火をつけてみたいと希

つた。だから、この彼女の寢室に、康祐がいない夜には、そうした男たちの一人を、療子は平然と泊めるのだ。彼女にとつて、それは醜行でも放蕩でもない。

「奈知さんが、不意に帰つてくることはないかしら？」

「どうして？ 帰つて来てもいいじゃない？ だけどあの人は、今頃何処かで大人しい妓でも相手に、きつと気楽に遊んでることよ」男は窺うように療子の顔を見た。しかし、彼女の顔には、なんの表情もない。

「奥さんたちは、変つた御夫婦だなあ——」

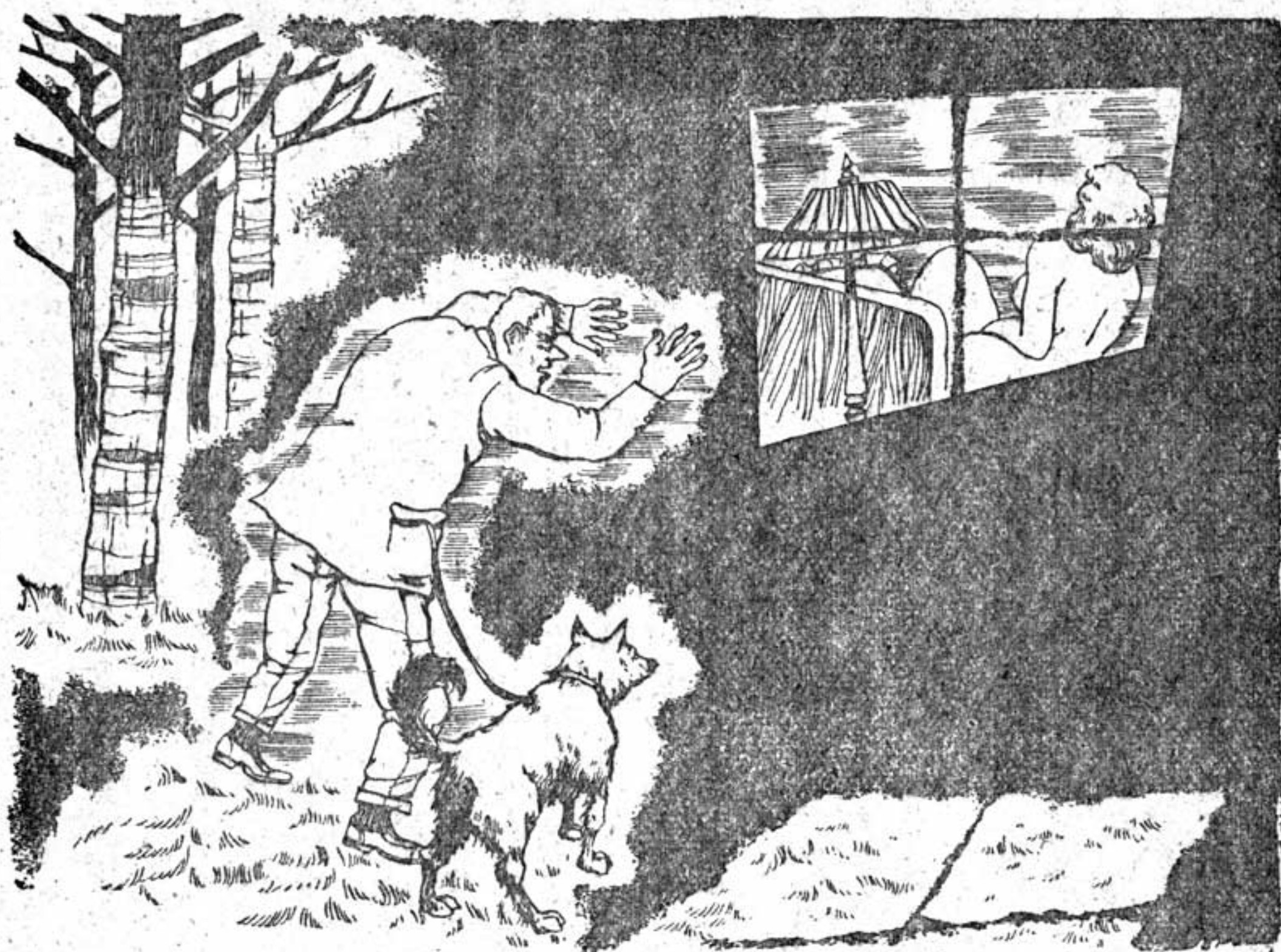
「そんなことはないわ。わたくしが、奈知を愛してはいないつて云う、ただ、それだけのことなのよ」

男は途惑つたように療子を見てから、その豊かな腰を抱いた。見事に恵まれた女の姿態である。それが夏の灯の下に、乳色に光るのだ。と、その胸がビクリと動いた。

「どうしたの？ 奈知さん？」

「バカね、奈知がそんなに怖しいの？ 奈知なんて、わたしをどうにも出来やしないじゃないの——」

療子が怖れているのは、確かに夫ではなかつた。それは窓の外から無限につながる闇である。其処の闇の中になにか無気味なものが



あるのだ。

そのくせ、この女は、カーテンを引くことも、窓を閉すこともしようとはしない。だから、毎夜のようにその闇の中から夜風が吹きこんで、彼女のおくれ毛を吹きあげ、うす紅の乳首を撫でてゆくのだ。

「燎子さん、僕、死んでもいい！」

「フフフ」

「笑ってるんですね。今に見ててごらん下さい。あなたから捨てられたら、僕はきつと死んじやうから——」

「あなたはおバカさんね、死ぬほど愛するってことは、そんな生優しいことではないのよ。本当に愛し合つて、若しあなたが死んだら私も生ては居ませんって誓い合つた恋人同志でも、死にはぐれて、一人で生き残ることもあるんだわ——。その時の、その誓いには露ほどの偽りもなかつたにしても……、そうなの、それが人間なのよ」

ひとり言のように呟きながら、燎子の頬は僅かに紅潮している。

恥ずべき過去にでもふれたように——。

この寢室の二人が疲労の極限に達して、やがてまったく寢入って仕舞つてからも、闇の中には少しの変動もない。

だが、やがて、あのテニスコートの審判台の上から、音もなく男が降りてくる。彼は、今夜も此処に来ていたのだ。男が歩き出すとあの黒犬もノツソリと立ち上つて、猫背の主に従つてゆく。人も犬もなんの物音もたてず、黙念と深夜の道を帰つてゆくのである。

首縊りの家

読者よ、あのセザンヌの名作、「首縊りの家」を思出して欲しい。あの灰色に鈍く沈んだ壁の色と、その壁をとり巻く、無気味に重たい空気の上と——、それだけでいいのだ。

その、林の前の古い洋館の中に入ってみよう。湿気を含んだ、カビ臭い空気が、この家の中に充満している。何処もしめつぽく、薄暗い。前住者の老ドイツ人が縊れて死んだ時から、この家の戸も窓も、思いつき、開け放たれたことはないのだから——。

その薄暗い部屋の片隅に彼がいる。あの猫背の男がうごめいているのだ。しかも、彼は去年の冬の頃から、この家に住んでいるのである。あの、豊の犬と一緒に——。普通の神経なら、到底こんな家に住めたものではない。恐らく一日で発狂して仕舞うだろう——。

しかし、彼はいいのだ。この男は、いわば幽霊なのだから——。いや、不必要に読者を混乱させるつもりはない。つまり、生を否定された男、戸籍を抹殺された男、と云ったほどの意味である。彼はこの廃屋を買取つて殆ど物音もたてずに住んでいる。

朽ちかけた風情が気に入ったのか、なんの手入れもしない。金なら、確か一生不自由のないほど持つてゐる筈だつたが——。尤も、一間だけ彼が一人で造り上げた部屋がある。それだけが、前住者の時にはなかつたものである。

その男が暗い部屋の片隅にいる。こんな暗い中で彼は画架に向つてゐる。ほの白いキャンヴァスが浮いて見えるのだ。そして、彼はどうやら、画筆を握つてゐるらしい。もちろん、彼の足元には、あの黒い犬がうずくまつてゐる。

キャンヴァスに赤く描かれつつあるのは女の首である。腫をとび出す程に見開いて、その一杯にひらかれた、舌の見える口が、無惨

に左につり上つてゐる。よく見ると、口ばかりではない、この女の顔の左反面がすべてゆがんでゐるのだ。

いびつに釣り上つた女の顔——。それに、赤く、黒く絵具がなすりつけられてゆく。一体どんなに病んだ神経が、こんな奇怪な女のマスクを生み出すのであろう——。だが、男は如何にも、もの靜かに画筆を握つてゐる。たしかにそれは鬼気迫る光景だつた。

しかも、その醜惡な女の首を些細に眺めた人は、其処にあの奈知療子の面影を見出すに違いない。輝くような療子の美貌と、セムシ男の描く赤黒い女の首との間に、一体どのような共通点があるのだろうか？ しかし、描かれつつあるのは、たしかに彼女に違いなかつた。

男の横の壁に立てかけられた百号ばかりのキャンヴァスには、胴も手も足も、バラバラに切断された女が描いてある。蠟のような女の手が朱盆にのせられて、棚の上にある。等身大の、石膏の女の胴体だけが、マントルピースの前に転がつてゐるのだ。レプラのようにくずれかけた、女の塑像もある。

それがことごとく療子なのだ。あの美しい女王蜂の奈知療子とは、似ても似つかぬ醜惡な女なのだが、しかし、たしかに彼女に違ひなかつた。キャンヴァスに向つた、この男の曲つた背中が、そのことを雄弁に物語つてゐるのだ。

どうやらこのセムシに近い猫背の男は、怪しくゆがんだその神経が命ずるままに、療子を描き、刻みつつけて暮してゐるらしい。黒い豊啞犬は、元より一声も啼かず、この主を見守つて生きてゐるのである。

男は黒いルパシカを着てゐる、この家は古井戸の底のようにひん

やりとつめたいのだ。そして、なんの物音も聞えやしない。ただ晝間からこの廃屋を包んで、さまざまの虫が沸くように鳴いているだけである。

男が起ち上った。例のようにゆつくり動いて、ドアに手をかける。サツと灯がさしこんだ。その奥の間は意外に明るいのである。と云つても、それは極く普通のブルジョアの書斎となんの変りもない。豊かにととのつた、若々しく瀟洒な雰囲気があるのだ。

ただ、この男の持つ暗いカゲと、その部屋の雰囲気が如何にもふさわしくないのである。男は部屋の真ん中に立止つて、そのテーブルの上の煙草をとつて火をつけた。淡い色の壁に、黒く男の影が写っている。

この男の極端な猫背は、南方で背髄にうけた戦傷が原因である。尤も、外形に現われた故障はそれだけだが、内面的に侵されたものはまだ他にもあつた。神経性不能症というのがある。つまり、脊髄が侵されて、勃起神経が麻痺しているのである。彼は不能者だつた。

サ フ イ ア

その夏の後半から、軽井沢は珍しく雨が降りつづいた。来る日も来る日も雨である。もちろん、奈知家の芝生にも、鬱陶しい夏の雨が降りそそぐのだ。

療子は居間の寝椅子にかけて、爪ブラシで爪を磨いていた。その瞳は焦々と、雨の庭を眺めている。芝生のあちこちの花壇に、五彩のアフリカン・マリーゴールドが、雨に打たれながら咲き乱れている。

これは療子の自慢の花壇である。三寸以上もある大輪のサンジャイアントや、クラウン咲きのマンモス・マン。クラウン・オブ・ゴールド。オレンジ色のバービー・ゴールドなど、ありとあらゆるマリーゴールドが今、最盛期だつた。色も薄桃色、黄金色、純白色、桃色と、雨の中にも眼も綾に華々しい。五彩の色紙をちぎつて撒いたようだつた。そんな濁りのない花の明るい色だけが、硝子戸越しに、雨の中に浮いているのである。

だが療子は、御氣入りのその花々をみつめているのでもない。もの憂い丹念さで、マニキュアの七ツ道具を次々にとり上げる。濃紅色のエナメルを塗つた。その手を眼の前にかざしてみる。爪の手入れが終ると、もう差あたつて、なんの予定も仕事もないのだ。彼女は改めて硝子戸の外の雨に瞳を移した。腹立しい。療子は退屈し切つているのだ。まったく、死ぬ程退屈だつた。しかし、それはなにも雨のせいばかりではない。今年の夏も又、退屈だつた。ということに過ぎないのだ。彼女はもう夏そのものにも、倦怠を感じ始めているのだ。二ヶ月の避暑地の生活にも、なんの刺激もなかったから――。

遠くベルが鳴つて、誰か訪れて来たらしい。療子はもの憂そうにシャンソン、エバーグレイズの午後の服をつけた軀を起した。小間使の後から、パーティ仲間の実枝の顔が見えた。瘦せて色が黒い、声の大きな女だつた。

「今日は誰も、ダンディの御光来はなさそうね。さすがのナイトたちも、この雨には腐つたとみえるわね」

療子はさすがに苦笑しながら、気乗りなさそうに答えた。

「わたくし、軽井沢も飽きちやつたから、今年はもう引揚げようかと思うの」

「あら、あなたが引揚げたら、軽井沢は火が消えたようになって仕舞うわ。御取巻きのダンディたちも、匆々に戻つてしまうから。それに、東京に帰つたつて、あなたは結局今とおんなじの、つまらない顔して暮すにきまつてることよ。それとも、急に旦那様が恋しくなつて？」

「ううん、ただ、浮気もパーティも、みんな退屈で面倒になつただけ。駄にカビが生えて仕舞いそうに退屈なの」

まつたく、療子の白い額から臉にかけて、淫蕩のはての、なにか不健康な疲労の色が漂つてゐる。それを又、美しいと見る人もあるかもしれないのだが――。

「ほんとに、療子さんの御乱行はなんのためだか、誰にも判らないわ。聰明で美しくつて、何一つ不自由のないあなたが、浮かない如何にも退屈そうな顔で火遊びしてるのだから――。軽井沢の七不思議の一つだわ」

喋りながら実枝は、サイドテーブルの上の、開けつ放しになつた宝石箱を覗きこんだ。さまざまの高価な宝石からなつた、豪華な女の装身具が、こぼれる程にも詰つてゐる。

「まあ――、さすがに奈知夫人の宝石箱ね、あたしには眼がくらみそうだわ、――あら、これはサファイアね？」

実枝は青く冷めたく光る、大粒のサファイアを嵌めこんだ指輪をつまみあげた。

「サファイアでも、こんなに美しく瑠璃色に光る、見事な石は今迄に見たことがないわ」

「それはわたくしの誕生石なのよ。わざわざその石を捜して、エンゲージ・リングにして下さつた方が、昔、居たの……」

「あら、その許嫁の方はどうなさつて？」

「十年前に、戦死したわ」

実枝は療子の表情をみつめて、ちよつと途惑つた色を見せた。だが、世馴れた風に調子をかえて、

「サファイアと云えば、わたし、こんな見事な石じゃなくつて、極く平凡なサファイアだけれど、最近一つ手放したのよ」

「……」

「ちよつと主人に内緒で、纏つたお金の必要があつて売つただけど、その買手と云うのが変つてゐるの。近頃よく町にビラが貼つてある、サファイア買入れの広告を見て尋ねて行つたら、まるでもう、壊れかかつたお化け屋敷なの、気味が悪くつて帰えろうと思つたけれど、思い切つてベルを押したら、玄関にひどい猫背の男が出て来て石を見るなり、黙つてお札を出してくれたわ。それが時価の三倍ほどにも相当する金高なのよ。御知り合ひのお宅でも手放された話を伺つたけど、やはり不相応に高い金額ですつて……」

「よほど変質的な蒐集家なのね」

「一言も口は利かないの。とてもお品はいいけれど、蒼白な顔をしたらまあ、病人のような男なの。なんだかその家も男も、ゾツとするほど無気味だつたわ」

療子はしばらく彫りの深い横顔を見せて庭を眺めていたが、ふと実枝の方に向き直つた。

「実枝さん、そのお化け屋敷つて、何処なの？」

「まあ、あなたはあんな処に、いらつしやる御用はないじやない

の？」

療子はなにかもの寂しそうに微笑んで見せた。

「御話伺つたら、なんだか其処に行つてみたくなつたの。それに、このサファイアには辛い思出があるから、機会があつたら、手放したいと思つていたの。」

復讐

林を背にした古い洋館は、雨の上りかけた黄昏の中に、灰色に沈んでいた。

その前の道に女が一人現われた。療子である。濃い御納戸に、朱やねずみ、銀黄などの水玉が散つた緞の訪問着を着ていた。その水玉模様は裾に一面に濃く、それがだんだんあらく、肩のあたりは極くまばらの飛び模様である。帯は洗い朱に銀の観世水が縫いとつてある。

なんだか、行つてみたくなつたの、と彼女は実枝に云つた。そう、ただそれだけで、療子は来たのである。何故だか、彼女も知らないのだ。例の門の前で、彼女はしばらくためらつた。だが、ひかれるようにその門をくぐつた。人の丈よりも高くのびた雑草が、両側から女にかぶさつて、その露が彼女の肩から胸につた

わつた。

ドアの前に立つて、赤くマニキュアされた指が、かすかに震えながらベルを押した。一度、二度——。と、ドアが内にひらいた。ギョツと、思わず一步退いたが、其処には誰も居ない。ホールは暗か



つたが、二、三間先のドアがひらかれていて、其処は明るく灯がとぼつている。どうやら客間らしく思えた。

療子はしばらく待つたが、誰も現われず、なんの物音も聞えない。ふと、ドアの開かれた客間のつき当りの壁に、遠く見える油絵に気がついた。なにか、見覚えのある構図だったのだ。

「ああ、ゴーギャンの、黄色のキリストだったわ」

と、思つた。そして、そう思つてから、療子はギョツとしていた。見知らぬ家の、始めて訪れた客間にかけられた絵を、彼女が知る筈はないではないか――

療子はしばらく、その絵をみつめた。やつぱり、彼女の知つてゐる、あの絵に違いなかつた。彼女はフラフラとまるで招かれるように、その客間に入つていつた。

絵の下に立つた。部屋の中を見廻した。

「やつぱり、あの部屋だ――」

そう思つた。そして、療子は鋭い叫び声をあげて、飛びすさつた。

彼女の、氷つたような視線の先に、切子細具の灰皿がある。その上に、ほんのついさつき、吸いつけられたばかりのように、一本の煙草が、ゆるく、紫の煙をただよわせているのだ。

それから暫くして、療子はオズオズと、そのテーブルに近づいて行つた。その生きている煙草の傍の、銀のシガレットケースをとり上げたのである。

間違いはなかつた。そのエジプト模様の彫刻のある銀のシガレット・ケースは、たしかに以前、療子自身が、ある一人の男性に贈つたものに違いなかつた。ガチャンと音がして、ケースが彼女の手から辿り落ちた。療子の腫が足元に落ちる。自分の立つている、その

暗紅色の絨氈にも見覚えがあつた。

鈍く、壁から窓に、窓からカーテンに、飾棚からマントルピースに、療子の視線が移つた。机も書棚の置き場所も、みんなあの時のままである。いや、そこに並べられた本の一冊一冊でさえ、あの時と寸分違わないのだ。

「あの方のお部屋だわ、あの時の……」

乾いた声で押出すように呟いてから、療子はワナワナと震えている。

「ちがうわ、そんな筈はない。こんな軽井沢の林の奥に――。この部屋は東京の世田ヶ谷で、戦災で焼けて仕舞つた筈なんだわ――」

恐怖にひきつった腫が、部屋中を震えながら辿つた。壁にとりつけられた燭台の飾りにも、ソファのカバーにも見覚えがある。そして、その傍の丸卓の上の青磁の壺には、あの最後に訪れた時に、彼女自身がたずさえて行つて活けた通りに、黄色のチューリップが五本活けられてあるではないか――

療子は突然パタパタと、この部屋の隅に置かれた、ピアノの傍にかけよつた。黒く光つたピアノの上に、レースの手袋が置き忘れられてあるのだ。

「そうだわ、あの、最後にお別れした、御出征の前の晩に、療子が忘れて来た手袋だわ。ホラ、まだジャスミンの匂いがする。療子はあの頃、この香水を使つていたのだから――」

彼女は狂つた腫をあげた。

あの方の御部屋に違いはない――。しかし、たとえば、これ等の道具類が疎開されて、焼けずに残つていたにしても、この通りに、この部屋を再現出来る人はいない筈だった。その人は戦死して、この世

に居ない人だつたから——。

現実か、幻想の世界なのか療子にはもう判らなかつた。フラフラと歩いて、深いグリーンのカーテンを引いた。其処に、ベッドがある筈だつたから——。そして、ベッドはあつた。それから、枕元に額縁に入つた写真がある。それは丁度十年前、二十一歳の頃の、彼女の面影に外ならない。彼が以前、其処に飾つていたことを、女は知つてゐるのだ。

療子は自分自身の、若く、純潔な映像に見入つた。

「ホホホホホホ」

怪鳥の声のように、女は笑うのだ。ベッドの上をころげ廻つて。

その時、そのベッドの下から、黒いものが這い出して来た。療子の顔が恐怖に、無惨にひきつた。黒い犬が声もなく這い出て来て彼女の足元にうずくまつたのである。二分、三分、そして、

「あッ！ アムール！ お前はアムールなのね！」

老いた黒犬はちぎれるように尾をふつた。療子はベッドから裾を乱してころがり降りた。狂わしく、犬の首を抱いていた。

「アムール、アムール！ 誠さんはどうしたの？ 誠さんは何処にゐるの？ ねえ、アムール、お前が何時も傍にいた、御主人は何処にゐるの？」

彼女は子供のようにすすり泣くのだ。

「ねえアムール、誠さんはやっぱり戦死したのね、わたしは、誠さんと誓つたわ、あなたが死んだら、わたしも決して生きて居られやしない、きつと、一緒に死にましようつて……、ああ、だけど、私は死ねなかつた——」

女は、涙の乾いた顔を上げた。再び、ピアノをみつめている。

あの方は、あの時、ピアノを弾いて欲しいとおつしやつた。あそこ、ひらかれてあるあの楽譜は、わたしは見なくとも判つてゐる。あれは、ショパンの、別れの曲なのだ。

朽ちかけた廃屋から、華麗なピアノの旋律が流れ出た。華かな着物の衿も裾も乱れた女が、しつかりと瞳を閉じてピアノに向つてゐる。鬼気迫る、その旋律の流れ——。

音が止んだ。しかし、女は後ろからその肩を抱かれてもしたように、うつとりと動かない。そして、かすかに囁くのだ。

誠さん、わたくし、あなたが、若し戦死でもなさつたら、わたくしも死んで仕舞う。いや！ いや！ 生きてなど居られない！

ほんとうよ、誓つてよ。ねえ、どうしたら死ぬの？

女は立上つた。十年前に恋人がそうしたように、机の上の手箱を明けた。其処に、小さな鍵がある。そして、その人がその鍵をさしこんだのは、その机の、一番下の抽出しだつたのだ。其の抽出しに黒いレツテルを貼つた、小さな青い壘がある筈だつた。

あつた！ 女は十年前にその恋人がした通りに、その小さな壘を灯にすかして見た。

この、ほんの耳搔き一さじの分量でいいんだよ——。

彼女は壘を握りしめて、疲れ切つたように、ニタリと笑つた。

やがて——。あの猫背の男が、何時ものように、ギイとドアを明けて外に出た。その後から、やっぱりあの老いた黒犬が、ひつそりと従つてゆくのである。深夜の道を、犬を連れてゆく男——。

奈知療子夫人の死体は、林の、朽ちかけた洋館で発見された。しかしその後、あの猫背の男と、黒い壘啞犬の姿を見た者はいない。



手記集 ★ 主君めに憑心がゆて……

華麗な惨虐の回想

進藤江利子

私の記憶では、一番始めは金魚でした。八、九才の頃なんです。夏風邪をひいて学校もおやすみして、子供心にも鬱陶しい気持で閉じこもっていました。

ぼんやりして、本を読むのも、ままごと遊びも嫌、といった気持だつたと思います。ふと、眼の前の金魚鉢に気がついて覗きこみました。藻をくぐりながら、大きな尾びれをゆるく動かして真赤な金魚が泳いでいるのです。鱗が金色に光つて、息が止るように美しいと思つたことを覚えています。

そのまま、確か一時間近くも覗いていたと思います。その間の心理はちよつと思出せないのですけれど……気がついた時には、私は金魚鉢の中に手をつつ込んでいたのです。驚いて逃げ廻る金魚を追いつし、丸っこい金魚の胸をギュツと握りしめました。その冷めたい、弾力の

ある不思議な感触！

掌をひらくと、もろい金魚はもう断末魔で、私の白い手の上に横たわり、ビク、ビク、と痙攣しているではありませんか——四、五へん痙攣すると、もう金魚は動かなくなつて仕舞いました。私はその美しい金魚の死骸を、暫く手に乗せたまま、恍惚と眺め続けたのです。

それから、幾匹も／＼の金魚が、私の掌の中で息絶えしました。逃げるのを追いつし、それから握りしめた時の、金魚の肌のなんともいえぬ感触——。しかし、一番私を恍惚とさせたのは、私の掌の上で、赤い金魚が、ビク、ビクと動く時なのです。

その小さな痙攣が掌から、私の全身につたわつて行つて気が遠くなるようでしたもの。——金魚鉢の五匹の金魚が皆、こうして私の掌で昇天しました。夕方でしたが、私は



何かグツタリして、そのまま眠つて仕舞つたのを覚えて
います。

それから幾度となくこうしたことを繰返すうちに子供
心なりに飽きたらなくなり、刃物で殺すことを覚えたの
です。鋭利な小刀で、金魚の腹をスーッと割くのです。
その瞬間は、私自身の血も氷るようなスリルでした。な
るべく瞬間的に殺さず、時間をかけて、苦悶の状態が永
いほど、満足感が多いことも知りました。

そのうちに、家の者が気づいて、もう金魚は買つて貰
えなくなりました。変質的な女の子と云うわけで、父が
非常に心配したようでした。私は事情があつて母と生別
し、肉親は父一人ですから、晝間は二人の女中相手に暮
らしていたのです。

どうせ雇人根性で、父が勤めに出ると、女中たちは二
人でお喋りばかりしていて、私は放任状態でした。私
も、かえつてその方がよかつたのです。一人で広い庭を
歩き廻つて、蟻の首を切つたり、トンボの羽根をむしつ
たり、カタツムリの殻をはがしたり、一日中飽くことを
知らない有様でしたから――。

蛙をハリツケにしたり、四十雀の羽根を抜いたりして
女中たちを、

「女の子とは思えない」

と、身震いさせたのも、この頃のことだつたと思いま
す。しかし、黒の美しい揚羽蝶などの死骸は、手箱の中
に入れて大事に保存したりも致しました。

それから、毎日雨が降りつづいた頃ですから、丁度梅雨
の時季だつたかと思ひます。庭に出れませんから、部屋で
焦々として居りますと、ふと、人形が眼につきました。そ
れは父が、私の性癖を案じて、少しでも優しい感情が養い
たいとの親心から、買つて来て呉れたものです。

金髪の美しいフランス人形でしたが、やはりみつめてい
る裡に、ムラムラと感情が昂ぶつて、ナイフでバラバラに
切断して仕舞つたのです。美しい人形が奇妙な恰好に破壊
されたのを見て、満足しました。

この事件は非常に父を悲しませ、そのため、自分でも特
異児童であることを悟るようになりました。しかし、間も
なく父が外遊することになり、私は青山の伯母の許に預け
られました。こうして急に環境が変つた爲か、忘れたよう
に、虫類を殺傷することが止んだのです。

三、四年、何事もなく、極く普通に成長致しました。孤
独で陰鬱な女の子ではあつたようですが、とり立てて変つ
たところがあつたとも思えません。自分でも以前のことは
殆ど忘れて居たくらいですから……。

ところが女学校一年生の夏のことでした。その頃、伯母
は学校を経営して居りましたので外出勝ちであり、やはり
家庭は女中任せの状態でした。子供はなく、私一人でした
が、近所には手頃な友達もなく、裏の、石屋の男の子が、時
々遊びに来るくらいだつたのです。この信ちゃんやと云う子
は、その頃十二、三で非常な腕白でした。木登りが好きだ
つたので、樹木の多い伯母の邸に遊びに来ていたのです。

或日、庭に出ますと、何かボンと頭に当たります。見ると、ザクロの木の上に、信ちやんが登つて、小さな青い実をぶつけて笑っているのです。私は思わず駆けよつて「覚えてらつしやい。落つこととしてあげるから……」あまり太くもないその木を、ユサユサとゆすぶり始めました。

始めは冗談のつもりでしたが、信ちやんが真蒼になつて枝にしがみつくのを見ると、面白くなつて、尙のことゆすぶり続けたのです。

「ごめんたら——、お嬢さん、堪忍しとくれよオ——」

「駄目、落つことしちやうわ」

そして、信ちやんは、本当に落ちて仕舞つたのでした。あまり高くもない木だつたのですが、打ち処が悪かつたと見えて、フラフラ起き上つた信ちやんの顔は鼻血で真紅だつたのです。

血を見て、始め私はビクツとしたのです。しかし又、躰がジーンとしびれるような氣持がして、信ちやんが顔を蔽つた両手を引きはがすようにして、跡から跡から流れ出る鮮血を、ジツとみつめました。この時もやはり、氣が遠くなるような氣持だつたと思ひます。信ちやんも泣くのを止め、ジツとして居たのです。

翌日学校から帰ると、又信ちやんが遊びに来ていて、私の顔を見ると、少し恥かしそうな顔でニコリ笑ふのです。氣嫌をとるように私の顔をのぞくので、悪い氣持はせず、又庭に出て遊びました。

思えば、この石屋の信ちやんにマゾ的な要素が多分にあつたため、今の私のような、サヂストが出来上つたとも云えるのでせうか——。

庭が広いので奥に入ると、女中たちの眼は届きません。以前に植木屋が寝泊りしていた、壊れかけた小屋もありました。私達は毎日のように、好きなことをして遊べるのです。私達と云うより、私の好きな通りに、と云うべきかもしれませぬ。石屋の信ちやんは、決して私の命令に逆いませんでしたから……。

年下と云つても、近所一の腕白である信ちやんが、私の命令通り、易々と縛られたり、打たれたりするのが、たまらなくよい氣持なのです。晝頃小屋の柱に信ちやんを縛りつけ、私は部屋に歸つて宿題などを片づけ、夕方頃に小屋に行つてみると、信はそのままジツと縛られているのです。そして、そんな時の哀願を浮べた表情を見ると、そのまま素直に解放してやる氣にはなれず、土間に転ろがして顔を靴で踏みつけたりしました。

信は悲鳴をあげますが、翌日は又遊びに来るのです。私は嫌がる彼の衣類を剥ぎ、少年の尻を、木の枝で幾度も幾度も打つたこともありました。

丁度その頃、学校の帰途、大人の男たちが四、五人で、大喧嘩をしているのを見掛けました。その内の二人は、臉が切れ、唇が破れて血だらけの凄惨な形相だつたのですが息もたえだえになりながら、まだ撲り合いを演じているのです。



人だかりがしていましたが、皆、遠くから見っていました。しかし、私はその喧嘩を見ると、ついフラフラと引きよせられるように、傍まで近より、ぼんやり立って見て居たのです。

「お嬢様、危いですよ！」

と、出入りの魚屋から引っぱられて、やつと我にかえつたような状態でした。

その時の光景は後になつてからも、時々思出しました。大の男が血を流す凄惨な情景を空想すると、躰が硬直するような氣持がするのです。そのため、街に買物などに出て、刃物屋の前を通ると、ウインドの中に並べられた鋭利な刃物にひきつけられ、暫くは其処から離れることが出来ません。



嗜虐

私の異常性欲は、比較的中年になつてから始つたものです。それは、前妻のマゾ的傾向が契機となつて、誘発されたものと考えられます。尤もそれも、私の裡に眠っていたものが、目を醒したと云うべきでせうか——。

とにかく、私共夫婦は非常に好くいつておりましたの

放浪記

天野 鐵 治

とうとうその中の一つを小遣で買つて仕舞いました。しかし、それを使うつもりではなく、時々とり出して眺めては空想し、たのしんでいたのです。

ところが、その年の暮のこと、何時ものように小屋で遊んでいる時、石屋の信を縛ろうとすると、どうしたことが嫌がつて反抗したのです。私はカツとなつて、すべてを忘れて仕舞い、小屋にかくしてあつた刃物を取り出すと、おびえる信の背中を傷つけていました。

始めはオドすだけのつもりでしたが、刃物をつきつけられて、驚愕する信の顔を見、必死に逃れようと焦るのを見ると、私は傷つけずには居られなかつたのです。

浅い傷でしたが、家中大騒ぎになりました。そして、私はその夜初潮を迎えたのです。

です。時計商を営んで居りますが、商売も夫婦仲も万事好都合にゆき、私は満足しておりました。ところが一昨年妻に死なれて仕舞いました。丈夫な女でしたが、二、三日病んで亡くなりました。私にとっては晴天の霹靂です。一挙に人生最大の楽しみを失つてしまつたわけです。



ガツカリして、腑抜のようになり、仕事も手につきません。親類の者たちは、

「後妻を世話するから……候補者が沢山いる」

と申しますが、そんな話は本気で聞く気持もないのです。亡くなつた妻は、私にとつて、まったくかけがえない女だつたのですから。

ここでちよつと、私たちの夫婦生活を申し上げますと、結婚したのは二十八才の時、三年ばかりはただ平凡な生活だつたのです。（現在私は三十九才です）

結婚して三年目頃、丁度倦怠期と云えるかもしれませんが、別にそんな自覚もなかつたのですが——。妻が肩が凝ると云つて、人にすすめられて灸を始めたのです。始めは近所の婆さんに、すて貰つていたようですが、私は関心ありませんので、覗いても見ません。

ところが或日、

「二、三日すえないから、すみませんがちよつと火をおろして下さい」

と、頼まれて、何の気もなく線香を持ちました。妻は中肉ですが、色の白い躰で、肌拔ぎになつて、前こごみになつた姿勢を、いいなあ——と思いました。ちよつと痛々しい気もしましたが、モグサに火をつけると、妻は両手を揚りしめ二つ折りになつて、声をあげながら、耐えているのです。

私は吃驚して、
「熱いだろう？」

と云うと、

「それは熱いけど、躰が締つていい気持だから——きつとそれが効くのでせう」

と云います。私はそんなものかと思つたのです。しかしそうして耐えている妻の様子が、とても美しくいじらしく思われて、興味を持つようになつたわけです。

夕飯がすむと、私の方から妻を促して、毎夜、火をおろすようになつたのです。だんだん過激になつて、妻の苦しみが大きい程、ゾクゾクするような、不思議な喜びで、亢奮もひどくなります。

妻の方でも、同じように快感があり、私のするままに、逆らつたこともありません。その跡は二人の気持がピッタリして、夫婦生活のよさというものがシミジミ判るような気さえしました。又、私は妻の白い背中の灸の無惨な傷跡を見るのも、とても好いものでした。

しかし、あまり過激になり灸の跡が糜爛して、妻は仰向きにも寝めなくなつた頃、自然に次の方法を覚えて、たのしみは、灸だけには限らないことを知つたのです。それは咬むことによつても、同じ刺激があることが分つたわけですから。

これも、だんだん激しくなり、夢中になつて血のにじんだ齒の跡がクツキリ浮上つているのを見るのが、なんとも云えない気持です。

咬む場所によつて、妻の反応が異なることにも気がつきました。妻の亢奮の激しい場所が、私も又好いのです。切な

さそうな様子を見るのが、とてもたまらなく、いじらしさと快感と交り合つたその気持は、ちよつと書き現わせないものです。

時々妻は、

「あーあ、こんなに傷だらけになつて、私、人と一諸にはお風呂にも入れやしない」

と云つたこともあります、そんなことを云いながら、私をみつめている眼が笑つて、

「それが嫌なら、出ていくんだな」

と云うと、

「嫌ぢやないからあんたの好きになようにして——、どうせ私の躰は、あんたのものだもの——」

と、しみじみ述懐したこともあり、世間から見れば、ずい分異常な夫婦でせうが、私共はこうしてお互に喜び合ひ、満足し合つて居たわけです。

その後、二人で相談しては、いろいろの方法でたのしみしました。

今になつて考えますと、当時の妻との行爲は、サヂズムから云えば、ほんの一部分であり、かなり幼稚なものであつたわけです。



ところが、私の異常性欲が亢進したところで、この妻にポツクリ亡くなられたのです。大の氣に入りの玩具を奪われた子供のような気持もあつて、ガクリと氣が滅入つて仕舞いました。三十五才の時です。

なんのたのしみもなく一年近く暮すと、かつての夜のことが思出されて、氣が狂いそうになりました。孤独に耐えられなくなり、すすめる人もあつて、若い未亡人を後妻に迎えたのです。

後妻を迎えた夜は、一年間の禁欲状態の後なので、私は非常に亢奮して居たのです。始めての女性であることも、自分が異常性癖であることも忘れて、私は床に入るなり、亡くなつた妻にした通りのことを行いました。

結果はみじめで、狼敗しました。今度の妻はそれを非常に嫌がり（それが普通であるかもしれませんが）無氣味がつて拒絶します。非常に嫌惡の眼で見られ、しまつた、と思つたのですが、私の方でも期待していただけないと思ひました。

次の夜は、私も自分を押えましたが、しかし、私にはまったくもの足りず、快感らしいものは殆どないのです。とうとうその次の夜は、亢奮して夢中で嫌がる妻を縛り上げ



たところ、妻は翌朝実家に逃げ帰って仕舞つたのです。

私は其処で、自分の性癖がまったく異常であることを思い知らされ、煩悶しました。しかし、現実の私の肉体はこのままあの喜びを諦めることは出来ないのです。と云つて、私の注文に合つた女を捜すことは困難です。事柄が事柄だけに、確かめることが出来ないわけです。

私は再婚を諦め、商売女の許に出掛けるようになりました。なるべく、元の妻に似た感じの女を捜すのですが殆どの場合案に相違して、怒鳴られて仕舞う結果になります。中には肩のあたりを咬むくらいは許してくれる女も居ますが、そんな、ほんの申分ける的な行爲では、私は少しもたのしくないのです。

何時の場合も失望ばかりです。この頃は雑誌などでも変態性欲を扱つたものが多く、責めの写真や、縛られた女の絵などが沢山目につくわけです。私は自然こうした雑誌や秘本類を耽読し、いろいろ知らなかつた知識を覚えるようになります。責めの写真など、

「こうして遊んだら、さぞかし嬉しいだろうなあ——」
と思ひながら、飽かずに眺め、一人でもいろいろ想像し工夫しては、女の苦悶と歡喜の姿を頭の中に描くのです。

ところが或夜、向島の娼家に泊つた時、やはりサチズムの行爲を行はうとしてきびしく拒絶され、その遊びなしでは全然興味がないので、(事実その異常行爲がなければ、当時、私はインポテンツの如き状態に陥入つてい

ましたのです) ぼんやりしていますと、さすがにその女は気の毒になつたのか、

「あんた、本当にそんな変態なことが好きなの？」
と、問うのです。

「ああ、とても普通では駄目なんだ。僕の相手になるような、変つた女はいないかなあ——」

「ないこともないわ。もと私と同じ家にいた友達が變つていて、絞めたり、ブタれたりすることが好きなのよ」

と、云う返事ではありませんか——

「しめた！」と、天にも昇る気持で、一度に元氣が出ました。しかし、新宿ということと、名前だけを頼りに捜すのは、容易なことではなかつたのです。

やつと、その女の居た店を捜し出すと、もうとつくに店を出て仕舞つたという返事で、今度はあの辺りの街娼を懸命に尋ね廻つたものです。

しかし、半年ばかり前に、やつとめぐり合えたわけですが、この女は街娼になつていて、海千山千のあばずれです。徹底したマゾヒズムで、私の病癖とはピタリと一致するのです。それ迄、私が前妻と行つていたことは、まったくこの種の行爲としては初歩だつたことを知らされたような次第です。

この女の好みは一段と強烈で、鞭打ちや、縛り上げなどを好む徹底ぶりなのです。私は夢中になつてこの女の許に通いましたが、遂にこのサチズムの魅力には勝てず、彼女を失うことが恐ろしいばかりに、小さな家ですが一軒買つて





彼女を住わせることにしたのです。

いはば二号ですが、永い間飢えていた私は、毎晩のうに通はずには居られない有様です。今はまったく満足して居る次第です。

彼女がこのように極端なマゾヒストとなつた原因は、



怖るべき教師おそききょうし

丸岡 泰子

私が女学校の舎監をしていたのは、まだ戦争中のことです。その頃のことですから、万事軍隊式にきびしい鍛練を行っていたわけです。生徒は工場に動員されていたし、工場関係者も、学校の校長や教頭などの責任者たちも、半ば神がかり的になつて、殺氣立っていたものでした。

私はまだ学校を出たばかりですが、家庭の都合もあつて寄宿舎に住み込み、七十名ばかりの生徒を預つていたのでした。ところが、或る時、その生徒の中の一人が、病氣と偽つて工場を休み、皆の留守に映画見物に出掛けたと云う事件が起つたのです。

当時としては大事件です。校長たちは非国民的所業だと怒りますし、私までが、責任不行届としてさんざん油

まだ故郷に居た娘時代に、暴行された爲であると云つて居ります。騒いだため、男二人が彼女に猿ぐつわをして縄で縛り上げたと言ふわけです。この時の恐ろしさが忘れられず、普通では何の快感もないと云つて居る次第です。

を絞られたのです。やがて、責任者として、嚴重に訓戒するように、と云われて、このA子を連れて寄宿舎に帰りましたが、胸は煮えくりかえるようです。

もう夜遅くなつていましたが、舎監室でA子と向き合いました。さんざん叱責しましたが、こちらも感情的になつていた爲か、A子はフテ腐れて反抗するような態度さえ見せるのです。

私はカツとなりました。この娘の爲に、さんざん校長たちから嫌味を云われた、と思うと、ムラムラと憎しみがこみ上げて来たのです。私は思わず手を上げて、よく肥つたA子の頬に平手打ちを加えていました。

「あッ！」

ピシツと云う鋭い音と私を見上げたA子の瞳に現われた



驚愕と、怖れの色を見ると、何故か胸がスーツとするようにいい気持ちだったのです。

「あなたは、よくも先生の顔に、泥を塗ってくれたわね」

夢中でA子の肩をつかんで、ひき倒し、半ば馬乗りになつて撲りつけたのです。亢奮のため、息切れがして、私は喘ぎながら撲つたのですが、その自分の姿勢がますます、亢奮を誘うのでした。

A子は、始めはタカをくくつていたようでしたが、私が蒼白になつて馬乗りになつた時、心の底から恐怖を感じたらしい様子でした。ヒイヒイと声をあげながら、必死に哀願の瞳を向けます。

その、家畜のように無力な、怖れと哀訴を含んだ瞳を見ると、一層私の気持は駆り立てられ、煽られてくるのです。それから、若い女の躰の、弾力のある手ごたえ、苦痛に足をふんばり、のけぞらせた時の姿態——。そんなものが一時に迫つて来て、私の神経を逆上させたわけです。

私は逃げようと立ち上るA子の後から、髪をつかんで引きずり、気がすむまで撲り、ツネリ上げました。やつと折檻が終り（と云うのも、私の力が盡きて仕舞つたわけですが）A子を解放した時には、私はペツタリと坐つたまま、ハアハアと喘いでいたくらいです。とうに、消澄時間も過ぎていました。

この一夜が、実は私の将来を決定づけたとも云えるの

です。それまで、陰気で内攻的な、目立たない教師だった私が、すっかり変つて仕舞つたのです。普通は何の変りもない教師ですが、一たび生徒の違犯を発見すると、早速舎監室に連れこんで懲罰を加えるのです。

丁度、十四、五から十七、八才位までの、育ち盛りのピチピチした娘たちです。撲つても、絞めても、ツネつてもその手応がたまらない快感を呼ぶのです。こころみにつけ加えますと、私は非常に瘦せて、十貫そこそこの体重しかありません。

それなのに、どう云うものか、肥つた、躰の大きな、いわば鈍重な感じのする生徒を折檻するのが、とてもいいのです。又、その方法も、始めの裡は打つたり撲つたりするのが主でしたが、そのうちに、長く時間をかけて懲らしめる方法を探るようになりました。

例えば長時間、身じろぎもさせずに正座させて、動くとかで膝を打つのです。又、食事を停止する方法にも、思わぬ喜びがあつたのです。五人、六人と、罰を受ける生徒が多い時には、この停食を命じました。その頃は食事が何より楽しみな時代です。

みんなが食事を始めている食堂の真中に、その生徒たちを並べておいて、食事を与えないわけです。私はその生徒たちの表情を眺めていると、ゾクゾクするような、不思議な快感を覚えるのでした。私の命令一つで、どんな苦痛でも、この娘たちに与え得る、と云う複雑な優越感もたらず喜びだつたと思います。

そんな風に、私の態度が苛酷になり、少しのあやまちでも容赦しませんから、生徒たちは怖しさに、朝から晩まで、ビクビクして、私の前では神経を弓のように張りつめています。何時も私の表情を盗み見て、一人一人が緊張の極限に達しているのです。

そんな生徒の態度が又、私には素晴らしい見物なのです。ゆつくりと、生徒たちの顔色をたのしみながら、巡回する時の気持はなんとも云えまん。

そんなわけで寄宿舎の規律は厳重に守られ、生徒の態度は模範的(?)ですから、校長や工場関係者は大喜びです。みんな私の、統制力の賜物だと云うことになり、非常に賞讃される始末でした。私も思映ゆい気持もしましたが、当時の国情として、戦争に勝つと云う目的の爲には、どんな手段もゆるされた時ですから、相当苛酷な処罪をしても、充分口実は私にあつたわけなのです。

生徒の怠惰、精神的遅緩を戒めると云う、大儀名分があつたからです。だから、私自身の好みから、相当惨酷な懲罰を加えたのですが、生徒はかげでブツブツ云うばかりで、泣き寝入りの状態だつたわけです。

こんな風にして、私は殆ど毎晩のように、自分の部屋に生徒を連れ込み、懲罰を行いました。いろいろの方法を行いました。髪をつかんで、グイと引上げる時、両手で宙をつかんで、軀をのけぞらせる姿勢がとても好きでよく行いました。みじめな表情がよく見えるからかと思えます。

又、私自身の、責める時の態度や姿勢なども、とても気になつて研究したのです。あまり、粗野で下品な言動になるのは好みません。飽くまで冷然と、芸術的(?)なのが良いのです。それから、私の思い通りのみじめな表情や、姿勢をした生徒は、その後ではなにか愛しく、抱きしめたくなることもあります。

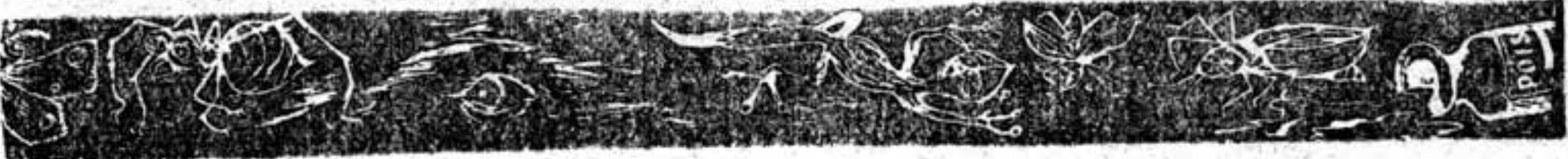
しかし、いくら罰を加えても、あまりとり乱さず、かえつて、私を蔑げずむような眼でみる生徒は、カツとなつて、憎悪でひどく責めますが、その時はあまり快感はなくイライラするばかりで、たのしくはないのです。

責められていることだけで夢中になつて、打たれながら、必死の哀願の色を浮かべて私の足などに、思はず抱きついてくるような生徒を、私は好むのです。その柔い軀を蹴飛ばして、ドタリと転がる時の、快感がたまらないのです。

そんな風にして、半年ばかり憑かれたように過した時、あの終戦を迎えました。そして、一切が終りでした。私はすぐ生徒たちの糺弾を浴びて、学校を追われたのです。それから、私は転々と職場を変わりました。

学歴に不足はないので、就職先には困りませんが、私の異常性癖は、普通の平凡なお勤めには飽き足らないのです。刺激のない毎日は死ぬ程退屈で我慢が出来ません。結局、若い女性の集団を監督するような職業を選ぶことになりました。

メイド養成所、ショップ・ガールの寄宿舎や、女子アパ



トの監理人など、幾度も転々と致しましたが、すっかり時世が変つたのですから、こんな私のサチズムを満足させてくれる筈がありません。何時も問題を惹起して退職ということになります。

こうして、私は今年三十七才になりますが、未だに独身です。知人から、

「寄宿舎や寮などの生活ばかりで、大変ですね、毎日、味気ないでせう？」

と、同情されると、ヒヤリとします。しかし、それ以上、あれこれと憶測されることもないので助かります。

しかし、縁談も結婚の機会もなかつたわけではないのですが、結局自分の異常な傾向が、私を引きつづけているわけです。

現在は某県のある織物工場の、女子工員監督、及び寮の舎監を兼ねて居ります。私が此処に落着いていることで推察出来るように、此処はまだまだ封建的遺風の甚だしい土地柄です。工員の自覚も乏しく、会社側は驚くべき搾取を敢てしているのです。

それに、この会社は極く小さな個人経営ですから、営利だけしか眼中にない工場主は、向う見ずに女工員たちを酷使するのです。だから、期せずして、私の異常性癖がこの工場主に役立つたわけです。

私は女工員の監督、指導一切を任され、思う存分にこれ等の不幸な娘たちを、懲罰する権利があるのです。寮の門限におくれる娘たち、上役を誹謗した者、仕事を怠

けた者など、みんな懲罰の対象になるのです。

女工員たちは殆どがよく肥つて、がつしりした躰つきです。少々撲たれても女学生ほどには感じませんから、体罰も此処では一段と苛酷になるのです。鞭や棒などが使用されます。しかし、翌日の作業には差支ない程度に――。

無知な娘たちを相手に、有分に責めの快感をたのしませる時には私はまったく生甲斐を感じるのです。その爲には一晚中眠らなくとも平気なのです。夜業の時など、怠けて居眠りなどする者を発見すると、酷寒の頃でも、バケツの水を浴せてやります。なんと云つても、その時の、みじめな、苦痛に満ちた娘の言動が、私をたまらなくさせるのですから――。

又、翌日、縛られた傷跡を撫でながら、鞭で傷んだ腰をのびしながら、必死に苦痛を耐えて、作業している姿を見るのも一つの喜びなのです。仕事の受註が多く多忙の時など、工場主の意のままに、むしろそれ以上に、残業につぐ徹夜で、作業を完成させることもあります。

疲労困憊の極に達して、もう意識もなくなつたような表情で、機械にとりついていて彼女たちの間を、私は鞭を片手に巡回するわけです。女工員たちはかげで私のことを、

「鬼婆あ」

と、呼んでいるようです。しかし、ヘンなことを云うようですが、私は現在に至るまでも、まだ処女を失つてはいないのです。



室 歡 交 者 読

嗜 虐 倶 楽 部

大 槻 久 良 二



女を虐めて悦びを感じる心理は、ふつう正常な神経をもっている男にも多かれ少かれ潜在しているものです。愛するがゆえにその相手を虐めると云うことは、確に変態であるかも知れませんが、これは征服欲と云うものがそうしたかたちをとつてあらわれたもので、女の場合にもこれと同じものがあります。

私が嗜虐の感情に目醒めたのは小学校五年の十二、三頃でした。もちろんその時はそれがサディズムの感情であるなど意識し

たわけではありませんが、私はその時、確にある種の肉体衝動を感じ陶然と夢ごゝちを味わつたのでした。

私はそのころ級長をしていましたので、ちよつと難しい予習や宿題があると、女生徒の誰かから放課後になるときまつて「宿題を教えて頂戴」と懇請され、その生徒の家へ呼ばれて行つたものでした。その日も副級長のA子の家へ呼ばれ、仲良しのS江とK子をまじえて宿題の算数をやつていました。

この三人の女生徒のうち、K子は誰よりも

愛らしく理智的な容顔でしたが、勉強になるといえばん駄目で理解力も劣っていました。ところが、K子は妙におとなびたところがあつて、その姿態や仕草がひどく私の心を引きつけていたので、クラスの女生徒と勉強をする時などは必ず彼女を誘うのでした。

この日も次々に宿題が片づいてあと二題やればいゝのでしたが、K子はとうに勉強に飽きてしまつて、いつものようにあとは私にそれをやらせようとするのでした。

「ねえ、これ教えてよ」と云つて例のごとく身体をすり寄せて甘え声で云うのでした。

それがどう云う動機であつたか、私には皆目わかりませんでした。K子のちよつと覗いた白い胸のあたりを見ると、何か訳のわからない情感がこみあげてきました。

「駄目だよ。自分でやらなくちや。次の問題ができないと懲罰にするよ」

私はK子のその白い胸のあたりを覗くようにして、いつになく冷く云い放ちました。そのあとの二題と云うのが、私にも難しいいくらの問題でしたから、もちろんK子にもそれができるはずがありません。

「難しいわ、こんなの……」

果してK子は初めから投げ出してしまった。私が教えてくれそうもないと思つたので「あたし、帰るわ」

と云つて、K子はさつさとノートを片づけ始めました。

「いけない、帰さないよ。宿題ができなきや懲罰にすると云つたじゃないか」

僕はそう云つてA子に命じて麻縄を持つてこさせ、それでK子の身体を柱に縛りつけてしまいました。そしてA子とS江のしている前で子供としてはかなり大胆なことをしてK子を虐めたのですが、しまいにはA子もS江もこれに同調してさんざんに虐めたのでK子はとうとう泣き出してしまいました。たいいていの子供の場合だつたら、相手が泣き出すとそれでその遊びはおしまいになるものですが、僕のお仕置きはK子の泣き出したことによつていつそう興味をあおり立てられこんどは手拭で猿轡をかませて彼女の身体を憐れつたりして虐めつづけたのでした。このとき僕は、おぼろげながらも或る衝動を身内に感じたことを、いまでもハッキリとおぼえている

のです。

少年期におけるこのような経験は、誰しも一度や二度は何等かのかたちで記憶にのこっていることでしょう。これが私の女性に対する嗜虐の昂奮を發展させる発火点となつたことはもちろんです。と同時に、僕の盲念に植えつけられた被虐者の容貌はいつの場合でもK子のそれでした。だから私は、いまでもこの初恋のK子に似た女にあうと、ドキリとさせられ何か特別な近親感を抱かずにはいられないのです。

私は知らずしらずのうちに自分の好みの女をこしらえあげて大学時代にはかなりの女性と交渉をもつたのですが、太平洋戦争のため鬱鬱たる気持のまゝ青春時代をブランクにしてしまつたのです。学生時代に蒐集した東西の文献や絵画、写真などもかなりあつたのでしたが、その時代の風潮からやむなく一応整理してしまつたことも原因して、私はそうした環境からまったく遠去かつてしまいました。それが戦後のがらりと変つた世相のなかに抛り出されてみると、私はふたゝび嗜虐の昂奮に陶酔できる自分を意識したのでした。

まず私の目をおどろかせたものは、性雑誌と云われる一連のカストリ雑誌やストリップ劇場などで責めを主材にした写真や演劇でした。そして私はそれら雑誌や演劇に主材される責めや拷問の内容に、ひどい間違いや嘘を発見して、どうしても自分の手で作り出した記録写真をのこそうと考へたのでした。と云うのは、こうした雑誌や演劇の、それを売物にして一儲けしようとする商人根性に対する僕のレジスタンスからでした。

いまでもこそ、責めの写真を撮ろうと思えば東京中に何十となくある貸スタジオへゆけば専属のモデルがいくらでもいるので不自由はないが、戦争前にはそう云うモデルなど一人だつて見当らなかつたのです。だからそう云うモデルを探すには、まず特別な交渉をもつてからでないと駄目だつたので、とても金銭づくで初手から口説き落すことはできなかったのです。そんなわけで、モデル探しにはひどく苦心したものです。そのかわり、いったん身体の交渉をもつてしまふと、嘘のないギリギリのものをカメラにおさめられるのです。云うまでもなく表情もリアリティにその

ままの感情を内包しているし、第一、縄のかけ方にも遠慮などいらないので緊縛感が意のままに見られます。もちろんマゾヒズムである相手の女は、縄をかけるにも肉体の苦痛が伴わなければ満足しないだろうし、シヤツタ―を切る前にはいずれ特別交渉につながる行為があつてのことですから、いきおい表情にも自然その感情があらわれて、絵の構成や雰囲気におのずから迫力のあるものが撮れることとなります。

いまここに、そのような写真を紹介することのできないのを残念に思う次第ですが、手や足の指にも、身体の表情にも「責められる女」特有の色気が見られ、縄目の間に盛りあがる肉体の弾力には一種の妖氣が漂つてただならぬ切迫感がうかがわれるものです。

私は最近、モデル女をつかつて撮影しましたが、どうにも満足したものが記録されませんでした。何人かのモデルを交代させてみましたが、どれもかつてのような情感をとらえることができないのです。そのうち某スタジオから呼び寄せたFと云うモデルが、写真を撮つてから帰つたあとで、撮影用につかつた

衣類や下着を片づけていると、下穿の一部に女の感情をとどめた汚点の残されているのを発見しました。男がサディズムの傾向を本能的にもつていいるのと同じに、女がマゾヒズムのそれをもつていいることは云うまでもありません。初めは「縛り」など経験がないからと、キョトンと目をまるくして仕方なく手をつろへ廻したモデルでも、いくどか縛つたり解いたりしているうちに、いつしかそう云う感情にさそいこまれてゆくものです。しかし、このモデルのように、こんなにハッキリとその感情を見せたのは、特別の交渉をもたない商売モデルとしては確かに珍らしいことでした。

そこで私は、もう一度このモデルを呼んで、まずあつさり何枚かシヤツターを切つてから、わざと下穿一枚にしてさらに強く縄をかけ直し、或る連想を起させるポーズをつけて何枚か撮つたのです。彼女はそのポーズに苦痛の伴う無理があればあるほど、次第に顔を紅潮させて、瞳になんとも云えない色気のある潤いを見せてくるのでした。私はその機を逸せず、「こんどは全裸で行こう」と云つ

て、縄をかけたままの彼女から下穿きをとろうと手をかけたのです。

そのときの彼女の困惑した表情、消えも入りたい羞恥と秘密をかくそうとする必死の表情が一瞬ごつちやになつて、私にかつて経験したことのない昂奮をかき立てたのでした。

こうして、最近の情況に添つてようやく私の秘かな趣味が蓄積されようとしている次第ですが、この頃の世相傾向から判断してサディスト同志間における交流に、或る程度の積極性をもつてもいいのではないかと愚見する次第です。

そこで私は、かくれた同志に呼びかけたいのです、諸君の希望や鬱積を交流して、かくれた記録やレポートを相互の私益に資したいことを。

私は毎月この欄で私見や記録を発表して、同志の隔意なき意見をおききしたいと思つていいます。本誌宛、同志諸君の応答を私に寄せられることを望んでいる次第です。

お互いに趣味の探究を致しましょう。どしどしお便り下さいませ。

さじすちつく

歴史小説

秘色

大

阪

城

繪

卷

岩堀

畫古庄英生

光

1

初夏の碧空に、大阪城の白壁が、峨々と浮き出ている。平野川の堤に崩える雑草を、蹴りつけて





かつかつと蹄で地面をひつかく。武士は、その首をなだめるように軽く叩いて、飛び降りるといった。

「怪我はなかつたか町人？」

（まあ、お優しい）と、ことは思った。

普通、こんな場合、武士は町人を蹄にかけるか、拔打ちに斬捨てるかだつた。ことに、この近辺の武士は、徳川、豊臣両家の合戦間近しというので、殺伐の気を昂ぶらせていた。だからいつそうことには、騎手のいたわりが床しく思われた。

同時に、彼女は（危ない）と思った。

彼女は竹売りが計画的に武士の行手をさえぎつたのをしつていた。先刻、彼が、仲間の町人風の四、五人と共に、何事か相談の末、堤の左右に別れたのを見ていた。その一人は近くの松に上つて、火縄銃を装備していた。

「たはッ！」

地に伏せていた竹売りは、突然、武士の腰に向つて、頭をぶつけていった。

「あッ！」

武士は危ふく腰をひねる。「何者だ？」と彼は、今は自分と対峙して、白刃を構える竹売りに叫ぶ。しかし、彼は、いつの間にか、背後に迫る竹売りの仲間たち三人には気がつかない。その一人は大

早駆けしてくる粟毛一騎。時々、それを追つて、乱れた蹄の音がする。そして、それもしだいに聞こえなくなつた。汗に濡れた驛馬の肌は陽光になめらかだ。

突！前方に人影。竹を肩にした。この辺に多い竹売りだつた。疾駆する馬はいつきに邪魔者を蹴散らしそうに見えた。

「うわッ！」

竹売りは青竹の束を馬の鼻面に投げだして地面に伏した。

驛馬は、一瞬、前足を空に上げて直立した。

「どッどッ！」

騎手は美事に馬の背に身を沈めて手綱を御した。瘤性らしい馬は

上段に振り上げた剣を、今にも打ち降しそうにしていた。

「ちッ！」

ことは本能的に帯にはさんだ手裏剣を投げていた。十字剣と呼ばれる柳生流手裏剣だ。彼女は柳生宗嚴（やましろ じゆんげん）の直弟子である父から護身用に学んでいた。

生きた人間相手は今がはじめてだが、「うわッ」と、狙われた男が左肩を押えてのけぞった。続いて一投、二投……ことは松樹の枝にひそむ銃手に向つて剣を投げた。

「タアーン！」と火縄銃が火を吐く寸前、僅かに早く、文字通り投げる十字型に開き、その四方の切尖が鋭くとがった十字剣は銃手の足首を打った。だ、だッと松葉を拂つて相手は落下した。

「散れッ！ 邪魔が入ったぞ！」

竹売りの声と共に、武士を狙った刺客たちは四散する。

「恭けない。危ないところを」と武士はいった。二人は堤の斜面に並んで腰を下していた。河を隔てた向うには青々とした稻の波がそよぎ立つては遠く消えている。

「女人だとは思わなかつた。まして、そなたのような美しい……」

「はしたない技事（わざごと）とお笑いでございましょう。女だてらに……」
「どうして？」

武士は真面目な顔で問い返す。面長の横顔は蒼いまでに色白で、生え下りが朝風のように新鮮だ。鼻筋の細く高く通るのが、どこか淋しく冷めたく、それと、唇の女のような赤さが、この人の薄幸を物語りようだ。ただ、そんな風貌が弱々しく思えないのは、肩幅が頼もしげに広く、身長が五尺七・八寸以上はあろう偉丈夫だから

だ。激しい気品の高さを感じさせるのは、きれ長の眼が、冬の湖面のように深く沈んだ色に澄んでいるから……。

ことは頬のほてりを覚える。（なんて、綺麗な歯だろう）と彼女は思った。物いう度にちらちら覗く武士の歯は、実際、真珠のような光沢を持つている。「どうして」と彼女は爽やかな気分になつて答えた。「どうしてつて、そのようなこと」

「はははは」と武士は笑つて、ふとまた真顔にかえると訊く。

「見れば旅のようだが、いずれへ参られる？」

「大阪の知り人を尋ねて参ります」

「城内へ？ それとも誰かの屋敷？ いずれは武家らしいが？」

ことははッとして、いつか落ちていた甘い情感から心を取戻した。（そうだ、このお方は大阪方の武士なのだ）

「いいえ、尋ねますのは町家」

ことは何げなく答えた筈が、心外に苦痛を覚える。大阪城に嫁いだ千姫には、お附きとして徳川方の女間者が多く従つていた。おことの姉さともその一人だ。千姫が七才、秀頼十一才の婚姻以来まる十二年ずつと大阪にいる。ことは関ヶ原の合戦以来の今度の戦争について、徳川家の密命を千姫や姉に伝えるため間者になつた。彼女は少女時代に別れた姉にあいたかつたのだ。ふだんは宿で尋ねられてもつきなれてる嘘が、若い美貌の武士の前では乱れる思いだ。そして、彼女はふいと馬鹿なことを考えた。（この方が豊臣右大臣秀頼公では？）

たしかに年は二十三・四才だが、豊臣の当主が日中、ことに世情騒然たる今日、ひとり郊原に汗馬する訳がないのだつたが……
「城内でなくてよかつた」

ぽつりと武士はいった。

「まあ、なぜでございます？」

「そこでは死だけが待っているからだ。あなたのような美しい花のいのちが、冷めたいあの石垣の中で砲煙に焼け死ぬのをみずともすむ」

「なぜ？ なぜそのような……」

武士は立上った、蹄の乱れる音が近寄るのをきいたからだ。彼は粟毛をまたぐ。「供の者が現われたようだ。そなたの名は？」

「こと」と、思わず名だけをつぶやく。

「姓は！ いや姓は聞くまい。予も名乗らぬ。そなたにはまたあえそうな気がする。さらば……」

驛馬は勇みたつように、たツたツと足踏みする。向うに、十数騎の駆けつけてくるのが見える。「はいよおッ！」武士はさつそうと愛馬に鞭を入れた……。

2

「いやじゃ！」

鏡の中で淀君の美しい眼尻がきりりと釣上った。眉をかいていた小筆の尖がびりツと震える。彼女は瘤高に続ける。

「それで太夫殿は承知してきやつたか？」

「いや、拙者の一存でどうして左様な」

片桐且元は瘦せた肩を前に落した。彼は、徳川家の重臣の意見として、この際、淀君が家康公の許へ人質として下られたら、両家の紛争も解決しようという見解を伝えたのだ。

「理の無いところに理をつけて戦いをいどむ駿府殿。なぜ、いさぎよく、望まれる戦さはお受けしようと答えてきやらぬ。けからわしい。そなたはわらわを、あの後家氣狂いの餌食に差出す考えであるう」

「それはあまりな」

「暴言といやるのか。そなたも故太閤殿下の御恩顧を忘れ、駿府の尾を振る犬大名の仲間入りがしたいのじゃ」

「お方さま！」と片桐且元はいつたが、後が続かず、彼は首をたれた。淀君のいつた事が真実でないまでも、戦争をさけようと計算しすぎた結果、必要以上に、徳川家に対して卑屈になつた点もある。

故太閤殿下が豊家の繁栄を祈つてたてた京都東山方広寺の大佛は地震のため破壊したままになつていた。徳川家康は、故太閤の冥福のためとしてその再建を豊家に進めた。その腹は、豊家の財産を少しでも多く費消させたいためである。大佛は途中一度出来上りかけたところを火災にあつた。徳川のスパイの放火であると且元はみている。工事は十二年かかり、やつとこの四月、佛前の巨鐘と共に出来上つたが、その鐘にきざんだ銘が問題になつた。

右僕射源朝臣 国家安康 君臣豊楽 子孫殷昌——といった、碩学の僧清韓の作るきまり文句だ。ただおめでたい文字を並べたにすぎない。だが徳川家では、それを家康調伏の文字だといいがかりをつけた。「源の朝臣家康を射る」と第一句は読み、二句で家康の名を二つに切つたは、明らかに、家康を真二つにせん意志だというのだ。すると第三句以下は「豊臣を君として、子孫の殷昌を樂しむ」とよめなくもない。且元は、その弁解の使者として駿府に出むいた。家康側から出された平和の條件は、秀頼が大阪城を明け渡す



か、江戸に下つて將軍に和を請うかである。いかに現在、関ヶ原の合戦落目とはいえ、もともと主君側の豊家が、それを承知しそうもない。且元として、それは、断つた。で、次に、それなら、淀君を差出せというのである。これなら……と且元は思つたのだ。げんに淀君の妹は、徳川二代將軍秀忠の妻である。その娘千姫は、秀頼の妻として大阪城にいる。淀君が江戸に下つたところで、別に屈辱というわけではない、と、且元は思つた。(戦つたところで、天下の大名が、殆んど徳川家に寝返つた今、勝てるものではない) 且元は、

数字の上で明らかなことには反抗する心になれなかつた。成上りの重役にすぎぬ且元には、淀君の心底に流れるプライドには思い到らなかつた。歸つてきて、四十代半を越してはいるが、まだ三十代になつたばかりとより見えぬ豊満な女主人の姿を見上げた瞬間、彼はそれに氣附いた。(そうだつた。自分の美に敏感な女ほど衿持は高いものだ)

「退りや、太夫殿！」と淀君はいつた。「故殿下はなんと思われることやら、淀が且元に、家康づれの妾になれと進められたとおききになられたなら」

「うッうッ」と且元はへんな呻き声を洩らした。急に泣き出しそうになつたのだ。彼は今になつて自分が駿府に誤解をとく使者としていつたのではなく、敗者の立場として徳川家にのぞんでいたのを氣附いた。(負けるのだ、戦えば必ず) その明白な数字が、戦う前に彼を敗者にしていた。

「治長殿は、どう思うぞえ」と淀君は左の腕のつけ根をかるくもみながら尋ねた。六日前に、そこへ植えつけたリマムシの心臓がまだ痛むのだ。彼女は五・六年前から、月に一・二回は、その手術をしていた。まだ女の月も正確だし、眼のふちにちりめん皺がある以外、皮膚にたるみも見えぬのは、そのせいだと、医者はいう。

「もちろんでござりまする」と大野治長は答える。彼も片桐且元同様に、故太閤在世中はテンで政治舞台へは上れなかつた。しかし石田三成の死後、淀君に愛されてから、今では大阪城の侍大將である。豊家の人事は、家の元老ともいふべき加藤清正、浅野長政、幸長、池田輝政などが、この二・三年に相ついで死んでからは、全く



淀君の独占だった。

「何がもつともじや」と淀君は、不満げにいう。「そなたまでが淀を軽く見やるのか」

「な、なんで治長がお方さまを。治長は、お方さまを、狸爺イに抱かすほどなら、おそれ多いことながら、この場でお方さまのおいのちをおちぢめ申し、治長もこの場を去らず相果てまする」

「おお、よういうてくりやつた」と淀君は治長の側にいざりよつて「したが、なにか、不安げな。何を考えてじや？」

「されば、お方さまのお話でふと思ひ当る節がございまする」「というと？」

「千姫さま附きの女中、さとが、昨夕、城中では見かけぬ女と、何事か密談を重ねていましたげな、拙者の耳に入れるものがございました。その時は別に気に致しませなんだが、いよいよお手切れと見込みがついてみますと」

「おお、千姫は犬じや、徳川の」

「いかが致しましょう」

「ここへ引つづてきて、折檻するがよい」

淀君はいつて、はつとしたように治長を見た。二人はなんとなく光つた瞳を交して微笑んだ。

3

ことは唐櫃の中で姉の声をきいた。

「出てはなりませんよ。案じることはないのですから」

しかし、声音に戦慄が隠されている。淀君附の老女から昨夕、さ

とと話していた女の素姓をただされた。さとは笑つて、それはどなたかの眼違いだろう。だい一、要心堅固をはこる御城内へどうして怪しい女など忍びこめましようか、と否定した。考女は「さと殿はまるで、関西の女の眼はふし穴だといったげな、お方さまにそう伝えましようぞえ」と枯れた嘲笑を残して去つた。淀君附きの女中と、千姫に従つてきた関東出身の女中との、暗黙の闘争が、そんなちよつとしたことにも感じられ、ことは、姉の長い苦勞を思いやつた。まもなく、淀君からのお召しである。さとはすでに察していて、ことを大きな唐櫃にひそませていた。

「たとへ言葉の上での折檻はあつても、右大臣様（秀頼）のお許しがない上は、千姫さま附きのわらわに指一本かけはいたしますまいから」

だが、一とき、二とき、長い時が経つても姉は戻らぬ。ことは、徳川家から問者を許されたほどの身だから、自分の敏捷さに自信がある。げんに昨夜も警護の士のちよつとした油断に城門を抜けたのだ。彼女は唐櫃をでて、はや、夜のとばりに包まれた大奥の庭に、素速く姿を消した。千疊敷と呼ばれる豪壯な建物のどこに、姉はいらるのだろうか？

「まだ強情はりやるか？」

淀君は浅い朱塗りの杯を美しい唇にふれさせながらいう。ほんのり染まつた眼許が、時々、治長にとけるように優しくそそがれるとそれはたちまち鬼女のように變つて、さとにそそがれる。

「いくらお訊ねになりましたも」

あとの声はしやがれている。ひとことという度に、くるしげに咳い

た。

「さとはまだのどがかわくげな。杯をとらせよ。淀の盃を」
さとの前に大きな酒杯が置かれる。徳利から、酒が満々とそそがれる。と、見えるけれど、それは、岩鹽をとかした生水。もうなんどかさとはのまされている。

「早うおのみなささい。さと殿は、主君の杯が受けられませぬか」
老女が意地悪くうながす。なるほど、身に指一本ふれはしないが、二とき（四時間）近く坐らされて、鹽水を数升のまされると、堪えられぬ。「どれ、おのませもうしましようぞえ。だいふ美酒に酔われた様子」と、老女が邪剣に。盃の底をもたげ。さとの髪を引いてあうむいた口にそそぎ入れる。からだにきくわけにゆかぬ女間者などに用いる責めの一つだ。さとの顔は蒼白めきついている。なにより、彼女は、生理的な要求に堪えられぬ。むしろ、刃の切尖で、きりきざまれたほうが、ずっと楽だ。胸を伝つて、心掛けてはいるものの水は衿やひざを濡らす。それがまた。皮膚を冷し、いつそう本能の必然性をうながす。その上、かゆいのだ。のみにかまれた経験もない肌は、岩鹽の刺激に敏感だ。

「なにをもじもじいたしておる」

治長は、わずかに出来た白髪をちらちら燭光に浮きださせ、二十才を三つ四つ出た豊満な女、しかも男知らずの肉体の苦悶をみる。

（淀君が早く酔つて寝てくれればいい）

彼は、いまさとと二人になれば。彼女に、不淨の扉を開けることを許す条件だけで、ほんの二三分の自由を与えるというエサだけで彼女が持つている未開の扉を開く権利が簡単に得られると思う。

「いえばいいに。すぐにも許されるものを、なにをもじもじ」

「ああ」と、さとは低い呻きをもらす。

「なんと？ なんといわれた？」

「修理殿は、えろう、さとの顔色がきになるげな」

淀君が腹立たしそうにいう。

「いえ拙者はただ、早うさとが昨日の相手の名を」

「ほほほ、修理殿のききたいは、さとにいわせたいは、そのもじもじのほうでは」

「うッふふふ、おん方はお人が」

「どれ、さと、修理がしりたいげな。そちがいいたくない女の名は後にきこう。からだをうごかしやるのはなぜじや。遠慮のう、そこでつかえをおろすがよい。ほんに、顔色の悪い。いま一献、かたむけるか？」

「あ、もう、お許し」

「ひざが濡れているようだが」

「ううッ！」とさとは前に身を折る。

「どうなされました、さと殿」と老女はさとの衿首をつかんで引き起し、「まさかお方さまが給うた美酒をこぼしなされたのでもございますまい。それとも、ややのように」

老女はおおげさにさとの膝をなでてみる。

「寒げに震えてじや。お情けの酒、早うめしあがれ」と、再び鹽水をそそぎいれる。

ことは、自分が体内の要求に苦るしめられているように感じる。どちらかというと、勝気で単純明解なことを好む気性である。関西流のねばっこい眼前の光景に、思わず自分の立場を忘れる。

「卑劣な！」と思わず叫んだ。いつか手指に離んでいた十字剣を、

「たッ！」と投げていた。

「あッ！」

老女は盃をとり落す。その手首からたれた血が、壘を染めた。

「曲者！」

大野治長は、とつさに立上ると、淀君をかばうように立つ。ばたばたと、どこにいたのか多勢の女たちが現われる。さすがにいずれも長刀の黒柄をたもとにかいいだしている。

「姉上！ 逃げて？」

ことは廊下に飛び上つたが、前を女たちにさえぎられる。えい！ やッ！ と、長刀の反つた刃は、一尖、二尖、間断なくことの足許を拂う。右に左に、ことはそれをさけながら後退する。手にした短剣はこの際、あまりに不利な武器だ。

頭髮をひきずられて、連れ去られる姉の姿が、ちらッと、女たちの腰の間から眼にいろ。だが一步も進めない。ことは庭に跳んだ。彼女は追い追つた長刀から逃れると見せて手許にいろと、敵の手首を打つ。

「あれッ！」と、叫んで相手は長刀を落す。ことは、さッと、その柄を奪いとる。大きく廻して、構えをきめようとした瞬間。

「曲者、捕つた！」

がつちりと、両わき下から、逆に肩をすくい上げるように掴まれる。男だ。

「ああ、離せッ！」

彼女があかくほど、両足は宙に浮く。

4

四囲が厚壁に仕切られた部屋。日中も陽光がはいらない。隅の隅に物置かなにかだろ。処置が決定するまで、千姫やその囲りの者を怖れての処置であろう。五日目、さつと光がさしこんだと思うと、窓が開かれ、淀君付き老女の顔が覗いた。

「よいおしらせをしましょうぞな。そなたたちは囚獄に下されるぞえ。ほほほほ」

「ああッ!」と、さとの口から思わず悲鳴が洩れる。

「いずれは憎い主家を売る犬女。人並のあつかいでは殺されまい。その日まで、たと下人共にけたものの法を教えられなさるがよいわな」

ぎつと不気味な音と共に、窓が閉まる。

「ああ、そなただけでも囚獄入りが許されぬものかな!」

さとは、涙の中から、誰かをかきくどくようにいう。

「こんなむし暑いところより牢舎のほうがまだましです」とことは答える。

「そなたは存ぜぬから、そのように暢気なことがいえるのです。囚

獄は、城の地下にある石牢なのです」

「それなら、このこと同じことでしよう」

「いいえ、そこは別世界です。わらわとて噂にきいただけですが、足輕小者たちが、上臈とみれば犬畜生のようになくさみにするとか」

「いくら囚人に対してでもそんな。それは噂だけですわ」

「でも囚獄入りの者は、二度と陽の目をみぬ死刑囚なのです。小者たちは、むしろ慈悲をさずけるとか申して」

「でも……」とことも身震いを感じて「でも、千姫さまが、まさか姉上を」

「間者を囲った女をどうしてかばえます」

「それなら、秀頼公が」

さとは答えないで、肩を震わし泣いた。

「ほんとに姉上を愛してられるなら、いくら憎い行爲の女といつても、まさか……まして、姉上のお仰せのように、心優しいお方なら、むしろ千姫さまのほうが、まことの愛をごぞんじないと姉上からおききました」

ことはこの三・四日、一つ牢にいて、姉から告白をきいた。姉は秀頼から愛されていた。さとは方は、むしろ恋を、激しい炎を主君に感じていた。千姫と秀頼の間は、夫婦というより兄と妹の関係だという。

「わらはの苦るしみは、徳川家の間者という思いでした。姫君に従つて、公におめもじしたのは、公と同じ年の十一才でしたが、姫君は七才、そ





れからの成長の日々に」

自分が現われなければ、姉は幸福だったのだと、ことは思った。幼ない千姫より、秀頼が、まず感情の交流を認めたのは、姉であつたということは、ことにも自然に思える。こともまだみぬ秀頼に親しみをさえ感じた。そして、そういう場合、いつも無意識に、浮かべる映像は、あの堤であつた若侍である。

その頼みの秀頼の特赦もなかつた。姉妹はその夕方、足輕に縄尻とられ、囚獄と呼ばれる地下牢に下された。

壁は石で隙間からじとじと水がにじみ流れしめつてゐる。片側に牢格子。二人がひかれてとおると、「お慈悲じや、抱かせろ」と、怒声が聴え、からからと笑う声がした。それは地獄の鬼のうなりに似て、こもつた地下の空気をふるわす。（ひるも夜もな

い生活がはじまるのだ」と、ことは、いまさらのように姉の怖れがうべなはれた。姉妹は別々の牢にいれられた。

「ああ、お助け下され！」

そんな金切るようなさとの声に、ことは思わず、冷めたい土の上のむしろに横たえまどろみかけていた意識を引戻された。いつ牢舎から引出されたのか、前の通路でさとが四五人の男たちに手足を押えられている。

「無礼者！ そのお方をどなたと思いやる。おそれ多くも秀頼公のお情け受けられる……」

とつさに、ことは嘘をいつた。

「はははは、たとい千姫さまじやとて、この囚獄の女となれば、馬だとして拒めない」

狼籍者がいう。「こいつがすめば、お前もこの世の名残りに、甘味の多い果汁をたんまり吸わせて進ぜるほどに、ひがまずに待て」

「ああ、およし遊ばして、く、くるしい」

さとの叫びも、なんのゆえか、暗くてはつきりしない。

「ううッ！」と呻めきをきくたびに、ことは、秀頼の救いを念じた。やつと姉の白い衣裳がよるめき立つたと思うまに、また、倒される。並んだ獄舎の中からも、エサに飢えた狼のような呻きがする。その瞳らにさらされて、もがき、悲鳴をあげ、あえぐさとの氣息が、長く続く、夜明けのない世界。終りも始めもない。「おい、おれさまも仲間にしろ」そんな声がする。ぴくりぴくりと、黒い人影の間で空にはねうごめくさとの足がことにも夜眼になれるにしたがつて見える。(姉の次自分だ) ことは思う。(一人でも二人でもいい。できるだけ殺して)

「おい、別嬪、でろ！」

声がした。

(いよいよだ) とことは、全身に、こはばるような緊迫感を覚える。その時、

「お奉行の見廻りだぞ！」と叫びがした。

5

お庭先の松の木に立てかけられた戸板である。ことは、廊下に、ずらりと並ぶ女たちを見る。淀君の御殿の女中たち、それに、千姫付きの女中たちも見物させられている。姉もことと同じに、戸板に縛られていたのだが、いまは、別の大の字型の柱に、その字型通りにしばられている。昨夜からの身にうけた嵐の名残りのように、頭髪は乱れ、裸体にされた胸や腹や足に、ひつかき傷がみみずばれについている。ことも、この刑場に引かれるのが、今少しおそれれば姉のように、女の最初の体験をさせられていただろう。焼けた棒を肌にしるしづけるように。

「ようみておくがよい」

淀君付きというより、城中の奥女中取締り役の老女は、千姫付きの女中たちにいう。

「関東とのお手切れが決まった今、そなたちに、あの女の最後はよしみせしめぞえ」

さすがに千姫付きの女中は、蒼白めて面を伏せている。

「これからは、もつとひどくなる。わらわが許しても、戦さに荒立つ、武者のいかりはしずめられなくなる。そうなれば、この二人の

女間者ぐらいではすまぬぞえ。八裂きじや」

ことは姉の負った柱が高い楠の枝につり上げられて行くのを見る。(姉は二十三だつたか、四だつたか?) ふとことは、今になつてそんな馬鹿げた、役にもたたぬことを考えた。あまりに、かた太りした、均衡のとれた裸体が美事だつたからだ。さつき、戸板からとかれ、あの大の字柱にしばらくられる時、衣裳が下人の手ではぎとられた。

「それだけは情けじや、許してたも」

さとは懇願した。

「なにをいう。ゆうべからさんざ見せなれとるのによ」

下人は冗談のように、真実をいう。さとかかつての同僚たちの前でさらす恥辱にもたえるのを、彼等はしらぬ顔だ。(姉にはまだ遠慮しているが、自分には) そう思うと、ことは、廊下に並ぶ、女共が憎い。

姉の柱は男たちの頭より高く上る。風になぶられて頭髮が流れる。陽光がからだのかげと突起にくつきりした区別をつける。男は顔をあげて、下から俯ぎみる。槍が持出されて彼の手に渡る。

「あッ」と見物の女たちが顔をふせる。

「ひいッ!」

さとの悲鳴が上る。それは、うッといきのつまる声になり、きいッ! とけだもののような悶絶声にもなる。「い、いたッ!」と、人間らしい言葉がほんの瞬間きこえる。突上げる男の手首に、槍の柄を伝つた血がぬられる。姉の大の字に開いた足尖から、細い水のよう血が落ちる。穂尖がさとの腹から胸を通過して、口か頭へ突き抜けるのをもつて、串差し刑の上手とされている。女

にはもつとも残酷な刑だ。開かれた足の中央、いや胴の下に、はや槍の柄が穂尖別にして尺余は隠れた。

ことの戸板の背に廻つた足輕が縄をほどきにかかる。ことは、姉のと同じ型の柱を見る。男の手が帯にかかる。

(姉は死んだ……ほんとに、秀頼に愛されたのかしら? 秀頼は敵だ)

ことは思つた。あの平野川に並んで腰を降した時、風が吹き寄せた男の体臭を感じた。

(大嫌い! あの人も、大阪方だもの)

「おい、早うぬがんかい!」

足輕は邪剣にことの腕をゆすつた。彼は計算を間違えていた。昨夕からずつと十数人の彼等の仲間を相手に身心を勞し盡したさとの体力と、ことのそれを。

「たッ!」と、彼女は足輕の手首を打つ。

「うわッ!」

足輕は、手首を押えてかがむ。その前にさした剣を奪うと同時にはりつけ柱用に用意された釘箱を、ことはこ脇にかかえた。

「狼籍者!」 「逃がすな!」

色めき立つ人々の中へ、五寸釘が飛んでくる。ぷすッ、ぷすッとそれはいのちを持つたように、ふれたところに、人にも板にも突刺さる。ことは、頃を見ては走り、投げ、走る。庭は見通しがきくだけ不利だ。廊下から部屋へ、部屋から廊下へ、彼女は隠れ、逃れる。さつと、侍小姓たちのつめる部屋のふすまを廻り奥へすべりこむ。と、彼女はきいたような声を耳にする。「何者だ!」

(この回終り)



★世間が不景気なので赤線区域青線区域もサビれてますな。

以前は、金がなくてもヒヤカシと言つて、案外イキがつたもんだつたが、近頃は、客にそんな気持の余裕が無いせいか、金が無ければそんな方角に足を向けぬ、という主義の人が多くなつた。

★されば、宵の口の特飲街なぞ、酒でも飲んでいねばテレ臭くて歩けぬ位、人通りが少ない。露路の入口に一人の客の姿が現れると、両側の店の女達がワアツと嬌声媚態を浴せかけて浅間しいばかりの争奪戦を演じ

る。気の弱い客は足がスクンで大抵他の道に外れて終う。

★需要が減れば、自然の法則で供給品の値が下る。新宿では女達が、やたらに「三百円!」「三百円!」と叫んでいる店があつた。他のことは何も言はず

指を三本立てて、たゞ「三百円!」とお客に呼び掛けているのだ。その時はなんだか判らな

かつたが後で考へてみると、あれはショートのア売りだつた訳である。露店の叩き売りじやあるまいし、あんな掛け声で登壇した客がありません。したかな。

★それ程でなくとも、相当の店の相当の女の子が、時間七、八百円も出せばオールストリップのベタサービスというもつぱらの評判。(無論東京のオハナ

シ)彼女達も商売に懸命なのであるうが、お小遣のある方は浮気の好機でアリマシヨウ!

★ただし、一夜の恋人を探す時は、なるべく肌に艶のある、この商売に入つて未だ日の浅いような女の子を探すべきですナ。眉と眼の間が開いていて唇が形よく緊つていればナホよるしい。時間やショートでは無理

でせうが、折角泊るなら、彼女の方でも共に楽しんでくれるような子でないとツマリマセン。「シツポリ濡れる」という小唄の文句は伊達じやありません。恋人

の選擇は御慎重に!

★責め繪や責めのマードが流行つてます。普通のマードには飽きて、新しい刺戟を求める傾向でせうが、同好者せいぜい四



五人で撮影會をやられるのもいゝですな。縛りに應じるモデルさんもボツボツ現れて半日貳千圓か貳千五百圓が相場です。

★今月は執筆直前に病氣になつて材料不足となり、意圖したものが出来ませんでした。が、来月からは本誌にふさわしい頁に致します。獵奇を好む紳士淑女に街のホットニュースを提供するのが狙いですから、讀者の方

もぜひ御協力下さい。地方の変つた風俗ニュース、体験談などのほか、本誌にふさわしいと思われるものはなんでも結構です。